大府市文化財調査報告書　第10集

瀬戸Ｂ古窯跡群
奥谷古窯跡

～大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ～

2009年

大府市教育委員会

大府市文化財調査報告書　第10集

瀬戸B古窯跡群
奥谷古窯跡

～大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ～

2009年

大府市教育委員会

巻頭１　調査区全景

巻頭２　調査区近景　１号窯・２号窯

巻頭３　調査区近景　３号窯・４号窯

序

２１世紀に入り、現代社会は少子高齢化と経済と文化のグローバル化というかつて経験したことのない変革期に入り、大府市も例外ではありません。その中にあって、我々の祖先が残した貴重な文化遺産を後世に継承する責務は不変でなければなりません。近年、区画整理事業・道路建設・民間開発事業は官民併せて活発であり、それに平行して数多くの埋蔵文化財が発見・調査されています。しかし消滅することを前提とした調査がほとんどのため、さらなる文化財保護を推進する必要があることを痛感しています。

このたび、大府市教育委員会が平成１６年に瀬戸Ｂ古窯跡群と奥谷古窯跡を発掘調査いたしました。この結果、大府市北部の丘陵地も鎌倉期に窯業生産の盛んな地域であったことがわかってきました。

最後になりましたが、発掘調査を指導された調査員の方々のご苦労とご協力に心から感謝いたします。また調査に際して、ご指導とご援助を賜りました愛知県教育委員会、大府市役所都市開発部区画整理課（現産業建設部都市整備課）、株式会社花井組、発掘調査作業にご参加された方々、この事業に対して、特別なご理解とご高配をいただきました大府共和西特定土地区画整理組合の各役員の方々には厚くお礼を申し上げます。

平成２１年３月吉日

大府市教育委員会

教育長　梶　谷　修

例　言

1．本書は愛知県大府市共和町七丁目 35・36 番地に所在した瀬戸Ｂ古窯跡群（市遺跡番号 101）と大府市共西町一丁目 42・62・70 に所在した奥谷古窯跡（市遺跡番号 102）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は大府共和西特定土地区画整理事業にともなう事前調査として大府市教育委員会が実施した。

3．調査期間は平成１６年１０月４日から平成１７年２月１５日まで本調査を行った。さらに平成１８年６月１２日から６月１７日まで灰原部分を追加調査した。遺物洗浄作業は歴史民俗資料館で実施した。平成１７・１８年度に出土品整理作業を、平成１９年度に遺物の図化作業と報告書編集に関する作業を実施した。

4．調査体制は、大府市教育委員会が調査主体となり、玉野総合コンサルタント株式会社に委託して実施した。

調査主体　　大府市教育委員会
調査管理者　古田功治（現：大府市歴史民俗資料館館長）
調査担当者　中村伸吾（当時：株式会社静岡人類史研究所　主任学芸員）
調査補助員　遠藤　仁（当時：東海大学文学部研究員）

5．発掘調査および報告書作成にあたっては、次の各機関をはじめ多くの方々からのご指導、ご協力を得た。記して感謝の意を表す次第である。

愛知県教育委員会文化財課、株式会社花井組、大府共和西特定土地区画整理組合、大府市役所都市開発部区画整理課（現産業建設部都市整備課）、中野晴久（常滑市民俗資料館）、青木修（瀬戸市埋蔵文化財センター）、財団法人荒木集成館、北村厚史（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査部長）、津田卓子（名古屋市博物館学芸員）、小川裕紀（愛知県陶磁資料館学芸員）、楠美代子（東浦町郷土資料館学芸員）、奥川弘成（武豊町歴史民俗資料館）、後藤健一（湖西市教育委員会生涯学習課）

6．出土品整理（洗浄・マーキング・接合・仕分など）は平成１７・１８年度に玉野総合コンサルタント株式会社、実測図作成は平成１９年度にアイシン精機株式会社事業企画室（廃止）に協力を依頼した。

7．発掘調査と整理作業には以下の方々が参加協力された。現場調査の作業に１９名、出土品洗浄の作業に１１名、出土品整理に３名、図化作業に３名の方々が参加協力された。お名前は以下のとおりである。

【現場作業員】

浅田レイ子・井上純子・大野定夫・小沢幸雄・小野八永・木下信雄・久野明子・児玉五市・都築規子・中野俊子・那須昌俊・七ツ村清吉・成木三枝子・蔦原淑子・平野洋子・前田美江・真島知恵・村野實・渡辺勝

伊藤羊子・鈴木智恵（以上大府市歴史民俗資料館）

【洗浄作業】

飯塚ますみ・江川一彦・駒形欽也・杉山勝・戸田博之・鳥羽香代子・中村正則・中村嘉子・松下勝美・松本茂昭・両角治子

【出土品整理作業】

鳥羽香代子・中村嘉子・両角治子

【出土品図化作業】

岸本勝江（以上アイシン精機株式会社事業企画室＝廃止）、鈴木智恵（大府市歴史民俗資料館）、服部孝信

8．熱残留磁気測定と炭化物分析はそれぞれ大谷女子大学文化財学科教授広岡公夫氏と株式会社パレオ・ラボ　植田弥生氏に依頼した。

9．窯体と調査区の測量および図化は愛知玉野情報システム株式会社に委託し、座標は国土座標第Ⅶ系に準拠する。

10．本書の編集は古田功治が総括し、事務を鈴木智恵と伊藤羊子が行なった。執筆の分担は以下のとおりである。

第1部	第1章	第1節	古田功治
		第2節	古田功治
		第3節	古田功治
第2部	第1章		中村伸吾・服部孝信・伊藤羊子・鈴木智恵
	第2章		服部孝信
	第3章	第1節	広岡公夫
		第2節	植田弥生
	第4章		古田功治
	第5章		古田功治
第3部	第1章		中村伸吾
	第2章		伊藤羊子
	第3章		古田功治

12．土色には、小林正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』を使用した。

13．調査記録および出土遺物は大府市歴史民俗資料館で保管している。

目　次

第１部　調査と遺跡の概要
第１章　調査の経緯 …… 2
第２章　調査概要 …… 6
第３章　遺跡の位置と地形および周辺の環境 …… 10

第２部　瀬戸Ｂ古窯跡群
第１章　遺　構
第１節　窯体について …… 18
第２節　灰原について …… 38
第３節　その他の遺構について …… 40
第２章　遺　物
第１節　器形分類 …… 41
第２節　窯内の遺物 …… 45
第３節　灰原および土坑の遺物 …… 58
第４節　床面下施設の遺物 …… 86
第５節　考察 …… 95
第３章　自然科学分析
第１節　瀬戸Ｂ古窯跡群の考古地磁気年代推定 …… 119
第２節　瀬戸Ｂ古窯跡群の出土炭化材の樹種同定 …… 137
第４章　出土陶硯について
第１節　陶硯について …… 143
第２節　愛知県および周辺県の出土中世陶硯 …… 145
第３節　瀬戸Ｂ古窯跡群出土陶硯の考察 …… 167
第４節　中世陶硯研究の展望 …… 173
第５章　まとめ …… 176

第３部　奥谷古窯跡
第１章　遺構について …… 180
第２章　遺物について …… 184
第３章　まとめ …… 186

報告書抄録 …… 187
刊行案内 …… 188

挿図目次

【第１部】
第１図　遺跡位置図（国土地理院　１/５万地形図「名古屋南」）…… 3
第２図　奥谷古窯跡調査時地形図 …… 4
第３図　瀬戸Ｂ古窯跡群調査時地形図 …… 4
第４図　奥谷古窯跡調査現況位置図 …… 5
第５図　瀬戸Ｂ古窯跡群調査現況位置図 …… 5
第６図　奥谷古窯跡調査前地形図 …… 6
第７図　瀬戸Ｂ古窯跡群調査前地形図 …… 8
第８図　江戸末期の奥谷古窯跡・瀬戸Ｂ古窯跡群付近（『大府市誌』近世村絵図集より） …… 11
第９図　大府市の表層地質図 …… 12
第10図　周辺遺跡分布図 …… 14
【第２部第１章】
第11図　遺構配置図 …… 19
第12図　１号窯窯体実測図 …… 21
第13図　１号窯セクション図 …… 22
第14図　１号窯床面下施設 …… 24
第15図　２号窯窯体実測図 …… 26
第16図　２号窯セクション図 …… 27
第17図　３号窯窯体実測図 …… 30
第18図　３号窯セクション図 …… 31
第19図　３号窯床面下施設 …… 33
第20図　４号窯窯体実測図 …… 35
第21図　４号窯セクション図 …… 36
第22図　灰原セクションライン位置図 …… 38
第23図　土坑１・２平面図とセクション図 …… 40
【第２部第２章】
第24図　部位等名称図 …… 41
第25図　碗類器形分類図 …… 42
第26図　皿類器形分類図 …… 43
第27図　鉢類器形分類図 …… 44
第28図　１号窯出土碗実測図 …… 45
第29図　１号窯窯内出土碗類器形分類組成図 …… 46
第30図　１号窯出土皿・重ね皿実測図 …… 46
第31図　２号窯窯内出土碗類器形分類組成図 …… 47
第32図　２号窯出土碗実測図 …… 48
第33図　３号窯窯内出土碗類器形分類組成図 …… 49

第34図　3号窯出土碗実測図 …… 50
第35図　3号窯窯内出土皿類器形分類組成図 …… 51
第36図　3号窯出土皿実測図 …… 52
第37図　3号窯出土重ね皿実測図 …… 53
第38図　4号窯窯内出土碗類器形分類組成図 …… 54
第39図　4号窯出土碗実測図 …… 55
第40図　4号窯窯内出土皿類器形分類組成図 …… 56
第41図　4号窯出土皿・陶丸実測図 …… 56
第42図　3号窯出土砥石実測図 …… 57
第43図　灰原出土碗類器形分類組成図 …… 58
第44図　灰原等出土碗実測図〔その1〕…… 59
第45図　灰原等出土碗実測図〔その2〕…… 60
第46図　灰原等出土碗実測図〔その3〕…… 61
第47図　灰原等出土脚付碗実測図 …… 67
第48図　灰原出土皿類器形分類組成図 …… 67
第49図　灰原等出土皿実測図〔その1〕…… 68
第50図　灰原等出土皿実測図〔その2〕…… 69
第51図　灰原等出土皿実測図〔その3〕…… 70
第52図　灰原等出土皿実測図〔その4〕…… 71
第53図　灰原出土鉢類実測図 …… 79
第54図　灰原出土托実測図 …… 80
第55図　灰原出土壺実測図 …… 81
第56図　灰原出土取手実測図 …… 82
第57図　灰原出土陶丸実測図 …… 83
第58図　灰原出土焼台実測図 …… 84
第59図　灰原出土土師質鍋・内耳鍋実測図 …… 85
第60図　1号窯床面下施設出土遺物実測図 …… 87
第61図　1号窯床面下施設遺物取上位置図 …… 88
第62図　3号窯床面下施設出土遺物実測図 …… 91
第63図　3号窯床面下施設遺物取上位置図 …… 92
【第2部第3章】
第64図　西暦700～2000年の東海版永年変化曲線（広岡・藤澤、2003による）と
瀬戸B古窯跡群の考古地磁気測定結果 …… 124
【第2部第4章】
第65図　東海地方出土中世陶硯分布図 …… 158
第66図　中世陶硯実測図〔その1〕…… 162

第67図　中世陶硯実測図〔その2〕……163
第68図　中世陶硯実測図〔その3〕……164
第69図　中世陶硯実測図〔その4〕……165
第70図　中世陶硯実測図〔その5〕……166
第71図　中世陶硯実測図〔その6〕……171
第72図　中世陶硯実測図〔その7〕……172
【第3部】
第73図　奥谷古窯跡遺構配置図……180
第74図　奥谷古窯跡調査区内土層断面図……181
第75図　奥谷古窯跡トレンチ断面図……182
第76図　奥谷古窯跡遺物実測図……184

表目次

【第1部】
第1表　文書一覧……8
第2表　調査工程表……9
第3表　周辺遺跡一覧表……15
【第2部第2章】
第4表　1号窯窯内出土碗器形分類表……45
第5表　2号窯窯内出土碗器形分類表……47
第6表　3号窯窯内出土碗器形分類表……49
第7表　3号窯窯内出土皿器形分類表……51
第8表　4号窯窯内出土碗器形分類表……54
第9表　4号窯窯内出土皿器形分類表……56
第10表　灰原等出土碗器形分類表……58
第11表　灰原等出土皿器形分類表……67
第12表　床面下施設出土遺物器形分類……86
第13表　1号窯床面下施設遺物取上げ表〔その1〕……89
第14表　1号窯床面下施設遺物取上げ表〔その2〕……90
第15表　3号窯床面下施設遺物取上げ表〔その1〕……93
第16表　3号窯床面下施設遺物取上げ表〔その2〕……94
第17表　出土地点別碗類皿類法量比較表……97
第18表　碗類観察表〔その1〕……98
第19表　碗類観察表〔その2〕……99
第20表　碗類観察表〔その3〕……100

第21表　碗類観察表〔その4〕……101
第22表　碗類観察表〔その5〕……102
第23表　碗類観察表〔その6〕……103
第24表　碗類観察表〔その7〕……104
第25表　皿類観察表〔その1〕……105
第26表　皿類観察表〔その2〕……106
第27表　皿類観察表〔その3〕……107
第28表　皿類観察表〔その4〕……108
第29表　皿類観察表〔その5〕……109
第30表　皿類観察表〔その6〕……110
第31表　皿類観察表〔その7〕……111
第32表　皿類観察表〔その8〕……112
第33表　皿類観察表〔その9〕……113
第34表　皿類観察表〔その10〕……114
第35表　托観察表……115
第36表　脚付碗観察表……115
第37表　鉢類観察表……115
第38表　重ね碗観察表……116
第39表　重ね皿観察表……116
第40表　壺観察表……117
第41表　陶丸観察表……117
第42表　陶硯観察表……117
第43表　焼台観察表……117
第44表　土師質鳥観察表……118
第45表　内耳鍋観察表……118
第46表　砥石観察表……118
第47表　取手観察表……118
【第2部第3章】
第48表　瀬戸B古窯跡群の考古地磁気試料番号……125
第49表　瀬戸B古窯跡群1号窯のNRMの磁化測定結果……125
第50表　瀬戸B古窯跡群1号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果……126
第51表　瀬戸B古窯跡群1号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果……126
第52表　瀬戸B古窯跡群1号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果……127
第53表　瀬戸B古窯跡群1号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果……127
第54表　瀬戸B古窯跡群2号窯のNRMの磁化測定結果……128
第55表　瀬戸B古窯跡群2号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果……128

第56表　瀬戸B古窯跡群2号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……129
第57表　瀬戸B古窯跡群2号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果 ……129
第58表　瀬戸B古窯跡群2号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果 ……130
第59表　瀬戸B古窯跡群3号窯のNRMの磁化測定結果 ……130
第60表　瀬戸B古窯跡群3号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……131
第61表　瀬戸B古窯跡群3号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……131
第62表　瀬戸B古窯跡群3号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果 ……132
第63表　瀬戸B古窯跡群3号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果 ……132
第64表　瀬戸B古窯跡群4号窯のNRMの磁化測定結果 ……133
第65表　瀬戸B古窯跡群4号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……133
第66表　瀬戸B古窯跡群4号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……134
第67表　瀬戸B古窯跡群4号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果 ……134
第68表　瀬戸B古窯跡群4号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果 ……135
第69表　瀬戸B古窯跡群の考古地磁気測定結果 ……136
第70表　瀬戸B古窯群出土炭化材樹種同定結果 ……140
第71表　窯および出土位置の検出樹種比較 ……140
【第2部第4章】
第72表　東海地方出土中世陶硯法量分布（実寸部分のみ） ……157
第73表　東海地方出土中世陶硯一覧表 ……160
【第3部】
第74表　奥谷古窯跡出土品観察表 ……185

写真目次

【巻頭】
巻頭1　調査区全景 …… i
巻頭2　調査区近景　1号窯・2号窯 …… ii
巻頭3　調査区近景　3号窯・4号窯 …… ii
【第1部】
写真1　共和西区画整理事業地区（空中写真） …… 2
写真2　奥谷古窯跡の調査区の遠景 …… 6
写真3　奥谷古窯跡の調査区の近景 …… 6
写真4　瀬戸B古窯跡群の調査区の遠景 …… 7
写真5　瀬戸B古窯跡群の調査区の近景 …… 7
写真6　調査風景（奥谷） …… 9
写真7　調査風景（奥谷） …… 9

写真８　調査風景（瀬戸）…… 9
写真９　調査風景（瀬戸）…… 9
【第２部第１章】
写真10　調査区全景 …… 18
写真11　１号窯埋土堆積状況Ｂ（南から）…… 23
写真12　１号窯完掘状況（北から）…… 23
写真13　１号窯床面断割状況Ｃ東（北から）…… 23
写真14　１号窯床面断割状況Ｃ西（北から）…… 23
写真15　１号窯断割完掘状況（北から）…… 23
写真16　１号窯床面下施設出土状況（南から）…… 23
写真17　２号窯完掘状況（北から）…… 28
写真18　２号窯埋土堆積状況Ｃ（北から）…… 28
写真19　２号窯床面断割状況Ｅ（北から）…… 28
写真20　２号窯床面断割状況［Ｂ－Ｃの間］（北から）…… 28
写真21　２号窯断割完掘状況（北から）…… 28
写真22　１・２号窯断割状況（北東から）…… 28
写真23　３号窯埋土堆積状況Ｃ東（北から）…… 32
写真24　３号窯埋土堆積状況Ｃ西（北から）…… 32
写真25　３号窯断割状況Ｂ（北から）…… 32
写真26　３号窯断割状況Ｃ（北から）…… 32
写真27　３号窯断割完掘状況（北から）…… 32
写真28　３号窯床面下施設出土状況（南から）…… 32
写真29　４号窯埋土堆積状況Ｃ（北から）…… 37
写真30　４号窯埋土堆積状況Ｂ（南から）…… 37
写真31　４号窯完掘状況（北から）…… 37
写真32　４号窯断割状況Ｂ（北から）…… 37
写真33　４号窯排水溝（南から）…… 37
写真34　４号窯断割完掘状況（北から）…… 37
写真35　灰原遺物出土状況（北から）…… 39
写真36　灰原掘削状況（北から）…… 39
写真37　灰原ＡＡ区西側［Ｂベルト］（東から）…… 39
写真38　灰原Ａ区西側［Ｃベルト］（東から）…… 39
写真39　灰原Ｂ区西側ほか［Ｃベルト］（東から）…… 39
写真40　灰原Ｅ区南側（北から）…… 39
写真41　灰原Ｈ区南側（北から）…… 39
写真42　灰原Ｌ区南側（北から）…… 39

【第２部第２章】

写真43　１号窯出土碗 …… 45
写真44　１号窯出土皿・重ね皿 …… 46
写真45　２号窯出土碗 …… 48
写真46　３号窯出土碗 …… 50
写真47　３号窯出土皿 …… 52
写真48　３号窯出土重ね碗・重ね皿 …… 53
写真49　４号窯出土碗 …… 55
写真50　４号窯出土皿・陶丸 …… 57
写真51　３号窯出土砥石 …… 57
写真52　灰原等出土碗〔その１〕 …… 62
写真53　灰原等出土碗〔その２〕 …… 63
写真54　灰原等出土碗〔その３〕 …… 64
写真55　灰原等出土碗〔その４〕 …… 65
写真56　灰原等出土碗〔その５〕 …… 66
写真57　灰原等出土脚付碗 …… 67
写真58　灰原等出土皿〔その１〕 …… 72
写真59　灰原等出土皿〔その２〕 …… 73
写真60　灰原等出土皿〔その３〕 …… 74
写真61　灰原等出土皿〔その４〕 …… 75
写真62　灰原等出土皿〔その５〕 …… 76
写真63　灰原等出土皿〔その６〕 …… 77
写真64　灰原等出土皿〔その７〕 …… 78
写真65　灰原出土鉢 …… 80
写真66　灰原出土托 …… 80
写真67　灰原出土壺 …… 82
写真68　灰原出土取手 …… 82
写真69　灰原出土陶丸 …… 83
写真70　灰原出土焼台 …… 85
写真71　灰原出土土師質鍋・内耳鍋 …… 85
写真72　１号窯床面下施設出土遺物 …… 87
写真73　３号窯床面下施設出土遺物 …… 91

【第２部第３章】

写真74　熱残留磁気測定調査風景 …… 123
写真75　瀬戸Ｂ古窯跡群出土炭化材の走査電子顕微鏡写真〔その１〕 …… 141
写真76　瀬戸Ｂ古窯跡群出土炭化材の走査電子顕微鏡写真〔その２〕 …… 142

写真77　瀬戸B古窯跡群出土切削底のある炭化材……142
【第2部第4章】
写真78　常滑窯出土中世陶硯……157
写真79　長方二面硯〔その1〕……168
写真80　長方二面硯〔その2〕……169
写真81　長方二面硯〔その3〕……170
【第3部】
写真82　奥谷古窯跡遺構……183
写真83　奥谷古窯跡遺物……184
写真84　奥谷古窯跡調査風景……186

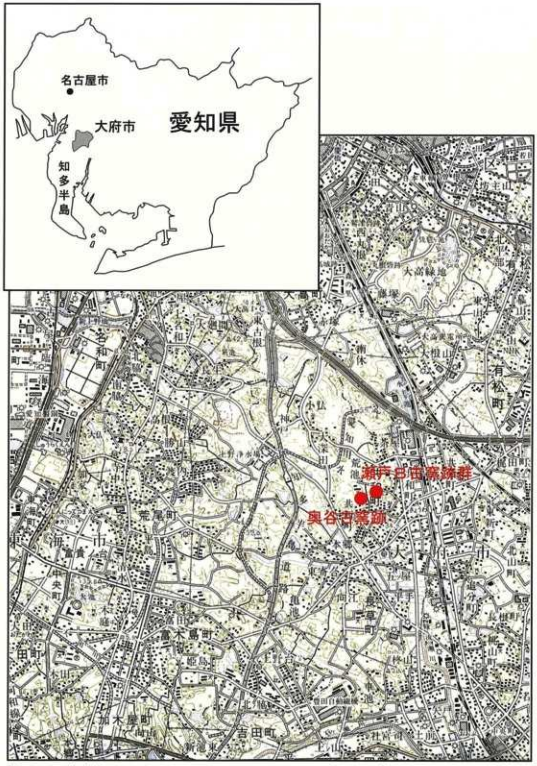
第１部　調査と遺跡の概要

第１章　調査の経緯

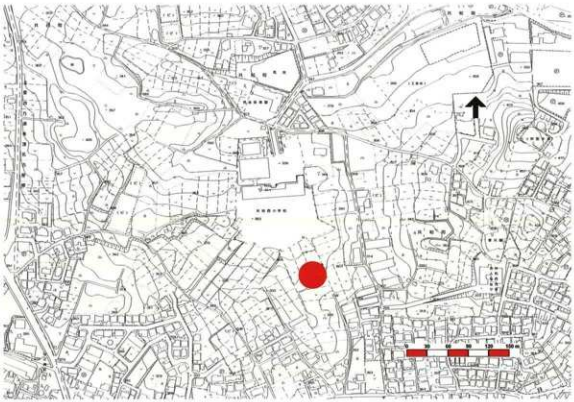
大府市は愛知県西部、伊勢湾と三河湾にはさまれた知多半島の基部に位置し、面積 33.68 平方キロメートルで、人口は約８万５千人である。北は名古屋市緑区と豊明市、西は東海市と知多市、南は東浦町、東はかつての尾張国と三河国を隔てる、境川を挟んで刈谷市と接する①。元々知多郡に属し、知多半島の一部とみなされているが、海にはどこも面していない。

さて、愛知県の中核に位置する名古屋市に接している大府市は、名古屋中心部への交通アクセスの良さから各地で住宅や工場、店舗の建設が旺盛である。特に、ＪＲ大府駅やＪＲ共和駅に近接した畑や雑木林は区画整理事業の対象とされ、盛んに事業が企画され、実行されている。その中のひとつに、共和西特定土地区画整理事業がある。この事業が計画された頃、市区画整理課から予定地内での遺跡所在の有無の照会があり、平成１０年３月に大府市歴史民俗資料館では事業予定地内での遺跡の踏査を行い、砂原古窯・奥谷古窯・瀬戸古窯（後に滅失と確認、瀬戸Ａ古窯と改称）・瀬戸遺跡（散布地で、後に瀬戸Ｂ古窯跡群と改称）・久分古窯の所在を確認した。さらに、瀬戸Ｂ古窯跡群調査中に、未知の窯跡を発見し、瀬戸Ｃ古窯と命名するに及んだ。発見当初、瀬戸Ｂ古窯跡群は畑の中に陶器片や遺物が散らばっていたが、遺跡の所在が想定されたので、「瀬戸遺跡」と命名した。その後、数度現地を訪れては、遺物を確認して遺跡の性格を把握しようと努めた。また、奥谷古窯跡は耕作放棄された畑の表面に遺物が散らばるところで、その量により遺跡所在の可能が高いことが推察された。以上の結果を平成１０年３月に「大府市遺跡等分布図　第４版」に掲載し、周知させた。奥谷古窯跡では平成１６年６月２２日と７月６日の２回、瀬戸Ｂ古窯跡群では平成１６年７月９日に大府市教育委員会（大府市歴史民俗資料館実施）が本発掘調査前の範囲確認調査を実施した結果、奥谷古窯跡ではかなり破壊された遺構を１箇所確認、瀬戸Ｂ古窯跡群では窯体２基以上が残存していることを確認したので、ともに１６年度秋以降に本調査の実施を決定した。本発掘調査は、大府市教育委員会が玉野総合コンサルタントに委託して、奥谷古窯跡は平成１６年１０月６日から、瀬戸Ｂ古窯跡群が平成１６年１１月４日から開始。それぞれ調査面積を 120 ㎡、420 ㎡とした。

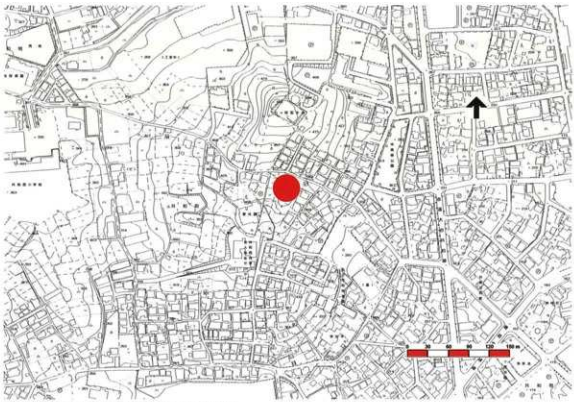
写真１　共和西区画整理事業地区（空中写真）



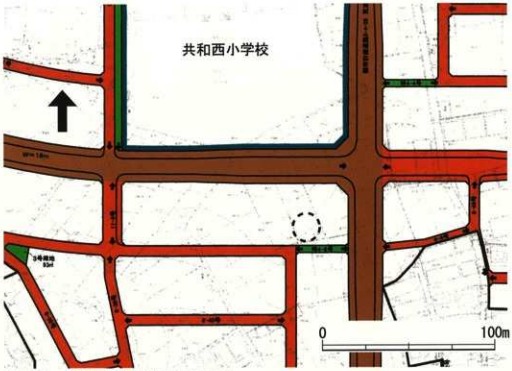
第１図　遺跡位置図（国土地理院　1/5万地形図「名古屋南」）



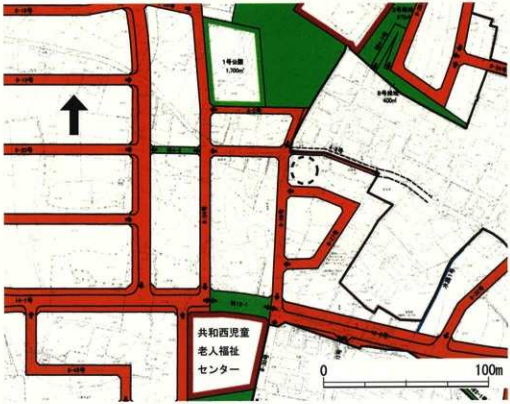
第２図　奥谷古窯跡調査時地形図



第３図　瀬戸Ｂ古窯跡群調査時地形図



第４図　奥谷古窯跡調査現況位置図



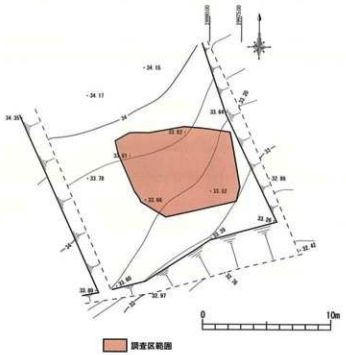
第５図　瀬戸Ｂ古窯跡群調査現況位置図

第２章　調査概要

奥谷古窯跡

この奥谷古窯跡は、丘陵地に開墾された農地の一角に存在した。遺跡は大府市立共和西小学校敷地の南どなりに広がる畑の中にあり、地主の証言では農地造成によりかなり地形がなだらかに改変された、とのことだった。遺物は畑の表面に散らばっており、どこが遺跡の本体であるかを捕まえることは困難であった。そこで、平成１６年６月２２日と７月６日の２回試掘調査を行った。畑の傾斜と直交する東西の試掘坑を決め、重機によって掘削した。合計 17 本の試掘坑をあけ、遺構の痕跡と認められる場所を中心に調査区を設定し、その面積を 120 ㎡とした。

本発掘調査は国土座標に準じたグリッド杭を設定後の平成１６年１０月６日から開始。若干の表土を剥ぎ、後は手堀で調査を進めた。遺物の取り上げと必要な地層の図面を作成し、１０月１３日に調査は終了した。



第６図　奥谷古窯跡調査前地形図

写真２　奥谷古窯跡の調査区の遠景

写真３　奥谷古窯跡の調査区の近景

瀬戸B古窯跡群

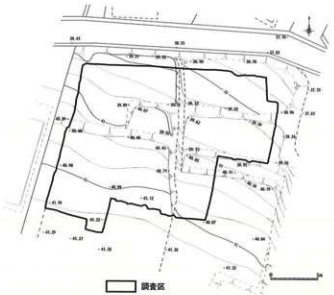
遺跡は丘陵地の標高が高い場所の一角で、かろうじて残った雑木林と旧傾斜を維持した畑の中にあった。周辺には住宅が間近に迫っていた。遺跡は北だれの斜面だが、北側に標高の高い南だれの斜面があり、両方の斜面でできた谷は道として利用されている場所であった。遺跡踏査時には畑の中に遺物が散布していることが確認されたが、その量はあまり多くないが、畑が土地利用による改変が皆無と思われたので、遺跡の存在が想定された。ただ、どのような系統の遺跡かは不明であったので、土器の散布する遺跡として登録した。平成16年7月9日に重機によって5本の試掘坑を傾斜に直交してあけた。その結果、窯体壁を2本のトレンチで確認し、この散布地が窯跡であることが判明し、遺跡の名称を「瀬戸遺跡」から「瀬戸B古窯跡群」へ変更した。

本発掘調査は、平成16年11月4日に着手し、窯体本体を確認した場所を中心に調査区を、西は隣家まで、北は舗装道路まで、東は駐車場（掘削により盤が下がる）までの420㎡に設定した。とりあえず、他にも未知の窯体が隠れている可能性を意識しながら表土剥ぎを行うことからはじめた。表土剥ぎ後、国土座標に準じたグリッド杭を設定。遺物はこのグリッド単位で取り上げた。表土剥ぎの結果、窯本体は全部で4基、いずれもほぼ全長が残存していることが確かめられ、しかも灰原も十分に残っていた。窯体、灰原の検出後、窯内埋土の除去、灰原の掘削土層断面の観察、記録作業、写真撮影を行った。完掘後の1月27日にはラジコンヘリによる空撮を行う。その後、窯体の断ち割り、窯体床面下の確認作業と記録作業、熱残留磁気測定調査のサンプリングと順次すすめた。その間、1月19日には近隣に住む市民を対象にした現地説明会を開催し、1月27日には中日新聞の大府市専従記者の取材を受けるなど、注目を集めた。遺構の調査は予想以上に時間を費やし、すべてを終了したのは、平成17年2月26日であった。なお、灰原部分は調査時に土留めとして残した部分があり、その部分の調査を平成18年6月12日から17日に追加調査として行った。

両遺跡の整理作業は、調査終了の翌年17年度から開始。17年度は遺物の洗浄、18年度は遺物の注記・接合・仕分け・分類、19年度は遺物の図面作成と調査記録の整理、原稿作成などを行った。報告書刊行準備は平成20年11月～平成21年3月まで費やして、報告書として3月末に刊行に及んだ。

写真4　瀬戸B古窯跡群の調査区の遠景

写真5　瀬戸B古窯跡群の調査区の近景



第７図　瀬戸Ｂ古窯跡群調査前地形図

奥谷古窯

文書名	文書番号	日　付
埋蔵文化財発掘の届出	大共区発５３９号	平成１６年9月１７日
指示通知	１６教生発１２０８号	平成１６年１０月４日
発掘届出	大教生発２２４号	平成１６年１０月７日
受理通知	１６教生発１３０２号	平成１６年１０月２０日
終了届	大教生発４７１号	平成１７年2月２８日
鑑定結果通知	１６教生発２１５０号	平成１７年3月２９日

瀬戸Ｂ古窯

文書名	文書番号	日　付
記載内容変更協議	大教生発１４９号	平成１６年7月７日
記載内容変更通知	１６教生発８２０号	平成１６年8月４日
埋蔵文化財発掘の届出	大共区発５４０号	平成１６年9月１７日
指示通知	１６教生発１２０９号	平成１６年１０月４日
発掘届出	大教生発２２６号	平成１６年１０月７日
受理通知	１６教生発１３０３号	平成１６年１０月２０日
終了届	大教生発４７２号	平成１７年3月１日
鑑定結果通知	１６教生発２１４９号	平成１７年3月２９日

第１表　文書一覧

年度	内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平成16年度	試掘・発掘調査			●奥谷	●瀬戸B			←	本調査		→		
平成17年度	出土品一次整理			←									→
平成18年度	出土品二次整理			←									→
平成19年度	報告書編集			←									
平成20年度	報告書刊行												●刊行

第２表　調査工程表

写真６　調査風景（奥谷）

写真７　調査風景（奥谷）

写真８　調査風景（瀬戸）

写真９　調査風景（瀬戸）

第３章　遺跡の位置と地形および周辺の環境

地形地質

愛知県の地質は、新生代古代三紀までと、新第三紀中新世以降とに大別される[2]。伊勢湾周辺の地域には、やや固結した礫・砂・シルト・泥層からなっている丘陵が拡がっており、これらは東海層群と呼ばれ、見られる地域毎に呼称が異なる。例えば、濃尾平野より東のものは瀬戸層群、知多半島のものは南部の師崎層群と北中部の常滑層群である。

地質年代は、最下部層は中新統最上部、下部層は下部鮮新統、中部層は上部鮮新統、上部層は鮮新統最上部、最上部層は下部更新統と考えられている[3]。師崎層群は、今からおよそ 1,600 万年前の第三紀中新世中頃に堆積した砂岩・凝灰質泥岩および凝灰岩からなる海成層である。常滑層群は、師崎層群よりも新しく、第三紀末の鮮新世に存在した東海湖と呼ばれる淡水湖に堆積した淡水性堆積物で、砂層・泥層・亜炭層・砂礫層から構成されている。この地層は、尾張丘陵の瀬戸層群の延長と考えられる。

大府市が位置する知多半島北部は、地形的には尾張丘陵の延長と考えられ、尾張丘陵に属する有松丘陵と大府丘陵および知多丘陵とからなる。有松丘陵と大府丘陵は、北流する大高川（伊勢湾に注ぐ）と南流する鞍流瀬川（三河湾に注ぐ）の谷中分水界が見られる低地を境とし、大府丘陵と知多丘陵は、大田川（東海市）の本・支流の作る谷によって隔てられている。これら三つの丘陵のうち、大府市には、有松丘陵と大府丘陵が含まれ、それぞれ東部の丘陵、西部の丘陵と称される。東部の丘陵は、標高 40～50mでやや急な斜面をなしている。それに対して西部の丘陵は、標高 70mを超える丘陵もあるが、およそ 40mで傾斜のゆるやかな丘陵地が広がる。いずれにしても標高は 100mを超えない高さである。これは、大府市にみられる地層は、全て新生代第三紀鮮新世以降のものであり、大府丘陵においては新第三紀(*Neogene*)後期中新世 ～鮮新世（*Late Miocene (?)to Pliocene*)東海層群(*Tokai Group*)常滑累層(*Tokoname Formation*)上部(*Upper part*)火山灰層(*Volcanic ash layer*)砂・シルト・粘土及び砂礫(火山灰層・亜炭を挟む)(*Sand, clay and pebbly sand(intercalating volcanic ash layers and lignite*)、大府丘陵北東の一部と有松丘陵においては新第三紀(*Neogene*) 鮮新世(*Pliocene*)矢田川累層(*Yadagawa Formation*)砂及び礫層 （*Sand and gravel*) を主としているためであり、東部の丘陵は透水性の高い礫が多く、西部の丘陵は透水性の低い砂やシルトがあるため、流れやすいためと考えられる。しかしながら、全体的には有松丘陵及び大府丘陵、知多丘陵は、砂・シルト・粘土層から構成されているなど、地質や地形が酷似しており、開析が進みやすく、いくつもの舌状の小丘陵が発達しているなどの共通点も見られる。丘陵部に広がる常滑層群を構成する主な鉱物は、チャート・ホルンフェルス・長石・石英・雲母などである。長石は風化して粘土になりやすい。シルト層や粘土層は、基本的には灰色をしているが、水分を含む量によりその濃さが変わる。また、砂層に伴うものは濃い灰色のものが多く、礫層に伴うものは桃色になるものが多い。常滑市周辺でみられる地層は、亜炭を挟むことが多いが、大府市内では比較的少ない。

河川流域の地形は、大府市では丘陵の上にわずかに残る高位段丘面を別にすれば、境川右岸や石ヶ

瀬川の河岸段丘が見られる。これは、第四紀(*Quaternary*)更新世(*Pleistocene*)後期(*Late*)に形成された低位段丘層(*Lower terrace deposits*)や中位段丘層(*Middle terrace deposits*)で、標高10～20mの各段丘面は比較的小規模で点在している。この地層は、名古屋市の熱田台地を形成している熱田層や知多半島の半田層・野間層などと同時期のものである。低地は、第四紀(*Quaternary*)完新世(*Holocene*)の潮汐低地(*Tidal flat*)・後背湿地(*back swamp*)・河道堆積物(*channel deposits*)や谷低平野堆積物(*Valley plain deposits*)からなり、開析された丘陵深部まで入り込み、平坦面を形成している④。

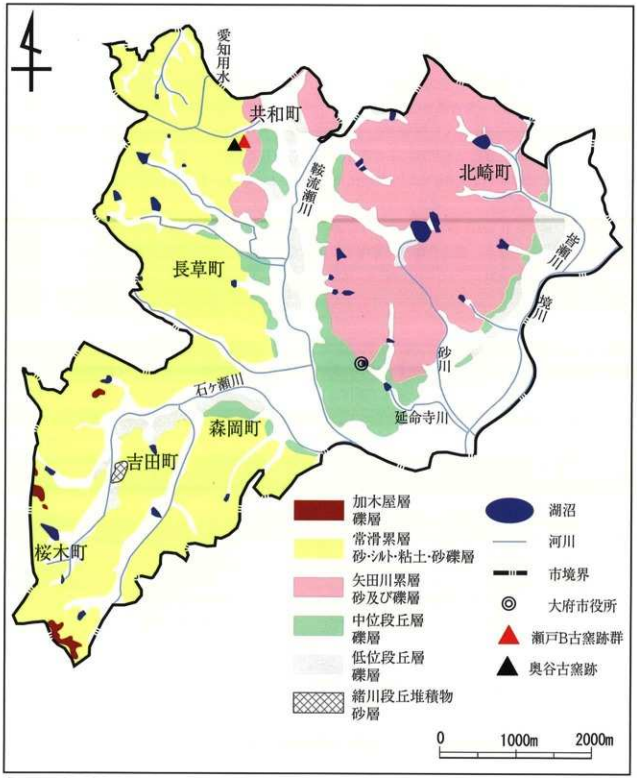
瀬戸B古窯と直線で数百mの距離にある砂原古窯周辺で得られたデータがある。大府市長草町において実施された深度800mに達するボーリングでは、厚さ約520mの東海層群の下位に、厚さ約260mの海成中新統が存在することが確かめられている⑤。

本窯跡の立地する丘陵は、常滑層群という陶器原料粘土やみがき砂（火山灰）・褐炭が含まれている地層が広がる。そのため、製品の原料や窯体を構築する良質な材料として広く利用されたものと考えられる。実際に確認されただけでも、周辺に窯跡が分布している事実がそのことを裏付けるものと推察される。

地名

瀬戸B古窯や奥谷古窯のあった地区は、江戸期には八ツ屋新田に属し、天保１２年の村絵図によると遺跡のあったところは「定納山」とか「御林山」と呼ばれるエリアになっていた。瀬戸B古窯に付けられている「瀬戸」はこの地域の小字名を冠して名づけた遺跡名である。「瀬戸」と言えば、瀬戸焼の焼き物を連想するように陶器を関係する地名と思われる。この「瀬戸」という小字は江戸期の文書や絵図では確認できないが、明治１５年（1882）の「愛知県郡町村字名調」には記録されている。しかし、明治期以降の地名なので中世の窯業と関係するものと解すことは無理であろう。この「瀬戸」の小字と中世窯業とは関連づけられない。

第８図　江戸末期の奥谷古窯跡・瀬戸B古窯跡群付近（『大府市誌』近世村絵図集より）



第９図　大府市の表層地質図　引用文献：『日本地質図大系』（名古屋市南部、知多半島より加筆・修正）

周辺の古窯・歴史的環境

瀬戸B古窯跡群や奥谷古窯跡の所在する市内北西部は名古屋市緑区・東海市の丘陵地につながるところに位置する。この地は圧倒的に窯業遺跡が多く、第 10 図のような状況を呈している。ここには古代から中世の窯業遺跡が確認されているが、時期的には灰釉陶器窯から中世山茶碗窯に属する遺跡である。古代に含まれる灰釉陶器窯の数は中世山茶碗窯に比して圧倒的に少ない。灰釉陶器窯は猿投山西南麓を発生源とする窯だが、その南限に大府市の東側が含まれている⑥。大府市北西部や東海市では灰釉陶器窯は未確認で、名古屋市緑区のうち大高緑地公園周辺（国道２３号線と名古屋鉄道本線に挟まれたエリア）には NA203 号窯・NA204 号窯・NA205 号窯・NA305 号窯（南平部２号窯群）・銭瓶谷古窯群の５箇所の灰釉陶器窯が知られて、さらにその数をはるかに上回る中世山茶碗窯が確認されている。おそらく中世山茶碗窯は粗密の程度はあるが、ほぼ丘陵地一円に築窯していた、と考えることに無理はないと言えよう。比較の問題であるが、この地区も窯業集中地域と見なすことが可能である。

さて、瀬戸B古窯や奥谷古窯の周辺には、砂原古窯（平成１５年調査、平安末から鎌倉初期の遺跡）・久分古窯（平成１７年調査　未報告）・瀬戸Ｃ古窯群(平成１７年調査　未報告)・大深田古窯・荒池古窯群などを把握している。時期的にはいずれも平安末期から鎌倉期の窯と想定される、いわゆる中世山茶碗窯に分類されるものである。今後も同地域での分布調査を進めていけば、さらにその数は増加すると考えられる。

註

①大府市役所『大府市誌』資料編　自然　18 頁　（大府市役所　1998 年）

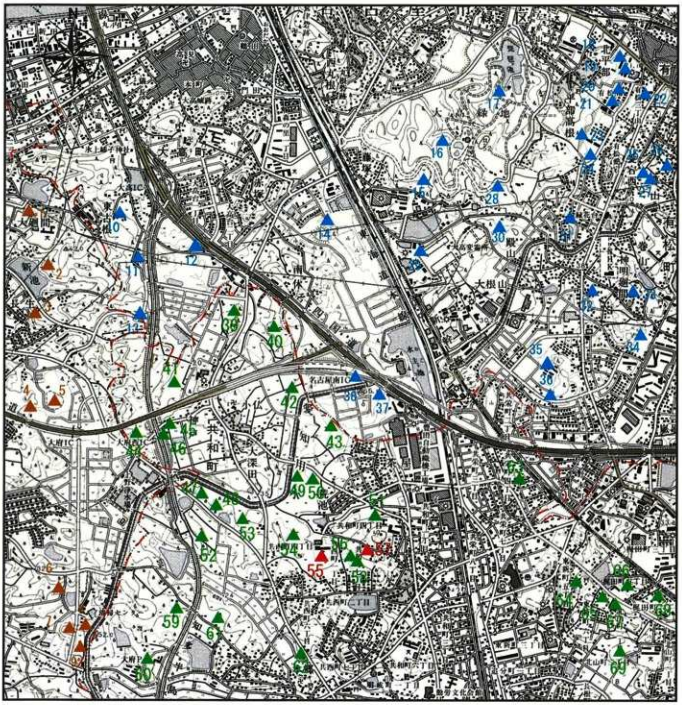
②大府市役所『大府市誌』資料編　自然　14-36 頁（大府市役所　1998 年）

③山下　昇編『日本の地質５　中部地方の地質Ⅱ』130－177 頁（共立出版株式会社　1988 年）

④猪木幸男『日本地質図大系　中部地方』（朝倉書店　1991 年）

⑤桑原　徹『濃尾盆地と傾動地塊運動』7　235－347 頁（第四紀研究　1968 年）

⑥斉藤孝正「中世猿投窯の研究～編年に関する一考察～」(『名古屋大学文学部研究論集』Ｃ１史学 34　1988 年)、藤澤良祐「山茶碗の生産体制」(「中世常滑焼をおって」資料集　日本福祉大学知多半島総合研究所　1994 年)



第 10 図　周辺遺跡分布図

東海市

	遺跡番号	包蔵地名	遺物
1	430009	大根古窯	山茶椀・小皿
2	430021	鐘棚古窯	山茶椀・小皿
3	430022	西萌山古窯	山茶椀・小皿
4	430026	座頭ケ峰古窯	山茶椀
5	430027	法秀古窯	山茶椀・小皿・短頸壺・小時器台・片口鉢
6	430142-001	奥山池4号窯	山茶碗・小皿・鉢
7	430032	奥山池第1号窯	山茶椀・小皿
8	430033	奥山池第2号窯	山茶椀・小皿
9	430034	奥山池第3号窯	山茶椀・小皿

名古屋市

	遺跡番号	包蔵地名	遺物
10	014134	天楽山古窯	山茶椀・小皿
11	014135	蔵王殿古窯	山茶椀・小皿
12	014133	銭瓶谷古窯群	須恵器・灰釉陶器・山茶椀
13	014136	定納山古窯群	山茶椀・小皿
14	014131	東植松古窯	山茶椀・小皿
15	014120	NA205号窯	灰釉陶器・山茶椀・小皿
16	014118	NA307号窯	山茶椀・小皿
17	014112	NA306号窯	山茶椀・小皿
18	014111	NA302号窯	山茶椀・小皿
19	014110	NA203号窯	灰釉陶器
20	014108	NA204号窯	灰釉陶器
21	014109	NA305号窯(南平部2号窯群)	山茶椀・小皿
22	014107	NA304号窯	山茶椀・小皿
23	014117	NA311号窯(露根西古窯群)	山茶椀・小皿
24	014116	NA312号窯	山茶椀・小皿
25	014114	NA309号窯	山茶椀・小皿
26	014113	NA308号窯	山茶椀・小皿
27	014115	NA310号窯	山茶椀・小皿
28	014119	NA313号窯(北忠治山古窯群)	山茶椀・小皿
29	014124	NA315号窯	山茶椀・小皿
30	014123	NA314号窯	山茶椀・小皿
31	014122	NA316号窯	山茶椀・小皿
32	014125	NA317号窯	山茶椀・小皿
33	014126	NA318号窯	山茶椀・小皿
34	014165	NA323古窯群(六ヶ廻間)	山茶椀・小皿
35	014129	NA321号窯	山茶椀・小皿
36	014130	NA322号窯(清水山古窯群)	山茶椀・小皿
37	014132	高根山古窯	山茶椀・小皿
38	014167	NA335古窯	山茶椀・小皿

大府市

	遺跡番号	包蔵地名	遺物
39	440168	子安古窯	灰釉陶器・山茶碗
40	440042	別峪古窯群	山茶椀・小皿
41	440120	下人道古窯	山茶碗
42	440084	大廻間古窯	山茶椀
43	440093	上徳古窯群	山茶碗・小皿
44	440061	上入道古窯	山茶椀・小皿
45	440053	才田A古窯	山茶椀・小皿
46	440054	才田B古窯	山茶椀・小皿
47	440098	木根A古窯群	山茶碗・小皿
48	440099	木根B古窯群	山茶碗・小皿
49	440095	大深田古窯	山茶碗・小皿・壺
50	440096	荒池古窯群	山茶碗・小皿
51	440097	砂原古窯	山茶碗・小皿
52	440176	木根C古窯	山茶碗・小皿
53	440043	権兵衛池古窯	山茶碗・小皿
54	440100	久分古窯群	山茶碗・小皿
55	440102	奥谷古窯	山茶碗・小皿
56	440170	瀬戸C古窯群	碗・皿
57	440101	瀬戸B古窯群	山茶碗・碗・皿・鉢
58	440103	瀬戸A古窯群	山茶碗
59	440177	西忍場古窯	山茶碗・小皿
60	440105	石原古窯群	山茶碗・鍋
61	440175	笹山古窯	山茶碗・小皿
62	440074	下北山古窯群	山茶椀・小皿
63	440114	上り戸古窯	山茶碗
64	440139	八代山B古窯	
65	440138	八代山A古窯	山茶碗・小皿
66	440123	梶田B古窯群	山茶碗・小皿
67	440140	八代山C古窯	山茶碗
68	440041	梶田古窯	山茶椀
69	440104	北山古窯	山茶碗・小皿

第３表　周辺遺跡一覧表

第２部　瀬戸Ｂ古窯跡群

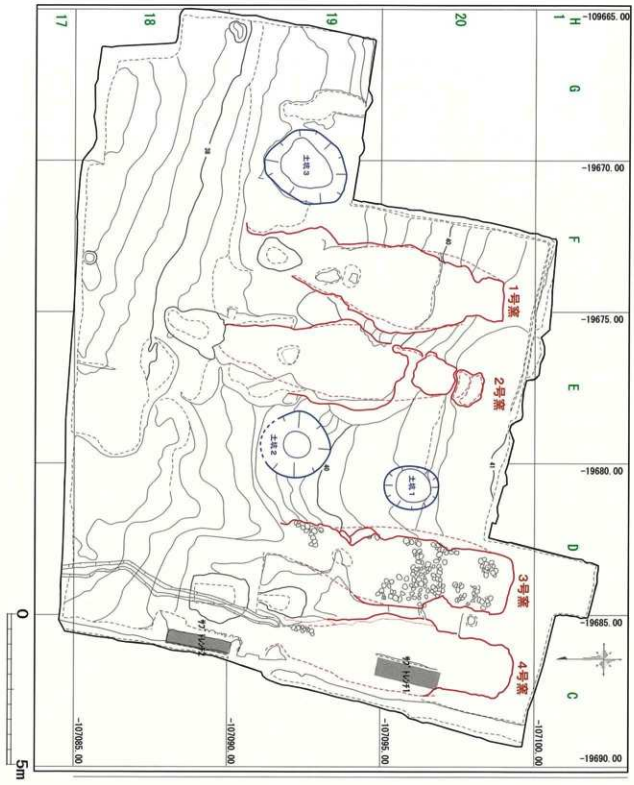
第1章　遺　構

第1節　窯体について

概要

瀬戸B古窯跡群は南南西から北北東へかけて傾斜する丘陵の、主に砂及びシルト層に築窯されていた。窯体は4基を検出した。1号窯と2号窯が近接して調査区の東側に位置し、2号窯から約3.7m西に3号窯が位置し4号窯は3号窯の西側に近接している。いずれも灰原を有するいわゆる山茶碗窯と呼ばれる地下式の窖窯である。窯体上部が削平を受けていたが、窯体の遺存状況や、前庭部から灰原にかけての残存状態は良好であった。

写真10　調査区全景


1号窯
2号窯
3号窯
4号窯
土坑1
土坑2
土坑3
17
18
19
20
D
E
F
G
H
I
-109665.00
-19670.00
-19675.00
-19680.00
-19685.00
-19690.00
-107085.00
-107090.00
-107095.00
-107100.00
0
5m

第 11 図　遺構配置図

1号窯

本窯の上部は数回の農地改良を受けており、窯体の最上部である煙出しや火炎調節棒（ダンパー）付近にかけては消滅していた。窯体全体の残存長は、約 7.18m である。窯体は焚口を北北東に向けて築窯されており、窯体の主軸方位は S－7.9° －W、標高は 38.24m～40.66m である。焚口の幅は 0.82m を測り、焚口から燃焼室までの遺存状態は良好である。壁面は左右とも残存し、燃焼室右側（西側）の方が状態は良好である。

＜燃焼室＞

規模は分焔柱基部で幅 1.66m、長さが分焔柱基部までで 2.15m である。床面の傾斜は、焚口から 64cm の地点までは 12° の傾斜で緩やかに下降し、その地点より 28cm の地点まではほぼ水平に推移し、そこから 12cm の地点まで 5° の傾斜でわずかに上昇する。さらにその地点から 64cm ほぼ水平を保ち、そこから分焔柱基部まで 12cm の地点までは 10° で下降する。床面は灰黒色でよく焼き締まっており、壁面は赤褐色でよく焼き締まっている。

＜分焔柱・通焔孔＞

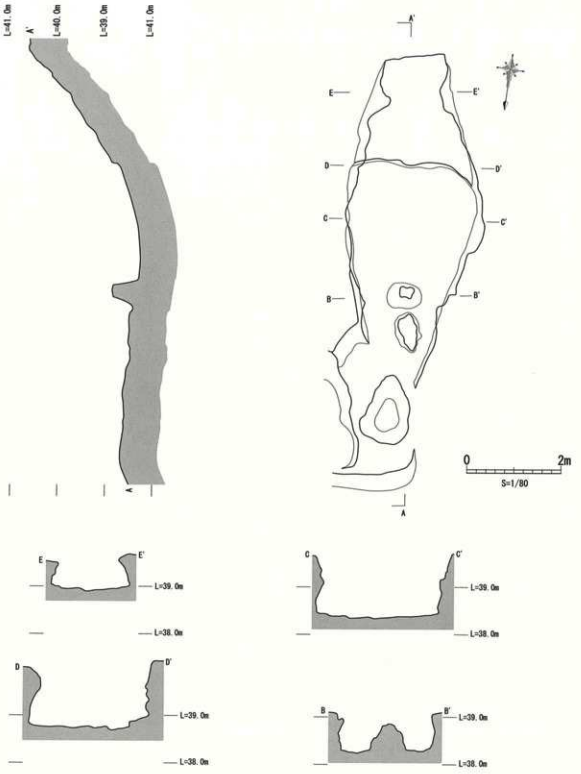
床面から約 52cm までが残存し、基底部の幅は約 72cm である。形状は楕円形を呈しているが、上部に向かい円形となっている。地山掘り残しによって構築され、分焔柱中央部での窯体の幅は床面で 1.92m、通焔孔の床面幅は西が 55cm・東が 64cm を測る。

＜焼成室＞

分焔柱基部と煙道部を結ぶセンターライン上での規模は残存長 4.54m・最大幅 2.56m である。壁面は最大高 1.25m を測る。焼台や遺物が残っていなかったため、全て窯から出した後の状態と考えられる。床面の傾斜は、分焔柱基部から 26cm の地点まで 7° の傾斜でわずかに下降し、そこから 76cm の地点までは 3° で緩やかに上昇する。そこから 124cm の地点までは 16° の傾斜で上昇をはじめ、その地点から 8cm までは 65° の急な傾斜で上昇する。そこから 56cm の地点までは 31° の傾斜で上昇を続け、その地点から 20cm では 7° の傾斜で上昇する。そこから 20cm の地点までは 50° の急傾斜で上昇し、その地点から 80cm までは 40° の傾斜で上昇が続く。そこから 56cm の地点までは 48° の急傾斜で上昇し、その地点から 8cm までは一旦水平を保ち、そこから 68cm の地点まで 44° の傾斜で再び上昇する。

＜床面下施設＞

床面の断割調査を行ったところ、床面下に碗（山茶碗）が伏せられた状態、あるいは横にして敷き詰められた施設が検出された。遺物は碗が 65 点、皿が 1 点の合計 66 点が出土した。床面下施設の構築された位置は、分焔柱のまわりから南側の遺構残存部にかけての範囲であった。伏せられた碗の下は、地山を掘り下げた状態のままであり、碗を伏せ、並べて粘土を貼り付けた構造であった。敷き詰められた碗は大半が伏せられた状態であったが、横になった状態が壁面に沿って認められ、また碗や小皿は単体のものと焼着したものが使用されていた。伏せた碗や小皿の内部は空洞ではなく、大半は粘土や碗の破片が詰められていた。床面下施設の層位は上から黒褐色土層・明黄褐色土層・明赤褐色土層であり、地山の層へと続いていた。層の厚さは黒褐色土層が約 4cm、明黄褐色土層が約 2cm、明赤褐色土層が約 5cm である。また全域にわたり灰の成層が確認された。



第12図　1号窯窯体実測図

1 Hue5YR5/8明赤褐色シルト
粘性やや強く、締まりやや弱い
窯材(壁・天井)を多く含み、炭化物を約1%含む
2 Hue5YR5/8明赤褐色シルト
粘性やや強く、締まりやや弱い
長石・石英・黒雲母粒子と炭化物を約1%含む
3 Hue7.5YR5/6明褐色シルト～粘質土
粘性やや強く、締まりやや弱い
Hue5YR6/8橙色焼土粒子と窯材を約25%含み、
炭化物を約1%、長石・石英・黒雲母粒子と窯材を約5%含む。
4 Hue5YR6/6橙色シルト～粘質土
粘性やや強く、締まりやや弱い
こぶし大以下の窯材を約30%、炭化物を約3%と焼土を少量含む
5 Hue7.5YR5/8明褐色シルト～粘質土
粘性やや強く、締まり強い
φ15mm以下の7.5YR8/8黄橙色粒子を約20%含み、炭化物と窯材を約3%含む
6 Hue10YR6/6明黄褐色シルト～粘質土
粘性強く、締まりやや弱い
長石・石英・黒雲母粒子と窯材を約30%、炭化物・焼土を約3%含む
7 Hue10YR4/6褐色シルト～粘質土 粘性やや強く、締まりあり。炭化物と焼土を10%程含む。窯材片を含む。
8 Hue7.5YR6/8橙色シルト～粘質土
粘性強く、締まりやや弱い
長石・石英・黒雲母粒子と炭化物と窯材片を約1%含み、10YR5/6明褐色粘質土を約20%含む
9 炭化物の層。焼土を少量含む。 粘性弱く、締まりあまりなし
10 Hue7.5YR5/8明褐色砂～粘質土 粘性やや強く、締まりやや弱い。焼土と炭化物を多く含む。黒雲母粒子をやや多く含む。
11 9層と同層だが、窯材片の混入がやや多い。
12 Hue5YR6/8橙色シルト～粘質土 粘性強く、締まりやや弱い。崩落した天井と壁が多く含まれる。
長石・石英・黒雲母粒子をやや多く含む
13 Hue10YR5/6黄褐色シルト～粘質土 粘性やや強く、締まりあり。炭化物・焼土・窯材片を10%程含む。
14 Hue7.5YR5/6明褐色土砂～粘土 粘性やや強く、締まりあり。遺物がやや多く混じる。焼台片・窯材片・焼土ブロックもやや多く含む。
15 Hue7.5YR5/8明褐色シルト～粘質土 粘性やや強く、締まり強い。φ15mm以下の7.5YR8/8黄橙色粒子を含む。
16 Hue10YR6/6明黄褐色シルト～粘質土 粘性強く、締まりやや弱い。遺物多く含む。
17 Hue7.5YR6/8橙色砂～砂質土 粘性弱く、締まりあり。長石・石英・黒雲母等の粒子で構成され、窯材片・焼台片・遺物を極少量含む。
18 Hue5YR6/6橙色シルト 粘性あり。締まりやや弱い。
19 黒色層
20 黄色層
21 濃赤色層

第13図　1号窯セクション図

写真 11　1 号窯埋土堆積状況 B（南から）

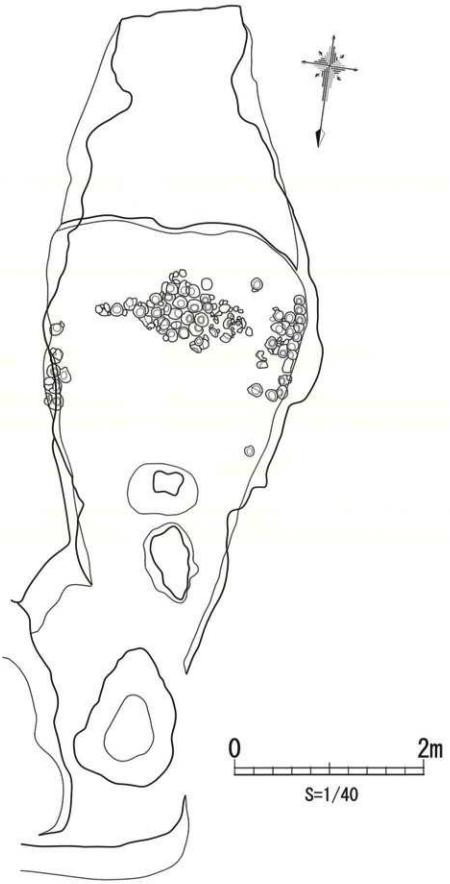
写真 12　1 号窯完掘状況（北から）

写真 13　1 号窯床面断割状況 C 東（北から）

写真 14　1 号窯床面断割状況 C 西（北から）

写真 15　1 号窯断割完掘状況（北から）

写真 16　1 号窯床面下施設出土状況（南から）



第 14 図　1 号窯床面下施設

2号窯

本窯は1号窯にくい込むほど西壁が近接している。本体上部の煙道部が数回の土地削平の影響を受けており、窯体の最上部である煙出しや火炎調節棒（ダンパー）付近にかけては消滅していたが、それを除けば状態は本遺跡中で最良である。窯体の残存長は、約8.65mである。窯体は焚口を北北東に向けて築窯されており、窯体の主軸方位はS－11.7°－W、標高37.81m～40.93mである。焚口から燃焼室までの遺存状態はやや良好である。壁面は左右ともほぼ残存している。焚口の幅は0.65mを測る。

＜燃焼室＞

規模は分焔柱基部で幅1.59m、長さは分焔柱基部までで2.11mである。燃焼室の床面傾斜は、焚口から1.54cmの地点までは、10.7°で下降し、そこから分焔柱の基部である76cmの地点までは8.5°の傾斜で上昇する。床面は1号窯と同様に灰黒色でよく焼き締まっており、壁面は赤褐色でよく焼き締まっている。

＜分焔柱・通焔孔＞

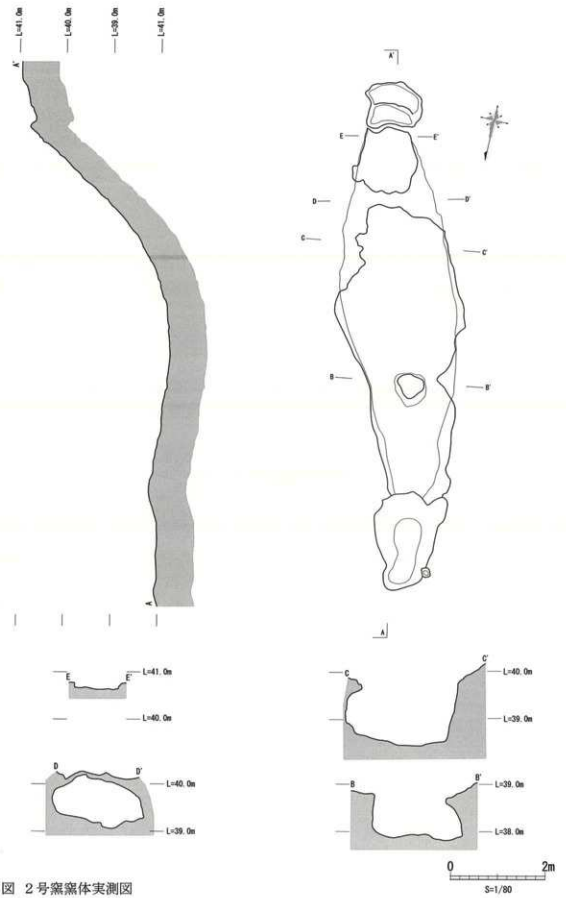
基底部のみが僅かに残存していた。基底部の幅は約67cmで、形状は楕円形を呈しており、地山を掘り残して構築されている。分焔柱中央部での窯体の幅は床面で2.04m、通焔孔の床面幅は西が60cm・東が76cmを測る。

＜焼成室＞

煙道部に近いところでは天井が残っていた。分焔柱基部と煙道部を結ぶセンターライン上での規模は残存長6.24m、最大幅2.74mである。壁面は最大高0.65mを測る。床面の傾斜は、分焔柱基部から74cmの地点までは3.5°の傾斜で下降し、その地点から40cmまでは3.7°で上昇する。そこから78cmの地点まで14.5°の傾斜で上昇し、その地点から56cmまでは27°で上昇する。そこから60cmの地点までは29°で上昇し、その地点から74cmまでは41°で上昇する。そこから78cmまで床が外れているが48°で急上昇し、その地点から40cmまでは35°上昇する。そこから1.34cmまでは再び48°で急上昇する。焼台や遺物が残っていなかったため、全て窯から出した後の状態と考えられる。

＜床面下＞

床面の断割調査を行ったところ、焼土面は検出されなかった。床面の層位は上から黒褐色土層・明黄褐色土層・明赤褐色土層であり地山へと続いている。それぞれの層の厚さは約3cm・約3cm・約4cmであった。



第 15 図　2 号窯窯体実測図

第16図　2号窯セクション図

写真 17　２号窯完掘状況（北から）

写真 18　２号窯埋土堆積状況Ｃ（北から）

写真 19　２号窯床面断割状況Ｅ（北から）

写真 20　２号窯床面断割状況
［Ｂ－Ｃの間］（北から）

写真 21　２号窯断割完掘状況（北から）

写真 22　１・２号窯断割状況（北東から）

3号窯

本窯は2号窯の約4m西側に位置し、2号窯と同様に上部が数回の農地改良を受けており、窯体の最上部である煙出しや焼成室上部付近にかけては消失していた。窯体の残存長は、約8.22mである。窯体は焚口を北北東に向けて築窯されており、窯体の主軸方位はS−8.3°−W、標高39.00m〜41.06mである。焚口から燃焼室までの遺存状態は良好である。壁面は左右両方ともほぼ残存している。焚口の幅は1.28mを測る。

＜燃焼室＞

規模は分焔柱基部で、幅1.73m、燃焼室の長さは分焔柱基部までで2.55mである。燃焼室の床面傾斜は、焚口から1.00mの地点までは、ほぼ水平で、そこから1.71mの分焔柱基部までは0.6°の傾斜で下降する。床面は灰黒色でよく焼き締まっており、壁面も灰黒色でよく焼き締まっている。

＜分焔柱・通焔孔＞

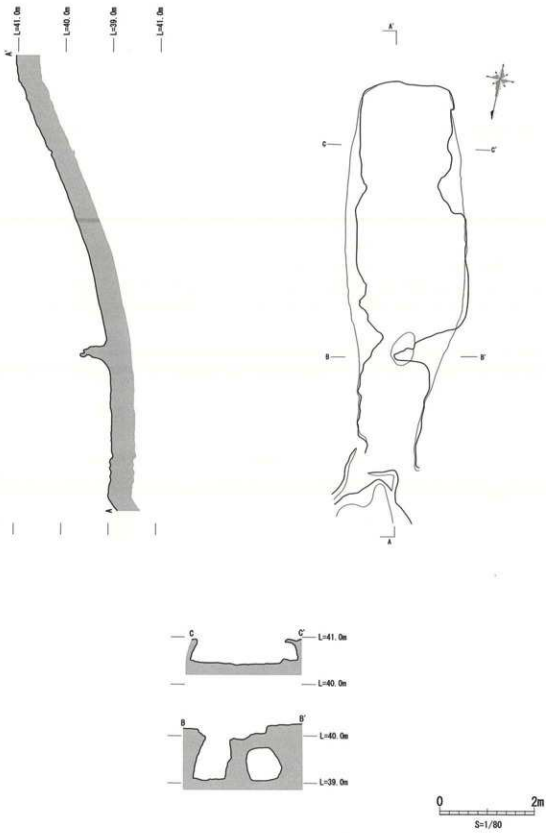
地山掘り残しによって構築され天井部まで残存している。基底部で46cm×74cmの楕円形を呈しているが、中位から上部にかけて方形になり、天井部に至る。色は灰黒色でよく焼き締まっている。周囲は補修されており、碗類や石（砥石？）とみられる遺物の使用が考えられる。分焔柱中央部での窯体の幅は、床面で1.88m、通焔孔の床面幅は西が60cm・東が72cmを測る。

＜焼成室＞

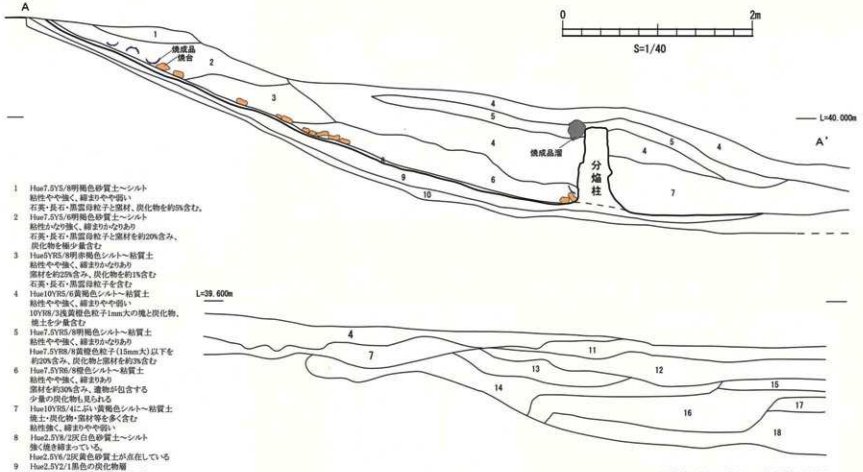
分焔柱基部と煙道部を結ぶセンターライン上で残存長5.61m・最大幅2.34mである。壁面は最大高で1.02mを測る。床面の傾斜は、分焔柱基部から29cmの地点まで7°の傾斜で下降する。そこから1.55mの地点までは13.5°で上昇し、その地点から83cmまでは22°で上昇する。そこから18cmの地点まで11°で上昇し、その地点から77cmまでは24°で上昇する。さらにそこから2.33mの地点まで22°で上昇する。分焔柱基部から焼成室には生焼けの焼台と碗が全体に残存していた。碗は重ねられているものはなく、単体で焼台に置かれていた。

＜床面下施設＞

床面の断割調査を行ったところ、床面下に碗（山茶碗）が伏せられた状態、あるいは横にして敷き詰めた施設が検出された。遺物は碗のみで85点が出土した。床面下施設の構築された位置は、分焔柱のまわりから南側の遺構残存部にかけての範囲であった。伏せられた碗の下は、地山を掘り下げた状態のままであり、碗を伏せて並べて粘土を貼り付けた構造であった。敷き詰められた碗は、大半が伏せられた状態であったが、壁面沿いには横にした状態も確認された。碗は単体のものと熔着したものが使用されており、伏せられた碗の内部は空洞ではなく、ほとんどは粘土や碗の破片が詰められた状態であった。全体に1層の灰層が検出された。床面下施設の層位は上から黒褐色土層・明黄褐色土層・明赤褐色土層であり、地山へと続いている。それぞれの層の厚さは約4cm・約4cm・約5cmであった



第 17 図　3 号窯窯体実測図



1 Hue7.5YS/8明褐色砂質土～シルト
粘性やや強く、締まりやや弱い
石英・長石・黒雲母粒子と黒材、炭化物を約5%含む。
2 Hue7.5YS/6明褐色砂質土～シルト
粘性かなり強く、締まりかなりあり
石英・長石・黒雲母粒子と黒材を約20%含み、
炭化物を極少量含む
3 Hue5YR5/8明赤褐色シルト～粘質土
粘性やや強く、締まりかなりあり
黒材を約25%含み、炭化物を約1%含む
石英・長石・黒雲母粒子を含む
4 Hue10YR5/8黄褐色シルト～粘質土
粘性やや強く、締まりやや弱い
10YR8/3浅黄橙色粒子1mm大の塊と炭化物、
焼土を少量含む
5 Hue7.5YR5/8明褐色シルト～粘質土
粘性やや強く、締まりかなりあり
Hue7.5YR8/8黄橙色粒子（15mm大）以下を
約20%含み、炭化物と黒材を約3%含む
6 Hue7.5YR6/8橙色シルト～粘質土
粘性やや強く、締まりあり
黒材を約30%含み、遺物が包含する
少量の炭化物も見られる
7 Hue10YR8/4にぶい黄褐色シルト～粘質土
焼土・炭化物・黒材等を多く含む
粘性強く、締まりやや弱い
8 Hue2.5YR/2灰白色砂質土～シルト
強く焼き締まっている。
Hue2.5YR/2灰黒色砂質土が点在している
9 Hue2.5Y2/1黒色の炭化物層
10 Hue10YR5/8黄褐色砂質土～シルト
炭化物を少量含む。
11 Hue7.5YR6/8橙色（砂質シルト） 粘性弱く、締まりやや弱い。
石英・長石・黒雲母粒子で構成され、5mm大程の粘土塊が3%程混じる。焼土と炭水化物を1%程含む。
12 Hue10YR6/8明黄褐色（砂質シルト） 粘性3層より弱く、締まりやや弱い。石英・長石・黒雲母粒子で構成され、10mm大程の粘土塊を10%程含む。
13 Hue7.5YR5/8明褐色（砂質シルト） 粘性弱く、締まりやや弱い。石英・長石・黒雲母粒子で構成され5mm大程の粘土塊を5%程含む
14 Hue10YR4/6褐色（砂～粘質土） 粘性やや強く、締まりやや弱い。炭化物を1%程含む。
15 Hue7.5YR6/6橙色（砂質シルト） 粘性弱く、締まりやや弱い。やや大きめの石英粒子が見られる。
16 Hue7.5YR5/6明褐色（砂～粘質土） 粘性やや強く、締まりやや弱い。5層と5層が2:8で混じりあっているように見える。
17 Hue10YR5/8黄褐色（シルト～粘質土） 粘性やや強く、締まりやや弱い。遺物・黒材片・焼台片などが多く混じる。
18 Hue10YR7/6明黄褐色（砂～粘質土） 粘性かなり強く、締まりやや弱い。砂も多少混入している。水分が多く粘性が強い。遺物も混入している。

※灰原セクション図はG－G'と連続した図面

第18図 3号窯セクション図

写真 23　3号窯埋土堆積状況C東（北から）

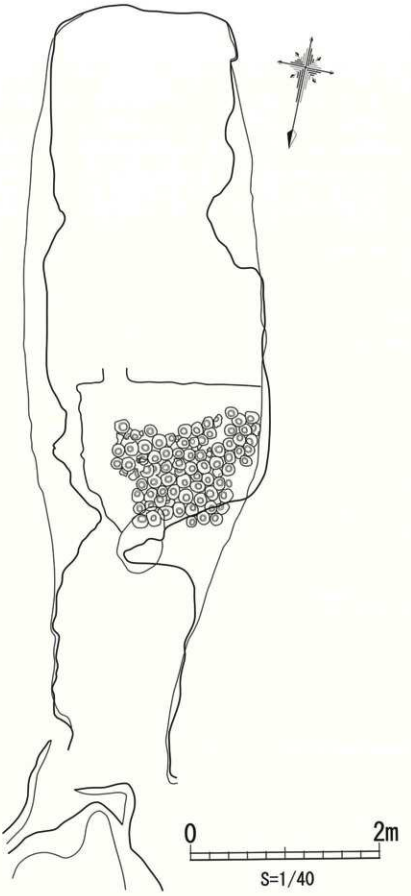
写真 24　3号窯埋土堆積状況C西（北から）

写真 25　3号窯断割状況B（北から）

写真 26　3号窯断割状況C（北から）

写真 27　3号窯断割完掘状況（北から）

写真 28　3号窯床面下施設出土状況（南から）



第19図　3号窯床面下施設

4号窯

本窯は3号窯の西側に近接し、上部は数回の農地改良の影響を受けており、窯体の最上部である煙出しや焼成室の上部付近にかけては消失していた。窯体の残存長は約 7.45m である。窯体は焚口を北北東に向けて築窯されており、窯体の主軸方位は S－9.8° －W、標高 39.26m～41.06m である。焚口の幅は 0.80m を測り、焚口から燃焼室までの遺存状態は概ね良好である。壁面は右側（西側）の壁面が調査区範囲の西限付近であるため、左側（東側）の壁面の方がより良好な残存状況であったが煙道部は不明瞭であった。

＜燃焼室＞

燃焼室の規模は残存長が約 5.65m、最大幅が約 2.48m である。分焔柱基部の幅は 1.76m、分焔柱基部までは 1.81m の長さである。床面と壁面は灰黒色でよく焼き締まっていた。

床面の傾斜は、焚口から 36cm の地点までは 3°の傾斜で下降し、その地点から 45cm の地点まで 6°の傾斜で下降する。そこから 76cm の地点まで 7°の傾斜で上昇し、分焔柱基部までの 25cm は不明瞭な凹凸の緩斜面が続いていた。

＜分焔柱・通焔孔＞

分焔柱は基底部のみが僅かに残存し、基底部の幅は 74cm で、平面形状は楕円形で地山の掘り残しによって構築されていたと推定される。窯体中央部の幅は床面で 1.47m、通焔孔の床面の幅は西が 46cm・東が 56cm である。

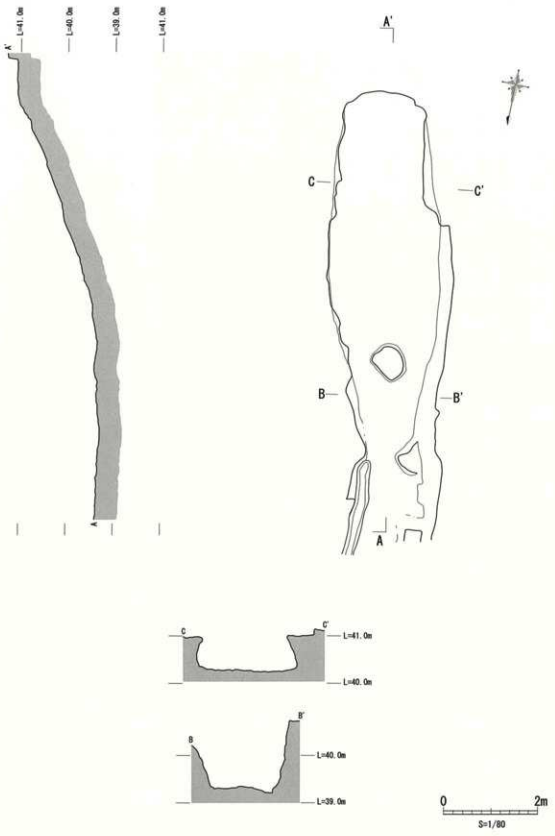
＜焼成室＞

分焔柱基部と煙道部を結ぶセンターライン上で残存長 5.65m・最大幅 2.48m である。壁面は最大高で 1.12m が残存する。床面の傾斜は焼成室の分焔柱基部から 82cm の地点まで 9°の傾斜で上昇し、その地点から 98cm までは 18°で上昇する。そこから 76cm の地点まで 23°で上昇し、その地点から 39cm までは 8°で緩やかに上昇する。そこから 78cm の地点まで 20°で上昇し、その地点から 84cm までは 22°で上昇する。焼台や遺物が残っていなかったため、全て窯から出した後の状態と考えられる。

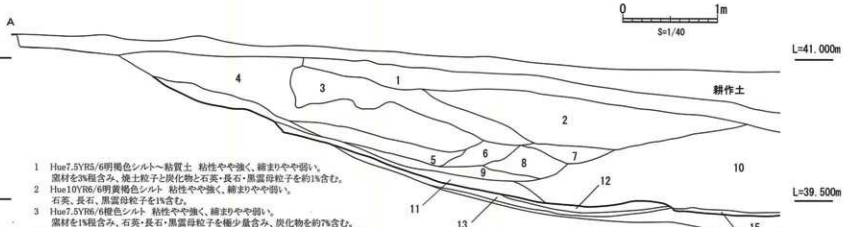
＜床面下＞

床面の断割調査の結果、焼土面は検出されなかった。床面の層位は上から黒褐色土層・明黄褐色土層・明赤褐色土層で地山へと続いている。それぞれの層の厚さは約 3cm・約 3cm・約 4cm であった。

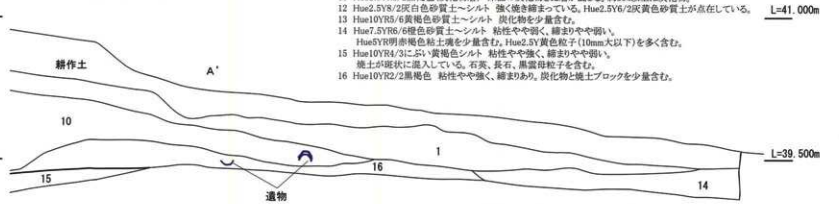
また、東側側壁に沿って幅約 30 ㎝、深さ約 20 ㎝の溝が燃焼室から調査区北壁へ続いていた。全長は不明だが確認できた長さは約 7.5m である。



第 20 図　4 号窯窯体実測図



1 Hue7.5YR5/6明褐色シルト～粘質土 粘性やや強く、締まりやや弱い。
黒材を3%程含み、焼土粒子と炭化物と石英・長石・黒雲母粒子を約1%含む。
2 Hue10YR6/6明黄褐色シルト 粘性やや強く、締まりやや弱い。
石英、長石、黒雲母粒子を1%含む。
3 Hue7.5YR6/6橙色シルト 粘性やや強く、締まりやや弱い。
黒材を1%程含み、石英・長石・黒雲母粒子を極少量含み、炭化物を約7%含む。
4 Hue5YR6/8明赤褐色シルト 粘性やや弱く、締まりやや弱い。黒材をやや多く含み、
Hue2.5YR8/6黄色粒子と石英・長石・黒雲母粒子を約1%含む。天井・壁の崩落片あり。
5 Hue5YR5/8明赤褐色シルト 粘性やや弱く、締まりやや弱い。
石英・長石・黒雲母粒子を約15%、黒材・炭化物を約3%含む。
6 Hue7.5YR5/8明褐色シルト～粘質土 粘性やや強く、締まりやや弱い。
石英、長石中1cm程の粒子を7%含む。
7 Hue10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘性やや強く、締まりやや弱い。
炭化物、黒体を約7%含む。
8 Hue7.5YR6/2橙色シルト～粘質土 粘性やや強く、締まりやや弱い。
石英、長石、黒雲母粒子を約1%含む。
9 Hue7.5YR5/8明褐色土シルト 粘性やや弱く、締まりあり。
黒材を1%、炭化物を7%程含む。
10 Hue2.5Y3/2黒褐色シルト 粘性やや強く、締まりやや弱い。
炭と炭化物をかなり多く含み、黒材を焼土ブロックを少量含む。
11 Hue2.5YR3/2黒褐色（炭化物層） 床面の炭化物と12層が混じる。約80%以上は炭化物。
12 Hue2.5YR/2灰白色砂質土～シルト 強く焼き締まっている。Hue2.5Y6/2灰黄色砂質土が点在している。
13 Hue10YR5/6黄褐色砂質土～シルト 炭化物を少量含む。
14 Hue7.5YR6/6橙色砂質土～シルト 粘性やや弱く、締まりやや弱い。
Hue5YR明赤褐色粘土塊を少量含む。Hue2.5Y黄色粒子(10mm大以下)を多く含む。
15 Hue10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘性やや強く、締まりやや弱い。
焼土が塊状に混入している。石英、長石、黒雲母粒子を含む。
16 Hue10YR2/2黒褐色 粘性やや強く、締まりあり。炭化物と焼土ブロックを少量含む。



※灰原セクション図は西壁セクションと連続する図面

第21図 4号窯セクション図

写真 29　4 号窯埋土堆積状況 C（北から）

写真 30　4 号窯埋土堆積状況 B（南から）

写真 31　4 号窯完掘状況（北から）

写真 32　4 号窯断割状況 B（北から）

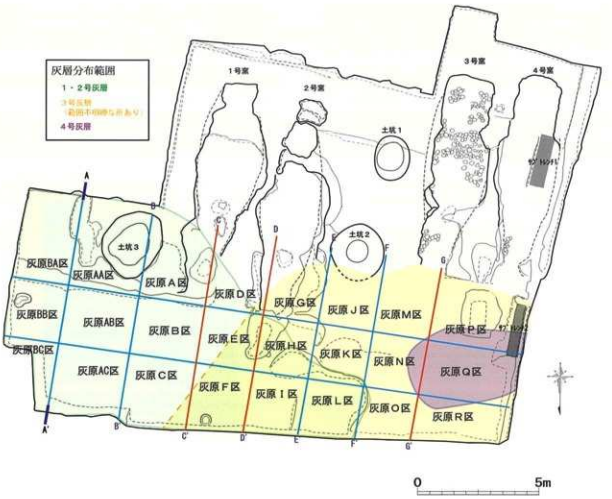
写真 33　4 号窯排水溝（南から）

写真 34　4 号窯断割完掘状況（北から）

第２節　灰原について

前庭部はやや不明瞭であるが、灰原は良好な状態で残存していた。灰原Ｈ・Ｉ区、Ｋ・Ｌ区の層位を観察したところ１号窯と２号窯で下層灰原が形成され、３号窯と４号窯で上層灰原が形成されていた。１号窯と２号窯の灰原の範囲を明確に分けることはできなかったが、上層灰原と下層灰原の中間には３号窯と４号窯を築造するときに出た排土が中間層として存在している。これにより明確に窯の築造された順番が窺える。

各窯の周辺には土坑が検出されており、１号窯の前庭部東側には直径 2.7m 程の土坑３があり、２号窯の西側には土坑２が確認できた。３号窯には東側に土坑１が確認できる。土坑１・２の用途については不明であるが、土坑３の性格については中世窯でよく検出される前庭部前のピット、すなわち焼成不良の破棄品を溜めて置くものと考えられる。



第 22 図 灰原セクションライン位置図

写真 35　灰原遺物出土状況（北から）

写真 36　灰原掘削状況（北から）

写真 37　灰原 AA 区西側〔B ベルト〕
（東から）

写真 38　灰原Ａ区西側〔Ｃベルト〕
（東から）

写真 39　灰原Ｂ区西側ほか〔Ｃベルト〕
（東から）

写真 40　灰原Ｅ区南側（北から）

写真 41　灰原Ｈ区南側（北から）

写真 42　灰原Ｌ区南側（北から）

第３節　その他の遺構について

土坑概要

各窯の周辺に３土坑検出された。

土坑１

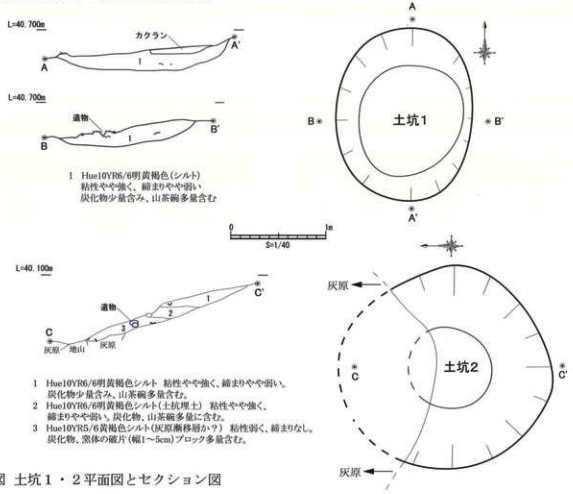
３号窯の焼成室東側に位置し、規模は長径 1.80m、短径 1.42m、深さ 0.22m である。平面形状は楕円形、断面形状は浅い皿状を呈す。一部撹乱の影響を受けているが、埋土の中位で少量の遺物が確認された。

土坑２

２号窯の焼成室西側に位置し、規模は長径 2.15m、短径 1.20m（残存）、深さ 0.20m である。平面形状は楕円形、断面形状は不定形を呈す。北側約 3/5 は灰原によって切られていた。埋土より遺物が多く確認された。

土坑３

１号窯の焚口東側に位置し、規模は長径 2.80m、短径 2.20m である。平面形状は楕円形を呈する。各土坑と各窯体との関係は不明である。



第 23 図　土坑１・２平面図とセクション図

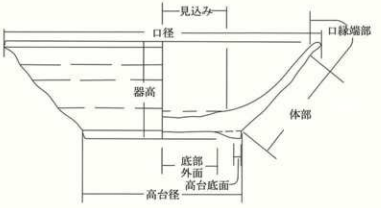
第2章　遺　物

第1節　器形分類

瀬戸B古窯跡群で出土した遺物は、窯跡の焼成品である碗類・皿類・鉢類・托・壺・壺系の取手・陶丸・陶硯が確認できた。他に焼台および窯業生産にともなって使用されたと考えられる伊勢型鍋・砥石も出土した。本窯を構築するために用いられた床面下施設からは碗類と皿類を検出した。

本窯では碗・皿類について、底部を基準にした個別識別の方法を採用した。底部の残存率50%以上のものを1個体、それ以外のものは、一部例外を除いて0個体と数え、総個体数を算出した。重ね碗、重ね皿については最下部のものを識別した。出土した遺物の総数は34,136点で、36リットルコンテナで430箱である。小片の多くは碗の口縁部で11,764点、続いて残存1/2以下の碗底部が6,012点、碗の体部が830点である。皿の底部で1/2以下の小片が693点、皿の口縁部が121点である。底部・口縁部・体部小片を含む碗類は計27,844点で焼成品全体に占める割合は81.6%（27,844/34,136）で、底部・口縁部小片を含む皿類の焼成品全体に占める割合は13.1%（4,483/34,136）である。個別識別が可能であった碗類は9,238点で全出土遺物中に占める割合は27.1%（9,238/34,136）、皿類は3,669点であり同10.7%（3,669/34,136）であった。焼成品とは別に、床面下施設に使用された遺物は碗類150点、皿類が1点で、内訳は1号窯で碗類65点、皿類が1点、3号窯で碗類85点である。碗類の床面下施設に占める割合は99.3%、皿類の比率は0.7%と1%に達していない。以上が遺物全体の状況である。このうち実測図は碗類で183点、皿類が335点、観察表のみ掲載したものが碗類で264点、皿類で390点である。個体に遺跡単位の遺物番号を付与した。観察による情報は観察表として第18表から第47表にまとめたのでご参照願いたい。

碗類と皿類は、主として体部の断面形態を基にした分類を、これをさらに口縁端部の断面形態によった分類を設定した。ただし、皿類については底部に高台があるものと、無高台で底部が大きく突出するもの、無高台で底部は突出しないものに分けた。なお、碗・皿の部位名称は第24図を参照して頂きたい。



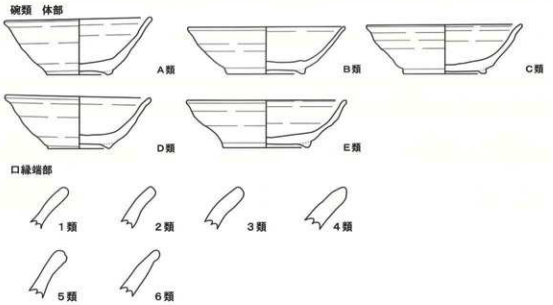
第24図　部位等名称図

（1）碗類

碗類は体部と口縁端部とで分類した。

体　　部　A類　体部から口縁部にかけて断面形状が、直線的に立ち上がるもの。
　　B類　体部から口縁部にかけて断面形状が、曲線的に立ち上がるもの。
　　C類　体部から口縁部にかけて断面形状が、緩やかなS字形をとるもの。
　　D類　体部の断面形状が直線的であるが、口縁部付近では外反するもの。
　　E類　立ち上がりのところで断面形状が内側にえぐれているもの。

口縁端部　1類　口縁端部がほぼ丸みを帯びたもの。
　　2類　口縁端部の断面形状が角張り、端部の内と外の曲点がそれぞれほぼ直角なもの。
　　3類　端部の内側の曲点が外側の曲点より、鋭角になるもの。
　　4類　端部の内側の曲点が外側の曲点より、鈍角になるもの。
　　5類　口縁端部の端面が溝状にえぐれているもの。
　　6類　口縁端部が丸く外にはりでるもの。



第 25 図　碗類器形分類図

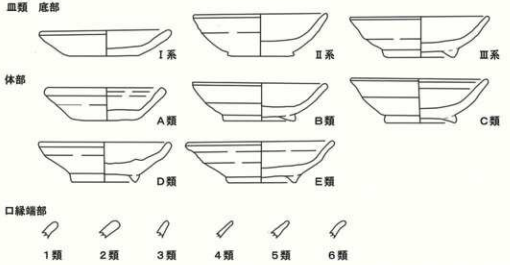
（2）皿類

皿類は、底部の高台と体部、口縁端部とで分類した。

底　部　Ⅰ系　底部が高台風にならないもの。
　　Ⅱ系　底部が高台風になるもの。
　　Ⅲ系　高台が付いているもの。

体　部　A類　体部から口縁部にかけて断面形状が、直線的に立ち上がるもの。
　　B類　体部から口縁部にかけて断面形状が、曲線的に立ち上がるもの。
　　C類　体部から口縁部にかけて断面形状が、緩やかなS字形をとるもの。
　　D類　体部の断面形状が内側にえぐれているもの。
　　E類　体部の断面形状が内側に2段にえぐれているもの。

口縁端部　1類　口縁端部がほぼ丸みを帯びたもの。
　　2類　口縁端部の断面形状が角張り、端部の内と外の曲点がそれぞれほぼ直角なもの。
　　3類　端部の内側の曲点が外側の曲点より、鋭角になるもの。
　　4類　端部の内側の曲点が外側の曲点より、鈍角になるもの。
　　5類　口縁端部の端面が溝状にえぐれているもの。
　　6類　口縁端部が丸く外にはり出るもの。



第26図　皿類器形分類図

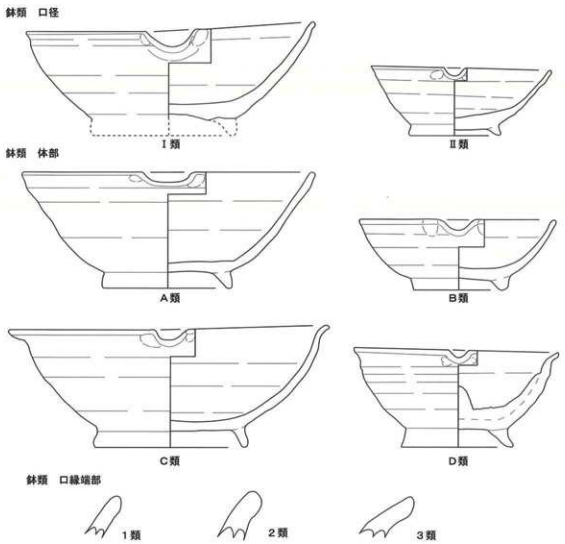
（3）鉢類

鉢類は口径の法量および体部と口縁端部とで分類した。

口径　Ⅰ類　口径が 30cm 以上を測るもの。
　　Ⅱ類　口径が 30cm 未満のもの。

体部　A類　体部から口縁部にかけて断面形状が、ほぼ直線的に立ち上がるもの。
　　B類　体部から口縁部にかけて断面形状が、曲線的に立ち上がるもの。
　　C類　体部から口縁部にかけて断面形状が、S字形をとるもの。
　　D類　体部の断面形状が曲線的であるが、口縁部付近で外反するもの。

口縁端部　1類　口縁端部が丸みを帯びたもの。
　　2類　口縁端部がやや外にはりでるもの。
　　3類　口縁端部が丸みを帯びているが、内側がやや直線的なもの。



第 27 図　鉢類器形分類図

第２節　窯内の遺物

【焼成品】

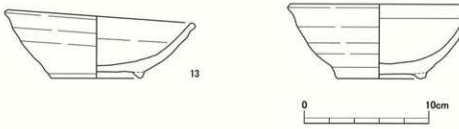
１号窯内

１号窯内に残っていた遺物は少なく、碗６点・皿４点・重ね皿１点が出土している。

碗（第 28 図、第 18 表、写真４）

碗は６点出土しているが、３点が焚口で、３点が焼成室である。寸法は平均値で口径 16.3 ㎝、高台径 8.1 ㎝、器高 4.9 ㎝となり、最大は口径 17.0 ㎝、高台径 9.0 ㎝、器高 6.0 ㎝、最小は口径 15.2 ㎝、高台径 7.5 ㎝、器高 4.2 ㎝を計測した。底部外面は糸切り痕が確認できる。胎土は少量の砂が混じるものもあるが、概ね良質である。

器形分類はＢ類が１点、Ｃ類が４点、Ｄ類が１点である。さらに口縁端部で分類するとＢ類は２類が１点、Ｃ類は１類が２点と２類が１点、３類が１点であり、Ｄ類は５類が１点である。



第 28 図　１号窯出土碗実測図

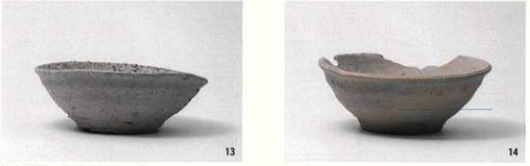
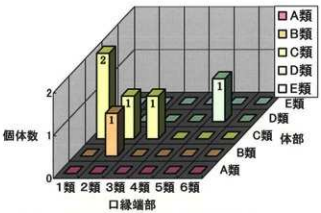


写真 43　１号窯出土碗

体部＼口縁端部	１類	２類	３類	４類	５類	６類	合計
Ａ類	0	0	0	0	0	0	0
Ｂ類	0	1	0	0	0	0	1
Ｃ類	2	1	1	0	0	0	4
Ｄ類	0	0	0	0	1	0	1
Ｅ類	0	0	0	0	0	0	0
合計	2	2	1	0	1	0	6

第４表　１号窯窯内出土碗器形分類表



第 29 図　1 号窯窯内出土碗類器形分類組成図

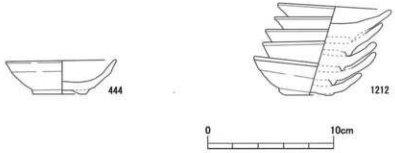
皿（第 30 図、第 25. 29 表、写真 44）

皿は焚口のみから出土した。寸法は平均値で口径 9.3 ㎝、高台径 4.7 ㎝、器高 2.6 ㎝となり、最大は口径 9.5 ㎝、高台径 4.9 ㎝、器高 2.8 ㎝、最小は口径 9.0 ㎝、高台径 4.5 ㎝、器高 2.3 ㎝を計測した。高台底面付着痕は籾痕が見られる。底部外面は糸切り痕が確認できる。胎土、焼成ともに良質である。

4 点いずれにも高台がある。器形分類すると、体部はＢ類が 2 点、Ｃ類が 1 点、Ｅ類が 1 点である。口縁端部でみるとＢ類は 3 類が 2 点、Ｃ類は 1 類が 1 点、Ｅ類は 4 類が 1 点である。

重ね皿（第 30 図、第 25. 39 表、写真 44）

重ね焼き焼成の一部で、5 枚皿が重なった状態で釉着したものである。最上段の皿に別の焼成品を置いた痕跡は認められない。下段は高台部が一部欠損していた。高台底面付着痕は籾痕が見られ、底部外面は糸切り痕が確認できる。胎土・焼成ともに良である。



第 30 図　1 号窯出土皿・重ね皿実測図

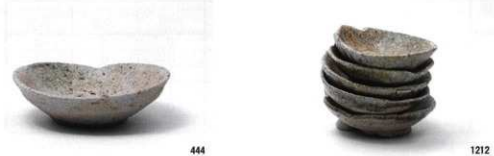


写真 44　1 号窯出土皿・重ね皿

2号窯内

2号窯内からは、碗11点・皿1点が出土している。

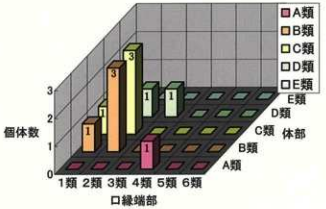
碗（第32図、第18表、写真45）

碗は11点が焼成室からの出土である。寸法は平均値で口径14.9㎝、高台径7.3㎝、器高4.8㎝となり、最大は口径16.7㎝、高台径8.7㎝、器高5.2㎝、最小は口径15.2㎝、高台径7.5㎝、器高4.2㎝を計測した。底部外面は糸切り痕が確認できる。胎土は少量の砂が混じるものもあるが、概ね良質、焼成も良好である。

器形分類は、体部ではA類が1点、B類が4点、C類が4点、D類が2点である。口縁端部では、A類は4類が1点で、B類は1類が1点、2類が3点である。C類は1類が1点で、2類が3点あり、D類は2類が1点と3類が1点である。

体部＼口縁端部	1類	2類	3類	4類	5類	6類	合計
A類	0	0	0	1	0	0	1
B類	1	3	0	0	0	0	4
C類	1	3	0	0	0	0	4
D類	0	1	1	0	0	0	2
E類	0	0	0	0	0	0	0
合計	2	7	1	1	0	0	11

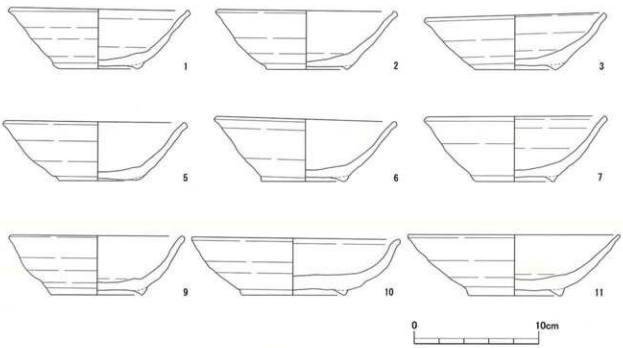
第5表　2号窯窯内出土碗器形分類表



第31図　2号窯窯内出土碗類器形分類組成図

皿

皿は焚口のみで1点出土した。寸法は口径8.2㎝、高台径5.0㎝、器高2.0㎝を計測している。底部外面は糸切り痕が確認できる。胎土、焼成ともに良質で、形式上、底部が高台風なのでⅡ系となり、A類2類に分類される。



第 32 図　2 号窯出土碗実測図

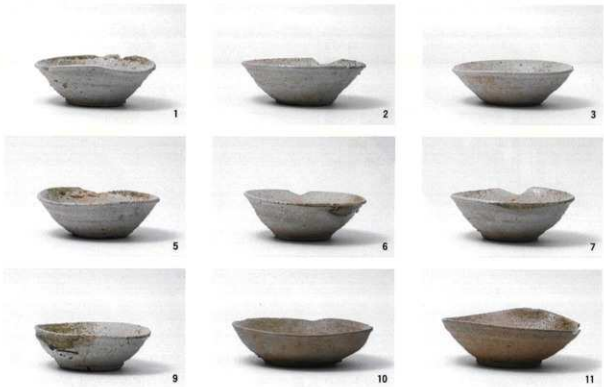


写真 45　2 号窯出土碗

3号窯内

3号窯内からは、碗19点・皿29点・重ね碗1点・重ね皿1点が出土している。

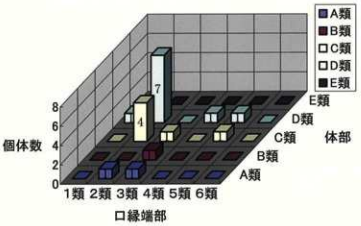
碗（第34図、第18.20表、写真46）

出土した詳細な場所は焚口から1点、燃焼室から7点、焼成室から11点である。高台底面付着痕には籾痕が認められ、底部外面には糸切り痕が見られる。胎土は少量の砂が混じるものが多く、良質の範囲である。焼成は全体に白色を呈するが、焼き締まりのよくない、いわゆる生焼け風のものが9点含まれている。寸法は平均値で口径15.4㎝、高台径7.8㎝、器高5.6㎝となり、最大は口径16.2㎝、高台径7.8㎝、器高5.6㎝、最小は口径15.2㎝、高台径7.5㎝、器高4.2㎝を計測した。

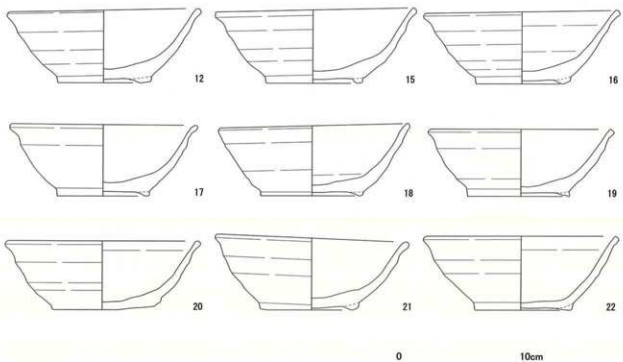
形状については、体部分類A類が2点、B類が1点、C類が6点、D類が10点となった。これを口縁端部分類すると、A類で2類が1点と3類が1点、B類で3類が1点、C類で2類が4点と3類が1点と5類が1点となった。D類で1類が1点と2類が7点、4類が1と5類が1点とに分けられた。

体部＼口縁端部	1類	2類	3類	4類	5類	6類	合計
A類	0	1	1	0	0	0	2
B類	0	0	1	0	0	0	1
C類	0	4	1	0	1	0	6
D類	1	7	0	1	1	0	10
E類	0	0	0	0	0	0	0
合計	1	12	3	1	2	0	19

第6表　3号窯窯内出土碗器形分類表



第33図　3号窯窯内出土碗類器形分類組成図



第 34 図　3 号窯出土碗実測図

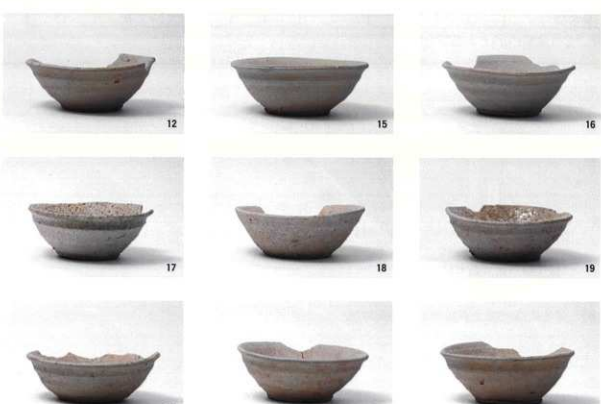


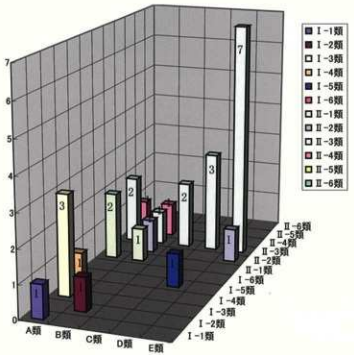
写真 46　3 号窯出土碗

皿（第 36 図、第 25. 29 表、写真 47）

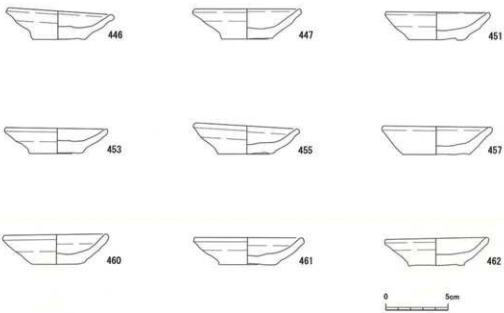
皿については、焚口から 4 点、燃焼室から 10 点、焼成室から 15 点出土している。底部外面には糸切り痕が認められ、成形は丁寧である。胎土や焼成について、特に気になる点はない。寸法は平均値で口径 8.5 ㎝、高台径 4.7 ㎝、器高 2.1 ㎝となり、最大は口径 9.0 ㎝、高台径 5.9 ㎝、器高 2.5 ㎝、最小は口径 8.1 ㎝、高台径 3.8 ㎝、器高 1.7 ㎝を計測した。形状については、底部に高台が付くものが 22 点、それ以外が 7 点である。詳細な器形分類は第 7 表のとおりである。

	高台 口縁端部															
	Ⅰ系							Ⅱ系							Ⅲ系	
体部	Ⅰ-1類	Ⅰ-2類	Ⅰ-3類	Ⅰ-4類	Ⅰ-5類	Ⅰ-6類	Ⅰ系計	Ⅱ-1類	Ⅱ-2類	Ⅱ-3類	Ⅱ-4類	Ⅱ-5類	Ⅱ-6類	Ⅱ系計	Ⅰ～6類	総計
A類	1	0	3	1	0	0	5	2	0	2	1	0	0	5	0	10
B類	0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	1	0	0	4	0	5
C類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	2
D類	0	0	0	0	1	0	1	0	0	3	0	0	0	3	0	4
E類	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	0	0	0	8	0	8
合計	1	1	3	1	1	0	7	3	2	15	2	0	0	22	0	29

第 7 表　3 号窯窯内出土皿器形分類表



第 35 図　3 号窯窯内出土皿類器形分類組成図



第 36 図　3 号窯出土皿実測図

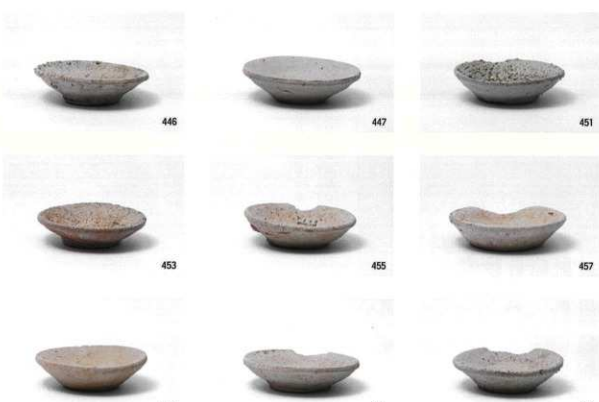


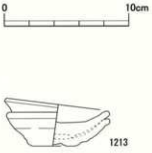
写真 47　3 号窯出土皿

重ね碗（第 38 表、写真 48）

燃焼室から出土し、一部が欠損するが 13 枚あり、最上部にほかに重ねた痕跡が認められない。おそらく、本窯での焼成時に重ねた最大に近い枚数と推測されるものである。

重ね皿（第 37 図、第 39 表、写真 48）

焼成室から出土した皿を 2 枚重ねたものである。胎土、焼成ともに良好である。



第 37 図　3 号窯出土重ね皿実測図

写真 48　3 号窯出土重ね碗・重ね皿

4号窯内

4号窯内からは、碗12点・皿6点・陶丸1点が出土している。

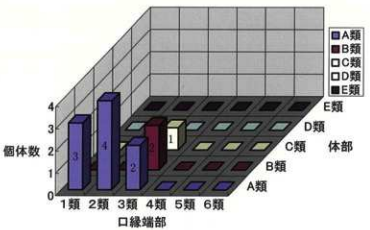
碗（第39図、第18.20表、写真49）

出土位置は、焚口から6点、燃焼室から3点、焼成室から2点、溝から1点が内訳である。高台底面付着痕には籾痕が認められ、底部外面には糸切り痕が見られる。胎土は少量の砂が混じるものもあり、良質かやや不良のものが混在する。焼成は全体に白色を呈する。寸法は平均値で口径15.7㎝、高台径7.8㎝、器高5.5㎝となり、最大は口径16.2㎝、高台径8.5㎝、器高5.9㎝、最小は口径14.4㎝、高台径7.2㎝、器高5.2㎝を計測した。

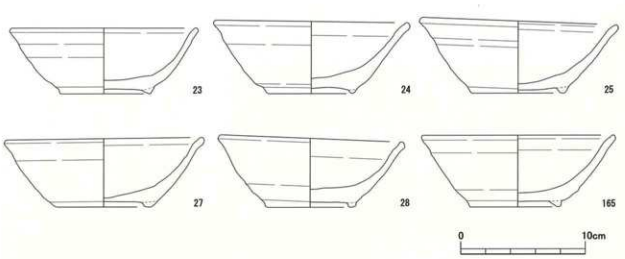
形状については、体部分類A類が9点、B類が2点、C類が1点となった。これを口縁端部で分類すると、A類で1類が3点と2類が4点,3類が2点、B類で3類が2点、C類で3類が1点とに分けられた。

体部＼口縁端部	1類	2類	3類	4類	5類	6類	合計
A類	3	4	2	0	0	0	9
B類	0	0	2	0	0	0	2
C類	0	0	1	0	0	0	1
D類	0	0	0	0	0	0	0
E類	0	0	0	0	0	0	0
合計	3	4	5	0	0	0	12

第8表　4号窯窯内出土碗器形分類表



第38図　4号窯窯内出土碗類器形分類組成図



第 39 図　4 号窯出土碗実測図

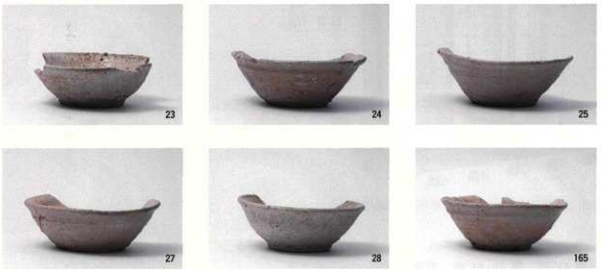


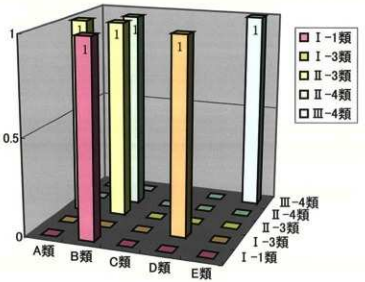
写真 49　4 号窯出土碗

皿（第 41 図、第 25. 29 表、写真 50）

皿については、焚口から 2 点、燃焼室から 2 点、焼成室から 1 点、溝から 1 点出土している。底部外面には糸切り痕が認められ、成形は丁寧である。胎土は少量の砂が混じるものもあるが良好である。焼成についても良好である。寸法は平均値で口径 8.6 ㎝、高台径 4.8 ㎝、器高 2.2 ㎝となり、最大は口径 9.3 ㎝、高台径 5.0 ㎝、器高 2.7 ㎝、最小は口径 8.2 ㎝、高台径 4.4 ㎝、器高 1.9 ㎝を計測した。形状については、底部の高台が付かないものが 2 点、高台風になるものが 3 点、高台があるものが 1 点である。器形分類について、体部分類A類が 1 点、B類が 3 点、D類が 1 点、E類が 1 点である。これを口縁端部で分類すると、A類で 3 類が 1 点、B類で 3 類が 1 点と 4 類が 1 点である。D類で 3 類が 1 点となり、E類では 4 類が 1 点であった。

	高台 口縁端部								
	Ⅰ系			Ⅱ系			Ⅲ系		
体部	Ⅰ-1類	Ⅰ-3類	Ⅰ系計	Ⅱ-3類	Ⅱ-4類	Ⅱ系計	Ⅲ-4類	Ⅲ系計	総計
A類	0	0	0	1	0	1	0	0	1
B類	1	0	1	1	1	2	0	0	3
C類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D類	0	1	1	0	0	0	0	0	1
E類	0	0	0	0	0	0	1	1	1
合計	1	1	2	2	1	3	1	1	6

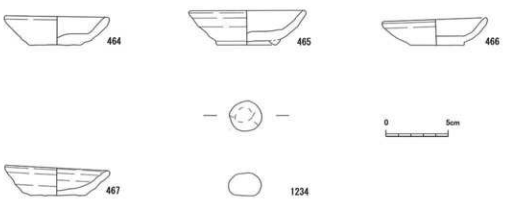
第9表　4号窯窯内出土皿器形分類表



第40図　4号窯窯内出土皿類器形分類組成図

陶丸（第41図、第25.41表、写真50）

陶丸の1点は燃焼室からの出土である。球状であるが、手により成形のため完全な球ではなく、だ円気味といえよう。



第41図　4号窯出土皿・陶丸実測図

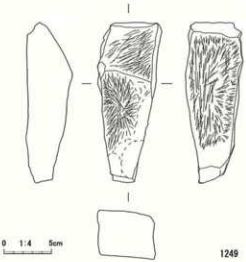
写真 50　4 号窯出土皿・陶丸

【焼成品外】

3 号窯

砥石（第 42 図、第 46 表、写真 51）

1 点のみの出土で、砥石面は 3 面認められる。石材の産地は不明である。



第 42 図　3 号窯出土砥石実測図

写真 51　3 号窯出土砥石

第３節　灰原および土坑の遺物

概要

灰原には窯内と比較して実に大量の遺物が残されていた。ここでは、灰原と土坑３などから出土したものをまとめて報告する。碗類 371 点、皿類 684 点、鉢類 27 点、壺２点、重ね碗７点、重ね皿 18 点、托３点、脚付碗１点、陶丸３点、陶硯１点、取手２点、窯道具の焼台８点、窯業生産で使われたと思われる土師質鍋（伊勢型鍋）１点、内耳鍋１点が確認された。灰原は、第１章の遺構で報告したように灰原Ａ区から灰原ＢＣ区までの 24 区画に分けて調査している。そのため、出土品の報告もそれを意識したものになっている。

【焼成品】

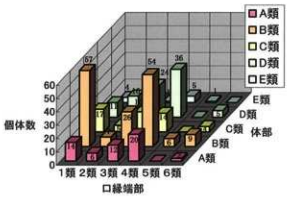
碗（第 44～46 図、第 18～24 表、写真 52～56）

灰原および土坑から出土した碗類 371 点（実測図 183 点、観察 260 点）について報告する。法量については平均値・最大値・最小値は第 17 表にしめしたとおりの数値である。その全体を通観した時、平均値は口径 16.3cm、高台径 8.0cm、器高 5.1cm を計測している。出土位置別における計測地の詳細は第 17 表を参照願いたい。

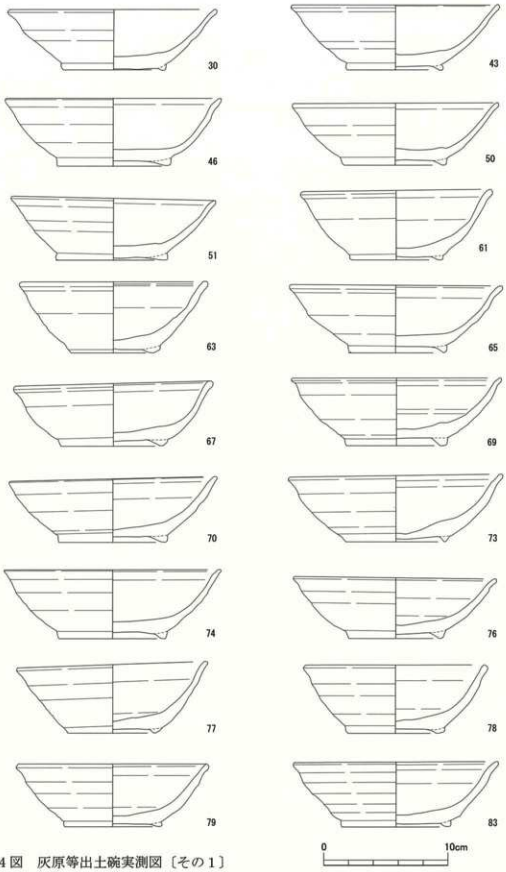
高台底面付着痕には砂・刷毛目・籾の３種類が認められ、底部外面では糸切り痕がほとんどで、高台を取り付ける過程で、底面をナデ・板ナデ・ヘラ削りが確認された。詳細な器形分類は第 10 表のとおりである。

体部＼口縁端部	1類	2類	3類	4類	5類	6類	合計
A類	14	6	12	20	0	2	54
B類	57	7	26	54	6	9	159
C類	17	5	15	14	0	4	55
D類	11	16	24	36	0	5	92
E類	4	0	1	5	1	0	11
合計	103	34	78	129	7	20	371

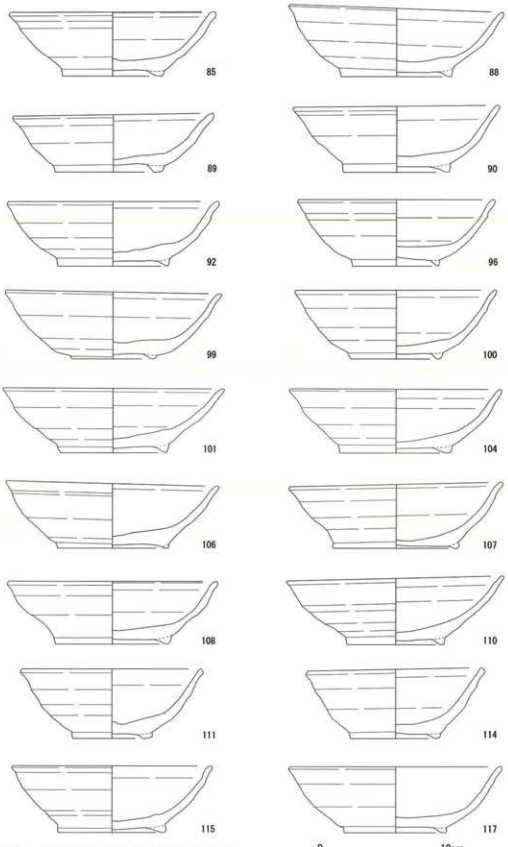
第 10 表　灰原等出土碗器形分類表



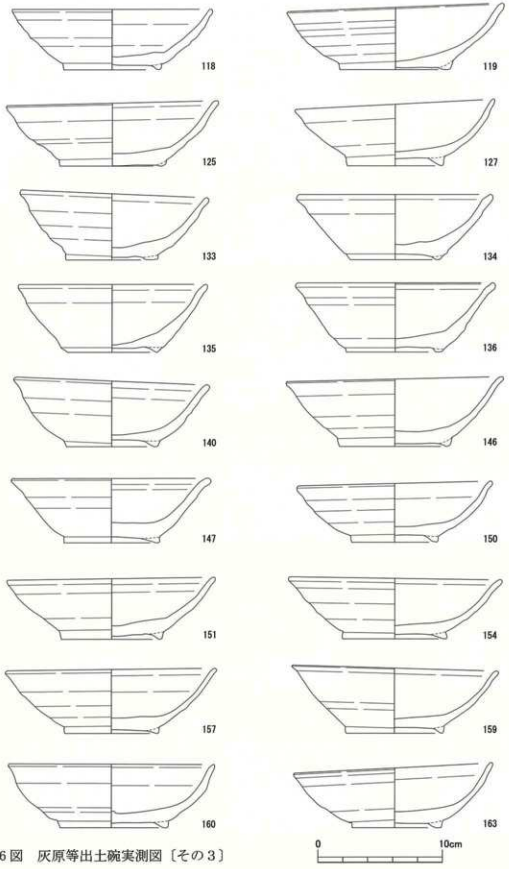
第 43 図　灰原出土碗類器形分類組成図



第 44 図　灰原等出土碗実測図〔その 1〕



第 45 図　灰原等出土碗実測図〔その２〕



第46図　灰原等出土碗実測図〔その3〕

写真 52　灰原等出土碗〔その１〕

写真 53　灰原等出土碗〔その 2〕

写真 54　灰原等出土碗〔その３〕

写真 55　灰原等出土碗〔その４〕

372

375

376

378

380

386

388

391

403

408

417

420

421

422

429

434

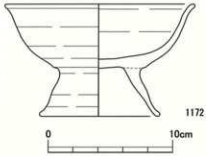
435

441

写真 56　灰原等出土碗〔その５〕

脚付碗（第 47 図、第 36 表、写真 57）

1172 は高台部分が皿と融合したような形態をした特殊な器形をもつもので、定まった呼称がないので、脚付碗ととりあえず呼んで置く。本体部分は碗そのものである。脚部と本体の一部が残存している。底部外面に指ナデが確認できた。体部内面に自然釉と重ねの痕跡が認められる。寸法は口径（推定）15.8cm、高台径 10.2cm、器高 8.8cm を計測している。

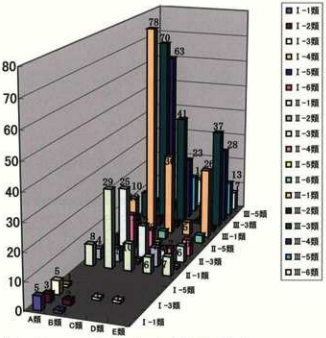


第 47 図　灰原等出土脚付碗実測図

写真 57　灰原等出土脚付碗

皿（第 49～52 図、第 25～34 表、写真 58～64）

灰原や土坑などから皿類は 684 点出土している。各部位の法量は平均値で口径 8.9cm、高台径 4.9cm、器高 2.6cm である。最大値は口径 10.4cm、高台径は 6.4cm、器高 3.8cm である。最小値は口径 7.7cm、高台径は 3.7cm、器高 1.7cm である。碗類と同様にナデにより全体が成形され、底部外面には糸切りの痕跡が認められる。胎土には少量の砂粒が混じる土が使用されているが、概ね良質と考えられる。器形分類は下記の第 11 表に示すとおりであるが、高台の有無は、高台が付けられているものと、高台風になるものがほとんどであり、高台風にならないものが少量（19 点）混在している。



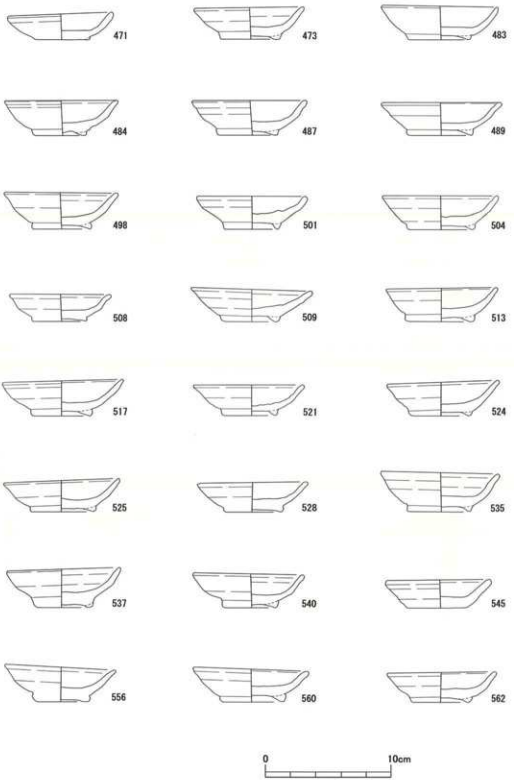
第 48 図　灰原出土皿類器形分類組成図

	高台 口縁端部						
	I系						
体部	I-1	I-2	I-3	I-4	I-5	I-6	I系計
A類	5	3	5	1	0	0	14
B類	1	2	0	0	0	0	3
C類	0	0	1	0	0	0	1
D類	0	0	1	0	0	0	1
E類	0	0	0	0	0	0	0
合計	6	5	7	1	0	0	19

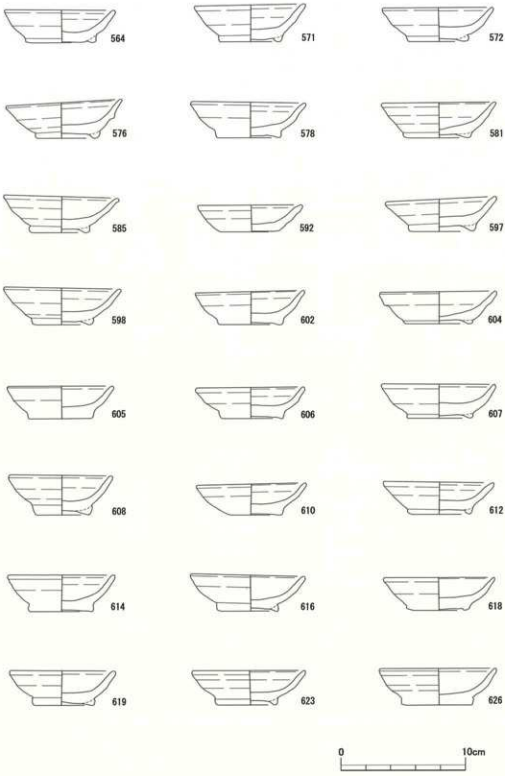
	高台 口縁端部						
	II系						
体部	II-1	II-2	II-3	II-4	II-5	II-6	II系計
A類	8	4	2	4	1	0	19
B類	29	5	25	13	0	2	74
C類	10	1	12	8	1	3	35
D類	6	7	4	2	0	0	19
E類	7	1	6	6	0	3	23
合計	60	18	49	33	2	8	170

	高台 口縁端部							
	III系							
体部	III-1	III-2	III-3	III-4	III-5	III-6	III系計	総計
A類	12	0	10	5	2	0	29	62
B類	78	3	70	63	1	4	219	296
C類	30	2	41	23	14	11	121	157
D類	5	0	1	6	0	2	14	34
E類	26	1	37	28	13	7	112	135
合計	151	6	159	125	30	24	495	684

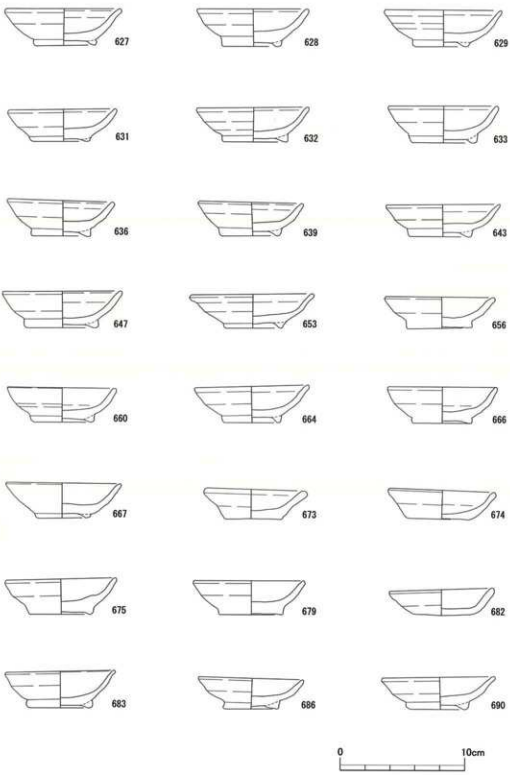
第 11 表　灰原等出土皿器形分類表



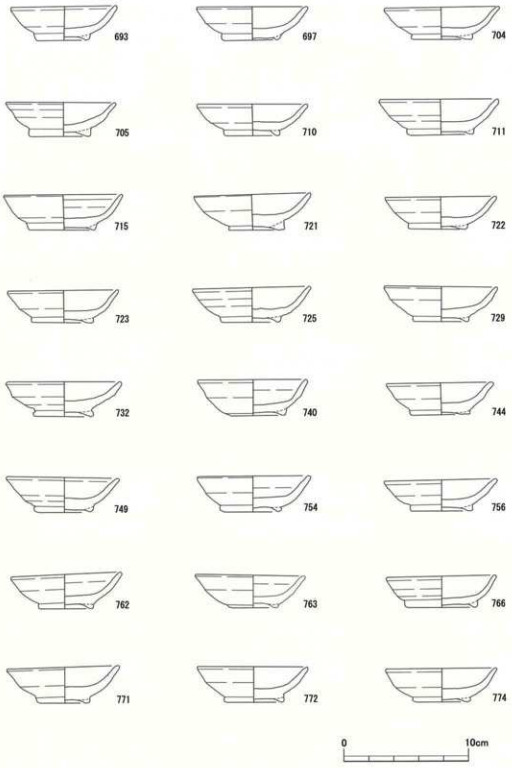
第 49 図　灰原等出土皿実測図〔その 1〕



第50図　灰原等出土皿実測図〔その2〕



第 51 図　灰原等出土皿実測図〔その３〕



第 52 図　灰原等出土皿実測図〔その 4〕

471

473

483

484

487

489

498

501

504

508

509

513

517

521

524

525

528

535

写真58　灰原等出土皿〔その1〕

537

540

545

556

560

562

564

571

572

576

578

581

585

592

597

598

602

604

写真 59　灰原等出土皿〔その 2〕

605

606

607

608

610

612

614

616

618

619

623

626

627

628

629

631

632

633

写真 60　灰原等出土皿〔その３〕

636

639

643

647

653

656

660

664

666

667

673

674

675

679

682

683

686

690

写真61　灰原等出土皿〔その４〕

693

697

704

705

709

710

711

715

721

722

723

725

729

732

740

744

749

754

写真 62　灰原等出土皿〔その 5〕

写真 63　灰原等出土皿〔その 6〕

1007

1015

1031

1033

1039

1043

1045

1046

1047

1050

1059

1065

1078

1089

1092

1069

1107

1136

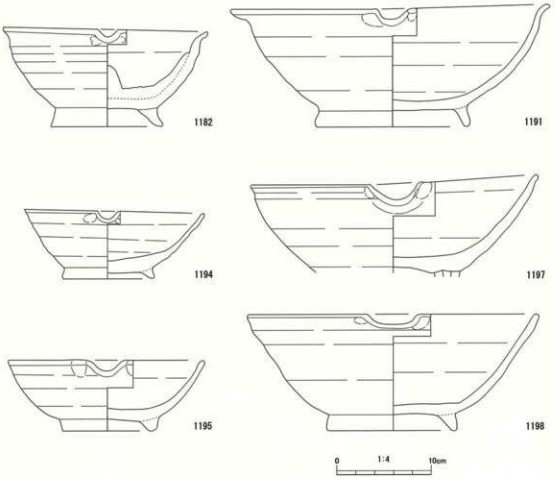
写真 64　灰原等出土皿〔その 7〕

鉢（第 53 図、第 37 表、写真 65）

口縁部に口を付けたもので、通称「片口鉢」と呼称される器種である。本遺跡では 27 点が、灰原からのみ出土し、1・2 号窯の灰原と目される灰原Ａ区からは 7 点が出土した。

寸法は平均値で口径 26.3 ㎝、高台径 12.7 ㎝、器高 9.5 ㎝となり、最大は口径 34.3 ㎝、高台径 16.4 ㎝、器高 12.3 ㎝、最小は口径 19.3 ㎝、高台径 9.7 ㎝、器高 5.4 ㎝を計測した。しかし、鉢はサイズ的に 2 タイプが焼成されたと思われる。一つは口径が 30 ㎝前後で、高台径が 15 ㎝前後、もうひとつは口径が 20 ㎝前後で、高台径が 10 ㎝前後である。その大きさの差は無視できないもので、明らかに意図的に造られていたと判断できよう。また注ぎ口は 27 点中 9 点で確認でき、寸法の大小に関わらず、口が付けられていた。

形状については、分類を示し、1181 はじめ 9 点で器形分類した。結果は、Ⅰ類が 5 点、Ⅱ類が 4 点、体部でＡ類が 1 点、Ｂ類が 3 点、Ｃ類が 2 点、Ｄ類が 3 点である。さらに口縁部で分類すると、1 類が 6 点、2 類が 1 点、3 類が 2 点という結果となった。Ｂ類 1 類が 3 点で最多である。



第 53 図　灰原出土鉢類実測図

写真 65　灰原出土鉢

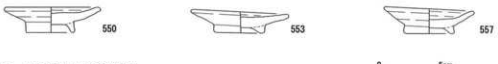
托（第 54 図、第 35 表、写真 66）

托は 3 点灰原から出土した。一見、皿と見間違うようなスタイルをしているが、浅く平らに成形されていることで区別した。550・553・557 が該当する。

550 は灰原H区から出土、口縁部から体部にかけて一部欠損している。口径 7.7cm、高台径 4.0cm、器高 2.2cm を計測した。内側に重ね痕が認められるが、胎土、焼成は良好である。

553 は灰原G区から出土。口縁の一部が欠損するが、完形品に近い資料である。内側に重ね痕が認められるが、胎土、焼成は良好である。口径は 7.6cm、高台径は 4.2cm でわずかながら他の 2 点より寸法が大きく、器高は 1.7cm で、他の 2 点と比較して体部から口縁部にかけて断面形状はやや緩やかな直線で立ち上がる。

557 は灰原 I 区から出土した完形品である。内部に重ね痕はない。高台端部には細かな刻みの痕が確認された。底部は糸切り後に高台部を成形し、底面に籾殻跡が付着している。口径 7.4cm、高台径 4.0cm、器高 2.2cm が寸法である。



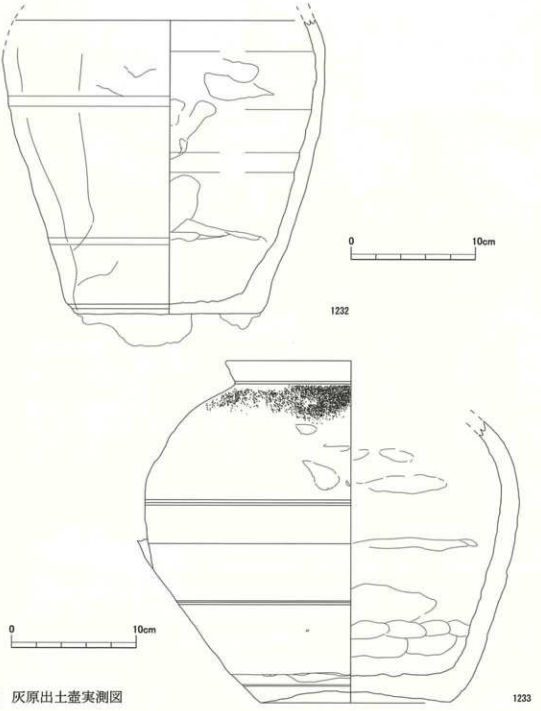
第 54 図　灰原出土托実測図

写真 66　灰原出土托

壺類（第 55 図、第 40 表、写真 67）

壺系の器種は 2 個体分あり、灰原Ⅰ区とK区で各 1 個体分出土している。

1232 は肩部から口縁部が欠損していて、正確な器種を特定できない。底径は 15.1cm、器高は残存長で 23.5cm を計測している。表面は全体に褐色系の色を呈している。1233 は口縁部があり、全体に器形が分かる資料で、おそらく短頭壺と推測される。口径は推定で 20.1cm、底径が 15.3cm、器高が 27.3cm あり、口縁の一部に自然釉がかかる。

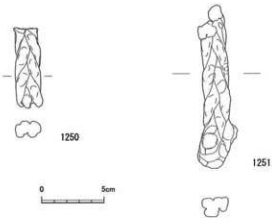


第 55 図　灰原出土壺実測図

写真 67　灰原出土壺

取手（第 56 図、第 47 表、写真 68）

粘土を編みこんであり、吉田第１・２号窯で出土した特殊器台と同様のものを想定した。点数は２点あり、いずれも猿投窯に見受けられる水瓶の取手に類似しているので、何らかの壺系器種の取手と判断しておく。1250 は取手の半分のみの資料、1251 は取手部分のすべてである。

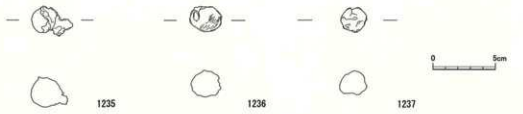


第 56 図　灰原出土取手実測図

写真 68　灰原出土取手

陶丸（第 57 図、第 41 表、写真 69）

灰原から陶丸は 3 点出土し、球には手による成形が行われ、自然釉がかかる。真円ではなく、径は 2〜2.5cm を計測している。1235 には本体に“かまくそ”と呼ばれるものが付着しているため本来の形が不明である。1237 には一部にひびが認められる。重量については 1236 が 12g、1237 が 9g であった。



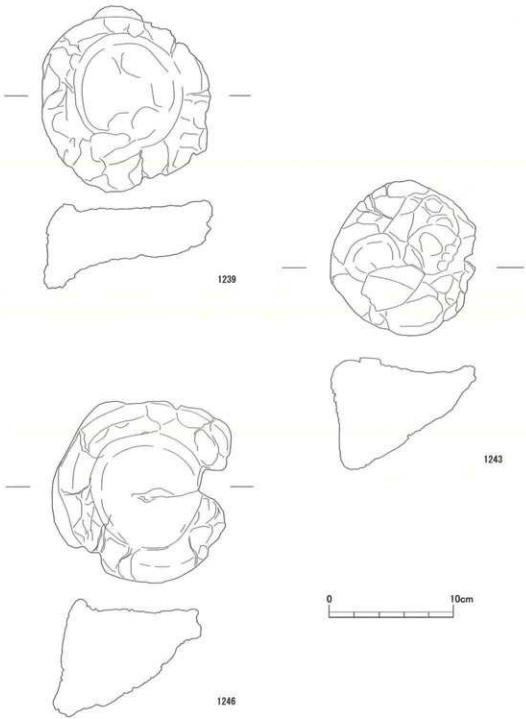
第 57 図　灰原出土陶丸実測図

写真 69　灰原出土陶丸

【焼成品外】

焼台（第 58 図、第 43 表、写真 70）

窯道具として焼台が使用され、状態の良好なもの 3 点を紹介する。馬蹄形をなし、特殊な形状をしているものは認められない。1243 には上面平坦部に碗破片が付着している。



第 58 図　灰原出土焼台実測図

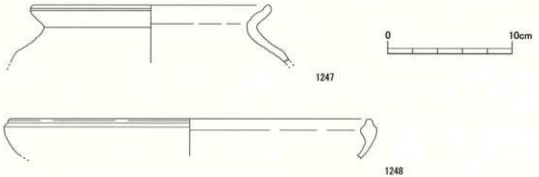
写真 70　灰原出土焼台

土師質場（第 59 図、第 44 表、写真 71）

伊勢型鍋と呼称される土器片が出土している。この地方の中世窯からは決まって出土する陶器片とは異質な土器である。本資料は口縁部のみであるが、寸法は推定で口径 16.7cm を計測している。表面は赤褐色を呈し、状態はもろい。

内耳鍋（第 59 図、第 45 表、写真 71）

灰原 AC 区からの出土である。口縁部のみの破片で、体部はない。口縁外部が黒くこげており、炎にあたった痕跡であろう。



第 59 図　灰原出土土師質場・内耳鍋実測図

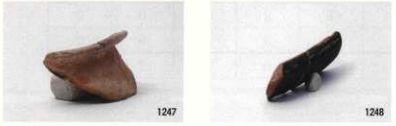


写真 71　灰原出土土師質場・内耳鍋

第４節　床面下施設の遺物

本窯では１号窯と３号窯で床面下施設が造られていることは第２部第１章で触れたとおりである。１号窯も３号窯も分焔柱付近から焼成室中央部にかけて碗・皿を伏せて隙間なく敷き詰める方法がとられている。ただし、１号窯は床面下施設の上にある床が取り除かれた状態であったため、調査時に何点かは平面面作成前にはずされてしまった可能性がある。実際には広範囲に碗・皿が敷き詰められていたと想像される。

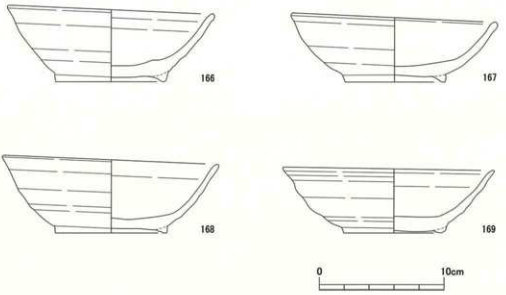
１号窯の床面下施設から出土した碗は65点、皿は１点、計66点であるが、そのうち分類できたものは５点であった。３号窯の床面下施設から出土した碗は85点であるが、そのうち分類できたものは15点であった。合計20点の資料について分類を行った。なお、取上げ時の状況は、第13表から第14表を参照していただきたい。

１号窯床面下施設から出土した碗の寸法は、平均値で口径16.7cm、高台径8.6cm、器高5.6cm、最大値は口径17.0cm、高台径9.4cm、器高6.3㎝、最小値は口径16.5cm、高台径8.2cm、器高4.8㎝である。底面高台付着痕は３点が籾痕であり、２点が不明であった。底部外面は糸切り後ナデ調整が４点、不明が１点、見込みはすべて指ナデ調整である。器形分類はＡ類が２点、Ｂ類が２点、Ｄ類が１点、口縁部は１類が２点、２類が１点、４類が２点であった。皿は１点確認でき、歪みの激しい遺物であるが、口径9.4cm、高台径5.5cm、器高2.9㎝を計測した。器形分類はⅢＢ４に相当する。

３号窯床面下施設から出土した碗の寸法は、平均値で口径15.4cm、高台径7.1cm、器高5.4cm、最大値は口径15.8cm、高台径8.5cm、器高5.8㎝、最小値は口径14.9cm、高台径6.1cm、器高4.8㎝である。底面高台付着痕はほとんど籾痕であった。底部外面はすべて糸切り後ナデ調整で、見込みも指ナデ調整である。器形分類はＡ類が７点、Ｂ類が２点、Ｃ類が３点、Ｄ類が３点、口縁部は１類が３点、２類が３点、３類が９点であった。取上げ時の状況は、第15表から第16表を参照していただきたい。

器形分類	体部				口縁部			
	Ａ類	Ｂ類	Ｃ類	Ｄ類	１類	２類	３類	４類
１号窯	2	2	0	1	2	1	0	2
３号窯	7	2	3	3	3	3	9	0
計	9	4	3	4	5	4	9	2

第12表　床面下施設出土遺物器形分類



第 60 図　1 号窯床面下施設出土遺物実測図

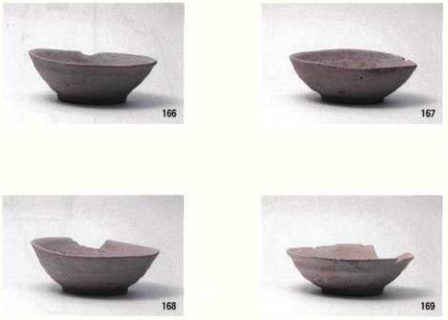
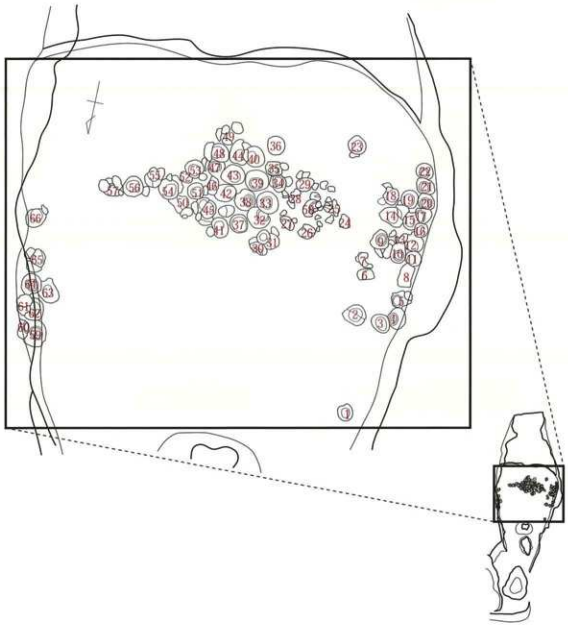


写真 72　1 号窯床面下施設出土遺物



第 61 図　1 号窯床面下施設遺物取上位置図

取上No.	器種名	出土状態	個体数(高台数)	破片の有無	遺物観察表対照	備考
1	碗	伏せ	1	1		
2	碗	伏せ	1	1		
3	碗	伏せ	1	1		
4	碗	伏せ	1	1		
5	碗	伏せ	1	1		
6	碗	伏せ	1	1		
7	碗	伏せ	1	3		
8	碗	伏せ	1	1		
9	碗	伏せ	1	3		
10	碗	伏せ	1	1		
11	皿	伏せ	1	1		
12	碗	伏せ	1	1		
13	碗	伏せ	1	2		
14	碗	伏せ	1	3		
15	碗	伏せ	1	1		
16	碗	伏せ	1	1		
17	碗	伏せ	1	1		
18	碗	伏せ	1	3		
19	碗	伏せ	1	1		
20	碗	伏せ	1	1		
21	碗	伏せ	1	1		
22	碗	伏せ	1	1		
23	碗	伏せ	1	3		
24	碗	伏せ	1	1		
25	碗	伏せ	1	10		
26	碗	伏せ	1	6		
27	碗	伏せ	1	2		
28	碗	伏せ	1	4		
29	碗	伏せ	1	5		
30	碗	伏せ	1	2		
31	碗	伏せ	1	4		
32	碗	伏せ	1	3		
33	碗	伏せ	2	2		
34	碗	伏せ	1	2		
35	碗	伏せ	1	3		
36	碗	伏せ	1	1		
37	碗	伏せ	1	1		
38	碗	伏せ	1	1		
39	碗	伏せ	1	1	434	
40	碗	伏せ	1	4		
41	碗	伏せ	1	8		
42	碗	伏せ	1	3		
43	碗	伏せ	1	2		
44	碗	伏せ	1	6		
45	碗	伏せ	1	5		

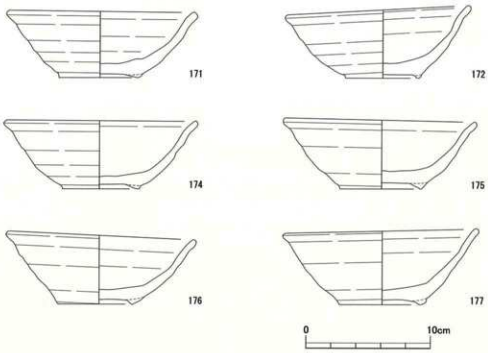
※個体数は高台 1/2以上で1個体とカウントし、重ねの場合は重ね枚数を( )書きする

第13表 1号窯床面下施設遺物取上げ表〔その1〕

取上No.	器種名	出土状態	個体数(高台数)	破片の有無	遺物観察表対照	備考
46	碗	伏せ	1	1		
47	碗	伏せ	1	4		
48	碗	伏せ	1	5		
49	碗	伏せ	1	5		
50	碗	伏せ	1	8		
51	碗	伏せ	1	10		
52	碗	伏せ	1	1	169	
53	碗	伏せ	1	1		
54	碗	伏せ	1	7		
55	碗	伏せ	1	6		
56	碗	伏せ	1	6		
57	碗	伏せ	1	5		
58	碗	伏せ	1	1		
59	碗	伏せ	1	1	168	
60	碗	横	1	1		
61	碗	伏せ	1	2		
62	碗	伏せ	1	1	166	
63	碗	伏せ	1	3		
64	碗	伏せ	1	1	167	
65	碗	伏せ	1	6		
66	碗	伏せ	1	5		

※個体数は高台 1/2以上で1個体とカウントし、重ねの場合は重ね枚数を( )書きする

第14表 1号窯床面下施設遺物取上げ表〔その2〕



第 62 図　3 号窯床面下施設出土遺物実測図

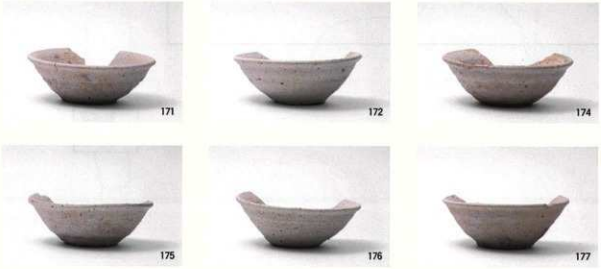
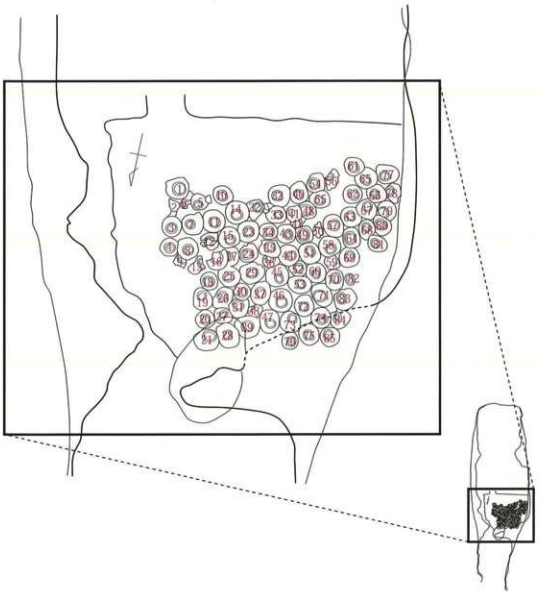


写真 73　3 号窯床面下施設出土遺物



第 63 図　3 号窯床面下施設遺物取上位置図

取上No.	器種名	出土状態	個体数(高台数)	破片の有無	遺物観察表対照	備考
1	碗	伏せ	1	2		
2	碗	伏せ	0	5		生焼け
3	碗	伏せ	1	0		
4	碗	伏せ	1	1		
5	碗	伏せ	1	1		
6	碗	伏せ	1	0		
7	碗	伏せ	1	1	439	
8	碗	伏せ	1	1		
9	碗	伏せ	0	0		
10	碗	伏せ	1	0		
11	碗	伏せ	1	4	435	
12	碗	伏せ	1	5		
13	碗	伏せ	1	1		
14	碗	伏せ	1	2		
15	碗	伏せ	1	0	437	
16	碗	伏せ	1	6		
17	碗	伏せ	1	2		
18	碗	伏せ	1	0		
19	碗	伏せ	1	2		
20	碗	伏せ	1	1		
21	碗	横	1	0	438	
22	碗	伏せ	1	1		
23	碗	伏せ	1	0	174	
24	碗	伏せ	1	0		
25	碗	伏せ	1	0		
26	碗	伏せ	1	3		
27	碗	伏せ	1	2		
28	碗	伏せ	1	4		
29	碗	伏せ	1	0		
30	碗	伏せ	1	1		
31	碗	伏せ	1	1		
32	碗	伏せ	1	4		
33	碗	伏せ	1	2		
34	碗	伏せ	1	0		
35	碗	伏せ	1	0		
36	碗	伏せ	0	1		
37	碗	伏せ	1	0	436	
38	碗	伏せ	1	2		
39	碗	伏せ	1	0		
40	碗	伏せ	1	4		
41	碗	伏せ	1	0		穴あき
42	碗	伏せ	1	0		
43	碗	伏せ	1	1		
44	碗	伏せ	1	0	178	
45	碗	伏せ	1	2		

※個体数は高台 1/2以上で1個体とカウントし、重ねの場合は重ね枚数を( )書きする

第15表　3号窯床面下施設遺物取上げ表〔その1〕

取上No.	器種名	出土状態	個体数(高台数)	破片の有無	遺物観察表対照	備考
46	碗	伏せ	1	0	170	
47	碗	伏せ	1	1		
48	碗	伏せ	1	0		
49	碗	伏せ	1	0		
50	碗	伏せ	0	2		
51	碗	伏せ	1	1		
52	碗	伏せ	1	0		
53	碗	伏せ	1	0		
54	碗	伏せ	1	1		
55	碗	伏せ	1	1		
56	碗	伏せ	1	0		
57	碗	伏せ	1	3		
58	碗	伏せ	1	0		
59	碗	伏せ	1	0		
60	碗	伏せ	1	1	172	
61	碗	伏せ	1	0		
62	碗	伏せ	1	1		
63	碗	伏せ	1	0	176	
64	碗	伏せ	1	0		
65	碗	伏せ	1	0	175	
66	碗	伏せ	1	0		
67	碗	伏せ	1	0		
68	碗	伏せ	1	0	177	
69	碗	伏せ	1	1		
70	碗	伏せ	1	0		
71	碗	伏せ	1	0		
72	碗	伏せ	1	0		
73	碗	伏せ	1	0	171	
74	碗	伏せ	1	5		
75	碗	伏せ	1	4		
76	碗	伏せ	1	0		
77	碗	伏せ	1	0	173	
78	碗	横	1	0		
79	碗	伏せ	1	0		
80	碗	伏せ	1	0		
81	碗	伏せ	1	0		
82	碗	伏せ	1	0		
83	碗	伏せ	1	2	179	
84	碗	伏せ	1	3		
85	碗	伏せ	1	0		

※個体数は高台 1/2以上で1個体とカウントし、重ねの場合は重ね枚数を( )書きする

第16表　3号窯床面下施設遺物取上げ表〔その2〕

第5節　考　察

瀬戸B古窯跡群で出土品は以上のとおりである。ここでは、主要な出土品であり、かつ焼成品の碗類・皿類・鉢類について年代観を中心に考察を加えることにする。

碗類は9,084点が、皿類は3,672点が、焼成室、燃焼室、焚口と灰原などから出土している。

整形方法について、碗類や皿類でも全体の成形は人の指によるナデが大半である。高台底面付着痕には籾痕が見られ、底部外面は糸切り痕がほとんどで確認できた。胎土自身には少量の砂粒や小石が混じるものもある。

次に、碗類と皿類の年代観について「赤羽・中野」による編年型式㉑、つまり常滑窯生産地編年を参考にその特徴と年代観を検討する。基本的に碗類と皿類はセットで焼成され、皿類は高台が付くものと、そうでないものとが同時に存在し、あわせて鉢類も共存している。これは常滑窯での基本器種構成を備えている。

まず、最終焼成品が残された各窯内から出土した焼成品について考える。1号窯出土の遺物（碗）14は体部がわずかに内湾し、口縁部は角形、底部から体部にかけて器壁の厚みに大きな変化が認められないなど3型式（1175～1190年）の特徴を呈する。また遺物（皿）444は高台が付き小碗と呼ぶことも可能なもので口径9.0cm、高台径4.5cm、器高2.8cmの寸法がある。他の遺物の器形分類などから、1号窯出土の遺物は2～3型式期と考えられる。

2号窯出土の遺物（碗）1～9は口縁部が角形に仕上げられており、器壁の変化が見られない点が3型式の特徴を示す。2型式より小型化の傾向があるが4型式にみられる体部の直線化は認められないため、3型式に属するものと考えられる。遺物（皿）445は高台のない小皿で、口径8.2cm、高台径5.0cm、器高2.0cmである。底部がわずかに突出し、3型式に顕著な器壁が薄くなる傾向は認められない。小碗の高台が省略されたとみれば2型式の特徴と捉えることも可能である。以上より2号窯出土の遺物は1号窯と同様に皿は2～3型式期、碗は3型式期であり2～3型式の移行期の遺物と推定される。

3号窯出土の遺物（碗）12・15～20は、平均計測値で口径15.4cm、高台径7.8cm、器高5.6cmを測る。1・2号窯出土の碗よりもいっそう明確に3型式期のものと考えられるが、遺物（碗）16・18・19の体部に着目すると直線化が認められるため、この点を重視すれば4型式（1190～1220年）にかけての年代と推定できよう。同じく、皿は平均計測値が口径8.5cm、高台径4.7cm、器高2.1cmである。高台径（底径）が小さく、高台は省略されるものが大半である。多くは3型式と捉えることができるが、遺物（皿）456にみられるように扁平化の傾向も認められ、4型式の特徴を呈するものが出現することから、3～4型式期のものと考えられる。以上より3号窯出土の遺物は碗、皿ともに3～4型式期と比定する。

4号窯出土の遺物（碗）23～28は、平均計測値の口径15.7cm、高台径7.8cm、器高5.5cmを計測する。また全体に小型化し口縁部に角形が多く、口縁端部が薄くならずに厚みを保っていることから3型式と考える。一方、皿は高台付の遺物（皿）465で口縁部より器壁が薄い体部が認められ、遺物（皿）465を除く平均計測値が口径8.5cm、高台径4.7cm、器高2.1cmである。各個体に注視すると、

遺物（皿）466で口縁部より器壁が薄い体部が認められ、遺物（皿）464は3型式の特徴を有しながらも扁平化の傾向を示すことから、4型式のものと考えられる。

灰原には、各窯の焼成品が重なるように破棄されていたが、1・2号窯の灰原と目される場所（第22図参照）と3・4号窯の灰原（第22図参照）とでは器形分類から傾向に相違が認められる。碗類では、体部の直線化と垂直化は3・4号窯の灰原と想定される場所に多く、また皿類への高台付きは1・2号窯の灰原の方が顕著である。この点を含め、全体的な検討から灰原は2～3型式期の部分と3～4型式期の部分とに分けられ、それが1・2号窯と3・4号窯の灰原と重なると判断される。

最後に、灰原から集中して出土、特に1・2号窯灰原地点の鉢類は、口1個が付けられている形態であるが、成形自体やスタイルに碗類と遜色はない。常滑窯の生産地編年が提示する典型的な鉢類の形態と遺物（鉢）1198は類似する点があり、寸法的には一部破損のため推定値であるが、口径が30.8cmを計測し、かつ形態が山茶碗を類似したまま大型化している点、また高台が高く断面形が三角形を呈すことから1b型式期（1130～1150年）の編年と判断可能な形態をしている。これは焼成年代が2型式を含め、それより古いことを暗示しているのではないであろうか。可能性を示しておくに留める。

以上の考察から、遺物からの瀬戸B古窯跡群の年代観（常滑窯編年）は、1・2号窯が2～3型式期（1150～1175年）、3・4号窯が3～4型式（1175～1220年）であると考えられる。ちなみに瀬戸窯・猿投窯を対象とした尾張型編年に比定すると、4型式に相当する。

大府市内の他の古窯群との比較を試みると、2型式期とされる神明古窯群・森岡第1号窯群よりも新しく、2～3型式とされる深廻間A古窯群・深廻間B古窯群と1・2号窯が同時期かやや新しいのではないかと考えられる。また、3型式とされるガンジ山古窯群や4型式とされる海陸庵古窯群とは3・4号窯が同時期により近いのではないかと、現時点では判断される。

註

①中野晴久他『「全国シンポジウム」中世常滑窯をおって』資料集「生産地編年について」　1994年

出土地点	器種	碗類			皿類		
		口径	高台径	器高	口径	高台径	器高
1号窯	平均値	16.3	8.1	4.9	9.3	4.7	2.6
	最大値	17.0	9.0	6.0	9.5	4.9	2.8
	最小値	15.2	7.5	4.2	9.0	4.5	2.3
2号窯	平均値	14.9	7.3	4.8	8.2	5.0	2.0
	最大値	16.7	8.7	5.2	8.2	5.0	2.0
	最小値	15.2	7.5	4.2	8.2	5.0	2.0
3号窯	平均値	15.4	7.8	5.6	8.5	4.7	2.1
	最大値	16.2	7.8	5.6	9.0	5.9	2.5
	最小値	15.2	7.5	4.2	8.1	3.8	1.7
4号窯	平均値	15.7	7.8	5.5	8.6	4.8	2.2
	最大値	16.2	8.5	5.9	9.3	5.0	2.7
	最小値	14.4	7.2	5.2	8.2	4.4	1.9
1号窯床面下	平均値	16.7	8.6	5.6	9.4	5.5	2.9
	最大値	17.0	9.4	6.3	9.4	5.5	2.9
	最小値	16.5	8.2	4.8	9.4	5.5	2.9
3号窯床面下	平均値	15.4	7.1	5.4	−	−	−
	最大値	15.8	8.5	5.8	−	−	−
	最小値	14.9	6.1	4.8	−	−	−
SK02	平均値	14.9	7.7	5.2	8.9	4.8	2.1
	最大値	15.8	8.7	5.5	9.2	4.8	2.2
	最小値	14.0	6.7	4.8	8.6	4.7	2.0
SK03	平均値	(16.2)	8.0	5.0	8.8	4.5	2.9
	最大値	(16.2)	8.0	5.0	9.0	5.0	3.2
	最小値	(16.2)	8.0	5.0	8.5	3.7	2.6
灰原AE区	平均値	16.5	8.4	5.2	9.1	4.7	2.6
	最大値	17.7	10.0	7.0	10.1	6.4	3.5
	最小値	15.2	7.0	4.5	8.1	3.7	1.7
灰原BE区	平均値	16.5	8.5	5.0	9.1	4.8	2.7
	最大値	17.3	10.2	5.6	9.8	5.8	3.4
	最小値	15.8	7.6	4.4	7.7	4.0	2.1
灰原CE区	平均値	16.9	8.9	5.1	9.2	4.9	2.7
	最大値	17.7	10.3	5.5	10.0	5.6	3.1
	最小値	15.8	8.0	4.4	8.4	4.2	2.1
灰原DE区	平均値	16.5	8.3	5.1	8.9	4.9	2.6
	最大値	16.6	9.6	5.9	9.8	5.7	3.0
	最小値	16.3	6.9	4.1	8.0	4.3	2.2
灰原EE区	平均値	16.9	8.2	5.0	−	−	−
	最大値	16.9	9.0	5.3	−	−	−
	最小値	16.8	7.5	4.7	−	−	−
灰原FE区	平均値	16.5	8.4	5.3	8.4	5.1	2.8
	最大値	17.4	9.3	6.0	9.6	6.0	3.3
	最小値	15.4	7.4	4.8	8.5	4.2	2.4
灰原GE区	平均値	15.4	6.5	5.1	8.5	4.7	2.4
	最大値	16.9	9.0	5.7	9.7	5.5	3.3
	最小値	13.7	6.2	4.6	7.9	3.8	1.9
灰原HE区	平均値	17.2	7.5	5.3	8.9	5.0	2.6
	最大値	17.4	8.5	5.4	9.5	5.7	3.0
	最小値	17.0	6.8	5.1	8.3	4.3	1.7
灰原IE区	平均値	16.7	8.2	5.2	9.1	5.1	2.8
	最大値	17.4	9.5	5.9	9.9	5.7	3.8
	最小値	15.8	7.0	4.5	8.3	4.5	2.2
灰原JE区	平均値	15.1	7.4	5.4	8.4	5.0	2.1
	最大値	15.3	7.7	5.7	8.8	5.5	2.5
	最小値	14.8	7.2	5.1	8.0	4.1	1.7
灰原KE区	平均値	16.6	8.2	5.1	9.0	5.1	2.7
	最大値	16.7	8.8	5.7	9.8	5.8	3.4
	最小値	16.3	7.2	4.3	8.2	4.4	1.9
灰原LE区	平均値	16.6	8.3	5.1	9.0	4.9	2.7
	最大値	17.5	10.3	5.7	10.3	6.0	3.4
	最小値	15.7	6.5	4.3	8.2	4.4	2.1
灰原ME区	平均値	15.4	7.8	5.3	8.2	5.2	2.0
	最大値	17.1	9.4	5.6	8.5	5.5	2.3
	最小値	14.2	6.7	5.0	7.9	4.8	1.8
灰原NE区	平均値	16.4	8.2	4.9	9.7	5.2	2.8
	最大値	16.4	8.6	4.9	9.7	5.2	2.8
	最小値	16.4	7.8	4.9	9.7	5.2	2.8

出土地点	器種	碗類			皿類		
		口径	高台径	器高	口径	高台径	器高
灰原OE区	平均値	17.1	8.1	5.0	9.0	5.0	2.7
	最大値	19.8	9.8	5.5	9.6	5.0	2.7
	最小値	15.7	7.4	3.9	8.2	3.8	2.0
灰原PE区	平均値	15.4	7.7	5.4	8.5	4.9	2.3
	最大値	15.7	8.2	5.7	8.8	5.5	2.5
	最小値	15.0	7.1	4.9	8.2	3.8	2.1
灰原QE区	平均値	15.5	7.7	5.1	8.8	5.0	2.5
	最大値	15.7	7.8	5.2	9.6	5.3	3.0
	最小値	15.3	7.5	5.1	8.9	5.2	2.3
灰原RE区	平均値	(15.0)	7.4	5.4	−	−	−
	最大値	(15.0)	7.4	5.4	−	−	−
	最小値	(15.0)	7.4	5.4	−	−	−
灰原AAE区	平均値	16.5	8.0	5.2	9.1	4.8	2.8
	最大値	17.3	8.9	5.9	9.8	5.8	3.1
	最小値	15.6	7.0	4.9	8.3	4.0	2.2
灰原ABE区	平均値	17.0	8.1	4.9	9.1	4.9	2.7
	最大値	17.5	8.8	5.5	10.0	5.7	3.3
	最小値	16.5	7.7	4.5	8.2	4.2	2.3
灰原ACE区	平均値	16.7	8.3	5.1	9.1	4.9	2.7
	最大値	17.2	9.8	5.8	10.4	5.5	3.3
	最小値	16.0	8.3	4.4	8.4	4.2	2.3
灰原BAE区	平均値	16.8	7.6	5.2	9.0	4.7	2.8
	最大値	16.8	7.6	5.2	9.0	4.7	2.8
	最小値	16.8	7.6	5.2	9.0	4.7	2.8
灰原BBE区	平均値	16.5	8.4	5.0	9.1	4.9	2.8
	最大値	16.5	8.7	5.3	9.8	5.5	3.3
	最小値	16.5	8.7	5.3	8.5	4.3	2.4
灰原BCE区	平均値	16.3	8.2	5.1	8.9	4.7	2.7
	最大値	17.3	9.3	6.2	10.1	5.8	3.3
	最小値	16.0	7.3	4.2	7.8	4.0	2.3

※ 2号・4号窯では床面下施設は検出されなかった。
※ − は出土遺物無しであった。
※ ( ) は推定値である。

出土地点	器種	碗類			皿類		
		口径	高台径	器高	口径	高台径	器高
灰原及び土坑全体	平均値	16.3	8.0	5.1	8.9	4.9	2.6
	最大値	19.8	10.3	7.0	10.4	6.4	3.8
	最小値	13.7	6.2	3.9	7.7	3.7	1.7

第 17 表　出土地点別碗類皿類法量比較表

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm/g)				高台底面付着痕	底部外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
1	碗	19e	2号窯E区	14.5	7.0	5.0	249.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
2	碗	20e	2号窯D区	14.5	7.2	5.0	242.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	2	
3	碗	20e	2号窯D区	14.6	7.3	4.4	260.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
4	碗	20e	2号窯D区	14.8	6.8	4.7	270.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	2	
5	碗	20e	2号窯D区	15.4	7.4	4.5	257.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	高台部3/4欠損
6	碗	20e	2号窯D区	14.3	6.7	4.8	243.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	2	
7	碗	20e	2号窯D区	14.5	6.7	5.2	277.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
8	碗	20e	2号窯D区	13.7	7.1	5.0	260.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	2	
9	碗	20e	2号窯D区	14.0	7.7	4.7	275.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
10	碗	19e	2号窯G区	16.7	8.7	4.5	448.0	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
11	碗	19e	2号窯G区	16.5	8.0	4.7	391.0	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
12	碗	20d	3号窯C区	15.3	7.3	6.1	292.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	5	生焼け?
13	碗	20d	1号窯D区ベルト	15.4	7.5	4.5	328.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	2	完形　歪み
14	碗	20d	1号窯D区ベルト	15.2	7.5	6.0	295.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	5	外面部明なヘラ削り痕
15	碗	20d	3号窯C区	16.2	7.7	6.0	324.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
16	碗	20d	3号窯C区	16.2	7.8	6.0	305.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	5	
17	碗	19d	3号窯F区	14.6	7.5	5.6	316.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
18	碗	19d	3号窯E区	15.2	8.2	5.6	319.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
19	碗	19d	3号窯東西セクションベルト	14.8	7.8	5.0	323.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	2	
20	碗	19d	3号窯東西セクションベルト	15.4	8.7	5.0	295.0	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
21	碗	19d	3号窯焚口	15.4	7.8	5.7	308.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
22	碗	19d	3号窯E区	15.7	7.9	6.2	316.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	生焼け?
23	碗	20e	4号窯D区	15.0	7.6	5.3	291.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
24	碗	19e	4号窯焚口ベルト	15.8	7.2	5.3	335.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	2	
25	碗	19e	4号窯焚口ベルト	15.8	8.0	5.5	319.0	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	生焼け
26	碗	19e	4号窯焚口ベルト	15.9	7.5	5.8	318.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
27	碗	19e	4号窯E区	16.0	8.5	5.5	287.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
28	碗	18d	4号窯庫	15.0	7.6	5.3	351.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
29	碗	19f	灰原A区	17.2	9.2	5.5	331.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
30	碗	19f	灰原A区	17.0	8.3	4.8	349.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	完形
31	碗	19f	灰原A区	15.8	9.2	5.2	401.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	5	歪み有り
32	碗	19f	灰原A区	16.5	9.0	5.3	393.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	7	内面にヘラ削り痕あり
33	碗	19f	灰原A区	17.0	8.0	4.7	362.0	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	歪み有り
34	碗	19f	灰原A区	16.1	8.2	4.7	396.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
35	碗	19f	灰原A区	17.7	10.0	5.3	356.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	E	1	
36	碗	19f	灰原A区	15.7	8.3	5.5	295.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	口縁部歪み
37	碗	19f	灰原A区東側ベルト	16.7	9.2	5.0	392.0	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
38	碗	19f	灰原A区東側ベルト	16.8	7.3	5.4	327.0	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	E	1	
39	碗	19f	灰原A区東側ベルト	16.5	8.0	5.8	294.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
40	碗	-	-	16.7	8.3	5.4	350.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
41	碗	19f	灰原A区東側ベルト	16.7	8.5	5.2	279.0	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
42	碗	19f	灰原A区東側ベルト	17.0	7.8	4.7	293.0	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	ほぼ完形
43	碗	19f	灰原A区東側ベルト	16.7	7.6	5.3	320.0	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
44	碗	18f	灰原B区	17.2	7.7	4.9	286.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
45	碗	19f	灰原B区南側ベルト	15.8	8.3	5.6	343.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
46	碗	18f	灰原C区	17.2	9.3	5.3	379.0	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	完形
47	碗	18f	灰原C区	16.3	8.0	4.9	366.0	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	ほぼ完形
48	碗	18f	灰原C区	15.8	8.3	4.4	294.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	完形　口縁歪み
49	碗	18f	灰原C区	17.5	10.0	5.2	312.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
50	碗	18f	灰原C区	16.6	8.7	5.0	347.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
51	碗	18f	灰原C区	16.5	9.0	5.0	318.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
52	碗	17f	灰原C区	17.7	9.0	4.7	371.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
53	碗	19f	灰原D区東側ベルト	16.3	8.3	5.3	340.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
54	碗	18f	灰原F区	16.8	7.5	5.2	342.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
55	碗	17e	灰原F区	16.5	9.2	5.2	403.0	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	7	
56	碗	17e	灰原F区	16.2	8.7	6.0	408.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
57	碗	18f	灰原F区	16.3	8.3	5.0	277.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
58	碗	18f	灰原F区南側ベルト	16.6	7.9	4.8	314.0	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
59	碗	18f	灰原F区南側ベルト	17.0	8.7	5.1	390.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
60	碗	18f	灰原F区南側ベルト	16.8	9.0	5.2	399.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
61	碗	18f	灰原F区南側ベルト	15.4	7.4	5.8	321.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	7	歪み有り
62	碗	19e	灰原G区	15.5	6.6	5.6	323.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	2	歪み有り
63	碗	19e	灰原G区	15.0	7.3	5.4	271.0	刷毛目	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	歪み有り
64	碗	19e	灰原G区	13.7	6.9	4.9	263.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
65	碗	19e	灰原G区南側ベルト	16.8	7.8	5.4	324.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
66	碗	19e	灰原G区南側ベルト	16.9	9.0	4.9	317.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
67	碗	18e	灰原H区	15.8	8.4	5.4	355.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	7	
68	碗	18e	灰原H区	16.9	7.8	4.8	337.0	刷毛目	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
69	碗	18e	灰原H区	16.7	8.0	5.2	393.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	7	
70	碗	18e	灰原H区	16.7	9.0	5.2	358.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
71	碗	18e	灰原H区	15.9	7.4	5.1	299.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	5	
72	碗	18e	灰原H区	17.3	7.4	5.3	305.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	歪み有り

第18表　碗類観察表〔その1〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm/g) 口径	高台径	器高	重量	高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類 系統	体部	口縁端部	備考
73	碗	17c	灰釉B区	17.1	8.8	5.1	377.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	歪み有り
74	碗	17c	灰釉B区	17.4	8.9	5.6	375.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
75	碗	17c	灰釉B区	17.1	8.3	5.5	368.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
76	碗	17c	灰釉B区	16.3	8.3	5.0	370.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
77	碗	19c	灰釉B区	15.3	7.3	5.6	335.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	2	
78	碗	18c	灰釉B区 東側ベルト	14.8	7.7	5.7	321.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	2	
79	碗	18c	灰釉B区 東側ベルト	15.1	7.2	5.2	316.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	7	
80	碗	18c	灰釉K区	16.7	8.2	4.8	324.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
81	碗	18c	灰釉K区	16.6	8.8	4.9	357.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
82	碗	18c	灰釉K区	16.7	8.8	4.8	313.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
83	碗	18c	灰釉K区	16.3	8.6	5.2	386.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
84	碗	18c	灰釉L区	16.3	8.7	5.3	374.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
85	碗	18c	灰釉L区	15.8	8.1	5.3	355.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
86	碗	18c	灰釉L区	15.8	8.4	4.8	344.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	7	
87	碗	18c	灰釉L区	16.9	8.7	5.0	359.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	高台底面刷毛目模様有り
88	碗	18c	灰釉L区	17.2	9.2	5.5	389.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
89	碗	18c	灰釉L区	16.1	7.3	4.3	334.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	4	
90	碗	18c	灰釉L区	16.4	8.3	5.3	383.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
91	碗	18c	灰釉L区	16.8	8.2	5.3	336.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	外面ヘラ削り
92	碗	18c	灰釉L区	16.9	9.1	5.1	394.0	刷毛目	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
93	碗	18c	灰釉L区	16.3	8.2	5.1	332.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	7	
94	碗	18c	灰釉L区	16.3	8.2	4.8	337.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
95	碗	18c	灰釉L区	16.8	8.2	4.8	373.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
96	碗	18c	灰釉L区南側ベルト	15.7	6.5	5.5	339.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	歪み有り
97	碗	18c	灰釉L区東側ベルト	15.8	7.7	5.0	349.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
98	碗	17d	灰釉L区	17.3	10.3	5.1	357.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
99	碗	17d	灰釉L区	17.1	8.3	5.3	412.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
100	碗	17d	灰釉L区	15.8	7.4	4.7	323.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
101	碗	17d	灰釉L区	17.5	8.9	5.2	412.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
102	碗	17d	灰釉L区	16.2	8.5	5.2	354.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
103	碗	17c	灰釉L区	17.2	8.3	5.6	348.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	歪み有り
104	碗	17c	灰釉L区	17.1	9.2	5.1	385.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
105	碗	17c	灰釉L区	16.9	9.1	5.1	369.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
106	碗	17c	灰釉L区	16.9	8.8	4.8	352.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
107	碗	17c	灰釉L区	17.0	9.8	5.1	354.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	E	1	
108	碗	17c	灰釉L区	16.6	8.7	5.1	353.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	E	5	
109	碗	17c	灰釉L区	16.8	8.8	4.8	277.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
110	碗	18d	灰釉M区	17.1	7.9	5.3	370.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
111	碗	19d	灰釉M区	14.5	6.7	5.3	282.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	2	
112	碗	19d	灰釉M区	15.1	8.0	5.0	295.0	もみ	糸切り後ヘラ削り	-	-	C	2	
113	碗	19d	灰釉M区	15.7	7.5	5.2	290.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	5	
114	碗	19d	灰釉M区	14.2	7.1	5.6	305.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	5	
115	碗	19d	灰釉M区南側ベルト	15.9	9.4	5.1	324.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
116	碗	18d	灰釉N区南側ベルト	16.4	8.6	4.9	354.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
117	碗	18d	灰釉O区	16.8	8.6	5.0	377.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
118	碗	18c	灰釉O区	15.8	7.5	4.8	327.0	もみ	半分程欠損	指ナデ	-	A	7	
119	碗	18c	灰釉O区東側ベルト	17.0	8.0	5.3	378.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
120	碗	18c	灰釉O区東側ベルト	16.4	7.7	5.3	378.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
121	碗	18c	灰釉O区東側ベルト	16.9	9.3	5.0	337.0	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
122	碗	18c	灰釉O区東側ベルト	19.8	7.4	5.1	289.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
123	碗	18c	灰釉O区東側ベルト	15.7	7.9	4.6	283.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
124	碗	18c	灰釉O区東側ベルト	19.0	8.5	5.3	336.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
125	碗	18c	灰釉O区東側ベルト	19.0	8.6	4.9	314.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
126	碗	17d	灰釉O区	16.9	9.2	5.5	341.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
127	碗	17d	灰釉O区	15.9	7.4	4.3	285.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
128	碗	17d	灰釉O区	16.2	7.9	4.6	356.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
129	碗	17d	灰釉O区	16.4	7.9	4.7	353.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	7	
130	碗	18c	灰釉P区	15.7	7.6	5.6	315.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
131	碗	19d	灰釉P区	15.1	7.9	4.9	293.0	もみ	ナデ	指ナデ	-	A	3	歪み有り
132	碗	20d	灰釉P区	15.5	7.4	5.7	355.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	2	
133	碗	21d	灰釉P区	15.0	7.1	5.6	294.0	もみ	糸切り後ナデ	-	-	C	3	
134	碗	18c	灰釉P区	15.4	7.8	5.0	364.0	もみ	ナデ	指ナデ	-	A	1	
135	碗	18c	灰釉P区	15.3	8.0	5.5	325.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
136	碗	18c	灰釉P区	15.7	8.2	5.5	354.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
137	碗	18c	灰釉P区	15.4	7.8	5.3	343.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
138	碗	18c	灰釉P区	15.3	7.7	5.5	294.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
139	碗	18c	灰釉P区	15.3	7.5	5.1	330.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	高台半分欠損
140	碗	18c	灰釉Q区	15.7	7.8	5.2	309.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
141	碗	19f	灰釉AA区	16.0	7.6	4.9	282.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
142	碗	19f	灰釉AA区	16.9	8.6	5.2	365.0	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
143	碗	19g	灰釉AA区	16.8	7.9	5.2	387.0	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	外側面削り跡
144	碗	19f	灰釉AA区	16.8	8.1	5.0	299.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	

第19表　碗類観察表〔その2〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cmrg)				高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
145	碗	19f	灰原AA北	16.1	8.3	5.6	333.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
146	碗	19g	灰原AA北	17.2	8.5	5.2	375.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
147	碗	19g	灰原AA北	15.9	7.8	5.1	350.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
148	碗	19g	灰原AA北	17.3	7.8	5.9	348.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
149	碗	19g	灰原AA北	16.3	7.8	5.5	367.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
150	碗	19g	灰原AA北	15.6	7.0	4.9	313.0	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
151	碗	19g	灰原ACE	16.7	8.2	5.0	333.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	歪み有り
152	碗	18g	灰原ABE	16.5	7.7	4.8	287.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
153	碗	18g	灰原ABE東側ベルト	17.5	8.8	5.5	374.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	7	
154	碗	18g	灰原ACE	17.0	8.5	4.7	313.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	5	
155	碗	18g	灰原ACE	16.0	8.7	4.9	337.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	2	
156	碗	17d	灰原ACE	17.2	8.3	4.4	322.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
157	碗	19g	灰原DAE	16.8	7.6	5.2	318.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
158	碗	19g	灰原DCE	16.6	8.2	6.2	323.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	歪み有り
159	碗	18g	灰原BCE	16.2	7.3	4.9	281.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
160	碗	19g	灰原DBE南側ベルト	16.5	8.7	5.3	363.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	4	
161	碗	18g	灰原BCE	17.3	9.0	4.6	468.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
162	碗	18g	灰原DCE	16.1	8.3	5.2	382.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
163	碗	18g	灰原DCE	16.1	7.3	5.2	300.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	5	
164	碗	19d	東側壁面	15.6	7.8	5.3	295.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
165	碗	19c	4号窯E区	15.4	7.5	5.8	324.0	もみ・小石	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
166	碗	19f	1号窯床面下施設	16.5	8.4	6.0	406.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
167	碗	19f	1号窯床面下施設	16.5	8.5	5.4	396.0	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	2	歪み有り
168	碗	19f	1号窯床面下施設	17.0	8.3	6.3	387.0	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
169	碗	19f	1号窯床面下施設	16.8	8.2	5.4	372.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
170	碗	19d・20d	3号窯床面下施設	15.7	7.9	5.1	389.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
171	碗	19d・20d	3号窯床面下施設	15.3	6.8	5.0	330.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
172	碗	19d・20d	3号窯床面下施設	14.9	6.4	5.5	295.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
173	碗	19d・20d	3号窯床面下施設	15.0	7.2	5.6	348.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
174	碗	19d・20d	3号窯床面下施設	15.6	6.9	5.3	294.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
175	碗	19d・20d	3号窯床面下施設	15.3	6.8	5.5	324.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
176	碗	19d・20d	3号窯床面下施設	15.3	6.3	5.7	289.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
177	碗	19d・20d	3号窯床面下施設	15.5	7.3	5.8	300.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	2	
178	碗	19d・20d	3号窯床面下施設	15.3	6.7	5.0	303.0	もみ・小石	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
179	碗	19d・20d	3号窯床面下施設	15.8	実測不可	5.5	292.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	2	
180	碗	17h	-	16.9	8.9	5.0	305.0	もみ	糸切り後ナデ	ナデ	-	D	1	
181	碗	17h	-	15.4	8.9	5.1	323.0	-	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
182	碗	18g	-	17.2	9.6	5.3	457.0	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	5	
183	碗	18g	-	16.7	8.0	4.6	345.0	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	歪み有り
184	碗	20f	1号窯EE	17.0	8.5	4.7	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
185	碗	19f	1号窯EC・ベルト焚口	16.7	8.3	4.2	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
186	碗	19f	1号窯EC・ベルト焚口	(17.0)	7.7	5.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	2	
187	碗	19f	1号窯EC・ベルト焚口	16.6	9.0	4.7	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
188	碗	20d	3号窯DE	15.6	8.0	5.6	-	もみ	糸切り後ナデ	-	-	C	2	
189	碗	20d	3号窯DE	15.8	7.5	5.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	生焼けか？
190	碗	20d	3号窯CE	(15.8)	6.8	5.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	生焼けか？
191	碗	20d	3号窯DE・ベルト	15.3	7.2	6.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	2	生焼けか？
192	碗	19d	3号窯EE	(15.2)	7.2	5.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
193	碗	19d	3号窯FE	15.5	8.4	5.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	2	
194	碗	19d	3号窯EE	14.3	7.5	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
195	碗	19d	3号窯東西セクションベルト	15.7	8.5	5.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	高台部1/2剥離　口縁部打掛
196	碗	19d	3号窯東セクションベルト	(15.8)	8.0	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	2	
197	碗	19d	3号窯GE・ベルト	15.4	7.5	5.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	内面側面に繊維痕か？
198	碗	20c	4号窯CE	(15.0)	7.8	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
199	碗	19c	4号窯EE	(14.4)	7.8	5.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	2	
200	碗	19c	4号窯焚口ベルト	15.4	8.0	5.8	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	2	
201	碗	19c	4号窯焚口ベルト	16.2	8.5	5.3	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
202	碗	19c	4号窯焚口ベルト	16.0	7.5	5.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	2	内面側面に繊維痕か？
203	碗	19f	灰原AE	(15.2)	8.8	4.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	内面底面に繊維痕
204	碗	19f	灰原AE	15.5	7.9	4.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
205	碗	19f	灰原AE	(16.0)	8.1	5.2	-	砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
206	碗	19f	灰原AE	16.3	8.5	5.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
207	碗	19f	灰原AE	16.7	9.2	4.7	-	砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	口径定形
208	碗	19f	灰原AE	16.8	9.0	4.6	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	
209	碗	19f	灰原AE	15.8	8.5	5.3	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
210	碗	19f	灰原AE	15.2	7.0	5.3	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
211	碗	19f	灰原AE	17.3	8.5	4.8	-	砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	2	
212	碗	19f	灰原AE	(14.8)	8.1	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
213	碗	19f	灰原AE	17.4	9.7	4.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
214	碗	19f	灰原AE	16.3	8.5	5.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
215	碗	19f	灰原AE	(20.2)	9.4	7.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
216	碗	19f	灰原AE南側ベルト	16.1	7.8	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	

第 20 表　碗類観察表〔その 3〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm・g)				高台底面付着痕	底面外面	見込み	部形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
217	碗	19f	灰原A区南側ベルト	16.7	8.6	5.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
218	碗	19f	灰原A区南側ベルト	15.4	8.1	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
219	碗	19f	灰原A区南側ベルト	16.7	8.0	4.8	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
220	碗	19f	灰原A区南側ベルト	15.8	8.4	4.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
221	碗	19f	灰原A区南側ベルト	(15.6)	8.1	5.2	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
222	碗	19f	灰原A区東側ベルト	(16.0)	7.5	4.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
223	碗	19f	灰原A区東側ベルト	(16.3)	8.3	5.9	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
224	碗	19f	灰原A区東側ベルト	16.3	7.8	4.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
225	碗	19f	灰原A区東側ベルト	17.0	8.0	5.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
226	碗	19f	灰原A区東側ベルト	16.5	8.1	5.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
227	碗	19f	灰原A区東側ベルト	(16.6)	8.5	4.8	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
228	碗	19f	灰原A区東側ベルト	16.3	8.0	4.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
229	碗	19f	灰原A区東側ベルト	16.6	7.8	5.2	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
230	碗	19f	灰原A区東側ベルト	(16.0)	8.5	5.7	-	砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
231	碗	19f	SK03	(15.8)	8.7	5.5	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
232	碗	19f	SK03	16.2	8.0	5.0	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
233	碗	18f	灰原B区	(17.3)	9.0	4.8	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
234	碗	18f	灰原B区	17.3	10.2	4.6	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
235	碗	18f	灰原B区	15.8	7.6	4.4	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
236	碗	19f	灰原B区	(16.2)	8.5	5.4	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
237	碗	19f	灰原B区南側ベルト 1.2号溝灰原	(16.4)	8.5	5.4	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
238	碗	19f	灰原B区南側ベルト 1.2号溝灰原	(16.6)	8.3	4.7	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	口縁部1/3残存
239	碗	19f	灰原B区南側ベルト 1.2号溝灰原	(15.5)	8.0	5.5	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
240	碗	18f	灰原C区	(17.8)	9.0	5.5	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
241	碗	18f	灰原C区	16.9	8.4	5.2	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	1	
242	碗	18f	灰原C区	(17.0)	10.3	5.5	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
243	碗	17f	灰原C区	(17.6)	8.5	5.1	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
244	碗	17f	灰原C区	17.6	8.0	5.4	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
245	碗	19f	灰原D区	(17.0)	9.6	4.1	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
246	碗	19f	灰原D区	(14.2)	7.6	5.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
247	碗	19f	灰原D区	(14.8)	6.9	5.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	2	
248	碗	19f	灰原D区東側ベルト	(16.4)	8.4	5.4	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
249	碗	19f	灰原D区東側ベルト	(16.9)	8.8	5.6	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
250	碗	19f	灰原D区東側ベルト	16.8	8.5	5.4	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
251	碗	18f	灰原E区	16.9	7.5	4.7	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
252	碗	18f	灰原E区	16.8	8.0	5.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	7	生焼け
253	碗	18f	灰原E区南側ベルト 1.2号溝灰原	16.9	9.0	5.0	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	4	生焼け
254	碗	18f	灰原F区	17.4	8.2	5.1	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	2	口縁歪み有り
255	碗	17e	灰原F区	16.1	8.6	5.6	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
256	碗	17e	灰原F区	16.2	8.4	5.1	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
257	碗	18f	灰原F区	16.6	8.1	5.4	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
258	碗	18f	灰原F区	16.3	9.3	5.8	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
259	碗	19e	灰原G区	15.2	8.3	5.5	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	2	
260	碗	19e	灰原G区	(15.0)	7.2	5.4	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
261	碗	19e	灰原G区	(14.2)	6.7	5.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
262	碗	19e	灰原G区	15.0	6.5	4.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
263	碗	19e	灰原G区	(13.8)	7.2	4.8	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	2	
264	碗	19e	灰原G区	(14.5)	7.2	4.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
265	碗	19e	灰原G区	(14.4)	6.8	5.2	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
266	碗	19e	灰原G区	(15.3)	7.5	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
267	碗	19e	灰原G区	(16.0)	7.8	5.0	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
268	碗	19e	灰原G区	(15.0)	7.5	5.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	2	
269	碗	19e	灰原G区	(15.0)	6.8	4.8	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
270	碗	19e	灰原G区	(15.0)	7.5	4.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	2	
271	碗	19e	灰原G区	16.0	(8.2)	5.0	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
272	碗	19e	灰原G区	14.6	6.5	5.0	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
273	碗	19e	灰原G区	(14.2)	6.2	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
274	碗	19e	灰原G区	(15.0)	7.5	5.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
275	碗	19e	灰原G区	(15.0)	6.5	5.6	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
276	碗	19e	灰原G区南側ベルト 1.2号溝灰原	(15.0)	7.0	5.0	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
277	碗	18e	灰原H区	(15.0)	7.5	5.3	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
278	碗	18e	灰原H区南側ベルト下層、1.2号溝灰原	17.0	8.5	5.1	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	完形
279	碗	18e	灰原H区南側ベルト 下層	(16.5)	7.3	5.4	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	4	
280	碗	18e	灰原H区南側ベルト 下層	(15.7)	7.3	5.2	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
281	碗	18e	灰原H区南側ベルト 下層	(17.0)	8.0	5.4	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	4	歪み有り
282	碗	18e	灰原I区	(16.0)	7.5	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	4	完形
283	碗	18e	灰原I区	(15.7)	8.0	5.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	完形
284	碗	18e	灰原I区	(16.7)	8.5	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
285	碗	18e	灰原I区	(17.4)	7.7	5.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	ほぼ完形
286	碗	18e	灰原I区	(16.3)	7.0	4.8	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	4	ほぼ完形
287	碗	18e	灰原I区	(15.6)	7.7	5.0	-	もみ・砂ラ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
288	碗	18e	灰原I区	(17.6)	7.5	5.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	

第21表　碗類観察表〔その4〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm·g)				高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
289	碗	18e	灰原I区	(16.0)	8.0	5.3	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
290	碗	18e	灰原I区	(16.8)	8.8	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
291	碗	18e	灰原I区	(16.0)	7.5	5.0	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
292	碗	18e	灰原I区	(16.0)	8.5	4.5	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
293	碗	18e	灰原I区	(16.7)	7.8	5.6	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
294	碗	18e	灰原I区	(15.8)	7.5	5.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
295	碗	18e	灰原I区	(15.7)	7.7	5.0	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
296	碗	18e	灰原I区	(17.9)	8.8	5.2	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	7	
297	碗	18e	灰原I区	(16.0)	8.2	4.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
298	碗	18e	灰原I区	(17.0)	8.5	5.6	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	7	
299	碗	18e	灰原I区	(16.0)	7.2	5.3	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
300	碗	17e	灰原I区	(17.2)	9.2	5.5	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
301	碗	17e	灰原I区	(17.0)	8.5	5.4	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	7	
302	碗	17e	灰原I区	(16.9)	9.2	5.2	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	ほぼ完形
303	碗	17e	灰原I区	(17.0)	8.8	5.2	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
304	碗	17e	灰原I区	(16.0)	9.5	5.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	7	
305	碗	17e	灰原I区	(17.0)	8.8	5.3	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
306	碗	19e	灰原J区	(15.8)	7.7	5.7	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
307	碗	19e	灰原J区	(15.5)	7.5	5.1	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	2	
308	碗	19e	灰原J区	(15.0)	7.2	5.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	口縁部2/5残存
309	碗	18e	灰原K区	(16.0)	8.3	4.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
310	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(16.6)	8.8	5.4	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
311	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(16.4)	7.2	4.3	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
312	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(16.2)	8.5	4.9	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
313	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(16.0)	8.0	5.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
314	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(16.4)	8.8	5.3	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
315	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(16.6)	8.6	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	ほぼ完形
316	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(16.5)	7.7	5.0	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
317	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(16.0)	8.2	5.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
318	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(17.0)	7.5	5.5	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
319	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(15.5)	8.0	5.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
320	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(17.0)	7.5	4.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
321	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(16.4)	8.8	5.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
322	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(17.0)	8.2	5.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
323	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(17.0)	7.9	5.4	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
324	碗	18e	灰原K区南側ベルト	(17.0)	8.0	5.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
325	碗	18e	灰原K区南側ベルト下層	(16.0)	8.0	4.8	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
326	碗	18e	灰原K区南側ベルト下層	(17.0)	8.0	5.5	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
327	碗	18e	灰原L区	(17.0)	8.8	5.1	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
328	碗	18e	灰原L区	(16.7)	7.5	5.6	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
329	碗	18e	灰原L区	(17.3)	8.2	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
330	碗	18e	灰原L区	(16.2)	8.1	5.0	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	4	
331	碗	18e	灰原L区	(16.0)	8.0	5.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
332	碗	18e	灰原L区	(17.0)	8.5	5.2	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
333	碗	18e	灰原L区	(17.7)	8.8	4.7	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	7	ほぼ完形
334	碗	18e	灰原L区	(17.8)	8.7	4.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
335	碗	18e	灰原L区	(16.0)	8.6	4.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	1	
336	碗	18e	灰原L区	(16.8)	7.3	5.0	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
337	碗	18e	灰原L区	(17.0)	9.1	5.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	4	
338	碗	18e	灰原L区	(16.0)	8.2	5.2	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
339	碗	18e	灰原L区	(17.0)	7.0	5.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
340	碗	18e	灰原L区	(17.0)	8.5	4.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	3	口縁部に指痕
341	碗	18e	灰原L区	(16.0)	8.3	5.0	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
342	碗	18e	灰原L区	(16.6)	7.0	4.5	-	不明	不明	指ナデ	-	C	4	
343	碗	18e	灰原L区	(17.0)	9.2	5.4	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
344	碗	18e	灰原L区	(16.2)	7.4	5.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
345	碗	18e	灰原L区東側ベルト	(16.9)	8.0	5.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
346	碗	18e	灰原L区東側ベルト	(16.8)	7.5	5.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
347	碗	18e	灰原L区東側ベルト	(16.3)	7.7	4.6	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
348	碗	18e	灰原L区東側ベルト	(17.0)	8.0	5.0	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	7	
349	碗	18e	灰原L区東側ベルト	(17.2)	7.2	5.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	ほぼ完形
350	碗	18e	灰原L区東側ベルト	(16.5)	7.6	5.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
351	碗	18e	灰原L区東側ベルト	(16.5)	7.3	5.2	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
352	碗	18e	灰原L区東側ベルト	(16.3)	8.0	5.2	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
353	碗	18e	灰原L区東側ベルト	(15.8)	7.8	5.2	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
354	碗	17e	灰原L区	(17.6)	9.0	5.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
355	碗	17e	灰原L区	(16.6)	8.8	5.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	E	1	
356	碗	17e	灰原L区	(17.8)	8.5	5.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
357	碗	17e	灰原L区	(16.7)	8.5	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
358	碗	17e	灰原L区南側ベルト3・4号窯灰原	(16.3)	8.5	4.9	-	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
359	碗	17e	灰原L区	(17.0)	8.7	5.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
360	碗	17e	灰原L区	(16.0)	9.6	4.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	E	4	

第22表　碗類観察表〔その5〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm・g)				高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
361	碗	18e	灰原N区東側ベルト灰原下層1・2号窯灰	(16.8)	7.8	4.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
362	碗	18e	灰原O区	(16.2)	7.4	5.4	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	E	4	
363	碗	18e	灰原O区東側ベルト	(17.6)	7.8	5.1	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
364	碗	18e	灰原O区東側ベルト	(17.5)	9.0	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
365	碗	18e	灰原O区東側ベルト	(16.6)	8.0	5.2	-	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
366	碗	18e	灰原O区東側ベルト	(16.9)	7.8	5.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
367	碗	18e	灰原O区東側ベルト	(16.2)	7.9	5.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
368	碗	18e	灰原O区東側ベルト	(17.0)	8.2	5.3	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	E	4	
369	碗	18e	灰原O区東側ベルト	(17.8)	8.1	4.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
370	碗	17d	灰原O区	(17.2)	9.8	4.8	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
371	碗	17d	灰原O区	(16.5)	8.0	3.9	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	ゆがみ 高台部1/2欠如
372	碗	17d	灰原O区	(18.2)	8.5	5.0	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	ほぼ完形
373	碗	17d	灰原O区	(17.5)	9.4	5.5	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	E	4	
374	碗	18c	灰原P区	(15.7)	8.0	5.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
375	碗	19c	灰原P区	(14.4)	7.8	5.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	口縁部3/5残存
376	碗	20c	灰原P区	(15.3)	7.2	5.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
377	碗	18d	灰原Q区	(15.8)	7.2	4.9	-	もみ	糸切り後板ナデ	指ナデ	-	B	1	
378	碗	18d	灰原Q区	(14.5)	7.5	5.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	2	
379	碗	18d	灰原Q区	(16.6)	8.5	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
380	碗	18d	灰原Q区	(15.5)	7.3	5.0	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
381	碗	18d	灰原Q区南側ベルト3・4号窯灰原	(16.4)	7.8	5.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
382	碗	18d	灰原R区	(15.0)	7.4	5.4	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	2	
383	碗	19f	灰原AA区	(16.0)	7.6	4.7	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
384	碗	19g	灰原AA区	(17.5)	8.5	4.5	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
385	碗	19g	灰原AA区	(16.6)	7.5	5.6	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
386	碗	19g	灰原AA区	(17.0)	8.2	5.1	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
387	碗	19g	灰原AA区	(16.6)	8.6	4.6	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
388	碗	19g	灰原AA区	(15.8)	7.1	5.2	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	3	
389	碗	19f	灰原AA区	(17.3)	8.6	5.2	-	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
390	碗	19f	灰原AA区	(15.4)	7.5	5.2	-	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
391	碗	19g	灰原AA区	(16.9)	8.9	5.1	-	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	ほぼ完形
392	碗	19g	灰原AA区	(15.6)	7.5	5.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
393	碗	18g	灰原AB区	(16.1)	7.7	5.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	4	
394	碗	18g	灰原AB区	(15.8)	7.7	4.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
395	碗	18g	灰原AB区	(17.0)	8.4	4.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
396	碗	19g	灰原AB区東側ベルト	(16.8)	8.3	4.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
397	碗	19g	灰原AB区東側ベルト	(16.0)	8.5	4.5	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
398	碗	18g	灰原AB区東側ベルト	(16.8)	8.0	5.2	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
399	碗	18g	灰原AC区	(16.8)	7.6	4.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	E	4	
400	碗	18g	灰原AC区	(17.4)	7.5	4.7	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
401	碗	18g	灰原AC区	(17.3)	7.5	4.6	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
402	碗	18g	灰原AC区	(18.0)	7.5	5.6	-	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
403	碗	18g	灰原AC区	(16.2)	8.5	5.8	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	4	歪み有り
404	碗	18g	灰原AC区	(16.1)	9.0	4.9	-	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
405	碗	18g	灰原AC区	(17.4)	8.0	5.3	-	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
406	碗	18g	灰原AC区	(16.6)	9.8	5.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
407	碗	18g	灰原AC区	(17.6)	7.8	5.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
408	碗	17f	灰原AC区	(16.8)	8.6	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	7	ほぼ完形
409	碗	18g	灰原BC区	(16.4)	8.2	5.2	-	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
410	碗	19g	灰原BB区	(17.2)	9.0	4.9	-	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	ほぼ完形
411	碗	19g	灰原BB区	(16.7)	8.5	5.2	-	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
412	碗	19g	灰原BB区	(17.4)	8.0	4.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
413	碗	19g	灰原BB区	(16.5)	8.8	4.8	-	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
414	碗	19g	灰原BB区	(16.8)	9.2	4.5	-	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	
415	碗	19g	灰原BB区	(16.2)	7.7	4.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
416	碗	19g	灰原BB区	(17.0)	7.8	4.7	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
417	碗	19g	灰原BB区	(16.7)	7.5	5.2	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
418	碗	18g	灰原BB区	(16.5)	9.1	5.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	A	4	高台部1/2欠損
419	碗	18g	灰原BB区	(17.0)	8.3	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
420	碗	18g	灰原BC区	(17.3)	8.0	4.2	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	4	
421	碗	18g	灰原BC区	(17.2)	8.0	5.2	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	4	
422	碗	18g	灰原BC区	(17.2)	8.0	4.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
423	碗	18g	灰原BC区	(16.8)	9.3	4.8	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
424	碗	18g	灰原BC区	(16.0)	8.2	5.0	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	
425	碗	18g	灰原BC区	(16.8)	7.8	5.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	E	3	
426	碗	19g	灰原BB区南側ベルト	(17.0)	8.3	4.8	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	4	
427	碗	18g	灰原BC区タンク下	(17.3)	8.5	5.0	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	3	
428	碗	18g	灰原BC区タンク下	(16.5)	8.4	5.4	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	B	1	
429	碗	17g	灰原BC区	(17.0)	8.0	5.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	1	
430	碗	19e	SK02	(14.0)	6.7	4.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	2	
431	碗	19f	SK03灰原AA区	(17.3)	8.0	5.0	-	もみ・砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	C	4	
432	碗	19f	SK03灰原AA区	(16.0)	7.8	5.5	-	砂?	糸切り後ナデ	指ナデ	-	D	3	

第23表　碗類観察表〔その6〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm/g)				高台底面	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量	付着痕			系統	体部	口縁端部	
433	椀	19f	SK03灰原AA区	(17.8)	8.4	4.5	－	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	－	B	1	
434	椀	19f	1号須床面下施設	(17.8)	9.4	4.8	－	もみ		指ナデ	－	A	4	ほぼ完形
435	椀	19d-20d	3号須床面下施設	(15.8)	7.0	5.4	－	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	－	B	2	生焼けっぽい
436	椀	19d-20d	3号須床面下施設	(15.3)	7.7	4.8	－	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	－	C	3	
437	椀	19d-20d	3号須床面下施設	(15.0)	6.2	5.3	－	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	－	D	3	
438	椀	19d-20d	3号須床面下施設	(15.7)	8.5	5.3	－	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	－	D	3	
439	椀	19d-20d	3号須床面下施設	(16.0)	7.3	5.8	－	もみ・砂？	糸切り後ナデ	指ナデ	－	C	3	
440	椀	18c	西側サブトレンチ	(15.8)	7.8	5.1	－	不明	糸きり	指ナデ	－	B	1	高台剥離
441	椀	17b		(16.7)	7.8	4.9	－	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	－	B	4	
442	椀	－	2･3号須中間北側灰原	(14.6)	7.0	5.0	－	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	－	D	3	
443	椀	－	2･3号須中間北側灰原	(15.0)	7.7	5.2	－	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	－	B	1	
1181	椀	18e	灰原H区	17.4	7.2	(6.2)	－	もみ・砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	－	B	2	
1183	椀	18e	灰原H区	－	(7.5)	(5.1)	－	もみ・砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	－	B	4	
1187	椀	18e	灰原K区南側ベルト	－	－	－	－	－	糸切り後指ナデ	指ナデ	－	B	1	
1190	椀	18e	灰原L区	－	－	－	－	－	糸切り	指ナデ	－	B	1	

第24表　碗類観察表〔その7〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm・g)				高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
444	皿	19f	1号窯E区ベルト	9.0	4.5	2.8	87.0	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	Ⅲ	E	4	
445	皿	19e	2号窯G区	8.2	5.0	2.0	72.0	-	糸切り	-	Ⅱ	A	2	完形
446	皿	20d	3号窯D区	8.7	4.4	2.2	77.0	砂	糸切り	-	Ⅱ	E	3	
447	皿	20d	3号窯C区	8.7	4.0	2.2	71.0	もみ	糸切り	-	Ⅱ	E	3	
448	皿	20d	3号窯C区	8.8	4.5	2.0	73.0	もみ	糸切り	-	Ⅱ	A	3	
449	皿	20d	3号窯C区	9.0	5.9	2.5	75.0	もみ・砂	糸切り	-	Ⅰ	D	5	
450	皿	20d	3号窯D区縦ベルト	8.3	4.5	2.0	79.0	もみ・砂	糸切り	-	Ⅱ	D	3	
451	皿	20d	3号窯D区縦ベルト	8.3	4.5	2.2	75.0	もみ・砂	糸切り	-	Ⅱ	D	3	
452	皿	19d	3号窯F区	8.7	4.3	2.2	77.0	もみ・砂	糸切り後ナデ	-	Ⅱ	E	3	
453	皿	19d	3号窯F区	8.2	4.3	1.8	69.0	もみ・砂	糸切り	-	Ⅱ	E	3	
454	皿	19d	3号窯E区	8.1	4.7	2.0	59.0	もみ・砂	糸切り後ナデ	-	Ⅱ	E	3	
455	皿	19d	3号窯東西セクションベルト	8.3	4.7	2.0	71.0	もみ・砂	糸切り後ナデか？	-	Ⅱ	E	3	
456	皿	19d	3号窯F区焚口ベルト	8.2	3.8	2.2	60.0	もみ・砂	糸切り後ナデ	-	Ⅱ	E	3	
457	皿	19d	3号窯F区焚口ベルト	8.8	5.7	2.2	78.0	-	糸切り後ナデ	-	Ⅰ	A	1	
458	皿	19d	3号窯焚口	8.3	5.3	1.8	85.0	-	糸切り	-	Ⅱ	A	1	
459	皿	19d	3号窯焚口	8.8	5.2	2.0	72.0	-	糸切り	-	Ⅰ	A	3	
460	皿	19d	3号窯E区	8.5	4.3	2.3	65.0	-	指ナデ	指ナデ	Ⅰ	A	3	
461	皿	19d	3号窯E区	8.5	4.6	2.5	69.0	もみ	糸切り	-	Ⅱ	D	3	
462	皿	19d	3号窯E区	8.4	4.5	2.1	65.0	もみ	糸切り	-	Ⅱ	C	3	
463	皿	19d	3号窯E区	8.2	5.6	1.7	62.0	もみ	糸切り	-	Ⅰ	A	4	
464	皿	19c	4号窯焚口ベルト	8.5	4.5	2.3	77.0	もみ	糸切り	-	Ⅱ	B	4	内面全釉
465	皿	19c	4号窯焚口ベルト	9.3	4.9	2.7	96.0	もみ	糸切り後指ナデ	-	Ⅲ	E	4	高台部指ナデ成形
466	皿	19c	4号窯E区	8.5	4.4	2.0	58.0	もみ	糸切り	-	Ⅱ	B	3	
467	皿	18d	4号窯溝	8.5	5.0	1.9	65.0	-	糸切り	-	Ⅰ	D	3	
468	皿	19f	灰原A区	9.0	5.5	2.8	80.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	
469	皿	19f	灰原A区	9.0	4.3	2.4	73.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
470	皿	19f	灰原A区	8.7	4.9	2.1	68.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	5	
471	皿	19f	灰原A区	8.1	3.7	2.1	66.0	-	糸切り	-	Ⅲ	E	3	内面全体に釉
472	皿	19f	灰原A区	8.8	4.3	2.8	76.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
473	皿	19f	灰原A区	8.3	4.8	2.6	78.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	5	内面降灰 高台成形
474	皿	19f	灰原A区	8.6	4.5	2.2	70.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	高台成形
475	皿	19f	灰原A区	9.5	4.8	2.9	78.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	高台成形
476	皿	19f	灰原A区	9.4	4.9	2.7	83.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	高台成形
477	皿	19f	灰原A区	8.8	4.8	2.4	71.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	6	
478	皿	19f	灰原A区	8.8	5.2	2.1	62.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	高台部と口縁部1/4欠損
479	皿	19f	灰原A区	9.0	3.8	3.1	78.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	高台部1/4欠損
480	皿	19f	灰原A区	9.3	5.6	2.8	94.0	砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	内面降灰 高台成形
481	皿	19f	灰原A区	9.2	6.4	2.5	102.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面降灰 高台成形
482	皿	19f	灰原A区	9.2	4.5	2.8	96.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	内面降灰 高台成形
483	皿	19f	灰原A区	9.2	5.0	2.6	89.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	3	高台成形
484	皿	19f	灰原A区	9.0	4.3	2.8	87.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	内面に離れ砂か？
485	皿	19f	灰原A区南側ベルト	8.2	4.3	2.1	74.0	もみ・砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全釉
486	皿	19f	灰原A区南側ベルト	8.9	5.4	2.6	67.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
487	皿	19f	灰原A区南側ベルト	9.0	4.8	2.8	89.0	もみ・小石	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	高台部1/4欠損
488	皿	19f	灰原A区南側ベルト	9.1	4.0	1.7	66.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	D	1	内面全体に釉
489	皿	19f	灰原A区南側ベルト	9.7	5.2	2.6	85.0	小石・砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	内面全釉
490	皿	19f	灰原A区南側ベルト	10.1	5.5	2.8	100.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	高台成形
491	皿	19f	灰原A区南側ベルト	8.5	4.3	2.2	54.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
492	皿	19f	灰原A区東側ベルト	8.8	4.8	2.4	71.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	高台成形
493	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.0	4.5	2.3	74.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	5	高台成形
494	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.2	4.2	2.7	76.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	5	内面降灰 高台成形
495	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.1	4.5	2.9	78.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	高台成形
496	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.1	4.8	2.8	84.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	高台成形
497	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.3	4.5	2.7	98.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	内面全釉
498	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.2	4.8	2.9	99.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	5	内面全釉
499	皿	19f	SK03	8.9	4.5	2.8	83.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	
500	皿	18f	灰原B区	9.8	5.2	2.8	66.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	内面全釉 高台部ヘラ削り
501	皿	18f	灰原B区	8.7	4.4	2.6	86.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	D	4	内面全釉 内面全体降灰
502	皿	18f	灰原B区	8.3	4.1	2.2	76.0	-	糸切り後指ナデ成形	指ナデ	Ⅱ	D	4	内面全釉 内面全体降灰
503	皿	18f	灰原B区	9.0	4.7	3.0	78.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
504	皿	18f	灰原B区	9.4	5.3	2.6	93.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
505	皿	18f	灰原B区	8.5	4.4	2.7	80.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	5	
506	皿	19f	灰原B区	9.6	5.2	2.8	103.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	
507	皿	19f	灰原B区	8.8	5.4	2.4	67.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	3	口縁1/5欠損
508	皿	18f	灰原B区	8.0	4.5	2.2	55.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	6	内面全釉
509	皿	18f	灰原B区東側ベルト1.2号窯灰原	9.7	4.5	2.4	101.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	5	内面に降灰
510	皿	18f	灰原B区東側ベルト1.2号窯灰原	9.3	4.6	3.0	93.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	D	1	口縁外面ヘラ削り
511	皿	18f	灰原C区	9.7	5.2	2.9	91.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	内面に降灰
512	皿	18f	灰原C区	10.0	4.5	2.8	104.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	D	4	内面全釉
513	皿	18f	灰原C区	8.7	5.6	2.9	92.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面に降灰
514	皿	18f	灰原C区	9.9	5.2	2.8	100.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	D	4	口縁部1/4欠損
515	皿	18f	灰原C区	8.6	4.8	2.7	62.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	E	3	高台部2/3欠損
516	皿	18f	灰原C区	8.8	4.7	3.1	77.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	口縁部1/5欠損
517	皿	18f	灰原C区	9.7	4.8	3.0	86.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	口縁部1/6欠損
518	皿	18f	灰原C区	9.7	5.3	2.9	86.0	もみ・小石	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	口縁部1/6欠損 内面降灰
519	皿	18f	灰原C区	9.5	5.2	2.6	90.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	内面離れ砂か？
520	皿	18f	灰原C区	9.5	4.6	2.2	84.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	5	口縁部1/4欠損
521	皿	18f	灰原C区	8.8	4.2	2.3	65.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	内面全釉
522	皿	18f	灰原C区	9.4	4.9	2.8	100.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	

第25表　皿類観察表〔その1〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm・g)				高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
523	皿	18f	灰原C区	9.2	5.1	2.9	98.0	小石	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
524	皿	18f	灰原C区	9.0	4.8	2.8	85.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
525	皿	18f	灰原C区	9.3	5.0	2.2	91.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	5	内面に降灰
526	皿	17f	灰原C区	8.7	4.7	2.2	85.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	内面全体に降灰
527	皿	17f	灰原C区	8.4	4.4	2.1	72.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
528	皿	19f	灰原D区東側ベルト	8.8	4.8	2.3	74.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	4	内面全釉 高台部1/2欠損
529	皿	19f	灰原D区南側ベルト1・2号窯灰原	8.5	5.2	2.6	67.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面に降灰
530	皿	18f	灰原F区	9.0	5.2	2.4	80.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	1	口縁部1/5欠損
531	皿	18f	灰原F区	9.0	5.0	2.8	86.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
532	皿	18f	灰原F区	8.8	4.9	2.7	93.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	1	
533	皿	17e	灰原F区	8.9	5.0	3.2	88.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	
534	皿	17e	灰原F区	9.6	5.4	3.0	94.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	5	
535	皿	17e	灰原F区	9.4	5.3	3.2	101.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
536	皿	18f	灰原F区	9.2	5.2	3.2	90.0	小石	糸切り後指ナデ	-	Ⅲ	D	4	
537	皿	18f	灰原F区	8.9	4.7	3.3	103.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	
538	皿	17f	灰原F区	9.3	4.5	3.0	91.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	
539	皿	18f	灰原F区	8.8	4.9	3.0	80.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	D	1	口縁1/4欠損
540	皿	18f	灰原F区西側ベルト	9.3	4.6	2.8	76.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	6	完形
541	皿	19e	灰原G区	8.8	4.7	2.2	68.0	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅰ	A	3	
542	皿	19e	灰原G区	8.1	4.6	2.5	57.0	-	糸切り	-	Ⅰ	A	3	
543	皿	19e	灰原G区	7.9	4.3	2.1	57.0	-	糸切り	-	Ⅰ	A	3	
544	皿	19e	灰原G区	8.3	4.3	2.2	52.0	-	糸切り後指ナデ	-	Ⅱ	D	3	
545	皿	19e	灰原G区	8.6	5.0	2.5	80.0	-	糸切り	-	Ⅱ	D	3	
546	皿	19e	灰原G区	8.4	4.9	2.3	67.0	-	糸切り	-	Ⅰ	D	3	口縁1/3欠損
547	皿	19e	灰原G区南側ベルト	9.7	5.0	3.1	100.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	完形
548	皿	18e	灰原H区	9.3	4.7	3.0	79.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
549	皿	18e	灰原H区	8.7	4.9	2.5	77.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
551	皿	18e	灰原G区南側ベルト	8.6	5.2	2.7	105.0	もみ・砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
552	皿	18e	灰原G区南側ベルト	9.3	4.7	3.3	137.0	砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	4	
554	皿	18e	灰原G区南側ベルト	8.5	4.7	3.0	85.0	もみ・砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
555	皿	18e	灰原I区	9.4	5.4	3.0	102.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	内部全体釉
556	皿	18e	灰原I区	8.5	4.7	3.2	91.0	砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	E	6	
558	皿	18e	灰原I区	9.2	5.0	2.3	87.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
559	皿	18e	灰原I区	8.7	4.8	2.3	89.0	-	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	3	口縁5/1欠損
560	皿	18e	灰原I区	9.0	5.2	2.5	109.0	もみ・砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	
561	皿	18e	灰原I区	8.6	4.8	3.8	95.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
562	皿	18e	灰原I区	8.3	4.6	2.6	89.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	5	
563	皿	18e	灰原I区	8.9	5.2	2.2	96.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	5	
564	皿	18e	灰原I区	8.9	5.7	2.8	101.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	3	
565	皿	18e	灰原I区	9.0	4.7	3.0	99.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
566	皿	18e	灰原I区	8.3	4.8	2.6	61.0	-	-	-	Ⅲ	C	3	
567	皿	18e	灰原I区	9.5	5.0	2.7	103.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	4	
568	皿	18e	灰原I区	9.2	4.7	3.1	84.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	
569	皿	18e	灰原I区	9.0	5.1	2.9	78.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	
570	皿	18e	灰原I区	8.8	4.5	2.4	71.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
571	皿	-	-	9.0	4.8	3.3	102.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
572	皿	18e	灰原I区	8.8	5.0	2.9	98.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
573	皿	18e	灰原I区	8.8	5.0	3.0	110.0	砂	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	3	
574	皿	18e	灰原I区	8.4	5.1	3.1	80.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	1	
575	皿	18e	灰原I区	9.3	5.3	2.7	88.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	5	完形
576	皿	18e	灰原I区	9.2	5.1	3.1	99.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	6	
577	皿	18e	灰原I区	8.6	4.8	3.2	84.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	完形
578	皿	18e	灰原I区	9.3	5.3	3.0	92.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	3	
579	皿	17e	灰原I区	9.6	5.3	3.0	94.0	砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	6	
580	皿	17e	灰原I区	9.0	5.0	3.0	81.0	もみ・小石	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅱ	B	3	
581	皿	17e	灰原I区	9.2	5.3	2.9	99.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	
582	皿	17e	灰原I区	9.3	5.1	3.1	93.0	小石	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	3	
583	皿	17e	灰原I区	9.4	5.3	3.1	99.0	小石	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	6	
584	皿	17e	灰原I区	9.2	5.0	2.7	93.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
585	皿	17e	灰原I区	9.3	4.7	3.0	88.0	もみ・小石	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
586	皿	17e	灰原I区	9.3	5.2	2.7	91.0	もみ・小石	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
587	皿	17e	灰原I区	9.2	5.1	3.1	105.0	砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
588	皿	17e	灰原I区	9.1	5.0	2.8	87.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	1	
589	皿	19E	灰原J区	8.4	5.2	2.2	64.0	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅰ	A	1	
590	皿	19E	灰原J区	8.4	5.0	2.4	76.0	小石	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	1	
591	皿	18e	灰原J区	8.4	4.6	2.2	68.0	もみ・小石	糸切り	指ナデ	Ⅱ	C	1	
592	皿	19E	灰原J区	8.2	5.0	2.5	70.0	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅰ	A	1	
593	皿	18e	灰原K区	8.2	4.5	2.5	65.0	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅰ	A	1	
594	皿	18e	灰原K区	8.9	5.0	2.6	96.0	不明	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	5	
595	皿	18e	灰原K区	9.2	5.3	2.3	76.0	小石	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
596	皿	18e	灰原K区	9.5	5.5	2.6	88.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	5	
597	皿	18e	灰原K区	8.9	5.4	2.6	106.0	もみ・小石	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	A	1	
598	皿	18e	灰原K区南側ベルト	9.4	4.8	3.4	96.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	1	
599	皿	18e	灰原K区南側ベルト	9.4	4.6	2.8	87.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
600	皿	18e	灰原K区南側ベルト	9.3	5.1	3.0	89.0	小石	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	6	
601	皿	18e	灰原K区南側ベルト	9.5	5.8	2.7	97.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
602	皿	18e	灰原K区南側ベルト	8.7	5.1	3.0	85.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅱ	C	1	
603	皿	18e	灰原K区南側ベルト	8.7	5.2	2.7	97.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	1	
604	皿	18e	灰原K区南側ベルト	9.6	5.3	2.5	101.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	D	6	

第 26 表　皿類観察表〔その 2〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm・g)				高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
605	皿	18e	灰釉K区廃棄ベルト	8.7	5.2	2.7	91.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅱ	C	1	
606	皿	18e	灰釉K区廃棄ベルト	8.3	5.1	2.8	88.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅱ	C	3	
607	皿	18e	灰釉K区廃棄ベルト	9.0	5.0	2.8	118.0	-	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面全釉
608	皿	18e	灰釉K区廃棄ベルト	8.3	4.5	3.3	88.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	5	
609	皿	18e	灰釉K区廃棄ベルト	8.5	5.2	3.0	90.0	砂	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	1	
610	皿	18e	灰釉K区廃棄ベルト	8.6	5.3	2.6	87.0	砂	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	3	
611	皿	18e	灰釉K区廃棄ベルト	8.7	4.4	2.5	85.0	もみ・小石	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	6	
612	皿	18e	灰釉L区	8.8	5.0	2.7	94.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	
613	皿	18e	灰釉L区	8.3	5.0	3.1	100.0	小石・砂	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	1	
614	皿	18e	灰釉L区	8.5	5.1	3.0	93.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅱ	B	1	
615	皿	18e	灰釉L区	9.3	4.8	3.1	117.0	もみ・砂	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	1	
616	皿	18e	灰釉L区	9.2	5.0	2.8	99.0	砂	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	1	
617	皿	18e	灰釉L区	9.2	4.6	2.7	90.0	小石	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
618	皿	18e	灰釉L区	8.8	5.0	2.8	94.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	1	
619	皿	18e	灰釉L区	8.3	4.8	2.8	90.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	1	
620	皿	18e	灰釉L区	9.3	4.0	2.7	73.0	-	糸切後高台成形	-	Ⅱ	E	1	
621	皿	18e	灰釉L区	9.0	5.0	2.8	87.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅱ	C	4	
622	皿	18e	灰釉L区	8.8	4.8	3.0	76.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	E	1	
623	皿	18e	灰釉L区	8.8	4.9	2.9	81.0	小石	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	3	
624	皿	18e	灰釉L区	9.7	5.4	2.3	121.0	もみ・小石	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	1	高台の2/3欠落 内面全釉
625	皿	18e	灰釉L区	9.5	5.0	2.8	90.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	
626	皿	18e	灰釉L区	9.6	5.7	3.0	111.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅱ	E	4	
627	皿	18e	灰釉L区	9.3	5.0	3.0	99.0	-	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	1	高台際に流線3本有り
628	皿	18e	灰釉L区	8.9	4.7	2.9	101.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	1	
629	皿	18e	灰釉L区	9.5	4.5	3.1	97.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
630	皿	18e	灰釉L区	8.8	5.3	2.8	83.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅱ	C	1	
631	皿	18e	灰釉L区	8.8	4.8	2.8	87.0	もみ・小石	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	D	3	
632	皿	18e	灰釉L区	9.0	5.0	2.6	84.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	1	
633	皿	18e	灰釉L区	8.8	5.0	3.0	89.0	-	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	3	
634	皿	18e	灰釉L区	8.5	4.8	2.7	84.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
635	皿	18e	灰釉L区	9.2	5.2	2.7	91.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	口縁1/3欠損
636	皿	18e	灰釉L区	8.5	4.7	2.8	89.0	もみ・小石	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	1	
637	皿	18e	灰釉L区廃棄ベルト	9.5	4.7	2.9	113.0	小石	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	1	
638	皿	18e	灰釉L区廃棄ベルト	8.5	4.4	2.8	69.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	3	
639	皿	18e	灰釉L区廃棄ベルト	8.4	4.8	2.6	87.0	砂	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	1	
640	皿	18e	灰釉L区廃棄ベルト	8.8	4.9	2.7	92.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	3	
641	皿	18e	灰釉L区廃棄ベルト	9.0	5.2	2.9	97.0	-	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
642	皿	18e	灰釉L区廃棄ベルト	8.8	4.5	2.7	79.0	小石	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
643	皿	17d	灰釉L区	9.1	5.0	2.8	87.0	もみ・小石	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	3	
644	皿	17d	灰釉L区	9.2	4.9	2.9	79.0	-	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	6	
645	皿	17d	灰釉L区	9.1	5.0	2.7	91.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	D	1	
646	皿	17e	灰釉L区	9.3	5.0	2.8	90.0	-	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	1	
647	皿	17e	灰釉L区	9.6	5.9	3.2	102.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	D	1	
648	皿	17e	灰釉L区	9.5	5.0	2.6	94.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
649	皿	17e	灰釉L区	9.9	5.3	2.8	101.0	もみ・砂	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	6	口縁外面～7分間横
650	皿	17e	灰釉L区	8.8	5.0	2.5	85.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	3	
651	皿	17e	灰釉L区	8.9	5.2	2.6	79.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅱ	B	1	
652	皿	17e	灰釉L区	9.0	5.0	2.4	86.0	もみ・小石	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	内面全釉
653	皿	17e	灰釉L区	9.8	4.8	2.5	90.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	6	
654	皿	17e	灰釉L区	9.5	5.4	2.8	103.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	
655	皿	18e	灰釉L区廃棄ベルト	8.8	5.5	2.9	105.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	3	
656	皿	18e	灰釉L区廃棄ベルト	8.6	5.2	2.6	93.0	-	糸切後高台成形	-	Ⅱ	D	1	
657	皿	18e	灰釉L区廃棄ベルト	8.7	4.6	2.4	87.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	6	
658	皿	18e	灰釉L区廃棄ベルト	8.8	5.0	2.8	91.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	3	
659	皿	18d	灰釉N区	9.7	5.2	2.8	106.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	6	
660	皿	18d	灰釉O区	8.7	5.2	2.7	89.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	1	
661	皿	18d	灰釉O区	9.0	4.2	2.7	85.0	-	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	5	
662	皿	18e	灰釉O区	9.0	5.2	2.7	79.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
663	皿	18d	灰釉O区	9.3	4.8	2.7	91.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
664	皿	18d	灰釉O区	9.2	4.7	2.7	86.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	3	
665	皿	18d	灰釉O区	8.8	4.9	2.5	70.0	-	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
666	皿	18e	灰釉O区	8.8	4.8	2.6	96.0	-	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	1	
667	皿	18e	灰釉O区東側ベルト	9.2	4.4	2.7	93.0	もみ	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
668	皿	18e	灰釉O区東側ベルト	8.4	4.6	3.2	81.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	1	
669	皿	18e	灰釉O区東側ベルト	9.0	3.8	2.5	91.0	-	糸切9	-	Ⅱ	B	1	
670	皿	17d	灰釉O区	8.8	5.2	2.9	102.0	もみ・小石	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	3	
671	皿	17d	灰釉O区	9.0	5.0	3.3	93.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	5	
672	皿	17d	灰釉O区	8.5	5.3	2.5	86.0	-	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅱ	D	1	
673	皿	17d	灰釉O区	8.2	4.2	2.2	73.0	もみ	糸切9	-	Ⅱ	D	2	内面全釉
674	皿	17d	灰釉O区	8.6	5.5	2.0	69.0	-	糸切9	指ナデ	Ⅰ	C	3	
675	皿	17d	灰釉O区	8.8	5.0	2.8	104.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅱ	B	3	
676	皿	17d	灰釉O区	9.1	4.9	3.0	95.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	1	
677	皿	17d	灰釉O区	9.4	5.0	2.7	95.0	-	糸切後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
678	皿	17d	灰釉O区	9.3	5.4	3.0	101.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	4	
679	皿	17d	灰釉O区	8.8	5.0	3.0	95.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅱ	B	3	
680	皿	17d	灰釉O区	9.3	5.2	2.9	104.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	1	
681	皿	18c	灰釉P区	8.2	4.8	2.5	73.0	もみ	糸切9	指ナデ	Ⅰ	A	3	歪み有り
682	皿	18c	灰釉P区	8.5	5.0	2.2	71.0	小石	糸切9	指ナデ	Ⅰ	A	3	
683	皿	18d	灰釉P区	8.9	5.2	3.0	89.0	もみ	糸切後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	6	

第27表　皿類観察表〔その3〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm・g)				高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
684	皿	19f	灰原AA区	9.0	4.4	2.9	106.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	3	歪み有り
685	皿	19f	灰原AA区	9.5	5.2	2.3	86.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	3	
686	皿	19f	灰原AA区	8.3	4.3	2.8	72.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	5	
687	皿	19f	灰原AA区	9.2	5.3	2.7	82.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	
688	皿	19f	灰原AA区	9.0	4.2	3.0	79.0	砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
689	皿	19g	灰原AA区	8.8	4.0	2.8	93.0	-	糸切り	-	Ⅱ	B	2	
690	皿	19g	灰原AA区	9.0	5.0	2.5	81.0	-	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	2	
691	皿	19g	灰原AA区	8.8	4.8	3.0	93.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	3	
692	皿	19g	灰原AA区	9.5	5.0	2.8	98.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
693	皿	19g	灰原AA区	8.5	4.5	2.7	84.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
694	皿	19g	灰原AA区	8.8	4.5	2.8	105.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	4	
695	皿	19g	灰原AA区	9.7	4.8	2.9	81.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	5	歪み有り
696	皿	19g	灰原AA区	9.1	4.3	3.0	79.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	5	
697	皿	19g	灰原AA区	8.9	4.7	2.6	89.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	1	
698	皿	19g	灰原AA区	9.5	5.8	3.0	100.0	砂	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	3	歪み有り
699	皿	19f	灰原AA区	8.8	4.1	2.7	68.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	4	
700	皿	19g	灰原AA区南側ベルト	8.8	5.0	2.6	75.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	1	
701	皿	19g	灰原AA区南側ベルト	9.3	5.1	2.6	79.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	4	
702	皿	19g	灰原AB区	9.0	5.1	3.0	89.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	4	歪み有り
703	皿	19g	灰原AB区	10.0	5.3	3.3	99.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	歪み有り
704	皿	18g	灰原AB区	9.2	4.9	2.7	80.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	
705	皿	18g	灰原AB区	8.7	5.0	3.0	97.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	4	
706	皿	18g	灰原AB区	8.7	4.3	2.5	82.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
707	皿	18g	灰原AB区	9.7	5.3	2.6	77.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	歪み有り
708	皿	18g	灰原AB区	9.2	5.1	2.3	74.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
709	皿	19g	灰原AB区	9.1	5.4	2.7	83.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
710	皿	19g	灰原AB区	8.7	4.6	2.3	75.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
711	皿	19g	灰原AB区	9.8	5.2	2.8	102.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	3	
712	皿	19g	灰原AB区	9.8	5.3	2.8	88.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	4	口縁1/4欠損
713	皿	18g	灰原AB区東側ベルト	8.2	5.3	3.0	105.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	5	
714	皿	18g	灰原AB区東側ベルト	9.7	5.3	2.8	99.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	4	
715	皿	19g	灰原AB区	9.6	5.3	2.8	91.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	D	4	内側に沈線1本有り
716	皿	18g	灰原AB区東側ベルト	8.8	4.3	2.7	75.0	-	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	3	
717	皿	19g	灰原AB区東側ベルト	8.8	4.3	2.5	73.0	もみ・砂	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	5	
718	皿	19g	灰原AB区南側ベルト	9.2	5.1	2.5	87.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	3	
719	皿	18g	灰原AC区	8.5	5.2	3.0	75.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	4	
720	皿	18g	灰原AC区	8.7	4.6	3.0	76.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	口縁1/4欠損
721	皿	18g	灰原AC区	9.4	4.5	2.9	91.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	3	
722	皿	18g	灰原AC区	9.0	4.8	2.6	71.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	4	
723	皿	18g	灰原AC区	8.9	5.0	2.8	86.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	5	
724	皿	18g	灰原AC区	8.8	4.5	2.9	68.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	D	4	
725	皿	18g	灰原AC区	9.5	4.7	2.7	87.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	4	
726	皿	18g	灰原AC区	9.4	4.7	2.9	102.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	
727	皿	18g	灰原AC区	10.4	5.0	2.8	99.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
728	皿	18g	灰原AC区	8.8	5.3	2.5	77.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	1	
729	皿	18g	灰原AC区	9.1	4.6	2.6	80.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	3	
730	皿	18g	灰原AC区	8.9	4.7	2.5	72.0	もみ・小石	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	5	
731	皿	18g	灰原AC区	8.7	4.8	2.8	68.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	3	
732	皿	17f	灰原AC区	9.3	4.8	2.9	100.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	4	
733	皿	17f	灰原AC区	8.4	5.1	2.7	85.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	3	
734	皿	17f	灰原AC区	9.3	4.7	2.6	80.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	5	
735	皿	18g	灰原AC区	9.2	4.2	3.3	91.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
736	皿	18g	灰原AC区	9.3	4.9	2.7	93.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	2	
737	皿	18g	灰原AC区	8.5	4.7	2.5	74.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	6	
738	皿	19g	灰原BA区南側ベルト	9.0	4.7	2.8	90.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
739	皿	19g	灰原BB区	9.3	5.0	2.5	97.0	-	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	D	1	
740	皿	19g	灰原BB区	8.7	5.0	3.0	73.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	3	
741	皿	19g	灰原BB区	9.0	4.7	3.0	82.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	3	
742	皿	19g	灰原BB区	8.9	5.0	3.0	93.0	もみ	糸切り後指ナデ	-	Ⅲ	C	4	
743	皿	19g	灰原BB区	8.8	4.7	2.8	89.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
744	皿	19g	灰原BB区	8.5	4.8	2.5	85.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	5	
745	皿	19g	灰原BB区	9.0	4.5	2.7	77.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	1	
746	皿	19g	灰原BB区	9.5	5.3	3.1	110.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	A	3	口縁1/4欠損
747	皿	18g	灰原BB区	9.8	5.3	3.2	125.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	4	
748	皿	18g	灰原BC区	8.5	4.7	2.9	89.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	1	
749	皿	18g	灰原BC区	9.0	4.8	2.7	90.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	A	3	
750	皿	18g	灰原BC区	9.3	4.8	2.7	86.0	-	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	4	
751	皿	18g	灰原BC区	9.2	4.8	2.8	88.0	もみ	糸切り後高台成形後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	
752	皿	18g	灰原BC区	8.5	4.5	2.5	78.0	もみ	糸切り後高台成形後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	6	
753	皿	19g	灰原BB区南側ベルト	8.6	4.3	3.2	96.0	もみ	糸切り後高台成形後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	5	
754	皿	18g	灰原BC区	9.0	5.0	2.6	100.0	もみ	糸切り後高台成形後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	4	
755	皿	18g	灰原BC区	8.5	4.6	2.8	99.0	もみ	糸切り後高台成形後指ナデ	-	Ⅲ	B	6	
756	皿	18g	灰原BC区	9.0	5.1	2.6	85.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	C	3	
757	皿	18g	灰原BC区	8.8	4.7	2.7	89.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	3	
758	皿	18g	灰原BC区	10.1	5.1	3.1	108.0	もみ	糸切り後高台成形後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	
759	皿	18g	灰原BC区	8.5	5.2	2.7	99.0	もみ	糸切り後高台成形後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	3	
760	皿	18g	灰原BC区	8.7	4.8	2.9	88.0	もみ	糸切り後高台成形後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
761	皿	18g	灰原BC区	9.3	4.6	2.8	89.0	もみ	糸切り後高台成形後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
762	皿	18g	灰原BC区	8.9	4.5	2.6	81.0	もみ	糸切り後高台成形後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	5	

第28表　皿類観察表〔その4〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm・g)				高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
763	皿	18g	灰原BC区	8.8	4.0	3.0	73.0	もみ	糸切り後高台成形後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	3	
764	皿	18g	灰原BC区	9.5	5.2	2.6	93.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	D	4	
765	皿	18g	灰原BC区	8.7	5.0	2.5	84.0	もみ	糸切り後高台成形後指ナデ	指ナデ	Ⅱ	E	4	
766	皿	18g	灰原BC区	8.9	5.8	2.4	73.0	-	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	1	
767	皿	18g	灰原BC区	8.8	4.9	2.9	105.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅱ	D	3	
768	皿	18g	灰原BC区	8.8	4.7	2.7	71.0	砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
769	皿	18g	灰原BC区	8.6	4.0	2.5	82.0	砂	糸切り	-	Ⅱ	B	1	
770	皿	18g	灰原BC区	8.7	4.9	3.0	89.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	
771	皿	18g	灰原BC区	9.0	4.7	3.0	103.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	
772	皿	18g	灰原BC区	8.8	4.7	3.1	89.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	E	5	
773	皿	18g	灰原BC区	8.3	5.0	3.0	88.0	-	糸切り後高台成形	指ナデ	Ⅲ	B	1	
774	皿	18g	灰原BC区	8.8	4.5	2.6	89.0	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
775	皿	18g	灰原BC区	8.2	5.5	2.6	83.0	砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	5	
776	皿	18g	灰原BC区	9.0	5.0	2.8	78.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	
777	皿	17g	灰原BC区	7.8	4.8	2.5	78.0	もみ・砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	歪み有り
778	皿	18g	灰原BC区	8.9	4.2	2.8	95.0	もみ	糸切り	-	Ⅱ	B	1	
779	皿	19E	SK02	9.2	4.7	2.2	75.0	-	糸切り	-	Ⅱ	A	5	
780	皿	20c	西側サブトレンチ	8.4	4.8	2.0	74.0	-	糸切り	-	Ⅱ	A	2	
781	皿	18c	西側サブトレンチ	8.6	5.0	2.0	75.0	-	糸切り	-	Ⅱ	A	2	口縁1/4欠損
782	皿	19f	1号窯J区焚口	9.5	4.5	2.7	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅲ	C	1	高台部3/4欠損
783	皿	19f	1号窯I区ベルト焚口	9.5	4.9	2.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面降灰
784	皿	19f	1号窯I区ベルト焚口	(9.4)	4.7	2.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	口縁部1/3
785	皿	19d	3号窯F区	8.7	5.4	2.1	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅰ	A	3	
786	皿	19d	3号窯F区	8.5	5.1	2.5	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	1	
787	皿	19d	3号窯E区	8.8	5.0	2.2	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	3	
788	皿	19d	3号窯E区	8.3	4.0	1.9	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	E	2	
789	皿	19d	3号窯E区	8.7	4.6	1.8	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	4	
790	皿	19d	3号窯東西セクションベルト	8.8	4.3	2.3	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	C	3	
791	皿	19d	3号窯東西セクションベルト	8.7	4.5	2.5	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	3	
792	皿	19d	3号窯東西セクションベルト	8.8	4.4	1.9	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	4	
793	皿	19d	3号窯G区縦ベルト	8.4	4.2	2.4	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	2	
794	皿	19d	3号窯G区縦ベルト	8.8	4.2	2.3	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅰ	B	2	
795	皿	19d	3号窯E区	8.3	5.2	1.9	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	1	全体に厚手
796	皿	20c	4号窯D区	8.7	5.0	2.4	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	3	
797	皿	19f	灰原A区	8.7	4.7	2.8	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	E	6	
798	皿	19f	灰原A区	9.6	5.0	2.6	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	
799	皿	19f	灰原A区	9.2	4.2	2.6	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	高台部1/2欠損　内面降灰
800	皿	19f	灰原A区	8.8	4.7	3.4	-	もみ・砂	-	指ナデ	Ⅲ	B	3	完形　内面降灰
801	皿	19f	灰原A区	9.9	4.7	2.7	-	砂	-	指ナデ	Ⅲ	E	3	完形　内面降灰
802	皿	19f	灰原A区	9.0	5.3	2.3	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全体に降灰
803	皿	19f	灰原A区	8.2	4.1	2.2	-	もみ	糸切り後ナデ	不明	Ⅲ	B	4	内面全体に釉
804	皿	19f	灰原A区	10.1	5.5	2.5	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
805	皿	19f	灰原A区	9.7	5.5	3.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
806	皿	19f	灰原A区	9.2	5.0	2.4	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面に降灰
807	皿	19f	灰原A区	9.7	5.5	3.5	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
808	皿	19f	灰原A区	9.2	4.8	2.8	-	もみ	-	指ナデ	Ⅱ	E	3	
809	皿	19f	灰原A区	9.1	5.5	2.4	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
810	皿	19f	灰原A区	(9.0)	5.0	2.3	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	4	
811	皿	19f	灰原A区	(9.0)	(4.8)	2.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	口縁部3/5　底部4/5残存
812	皿	19f	灰原A区	9.9	5.2	3.0	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
813	皿	19f	灰原A区南側ベルト	8.4	4.5	2.4	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
814	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.3	5.6	3.0	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
815	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.1	4.5	2.3	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	3	
816	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.4	5.2	2.8	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
817	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.0	4.9	2.7	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	C	3	
818	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.4	5.0	2.8	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	3	内面に降灰
819	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.8	4.8	3.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	1	
820	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.0	4.8	3.0	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
821	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.2	4.5	2.8	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
822	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.2	5.0	2.9	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	3	
823	皿	19f	灰原A区東側ベルト	8.8	4.8	2.7	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	1	
824	皿	19f	灰原A区東側ベルト	9.0	4.9	3.2	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	3	
825	皿	19f	SK03	9.0	3.7	3.2	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	1	
826	皿	19f	SK03	8.8	5.0	2.6	-	もみ	-	指ナデ	Ⅲ	B	2	
827	皿	19f	SK03	8.5	4.8	3.0	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	3	
828	皿	18f	灰原B区	8.5	4.0	2.9	-	不明	-	不明	Ⅲ	B	4	
829	皿	18f	灰原B区	9.1	4.8	2.6	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
830	皿	18f	灰原B区	9.4	5.2	2.5	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	6	
831	皿	18f	灰原B区	(10.0)	5.7	3.1	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面降灰
832	皿	18f	灰原B区	8.8	4.8	2.1	-	砂	糸切り後ナデ	不明	Ⅲ	B	4	内面全釉
833	皿	18f	灰原B区	7.7	4.7	2.6	-	砂	糸切り後ナデ	不明	Ⅲ	B	4	内面全釉
834	皿	18f	灰原B区	9.1	5.0	2.6	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
835	皿	19f	灰原B区	9.2	5.0	3.4	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	
836	皿	19f	灰原B区	9.4	4.8	3.2	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	
837	皿	19f	灰原B区	9.4	4.5	2.8	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	高台部2/3欠損
838	皿	19f	灰原B区	9.2	4.3	2.8	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	
839	皿	19f	灰原B区	(7.8)	4.0	2.2	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	C	6	
840	皿	18f	灰原B区	9.0	4.8	2.4	-	不明	-	指ナデ	Ⅲ	E	3	
841	皿	19f	灰原B区東側ベルト	9.7	5.0	2.4	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	

第29表　皿類観察表〔その5〕

遺物番号	層種	G名	出土位置	法量(cm・g)				高台底面	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量	付着痕			系統	体部	口縁端部	
842	黒	19F	灰黒D区東側ベルト	9.8	5.8	3.4	-	不明	糸切り後ナデ	不明	Ⅱ	E	6	
843	黒	19F	灰黒D区東側ベルト	9.3	4.8	3.0	-	不明	-	指ナデ	Ⅲ	B	4	
844	黒	18F	灰黒C区	9.1	5.0	2.6	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
845	黒	18g	灰黒C区黒褐炭	9.0	5.2	2.9	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	3	
846	黒	18F	灰黒C区	9.2	5.2	2.9	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
847	黒	18F	灰黒C区	9.0	4.8	2.8	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	
848	黒	18F	灰黒C区	9.4	5.3	2.8	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	3	
849	黒	18F	灰黒C区	8.9	4.8	2.8	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	3	
850	黒	18F	灰黒C区	8.8	4.7	2.5	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	内面降灰
851	黒	18F	灰黒C区	9.0	5.1	3.1	-	砂		指ナデ	Ⅲ	C	3	
852	黒	18F	灰黒C区	9.0	4.5	2.5	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	4	
853	黒	18F	灰黒C区	9.3	4.9	2.6	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	3	
854	黒	18F	灰黒C区	9.0	5.2	2.6	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	1	
855	黒	18F	灰黒C区	9.3	5.0	2.8	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
856	黒	19F	灰黒D区	9.2	5.0	2.7	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	D	3	
857	黒	19F	灰黒D区	(8.8)	5.2	2.6	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	1	
858	黒	19F	灰黒D区	8.6	4.5	2.5	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅲ	A	3	内面降灰
859	黒	19F	灰黒D区	8.0	4.5	2.4	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	1	
860	黒	19F	灰黒D区東側ベルト	9.4	5.3	2.9	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	内面降灰
861	黒	19F	灰黒D区東側ベルト	9.2	4.8	2.2	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	3	
862	黒	19F	灰黒D区東側ベルト	9.8	5.7	3.0	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	C	6	
863	黒	19F	灰黒D区東側ベルト	9.0	4.3	2.3	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	4	
864	黒	19F	灰黒D区東側ベルト	8.8	4.5	2.7	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	
865	黒	19F	灰黒D区東側ベルト1・2号薬医跡	8.8	4.9	2.8	-	砂	-	指ナデ	Ⅱ	B	3	
866	黒	18F	灰黒F区	8.5	4.2	3.0	-	不明		指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全釉
867	黒	17e	灰黒F区	9.0	5.3	2.5	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
868	黒	17e	灰黒F区	9.4	5.2	2.9	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	
869	黒	17e	灰黒F区	9.1	5.4	2.8	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全釉
870	黒	17e	灰黒F区	9.0	5.0	3.0	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全釉
871	黒	17e	灰黒F区	9.0	4.8	2.8	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
872	黒	17e	灰黒F区	(9.0)	5.4	2.5	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	C	4	
873	黒	18F	灰黒F区	9.0	5.7	2.5	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
874	黒	18F	灰黒F区	9.4	5.0	2.6	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全釉
875	黒	18F	灰黒F区	9.2	5.3	2.7	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
876	黒	17F	灰黒F区	9.1	5.5	2.6	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	
877	黒	17F	灰黒F区	9.6	6.0	2.9	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	A	4	
878	黒	17F	灰黒F区	9.1	5.5	2.7	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
879	黒	19E	灰黒G区	8.2	3.8	2.1	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	1	
880	黒	19E	灰黒G区	8.3	4.4	1.9	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	2	
881	黒	19E	灰黒G区	8.3	4.8	1.9	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	D	2	
882	黒	19E	灰黒G区	8.3	4.5	2.3	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅰ	A	2	
883	黒	19E	灰黒G区	8.6	4.3	2.3	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	D	1	
884	黒	19E	灰黒G区	8.2	4.8	2.5	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	D	1	内面全釉
885	黒	19E	灰黒G区	8.2	4.8	2.2	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	3	
886	黒	19E	灰黒G区	8.5	4.5	2.6	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	D	2	
887	黒	19E	灰黒G区	8.2	4.5	2.6	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	D	2	
888	黒	19E	灰黒G区	8.5	4.8	2.5	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	3	
889	黒	19E	灰黒G区	8.3	4.9	2.3	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	1	
890	黒	19E	灰黒G区	8.2	4.3	2.1	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	2	
891	黒	19E	灰黒G区	(8.2)	5.2	2.2	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	3	
892	黒	19E	灰黒G区	8.0	4.5	2.1	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	D	2	
893	黒	19E	灰黒G区	8.5	5.5	2.8	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅰ	A	4	
894	黒	19E	灰黒G区	8.3	5.0	2.5	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	D	2	
895	黒	19E	灰黒G区	9.5	5.2	2.8	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	
896	黒	19E	灰黒G区灰黒G区との交点	8.8	4.7	2.2	-	不明	-	指ナデ	Ⅲ	D	6	全体に薄手
897	黒	19E	灰黒G区南側ベルト1・2号薬医跡	8.1	4.2	2.2	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅰ	B	2	筋部外面に粗状痕
898	黒	18e	灰黒H区	8.3	4.7	1.7	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	2	
899	黒	18e	灰黒H区	9.5	5.7	2.7	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	C	4	
900	黒	18e	灰黒H区	9.4	4.3	2.8	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
901	黒	18e	灰黒H区南側ベルト下層	8.8	5.0	2.8	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	
902	黒	18e	灰黒H区南側ベルト下層	8.6	5.4	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	
903	黒	18e	灰黒H区	8.6	4.7	2.8	-	砂		指ナデ	Ⅲ	B	6	内面全釉
904	黒	18e	灰黒H区	9.6	4.7	3.3	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	
905	黒	18e	灰黒H区	9.0	5.3	2.3	-	不明	-	指ナデ	Ⅲ	B	1	
906	黒	18e	灰黒H区	9.2	4.8	2.9	-	砂	-	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面降灰
907	黒	18e	灰黒H区	9.3	5.5	2.7	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	A	4	
908	黒	18e	灰黒H区	9.1	4.9	3.0	-	砂	-	指ナデ	Ⅲ	E	3	
909	黒	18e	灰黒H区	8.9	4.7	3.0	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	
910	黒	18e	灰黒H区	9.0	5.4	3.0	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	C	3	内面降灰
911	黒	18e	灰黒H区	9.5	5.5	2.7	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	C	3	内面全釉
912	黒	18e	灰黒H区	8.4	5.2	2.5	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	
913	黒	18e	灰黒H区	8.8	4.7	2.7	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
914	黒	18e	灰黒H区	8.8	5.5	2.9	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面降灰
915	黒	18e	灰黒H区	9.0	5.3	3.0	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	
916	黒	17e	灰黒H区	9.5	4.9	3.2	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面全釉
917	黒	17e	灰黒H区	9.9	4.8	2.2	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	4	
918	黒	17e	灰黒H区	8.8	4.6	2.8	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
919	黒	17e	灰黒H区	9.4	5.3	3.0	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
920	黒	17e	灰黒H区	9.2	4.5	3.2	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	1	

第 30 表　皿類観察表〔その６〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm・g)				高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
921	皿	17e	灰原I区	8.8	4.5	2.2	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全釉
922	皿	17e	灰原I区	9.1	4.8	2.8	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	E	3	内面全釉
923	皿	17e	灰原I区	9.3	5.3	3.1	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
924	皿	17e	灰原I区	9.8	5.4	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	2	
925	皿	17e	灰原I区	(9.4	5.6	3.2	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	
926	皿	17e	灰原I区	9.2	5.0	2.3	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面降灰
927	皿	17e	灰原I区	9.2	5.0	3.3	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	E	1	内面全釉
928	皿	17e	灰原I区	9.5	5.2	2.6	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
929	皿	17e	灰原I区	9.2	5.5	2.8	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	1	
930	皿	17e	灰原I区	8.8	4.8	2.8	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面全釉
931	皿	17e	灰原I区	9.6	5.0	2.5	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	
932	皿	17e	灰原I区	8.6	5.0	2.8	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	1	内面全釉
933	皿	17e	灰原I区	9.0	5.3	2.7	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面降灰
934	皿	17e	灰原I区	8.8	5.7	2.7	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	1	
935	皿	19E	灰原J区	8.8	5.5	2.0	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	1	
936	皿	19E	灰原J区	8.7	5.2	2.4	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	1	
937	皿	19E	灰原J区	8.2	5.0	1.8	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	2	
938	皿	19E	灰原J区	8.0	4.8	1.7	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅰ	B	2	
939	皿	19E	灰原J区	8.2	5.5	2.0	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	1	
940	皿	19E	灰原J区	8.7	5.4	2.4	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	3	
941	皿	19E	灰原J区	(8.6)	4.7	2.1	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	3	
942	皿	18e	灰原J区東側ベルト3・4号窯灰原	8.2	5.2	2.1	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	1	
943	皿	18e	灰原J区東側ベルト3・4号窯灰原	8.3	4.1	2.0	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅰ	A	1	
944	皿	18e	灰原J区東側ベルト3・4号窯灰原	8.7	5.0	2.0	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	D	2	
945	皿	18e	灰原K区	9.5	5.2	2.7	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	1	内面降灰
946	皿	18e	灰原K区	8.7	5.2	2.5	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面降灰
947	皿	18e	灰原K区	8.9	5.0	1.9	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
948	皿	18e	灰原K区	8.8	5.3	2.2	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	E	1	内面全釉
949	皿	18e	灰原K区南側ベルト	9.0	4.8	3.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面降灰
950	皿	18e	灰原K区南側ベルト	9.2	5.3	2.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
951	皿	18e	灰原K区南側ベルト	9.3	5.5	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
952	皿	18e	灰原K区南側ベルト	8.8	5.5	2.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
953	皿	18e	灰原K区南側ベルト	9.3	5.5	2.7	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	A	4	
954	皿	18e	灰原K区南側ベルト	8.9	5.2	3.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	3	
955	皿	18e	灰原K区南側ベルト	8.8	5.2	2.7	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	
956	皿	18e	灰原K区南側ベルト	9.0	4.7	2.7	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	
957	皿	18e	灰原K区南側ベルト	8.3	4.7	2.5	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	2	内面降灰
958	皿	18e	灰原K区南側ベルト	9.7	5.0	2.9	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	6	
959	皿	18e	灰原K区南側ベルト	8.2	5.2	2.3	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面降灰
960	皿	18e	灰原K区南側ベルト	9.3	4.9	2.9	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	3	
961	皿	18e	灰原K区南側ベルト下層	9.0	5.4	2.9	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	3	
962	皿	18e	灰原K区南側ベルト下層	9.8	4.8	2.4	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
963	皿	18e	灰原L区	8.2	5.5	2.4	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全釉
964	皿	18e	灰原L区	9.4	4.7	2.5	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
965	皿	18e	灰原L区	8.9	5.0	2.4	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
966	皿	18e	灰原L区	9.2	6.0	2.7	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
967	皿	18e	灰原L区	8.8	5.5	2.8	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全釉
968	皿	18e	灰原L区	8.9	5.3	2.5	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
969	皿	18e	灰原L区	8.3	4.8	2.6	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
970	皿	18e	灰原L区	9.4	4.9	2.9	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
971	皿	18e	灰原L区	9.0	4.8	2.6	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	1	内面降灰
972	皿	18e	灰原L区	9.1	5.5	2.7	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面降灰
973	皿	18e	灰原L区	8.6	5.4	2.6	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面降灰
974	皿	18e	灰原L区	8.5	5.0	2.3	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	
975	皿	18e	灰原L区	9.2	4.8	2.8	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
976	皿	18e	灰原L区	9.3	5.5	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面降灰
977	皿	18e	灰原L区	9.0	4.8	2.6	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面全釉
978	皿	18e	灰原L区	9.3	5.1	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
979	皿	18e	灰原L区	9.1	5.7	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	3	
980	皿	18e	灰原L区	8.9	5.2	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
981	皿	18e	灰原L区	9.0	4.8	2.7	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
982	皿	18e	灰原L区	8.6	4.8	2.9	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
983	皿	18e	灰原L区	9.4	4.9	2.6	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
984	皿	18e	灰原L区	9.0	4.5	2.8	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
985	皿	18e	灰原L区	8.8	5.5	2.9	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	E	3	内面降灰
986	皿	18e	灰原L区	8.9	5.0	2.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面降灰
987	皿	18e	灰原L区	9.1	5.2	2.6	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
988	皿	18e	灰原L区	8.7	4.8	2.7	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	1	
989	皿	18e	灰原L区	9.7	4.8	2.9	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	A	1	内面全釉
990	皿	18e	灰原L区	9.8	4.8	2.9	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
991	皿	18e	灰原L区	9.3	5.1	3.0	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面全体降灰
992	皿	18e	灰原L区	9.1	4.6	2.8	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	1	
993	皿	18e	灰原L区	8.3	5.0	2.6	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	1	
994	皿	18e	灰原L区	8.8	4.6	2.9	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	
995	皿	18e	灰原L区	8.7	4.5	2.7	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	
996	皿	18e	灰原L区東側ベルト	8.8	5.3	2.4	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	1	
997	皿	18e	灰原L区東側ベルト	8.5	5.0	2.4	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
998	皿	18e	灰原L区東側ベルト	(9.0)	(4.7)	2.7	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	
999	皿	18e	灰原L区東側ベルト	9.0	5.7	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	4	内面全釉

第31表　皿類観察表〔その7〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm・g)				高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
1000	皿	18e	灰原L区東側ベルト	(7.4)	4.8	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面全釉
1001	皿	18e	灰原L区東側ベルト	8.6	4.7	2.9	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全釉
1002	皿	18e	灰原L区東側ベルト	8.8	4.8	2.6	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	3	ゆがみきつい
1003	皿	18e	灰原L区東側ベルト	8.7	5.2	2.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	4	
1004	皿	18e	灰原L区東側ベルト	8.4	4.8	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
1005	皿	18e	灰原L区東側ベルト	8.8	4.7	2.9	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅱ	E	1	
1006	皿	18e	灰原L区東側ベルト	9.2	5.3	2.9	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	1	
1007	皿	17d	灰原L区	8.4	5.3	2.6	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1008	皿	17d	灰原L区	9.3	5.1	2.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	1	
1009	皿	17d	灰原L区	8.7	4.6	3.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
1010	皿	17e	灰原L区	9.2	5.4	2.4	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	
1011	皿	17e	灰原L区	9.6	5.7	3.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	
1012	皿	17e	灰原L区	9.1	5.3	2.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	4	内面全釉
1013	皿	17e	灰原L区	9.3	5.6	2.7	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	1	
1014	皿	17e	灰原L区	8.4	4.7	2.1	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅰ	A	2	
1015	皿	17e	灰原L区	9.4	4.9	2.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	内面全釉
1016	皿	17e	灰原L区	9.1	5.0	2.4	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	4	
1017	皿	17e	灰原L区	9.7	5.2	2.7	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	C	6	内面降灰
1018	皿	17e	灰原L区	10.2	5.7	3.1	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅱ	C	1	
1019	皿	17e	灰原L区	(9.6)	5.3	3.0	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1020	皿	17e	灰原L区	8.8	4.9	2.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	歪み有り
1021	皿	17e	灰原L区	9.5	4.8	2.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
1022	皿	17e	灰原L区	9.8	5.5	2.4	-	不明	糸切り	不明	Ⅲ	B	4	完形　内面全釉
1023	皿	17e	灰原L区	9.3	4.6	2.7	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	4	
1024	皿	17e	灰原L区	(9.2)	5.3	2.8	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	C	6	内面全釉
1025	皿	17e	灰原L区	9.3	4.7	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面降灰
1026	皿	17e	灰原L区	10.3	5.4	3.4	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
1027	皿	17e	灰原L区	9.2	4.8	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
1028	皿	17e	灰原L区	9.2	5.2	2.9	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1029	皿	17e	灰原L区	9.2	5.3	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
1030	皿	18e	灰原L区東側ベルト下層,1・2号窯灰原	8.8	5.0	2.8	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面全釉
1031	皿	19d	灰原M区	8.5	5.4	2.3	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	4	
1032	皿	19d	灰原M区	8.5	4.8	1.9	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	1	
1033	皿	18e・19d	灰原M区東側ベルト	8.1	5.3	2.1	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	1	
1034	皿	18e・19d	灰原M区東側ベルト	7.9	5.5	1.8	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	1	内面降灰
1035	皿	18d	灰原M区	8.0	4.8	2.0	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	A	1	
1036	皿	18d	灰原O区	9.0	4.8	2.2	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	内面全釉
1037	皿	18d	灰原O区	9.0	4.6	3.1	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	3	
1038	皿	18d	灰原O区	8.8	4.8	3.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面降灰
1039	皿	18d	灰原O区	9.4	4.7	2.0	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	内面全釉　歪み有り
1040	皿	18d	灰原O区	9.6	5.5	2.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面降灰
1041	皿	18d	灰原O区	8.7	5.4	3.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面降灰
1042	皿	18e	灰原O区東側ベルト	(9.8)	5.3	2.6	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	3	
1043	皿	18e	灰原O区東側ベルト	9.3	5.3	2.6	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
1044	皿	18e	灰原O区東側ベルト	9.2	5.7	2.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1045	皿	17d	灰原O区	8.9	5.0	2.6	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
1046	皿	17d	灰原O区	8.9	5.4	2.8	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面降灰
1047	皿	17d	灰原O区	8.9	4.9	2.8	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅱ	C	3	
1048	皿	17d	灰原O区	9.1	5.7	2.8	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅱ	C	3	内面降灰
1049	皿	17d	灰原O区	8.7	5.0	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	3	内面降灰
1050	皿	17d	灰原O区	9.4	5.9	2.8	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅱ	C	4	
1051	皿	17d	灰原O区	9.3	5.6	2.7	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	内面降灰
1052	皿	17d	灰原O区	9.1	5.0	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
1053	皿	18d	灰原P区	8.7	5.5	2.1	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅰ	A	1	
1054	皿	18d	灰原P区	8.2	3.8	2.4	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	2	
1055	皿	18c	灰原P区	8.8	5.2	2.2	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	A	1	
1056	皿	18c	灰原Q区西側拡張区	9.6	5.2	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	1	
1057	皿	18c	灰原Q区西側拡張区	8.7	5.2	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	4	
1058	皿	18c	灰原Q区西側拡張区	8.7	5.3	2.6	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	A	1	内面降灰
1059	皿	18d	灰原Q区	8.2	4.3	1.9	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅰ	A	2	
1060	皿	19f	灰原AA区	8.7	4.6	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1061	皿	19f	灰原AA区	9.3	4.7	2.8	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	1	
1062	皿	19f	灰原AA区	8.6	4.5	3.0	-	不明	糸切り後ナデ	不明	Ⅱ	B	1	内面全釉
1063	皿	19f	灰原AA区	9.3	5.6	3.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	1	
1064	皿	19f	灰原AA区	9.4	5.2	3.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	内面降灰
1065	皿	19f	灰原AA区	9.2	4.5	3.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	4	
1066	皿	19f	灰原AA区	9.3	5.4	2.7	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1067	皿	19f	灰原AA区	9.0	4.2	3.0	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	3	
1068	皿	19g	灰原AA区	8.6	4.5	2.5	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
1069	皿	19g	灰原AA区	9.4	5.3	2.8	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面降灰
1070	皿	19g	灰原AA区	9.2	4.8	2.2	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1071	皿	19g	灰原AA区	9.7	4.5	2.9	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	1	
1072	皿	19f	灰原AA区	8.6	4.5	2.9	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅲ	C	3	内面降灰
1073	皿	19g	灰原AA区	8.5	4.9	3.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面全釉
1074	皿	19f	灰原AA区上層	9.5	5.3	2.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	
1075	皿	19f	灰原AA区上層	9.0	5.6	3.1	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1076	皿	19f	灰原AA区上層	9.8	4.9	2.9	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
1077	皿	19g	灰原AB区	8.6	4.6	2.7	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
1078	皿	18g	灰原AB区	8.9	5.7	2.4	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	E	3	

第32表　皿類観察表〔その8〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm·g)				高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
1079	皿	18g	灰原AB区	9.2	4.4	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面降灰
1080	皿	18g	灰原AB区	8.4	4.9	2.8	-	砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	E	6	内面全釉
1081	皿	19g	灰原AB区	10.0	4.8	2.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
1082	皿	19g	灰原AB区	8.6	4.2	2.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	
1083	皿	19g	灰原AB区	9.4	5.0	2.8	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全釉
1084	皿	18g	灰原AB区東側ベルト	8.7	5.0	2.5	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全釉
1085	皿	18g	灰原AB区東側ベルト	9.2	5.0	2.4	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	3	内面全釉
1086	皿	18g	灰原AB区東側ベルト	8.8	4.7	2.5	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	6	
1087	皿	18g	灰原AB区東側ベルト	9.1	4.8	3.2	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面降灰
1088	皿	18g	灰原AC区	9.2	5.3	2.7	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	3	内面全釉
1089	皿	18g	灰原AC区	9.1	4.5	2.6	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	C	3	
1090	皿	18g	灰原AC区	9.6	4.8	2.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
1091	皿	18g	灰原AC区	8.9	4.2	2.5	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
1092	皿	18g	灰原AC区	9.0	5.2	2.6	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	E	4	内面全釉
1093	皿	18g	灰原AC区	9.1	5.5	3.2	-	もみ・砂	糸切り	指ナデ	Ⅱ	E	2	内面降灰
1094	皿	18g	灰原AC区	8.5	4.5	2.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	内面全釉
1095	皿	18g	灰原AC区	9.1	5.4	2.5	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	4	
1096	皿	18g	灰原AC区	9.4	5.0	2.8	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	2	
1097	皿	18g	灰原AC区	9.5	5.5	2.9	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	3	
1098	皿	18g	灰原AC区	(9.0)	5.4	2.6	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	4	
1099	皿	18g	灰原AC区	9.0	5.2	2.4	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	2	内面全釉
1100	皿	18g	灰原AC区	9.4	4.8	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	4	
1101	皿	18g	灰原AC区	9.5	5.2	2.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	C	4	
1102	皿	18g	灰原AC区	8.5	4.5	2.8	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	3	内面全釉
1103	皿	18g	灰原AC区	9.7	5.0	2.9	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	E	1	内面降灰
1104	皿	18g	灰原AC区	8.8	4.8	2.4	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
1105	皿	18g	灰原AC区	9.1	5.3	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	1	
1106	皿	18g	灰原AC区	8.9	5.0	2.6	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
1107	皿	17f	灰原AC区	8.8	4.9	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	3	内面全釉
1108	皿	17f	灰原AC区	8.9	4.9	2.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	4	内面降灰
1109	皿	18g	灰原AC区下層	9.1	5.5	2.3	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	A	4	内面降灰
1110	皿	19g	灰原BB区	9.8	5.5	3.0	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	1	内面降灰歪み有り
1111	皿	19g	灰原BB区	9.0	4.8	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	E	1	
1112	皿	19g	灰原BB区	9.5	4.8	2.9	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1113	皿	19g	灰原BB区	9.0	4.5	2.6	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	1	
1114	皿	19g	灰原BB区	9.4	5.1	3.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面降灰
1115	皿	19g	灰原BB区	9.0	5.4	3.0	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	3	内面全釉
1116	皿	19g	灰原BB区	9.6	4.9	2.4	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	E	4	内面降灰
1117	皿	19g	灰原BB区	8.6	4.6	2.5	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	内面全釉
1118	皿	19g	灰原BB区	9.0	5.3	2.8	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面全釉
1119	皿	19g	灰原BB区	9.2	5.3	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	A	1	内面全釉
1120	皿	19g	灰原BB区	(8.8)	5.0	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	内面降灰 口縁2/5残存
1121	皿	19g	灰原BB区	9.3	5.0	2.6	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
1122	皿	18g	灰原BB区	9.1	5.0	2.9	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	E	1	内面全釉
1123	皿	18g	灰原BB区	8.7	4.4	3.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	1	
1124	皿	18g	灰原BC区	9.5	4.8	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	内面全釉
1125	皿	18g	灰原BC区	8.8	5.4	2.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面全釉
1126	皿	18g	灰原BC区	8.9	4.5	2.5	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面全釉
1127	皿	18g	灰原BC区	9.0	4.3	2.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	6	
1128	皿	18g	灰原BC区	8.6	4.7	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	4	
1129	皿	19g	灰原BB区	8.8	5.2	2.4	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面降灰
1130	皿	19g	灰原BB区	9.4	5.3	2.9	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	内面全釉
1131	皿	19g	灰原BB区南側ベルト	9.3	4.8	2.4	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
1132	皿	19g	灰原BB区南側ベルト	8.9	4.8	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1133	皿	19g	灰原BB区南側ベルト	9.2	4.8	3.1	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	1	
1134	皿	19g	灰原BB区	8.6	5.3	2.7	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面降灰
1135	皿	18g	灰原BC区タンク下	9.2	4.2	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
1136	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.8	4.9	3.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
1137	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.9	(4.0)	2.7	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	E	3	内面全釉
1138	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.8	4.5	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1139	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.3	4.7	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全釉
1140	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.5	4.3	2.8	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	内面全釉
1141	皿	18g	灰原BC区タンク下	9.3	5.2	2.8	-	もみ	糸切り	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1142	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.2	4.7	2.6	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	4	
1143	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.8	4.5	2.9	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	3	
1144	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.7	4.5	2.7	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1145	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.4	4.8	2.7	-	不明	糸切り	指ナデ	Ⅱ	B	1	
1146	皿	18g	灰原BC区タンク下	10.0	5.7	3.1	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	E	1	
1147	皿	18g	灰原BC区タンク下	9.0	5.1	2.8	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	1	
1148	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.9	4.2	2.3	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	C	4	内面降灰
1149	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.6	4.4	2.7	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	B	1	
1150	皿	18g	灰原BC区タンク下	9.0	4.7	2.8	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	E	4	
1151	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.6	4.6	2.7	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	B	1	
1152	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.8	5.4	2.9	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	
1153	皿	18g	灰原BC区タンク下	9.4	5.2	3.2	-	もみ	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	2	内面降灰
1154	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.4	5.0	2.7	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	
1155	皿	18g	灰原BC区タンク下	8.8	5.2	2.6	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	1	内面降灰
1156	皿	18g	灰原BC区タンク下	9.3	4.2	2.7	-	砂	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅲ	E	4	
1157	皿	18g	灰原BC区タンク下	9.5	5.4	3.0	-	不明	糸切り後ナデ	指ナデ	Ⅱ	E	4	

第33表　皿類観察表〔その9〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm・g)				高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高	重量				系統	体部	口縁端部	
1158	皿	18g	灰原BC区タンク下	9.0	4.8	2.4	-	砂	赤切り後ナデ	指ナデ	皿	B	1	内面降灰
1159	皿	18g	灰原BC区	8.9	5.2	2.5	-	不明	赤切り後ナデ	指ナデ	皿	B	4	内面降灰
1160	皿	17g	灰原BC区	9.2	4.8	2.6	-	不明	赤切り後ナデ	指ナデ	皿	B	4	
1161	皿	18g	灰原上層、東側拡張区	9.6	4.0	2.9	-	不明	赤切り後ナデ	指ナデ	皿	E	1	内面降灰
1162	皿	18g	灰原上層、東側拡張区	8.3	4.0	2.6	-	不明	赤切り後ナデ	指ナデ	皿	E	4	内面降灰
1163	皿	19w	SN202	8.6	4.8	2.0	-	不明	赤切り	指ナデ	皿	B	1	
1164	皿	19f	1号泥床面施設	9.4	5.5	2.9	-	砂	赤切り後ナデ	指ナデ	皿	B	4	
1165	皿	20c	西壁サブトレンチ	9.0	5.0	1.5	-	不明	赤切り	指ナデ	皿	D	1	
1166	皿	18c	西壁サブトレンチ北端壁土ハイアウト層	8.5	4.9	2.1	-	不明	赤切り	指ナデ	皿	B	3	
1167	皿	記載なし	4号泥床原上層の黒色土層	8.2	4.7	2.0	-	不明	赤切り	指ナデ	1	B	1	
1168	皿	17h	灰原	9.8	5.5	2.8	-	もみ	赤切り後ナデ	指ナデ	皿	E	4	
1169	皿	17h	灰原	8.8	4.8	2.8	-	不明	赤切り後ナデ	指ナデ	皿	E	3	内面全軸
1170	皿	17h	灰原	9.0	5.0	2.8	-	不明	赤切り後ナデ	指ナデ	皿	B	4	内面全軸
1171	皿	17g	灰原	9.5	4.7	2.6	-	砂	赤切り後ナデ	指ナデ	皿	E	1	

第 34 表　皿類観察表〔その 10〕

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm)			重量(g)	高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高					系統	体部	口縁端部	
550	托	18e	灰原H区	7.7	4.0	2.2	61.0	不明	糸切り後高台成形	指ナデ	-	-	-	
553	托	18e	灰原G区南側ベルト	7.6	4.2	1.7	63.0	不明	糸切り後高台成形	指ナデ	-	-	-	
557	托	18e	灰原I区	7.4	4.0	2.2	53.0	もみ	糸切り後高台成形	指ナデ	-	-	-	完形

第35表　托観察表

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高				系統	体部	口縁端部	
1172	脚付碗	19g	灰原BB区	(15.8)	10.2	8.8	もみ	指ナデ	指ナデ	-	-	-	高台と碗部が一部残存。内面に重ね痕

第36表　脚付碗観察表

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	底面外面	見込み	器形分類			備考
				口径	高台径	器高				系統	体部	口縁端部	
1173	片口鉢	19f	灰原A区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1174	片口鉢	19f	灰原A区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1175	片口鉢	19f	灰原A区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1176	片口鉢	19f	灰原A区南側ベルト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1177	片口鉢	19f	灰原A区東側ベルト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1178	片口鉢	19f	灰原A区東側ベルト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1179	片口鉢	19f	灰原A区東側ベルト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1180	片口鉢	18f	灰原F区	(30.0)	15.4	(11.9)	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	I	D	1	内面に重ね痕
1182	片口鉢	18e	灰原H区	21.2	11.8	10.4	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	II	D	3	
1184	片口鉢	17e	灰原I区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1185	片口鉢	17e	灰原I区	(30.0)	(16.5)	(12.3)	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	I	B	1	1/2欠損
1186	片口鉢	18e	灰原K区	20.3	9.8	5.4	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	II	C	1	1/3欠損
1188	片口鉢	18e	灰原L区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1189	片口鉢	18e	灰原L区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1191	片口鉢	18e	灰原L区	34.3	16.4	12.0	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	I	C	1	
1192	片口鉢	19g	灰原AB区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1193	片口鉢	19g	灰原AB区	-	-	-	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	-	-	-	
1194	片口鉢	18g	灰原AC区	19.3	9.7	7.1	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	II	A	3	
1195	片口鉢	19g	灰原BA区	20.7	9.9	7.3	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	II	B	1	
1196	片口鉢	19g	灰原BB区	-	(9.5)	(8.0)	もみ	糸切り後指ナデ	指ナデ	-	-	-	1/4欠損
1197	片口鉢	19g	灰原BB区	30.5	15.4	10.3	-	糸切り後指ナデ	指ナデ	I	D	2	高台欠損
1198	片口鉢	18g	灰原BC区	(30.8)	13.8	12.3	もみ・砂	糸切り後指ナデ	指ナデ	I	B	1	
1199	片口鉢	19g	灰原BB区南側ベルト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1200	片口鉢	17g	灰原BC区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1201	片口鉢	18g	灰原	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1202	片口鉢	7h	灰原	-	-	-	-	-	-	-	-	-	片口鉢片
1203	片口鉢	7h	灰原	-	11.2	(7.9)	もみ・小石	糸切り後指ナデ	ヘラ削り(?)	-	-	-	1/3欠損

第37表　鉢類観察表

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	底面外面	器形分類			備考
				口径	高台径	器高			系統	体部	口縁端部	
1204	重ね碗	19d	3号窯E区	(11.0)	7.5	4.5	不明	不明	-	A	2	
1205	重ね碗	17e	灰溜F区	17.2	8.8	5.7	もみ	糸切り後指ナデ	-	B	4	重ね7枚
1206	重ね碗	18e	灰溜E区	14.5	7.0	5.2	もみ	糸切り後指ナデ	-	B	2	重ね3枚
1207	重ね碗	18e	灰原EK区南側ベルト	15.9	8.7	4.8	もみ	糸切り後指ナデ	-	B	1	重ね4枚
1208	重ね碗	18e	灰原EK区南側ベルト	16.7	7.7	5.2	もみ	糸切り後指ナデ	-	B	4	重ね7枚
1209	重ね碗	18e	灰原LK区	16.8	9.2	5.2	もみ	糸切り後指ナデ	-	B	4	重ね7枚
1210	重ね碗	18e	灰原LK東側ベルト	16.5	7.3	4.9	もみ	糸切り後指ナデ	-	A	1	重ね7枚　全体に湾曲
1211	重ね碗	18e	灰原LK東側ベルト	16.7	8.2	6.0	もみ・砂	糸切り後指ナデ	-	C	4	重ね11枚

第 38 表　重ね碗観察表

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	底面外面	器形分類			備考
				口径	高台径	器高			系統	体部	口縁端部	
1212	重ね皿	19f	1号窯I区ベルト	8.7	4.9	2.7	不明	糸切り後指ナデ	III	B	1	重ね5枚
1213	重ね皿	20d	3号窯C区	7.9	3.5	2.8	小石	糸切り後指ナデ	II	B	1	重ね2枚
1214	重ね皿	19f	灰原AA区	11.0	4.5	2.8	不明	糸切り後指ナデ	III	B	1	重ね2枚
1215	重ね皿	19f	灰原AA区	(9.5)	(4.4)	(4.0)	不明	糸切り後指ナデ	III	B	2	重ね10枚
1216	重ね皿	19f	灰原AE東側ベルト	9.5	4.7	2.2	もみ・砂	糸切り	III	C	4	重ね13枚
1217	重ね皿	18e	灰原IE区	9.6	4.4	2.9	もみ・砂	糸切り後指ナデ	III	B	1	重ね2枚
1218	重ね皿	18e	灰原IC東側ベルト	8.4	4.7	1.6	砂	糸切り	I	B	1	重ね6枚
1219	重ね皿	18e	灰原LE区	10.0	5.7	2.8	もみ	糸切り後指ナデ	II	B	4	重ね3枚
1220	重ね皿	18e	灰原LE東側ベルト	8.9	5.6	2.8	小石	糸切り後指ナデ	II	A	4	重ね3枚
1221	重ね皿	18e	灰原LE東側ベルト	9.8	4.7	3.7	もみ	糸切り後指ナデ	III	A	4	重ね3枚
1222	重ね皿	18e	灰原LE東側ベルト	12.6	7.5	4.3	釉	糸切り後指ナデ	III	C	2	重ね2枚
1223	重ね皿	18e	灰原LE東側ベルト	9.0	4.9	2.5	もみ	糸切り後指ナデ	III	B	1	重ね3枚、最上段内面潰くそ付着
1224	重ね皿	19g	灰原AA区	9.0	4.7	2.5	もみ	糸切り後指ナデ	III	B	1	重ね4枚、最上段内面潰くそ付着
1225	重ね皿	19g	灰原AA区	9.5	5.0	2.5	もみ	糸切り	III	B	1	重ね4枚、最上段内面潰くそ付着
1226	重ね皿	19g	灰原AA区	(8.0)	(4.1)	3.3	もみ	糸切り後指ナデ	III	B	2	重ね10枚
1227	重ね皿	19g	灰原AA区	9.7	4.4	3.5	もみ・砂	糸切り後指ナデ	I	B	3	重ね12枚、最上段内面潰くそ付着
1228	重ね皿	19f	灰原AA区	9.2	4.7	2.3	もみ・砂	糸切り後指ナデ	III	E	4	重ね3枚
1229	重ね皿	18g	灰原AC区	8.7	4.2	2.5	もみ	糸切り後指ナデ	III	B	4	重ね7枚
1230	重ね皿	19g	灰原BB区	8.0	4.0	2.2	もみ	糸切り後指ナデ	III	C	1	重ね5枚
1231	重ね皿	18g	灰原BB区	9.0	4.8	2.7	もみ・砂	糸切り後指ナデ	III	B	4	重ね5枚

第 39 表　重ね皿観察表

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	備考
				口径	底径	器高		
1232	壺	18e	灰原I区	—	15.1	(23.5)	窯くそ・破片	底部～肩部残存
1233	短頸壺	18e	灰原K区	(20.1)	15.3	27.3	無	全体の1/3欠損

第40表　壺観察表

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm)			重量(g)	備考
				長径	短径	厚さ		
1234	陶丸	19c	4号窯F区	2.6	2.4	1.8	11.0	
1235	陶丸	18f	灰原C区	3.0	2.2	2.4	29.0	かまくそ付着
1236	陶丸	17d	灰原N区	2.5	2.0	2.2	12.0	
1237	陶丸	18c	灰原P区	2.1	2.0	1.8	9.0	亀裂有り

第41表　陶丸観察表

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm)				備考
				長さ	幅	厚さ(除)	厚さ(外)	
1238	陶硯	18d	灰原N区	(7.8)	8.7	1.53	2.33	1/2欠損、陸部のみで2面あり

第42表　陶硯観察表

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm)			備考
				最大長	最大幅	最大高	
1239	焼台	19f	灰原AI区	13.3	14.5	7.0	上部に縄をのせた痕跡有り
1240	焼台	19f	灰原AI区	13.0	(13.8)	7.8	上部に縄をのせた痕跡有り
1241	焼台	19f	灰原AI区	11.4	(10.4)	9.6	胎土に小石含む
1242	焼台	18f	灰原CI区	13.4	(11.3)	9.5	胎土に小石含む
1243	焼台	19f	灰原AA区	(11.8)	11.1	10.9	胎土に小石含む 上部に重ね痕付着
1244	焼台	19g	灰原AA区	(11.6)	(8.7)	(12.0)	胎土に小石含む 側部に指頭痕
1245	焼台	18g	灰原AC区	11.7	(11.5)	9.5	胎土に小石含む
1246	焼台	19g	灰原BB区	13.0	13.0	9.5	胎土に小石含む 側部に手痕

第43表　焼台観察表

土師質鍋観察表

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm)			焼成	胎土	接合	備考
				口径	底径	器高				
1247	伊勢場	18d	灰原R区	(16.7)	−	−	良好	−	−	口縁一部残存

第44表　土師質鍋観察表

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm)			備考
				口径	底径	器高	
1248	内耳鍋	18g	灰原AC区	−	−	−	口縁1/7残存　表面すす付着

第45表　内耳鍋観察表

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm)			備考
				最大長	最大幅	最大厚	
1249	砥石	19d	3号窯北側縦ベルト	16.8	5.5	4.7	砥面3面

第46表　砥石観察表

遺物番号	器種	G名	出土位置	法量(cm)			備考
				最大長	最大幅	最大厚	
1250	取手	18f	灰原C区	6.4	2.0	1.3	編みこみ、表面釉、半分欠損か
1251	取手	18g	灰原C区	13.1	2.0	1.5	編みこみ

第47表　取手観察表

遺物観察表の凡例

【法量の測量】

○　出土位置

出土位置が不明または確認できないものは「−」とした。

○　口径・高台径

実測できるものは、そのまま計測した。1/2以下は推定値を記し小数点第2位を繰上げ、(　)で記入した。測定個所が欠損している場合は「−」とし、測定出来なかったものについては「実測不可」とした。

○　器高

測定可能な位置の最高値を測定し、測定個所が欠損している場合は「−」とした。

○　高台底部接地面

高台底部に付いた様々な痕跡を記した。

○　底部外面

回転台から切り離す工程でできた糸切り痕やナデなどを記した。

○　見込み

内面底部中央にできた調整痕のことを記した。

第３章　自然科学分析

第１節　瀬戸Ｂ古窯跡群の考古地磁気年代推定

大谷女子大学文化財学科
広岡公夫、井上有香

はじめに

地球はその中心に強力な棒磁石（これを地磁気双極子という）をおいたときに生ずる磁場として近似することができる磁場を持っている。この磁場を‘地磁気’または‘地球磁場’という。地球磁場は地球表面全地域に存在しているが、地域ごとにその方向と強度は異なっている。しかも、この地球磁場はゆっくりとした時間変化をしており、数十年から百年という年代の経過とともに変わるのである。このようなゆっくりとした地球磁場の変動を地磁気永年変化（geomagnetic secular variation）という。この変動は１７世紀後半から開始された地磁気観測にもはっきり現れている。

土には、鉄酸化物の磁鉄鉱（Fe_3O_4）や赤鉄鉱（Fe_2O_3）などの磁性鉱物（磁石になることができる鉱物）が１～３％程度含まれている。土が焼かれて高温に熱せられ、それぞれの鉱物に固有の温度（これをキュリー温度という）に達すると、これらの磁性鉱物の磁性（磁石になることができる性質）は失われる。焼成が終わって、冷却の過程で、キュリー温度以下になると、これらの磁性鉱物は再び磁性を取り戻し、そのとき作用している外部磁場の向きに磁化を獲得し、常温にまで温度が下がったときには磁化が残り、弱いながらも磁石になっている。このようにして獲得された磁化を熱残留磁化（thermoremanent magnetization、略して、ＴＲＭ）という。冷却時には、当然、地球磁場が作用しているので、この時獲得された磁化の方向は、地球磁場の方向と同じで、その強さもその時、その場所の地磁気強度に比例したＴＲＭを獲得することになる。充分高温にまで加熱された場合には、この残留磁化（remanent magnetization）は非常に安定で、何万年経っても変化しない。このように、焼土は、ＴＲＭの形で焼成当時の地球磁場の方向を記録していることになり、ＴＲＭは、昔の地磁気を記憶している目に見えない‘地磁気の化石’であるといってよい。

このような地磁気の化石（残留磁化）を測定して、過去の地磁気変動を復元する研究を考古地磁気学（archeomagnetism）という。

大府市内の遺跡に関する考古地磁気研究は、山茶碗の窯跡を主にして多数の測定例がある。すなわち、海陸庵古窯跡群・神明古窯跡群（広岡他、1996）、ガンジ山Ａ古窯跡群（広岡・佐竹、2000）、深廻間Ａ古窯跡群（広岡・佐竹、2005）、深廻間Ｂ古窯跡群（広岡他、2006）、砂原古窯跡群（広岡他、2007）、深廻間Ｃ古窯跡群（広岡他、2008）、石亀戸古窯跡群などである。

考古地磁気永年変化

地磁気は数十年～百年程度の長期間かかってやっとはっきり検出できるような、長周期のゆっくり

とした変化をする。このような地磁気の変動を地磁気永年変化（geomagnetic secular variation）という。地磁気の直接観測によって得られた偏角・伏角の最古の観測記録は、１６世紀中頃以降、英国ロンドンのグリニッヂで得られている。それ以来の 400 年余りの継続観測記録を見ると、地磁気方位は明らかに変わっており、永年変化が認められる。しかし、その変動周期は、もっと長いものらしく、この観測期間内では周期性は得られていない。

観測記録のないこれ以上古い時代にまで遡って地磁気の変動の様子を調べるためには、遺跡に残る焼土遺構の残留磁化を測定する考古地磁気学的手法に依らねばならない。考古地磁気測定によって得られたより古い時代の永年変化を、観測記録から得られた永年変化と区別するために、考古地磁気永年変化（archeomagnetic secular variation、または archaeo secular variation）という。

東海・北陸地方から九州北部に至る西南日本各地の遺跡における考古地磁気学的測定によって、過去 2,000 年間の考古地磁気変動が相当詳しく調べられており、西南日本版の考古地磁気永年変化曲線（Hirooka、1971；広岡、1977）として、考古地磁気年代推定に利用されてきた。窯跡や炉跡の焼土の残留磁化を測定し、得られた磁化方向を上記の考古磁気永年変化曲線と照合することによって、考古地磁気学的に年代を推定することができるのである。

東海地方では東濃・瀬戸を中心として、愛知・岐阜・三重３県および静岡県西部にわたる地域の考古地磁気データをもとに東海版の考古地磁気永年変化曲線が描かれている（広岡・藤澤、2003）。

永年変化曲線作成時に用いられたそれぞれの遺構の年代は考古編年による推定年代（時代）に基づいているため、永年変化曲線の年代軸は考古編年と独立ではないことに注意することが必要である。これは、考古編年の改訂によって考古地磁気推定年代値も変更になることを意味するからである。

試料の採取と残留磁化測定

瀬戸 B 古窯跡群では、１号窯から 12 個（試料番号：CT3251～3262）、２号窯から 13 個（CT3271～3283）、３号窯から 14 個（CT3291～3304）、４号窯から 14 個（CT3311～3324）の総計 53 個の考古地磁気測定試料を採取した（第 48 表）。これらは全て、方位が詳しく測られた定方位試料である。定方位試料の採取は、我々のグループが試行錯誤の末に確立した採取法で、石膏で固めて石膏表面に平面を作り、その面の方位を測定してから採る方法である。この方法によって比較的短時間に精度のよい定方位試料が得られる。

定方位サンプルの採取方法の手順は次の通りである。

1) まず、古窯址床面のよく焼けている部分を選んで、試料として採取する焼土（こぶし大）の周りに深さ数 cm の溝を掘る。このとき、焼土が動かないように、焼土の根元部分が遺構につながったままの状態が保たれるように気を付ける。溝が掘り上がったら、こぶし部分の土片や土埃をきれいに取り除いておく。

2) 次いで、多めの水で溶いた石膏をその部分にかけ、全体がくずれないようにする。その後、濃いめに溶いた石膏を焼土の表面にのせ、数 cm 角のアルミ板を押し付けて石膏の上面に平面をつくる。先に薄い石膏をかけるのは焼土表面の細かい凸凹に中にも石膏がしみ込んで補強するのと、後でかける濃い石膏とよく馴染んで試料が壊れ難くなるからである。

3) 石膏が固まった後に、アルミ板をはがして、石膏平面の最大傾斜線（これを pitch という）の方位とその傾斜角（dip）を、考古地磁気試料採取用に特に改造された特製クリノメーター（Hirooka、1971）で測り、野帳に記録する。石膏平面には、その面の走向（strike）と傾斜方向を示す３点と試料の番号を油性マーカーで記す。

4) １本刃の手鍬を用いて石膏で固めた試料を遺構から掘り起こす。

5) 試料の裏面にも石膏をかけて補強した後、１個ずつ壊れないように紙で包む。

通常、遺構の大きさにかかわらず、１遺構当りこのような試料を10～15個採取して、研究室に持ち帰る。

方位の測定にはクリノメーター（特製クリノコンパス）の磁針を用いているので、磁北を基準にした方位となる。したがって、磁北が真北からずれている角度（現在の偏角）分だけ偏ったものになっている。

遺跡現場の現在の偏角を求めるために、日本全国に分布する地磁気観測点の観測値を用いて国土地理院が決めた西暦2000年の地磁気分布を求める実験式（2005年理科年表、 2004）に依った。遺跡現場の緯度・経度から計算によって得た値・2000年現在の遍角（D_{2000}）の値は、西偏7.05°（D_{2000} =-7.05°）となった。遺跡現場の緯度・経度とともに、D_{2000}の値も第48表に載せてある。残留磁化測定結果の偏角はこの値を用いて真北を基準にしたものに補正されている。

残留磁化の測定には夏原技研製のリングコア型スピナー磁力計（SMM-85型）を使用し、試料１個につき６回置き直しをして測定した。縦型のこの磁力計では、回転軸は鉛角方向であるので、１回で回転軸に垂直な平面（水平面）内の直交２成分を測定することができる。したがって、６回置き直すと12成分が得られ、３次元ベクトルである磁化ベクトルの直交３成分（X・Y・Z）のそれぞれを４回ずつ測ることになる。これら４個の値の平均値をX・Y・Zのそれぞれの磁化成分とする。

試料が保持している自然残留磁化（natural remanent magnetization、略して、NRM）には、最終焼成後に付加された不安定な磁化成分も含まれており、それを効果的に除去するために、段階交流消磁実験を行うとよい。今回の消磁磁場の段階として、2.5 mT、5.0 mT、7.5 mT、10.0 mT の４段階を設定した。NRMの測定の後、この４段階で消磁を行った。段階ごとに磁化方向のまとまり具合と磁化強度の減少度をみて、最もまとまりがよくなる段階を選定して、それを最適消磁段階とし、その時の平均磁化方向を考古地磁気データとして採用する。考古地磁気年代推定は、こうして得られた考古地磁気データを用いて行われる。

瀬戸Ｂ古窯跡群の各古窯のNRMおよび上記４段階の消磁後の残留磁化測定結果は第49～68表に示されている。各古窯のNRMから10.0 mTまでの各消磁段階で、段階ごとに平均磁化方向および統計的なばらつきの程度を表わすパラメータ（フィッシャーの信頼角：α_{95}と、フィッシャーの精度係数：K）を計算によって求める。統計計算にはフィッシャーの統計計算にはフィッシャーの統計法（Fisher、1953）を用いた。統計処理の結果は第69表にまとめられている。最適消磁段階は【 】で括って示されている。１・２・３・４号窯の最適消磁段階は、それぞれ2.5 mT、2.5 mT 、2.5 mT 、5.0 mTであった。

同表の平均磁化強度を見ると、１号窯と３号窯は10^{-4}（Am^2/kg）のオーダーの磁化強度を保有し

ており、2号窯は10^{-5}、4号窯は10^{-3}のオーダーの磁化強度となっている。2号窯を除く3窯は通常の窯跡の磁化強度を有しており、十分高温に加熱され、しっかりしたTRMを獲得していることを示している。特に、4号窯はα_{95}が 0.6° で、非常に磁化方向のまとまりがよく、考古地磁気測定の結果としては、極めて信頼度の高いものであることを示している。2号窯も磁化強度は10^{-5}のオーダーではあるが、2.5 mTの消磁段階では2° 台のα_{95}を示しており、充分信頼に足る残留磁化を保持していると考えられる。

考古地磁気年代測定

第69表の最適消磁段階の考古地磁気データ（【 】で括ったもの）を東海版考古地磁気永年変化曲線に載せたのが第64図である。図中の●が各窯の平均磁化方向を示しており、それを囲む円がフィッシャーの信頼円（α_{95}）で、誤差の範囲を表す。推定年代幅（年代誤差）は信頼円が覆う永年変化曲線の線分の長さとなる。東海版永年変化曲線ではA.D.1150年～A.D.1350年の期間は永年変化量が小さく地磁気の動きがあまりないため、信頼円が小さくても相当な年代幅となり、年代推定の分解能が落ちる時期に当たっている。

この図を見ると、1・2・3号窯は非常に似た磁化方向を示しており、かつ平均磁化方向が互いのα_{95}の中に含まれている。したがって、考古地磁気学的には年代差はほとんどなく、誤差の範囲内で同一の年代といってよい。これに対して、4号窯は、他の3窯とは信頼円も重なって居らず、年代差があるように見える。この違いは、4号窯の伏角が他のものより深いことと、α_{95}が非常に小さいことに起因しており、永年変化曲線から外れてしまっているため、推定年代の誤差と他の窯とどれくらいの年代差があるのかを見積もるのは難しい状態にあるが、あまり大きな年代差ではないと考えられる。

第64図から推定される考古地磁気年代は、

瀬戸B1号窯　：A.D.1250年±70年
瀬戸B2号窯　：A.D.1230年±90年
瀬戸B3号窯　：A.D.1250年±50年
瀬戸B4号窯　：A.D.1130年±30年　又は　A.D.1250年±50年

となろう。

ちなみに、今回得た考古地磁気データを以前に用いていた西南日本版永年変化曲線と照合して年代を推定すると、

瀬戸B1号窯　：A.D.1210年±15年
瀬戸B2号窯　：A.D.1215年±25年
瀬戸B3号窯　：A.D.1220年±10年
瀬戸B4号窯　：A.D.1220年±5年

となる。

引用文献

Fisher, R. A. (1953) Dispersion on a sphere, Proceedings of Royal Society of London, Series A, vol.217, 295-305.

Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., ser. Geol. & Mineral., 38, 167-207.

広岡公夫（1977）考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol.15, 200-203.

広岡公夫、水上裕美、川浪英子（1996）海陸庵・神明古窯址群の考古地磁気年代、「海陸庵古窯址群・神明古窯址群、～大府半月地区区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書～」、大府市文化財調査報告書、第２集、愛知県大府市教育委員会、138-151.

広岡公夫、佐竹俊昭（2000）ガンジ山 A 古窯跡群の考古地磁気学的研究、「ガンジ山 A 古窯跡群、～大府桃山土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告～」、大府市文化財調査報告書、第４集、大府市教育委員会　102－123.

広岡公夫、藤沢良祐（2003）東海地方の地磁気永年変化曲線、「考古学と自然科学」、45号、日本文化財科学会誌、29-54.

広岡公夫、佐竹俊昭（2005）深廻間 A 古窯跡群の考古地磁気学的研究、「深廻間 A 古窯跡群、～大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告～」、大府市文化財調査報告書、第５集、愛知県大府市教育委員会、160-172.

広岡公夫、南依里、成享美（2006）深廻間 B 古窯跡群の考古地磁気、「深廻間 B 古窯跡群、～大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告～」、大府市文化財調査報告書、第７集、愛知県大府市教育委員会、74-90.

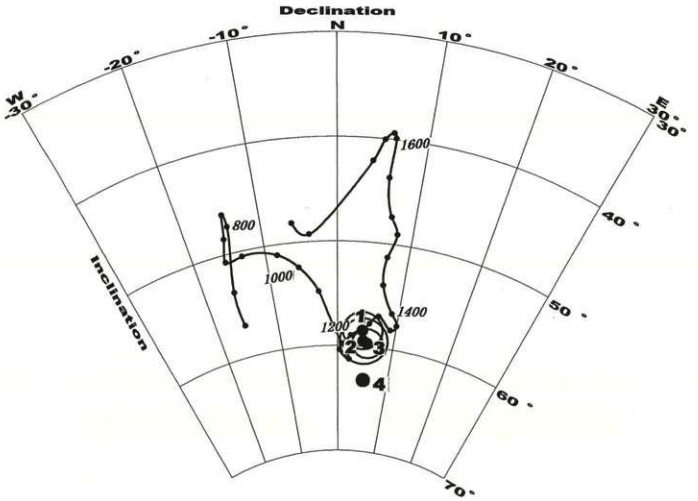
４号窯　サンプル状況

３号窯　サンプル状況

３号窯　サンプル採取状況

１号窯　サンプル採取状況

写真 74　熱残留磁気測定調査風景



第 64 図　西暦 700～2000 年の東海版永年変化曲線（広岡・藤澤、2003 による）と瀬戸Ｂ古窯跡群の考古地磁気測定結果.

１：１号窯、２：２号窯、３：３号窯、４：４号窯、

Declination：偏角、Inclination：伏角

遺構名	個数	試料番号
瀬戸B１号窯	12	CT 3251～3262
瀬戸B２号窯	13	CT 3271～3283
瀬戸B３号窯	14	CT 3291～3304
瀬戸B４号窯	14	CT 3311～3324

Lat.：35° 02′ N、 Long.：136° 57′ E

$D_{2000} = -7.05°$

第48表　瀬戸B古窯跡群の考古地磁気試料番号

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
CT 3251	5.3	58.6	2.31
3252	-2.8	59.3	2.57
3523	13.9	59.7	2.27
3254	7.4	54.0	1.65
3255	13.4	58.6	2.42
3256	3.5	58.3	1.97
3257	2.4	63.7	1.80
3258	0.1	60.4	1.49
3259	7.0	54.3	1.61
3260	-9.8	66.5	1.39
3261	13.8	58.5	1.41
3262	3.8	54.7	1.16

第49表　瀬戸B古窯跡群１号窯のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
CT 3251	5.6	58.0	2.31
3252	-2.5	58.3	2.70
3253	12.5	59.1	2.28
3254	6.0	56.5	1.70
3255	5.5	60.0	2.54
3256	2.3	57.5	2.03
* 3257	8.3	33.8	1.83
3258	1.9	60.7	1.50
3259	5.5	55.8	1.62
3260	-3.3	61.6	1.39
3261	11.2	59.4	1.41
3262	3.5	55.5	1.12

*：統計計算の際に除外したもの

第50表　瀬戸B古窯跡群1号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
CT 3251	2.6	58.4	2.27
3252	-3.1	58.0	2.62
3253	9.5	59.4	2.24
3254	6.6	56.5	1.63
3255	6.4	59.8	2.37
3256	1.6	59.4	1.92
3257	3.1	61.8	1.79
3258	1.6	60.4	1.49
3259	7.9	56.2	1.60
3260	-6.4	63.4	1.41
3261	15.7	55.8	1.38
3262	3.1	55.5	1.10

第51表　瀬戸B古窯跡群1号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
CT 3251	2.9	58.1	2.20
3252	-1.9	57.3	2.49
3253	13.4	59.2	2.13
3254	5.7	58.9	1.52
3255	5.8	59.6	2.33
3256	3.0	57.9	1.91
3257	1.9	62.1	1.74
3258	3.4	60.5	1.44
3259	3.6	53.1	1.51
3260	-5.6	62.9	1.35
3261	18.2	58.0	1.34
3262	4.4	55.8	1.03

第52表　瀬戸B古窯跡群1号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
CT 3251	6.7	58.3	2.31
3252	-2.2	57.9	2.59
3253	8.9	59.7	2.21
3254	6.0	56.2	1.59
3255	6.0	58.5	2.43
3256	2.7	57.3	1.93
* 3257	-37.5	81.4	0.742
3258	1.7	61.3	1.51
3259	6.6	53.0	1.55
* 3260	-9.0	63.8	1.44
3261	10.9	59.2	1.36
3262	3.7	56.0	1.00

*：統計計算の際に除外したもの

第53表　瀬戸B古窯跡群1号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果

	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
*CT	3271	154.1	-69.4	0.351
*	3272	18.2	59.4	0.151
	3273	0.8	62.9	0.506
	3274	6.3	58.4	0.325
	3275	3.9	64.4	0.432
	3276	4.5	48.5	0.200
	3277	-1.9	56.1	0.126
*	3278	5.8	-18.3	0.246
*	3279	-9.5	41.0	0.0552
	3280	10.4	57.9	0.0460
	3281	1.6	59.5	0.592
*	3282	-40.1	-44.1	0.120
*	3283	-116.3	61.6	0.206

*：統計計算の際に除外したもの

第54表　瀬戸B古窯跡群2号窯のNRMの磁化測定結果

	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
*CT	3271	155.0	-69.2	0.337
	3272	14.1	57.1	0.132
	3273	2.4	60.2	0.463
	3274	2.6	59.0	0.308
	3275	-0.7	61.2	0.402
	3276	5.4	46.7	0.173
	3277	8.4	60.3	0.116
	3278	1.9	-4.6	0.0202
*	3279	-11.8	39.4	0.0507
	3280	2.1	57.7	0.0416
	3281	3.5	60.4	0.604
*	3282	-37.4	-53.7	0.140
*	3283	-124.3	62.9	0.180

*：統計計算の際に除外したもの

第55表　瀬戸B古窯跡群2号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果

	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
*CT	3271	156.7	-68.8	0.346
	3272	15.1	56.0	0.116
	3273	1.4	59.5	0.472
	3274	4.1	59.6	0.276
	3275	4.0	60.5	0.372
*	3276	2.4	44.4	0.152
	3277	5.9	60.8	0.112
*	3278	4.7	6.6	0.0125
*	3279	-7.4	37.7	0.0400
*	3280	-14.6	51.0	0.0348
	3281	3.0	59.8	0.581
*	3282	-42.6	-46.0	0.153
*	3283	-121.9	60.8	0.180

*：統計計算の際に除外したもの

第56表　瀬戸B古窯跡群2号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果

	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
*CT	3271	161.2	-68.6	0.317
	3272	11.9	57.2	0.0906
	3273	0.1	59.8	0.331
	3274	2.1	59.4	0.223
	3275	1.3	61.9	0.283
*	3276	11.9	45.4	0.110
	3277	6.1	58.7	0.0788
*	3278	84.8	71.7	0.00682
*	3279	-12.7	29.0	0.0203
*	3280	-2.5	43.9	0.0242
	3281	0.2	59.3	0.473
*	3282	-48.9	-47.1	0.154
*	3283	-120.4	58.2	0.158

*：統計計算の際に除外したもの

第57表　瀬戸B古窯跡群2号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果

	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10⁻⁴ Am²/kg)
*CT	3271	161.2	-68.6	0.317
	3272	11.9	57.2	0.0906
	3273	0.1	59.8	0.331
	3274	2.1	59.4	0.223
	3275	1.3	61.98	0.283
*	3276	11.9	45.4	0.110
	3277	6.1	58.7	0.0788
	3278	4.7	57.9	0.0203
	3279	-1.7	56.9	6.63
*	3280	2.0	52.8	5.21
	3281	1.6	56.9	6.37
	3282	4.1	60.4	7.77
	3283	3.1	61.5	3.03

*：統計計算の際に除外したもの

第58表　瀬戸B古窯跡群2号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果

	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10⁻⁴ Am²/kg)
CT	3291	9.8	59.5	1.26
	3292	-0.4	65.3	1.27
*	3293	6.5	72.2	1.12
	3294	7.6	58.3	1.34
	3295	8.0	60.7	1.28
	3296	7.8	58.9	1.53
	3297	3.9	63.3	1.54
	3298	5.6	60.2	1.52
	3299	4.9	60.0	1.42
	3300	0.9	60.4	1.69
	3301	5.5	58.9	1.47
	3302	1.8	58.1	1.43
	3303	3.0	58.0	1.60
	3304	6.8	58.7	1.53

*：統計計算の際に除外したもの

第59表　瀬戸B古窯跡群3号窯のNRMの磁化測定結果

	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
	CT 3291	8.6	58.4	1.29
	3292	3.7	65.4	1.30
*	3293	3.7	71.3	1.13
	3294	4.6	58.0	1.36
	3295	6.5	60.6	1.27
	3296	5.3	59.0	1.53
	3297	1.5	61.6	1.51
	3298	6.2	60.8	1.54
	3299	6.2	60.3	1.42
	3300	5.4	58.3	1.67
	3301	3.0	57.3	1.47
	3302	0.8	57.7	1.48
	3303	6.0	58.6	1.62
	3304	12.9	60.0	1.46

*：統計計算の際に除外したもの

第60表　瀬戸B古窯跡群3号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果

	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
	CT 3291	9.5	57.7	1.16
	3292	1.7	64.8	1.22
*	3293	2.0	71.1	1.08
	3294	7.3	59.2	1.34
	3295	6.3	59.6	1.21
	3296	9.3	58.6	1.52
	3297	-1.4	64.6	1.51
	3298	3.7	61.6	1.56
	3299	3.3	60.1	1.37
	3300	2.0	58.8	1.69
	3301	2.6	59.9	1.44
	3302	3.0	57.6	1.39
	3303	7.1	58.3	1.54
	3304	11.9	60.3	1.45

*：統計計算の際に除外したもの

第61表　瀬戸B古窯跡群3号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果

	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
	CT 3291	5.9	60.1	1.14
*	3292	-5.1	65.8	1.17
	3293	5.3	69.2	1.00
	3294	8.1	57.5	1.24
	3295	8.4	58.3	1.15
	3296	10.6	59.3	1.37
	3297	3.1	64.0	1.43
	3298	3.7	61.0	1.47
	3299	4.6	59.6	1.32
	3300	1.3	59.5	1.59
	3301	1.3	58.9	1.41
	3302	1.4	59.1	1.37
*	3303	26.4	57.5	1.49
	3304	11.4	60.3	1.36

*：統計計算の際に除外したもの

第62表　瀬戸B古窯跡群3号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果

	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
	CT 3291	7.5	57.3	1.09
	3292	1.1	65.1	1.13
*	3293	5.5	69.2	0.963
	3294	6.7	59.3	1.17
	3295	9.2	58.6	1.12
	3296	7.8	59.1	1.35
	3297	1.0	65.0	1.38
	3298	4.4	61.4	1.47
	3299	6.3	59.7	1.26
	3300	1.9	60.3	1.55
	3301	-1.5	59.5	1.37
	3302	1.5	59.5	1.35
	3303	5.6	58.6	1.44
	3304	10.9	58.9	1.34

*：統計計算の際に除外したもの

第63表　瀬戸B古窯跡群3号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10⁻⁴ Am²/kg)
CT 3311	15.2	66.6	7.27
3312	5.7	61.1	23.8
3313	23.1	65.4	22.8
3314	6.4	65.5	22.1
3315	1.9	64.7	25.4
3316	8.3	60.9	22.3
3317	2.1	62.5	16.8
3318	5.2	64.3	13.9
3319	4.9	62.1	17.0
3320	2.1	63.4	15.0
3321	8.0	61.6	31.4
3322	2.8	63.2	32.0
3323	4.2	64.9	36.6
3324	9.7	65.1	25.0

第64表　瀬戸B古窯跡群4号窯のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10⁻⁴ Am²/kg)
CT 3311	8.2	64.7	7.29
3312	5.6	63.3	2.41
3313	23.7	62.0	22.0
3314	5.9	64.7	22.2
3315	3.3	63.8	25.4
3316	6.4	62.8	22.6
3317	1.1	62.7	17.1
3318	10.7	64.1	14.0
3319	4.0	61.4	17.0
3320	4.6	62.9	15.3
3321	5.2	62.4	32.0
3322	8.0	63.0	32.4
3323	5.0	64.4	35.8
3324	6.4	61.1	25.1

第65表　瀬戸B古窯跡群4号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果

	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10⁻⁴ Am²/kg)
*CT	3311	13.0	68.0	7.52
	3312	5.7	63.6	24.4
*	3313	24.2	65.3	22.9
	3314	5.1	65.5	21.7
	3315	4.3	64.4	25.1
	3316	6.4	63.2	22.9
	3317	3.7	62.4	17.2
	3318	6.0	64.4	14.0
	3319	2.1	61.2	16.9
	3320	5.5	62.9	15.5
	3321	6.0	62.3	31.3
	3322	5.6	63.3	32.4
	3323	6.9	64.5	35.9
	3324	5.5	62.3	25.5

*：統計計算の際に除外したもの

第66表　瀬戸B古窯跡群4号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果

	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10⁻⁴ Am²/kg)
CT	3311	10.6	66.9	7.29
	3312	5.0	63.3	23.5
*	3313	26.4	64.5	22.7
	3314	1.1	64.4	21.6
	3315	1.7	64.4	25.5
	3316	9.1	62.6	22.3
	3317	1.2	62.3	16.9
	3318	2.5	64.3	13.8
	3319	6.2	62.2	17.0
	3320	1.1	63.1	14.8
	3321	4.7	63.0	32.1
	3322	5.8	63.0	31.9
	3323	3.7	65.1	35.9
	3324	8.1	60.4	24.8

*：統計計算の際に除外したもの

第67表　瀬戸B古窯跡群4号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果

	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
CT	3311	9.8	68.2	7.76
	3312	5.1	62.6	25.3
*	3313	27.3	64.9	23.8
	3314	6.5	62.4	22.6
	3315	−2.3	63.8	26.3
	3316	7.7	61.8	23.5
	3317	4.9	62.3	17.4
	3318	6.1	63.9	14.5
	3319	4.9	61.6	17.4
	3320	4.6	63.1	15.8
	3321	4.3	61.9	32.5
	3322	7.6	63.4	33.9
	3323	4.3	64.5	37.1
	3324	5.6	60.9	25.8

*：統計計算の際に除外したもの

第68表　瀬戸B古窯跡群4号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果

遺構名	消磁段階	n/N	D (° E)	I (°)	α_{95} (°)	K	平均磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
1号窯	NRM	11/12	5.6	58.3	2.2	427.8	1.84
	【 2.5 mT	11/12	4.4	58.5	1.8	648.8	1.86 】
	5.0 mT	12/12	4.3	58.8	2.1	439.5	1.82
	7.5 mT	12/12	4.7	58.8	2.2	383.9	1.75
	10.0 mT	10/12	5.1	57.8	1.8	716.6	1.72
2号窯	NRM	7/13	5.7	60.0	3.4	322.4	0.258
	【 2.5 mT	11/13	4.7	59.5	2.2	738.2	0.228 】
	5.0 mT	6/13	5.7	59.4	2.6	683.2	0.216
	7.5 mT	7/13	3.2	59.6	2.5	567.7	0.263
	10.0 mT	6/13	3.7	59.5	2.3	814.5	0.175
3号窯	NRM	13/14	5.1	60.1	1.3	968.8	1.43
	【 2.5 mT	13/14	5.4	59.7	1.4	918.1	1.43 】
	5.0 mT	13/14	5.3	60.1	1.5	740.6	1.39
	7.5 mT	12/14	4.8	60.4	1.7	616.9	1.33
	10.0 mT	13/14	5.0	60.2	1.5	731.2	1.28
4号窯	NRM	14/14	7.0	63.8	1.5	680.8	22.2
	2.5 mT	14/14	7.0	63.2	1.3	903.6	20.8
	【 5.0 mT	12/14	5.2	63.2	0.6	4806.9	22.3 】
	7.5 mT	13/14	4.7	63.8	1.1	1446.3	22.3
	10.0 mT	13/14	5.3	63.1	1.1	1341.6	23.1

n/N：採択試料個数／採取試料個数、　D：平均偏角、　I：平均伏角、
α_{95}：フィッシャーの信頼角、　K：フィッシャーの精度係数.
【　】：考古地磁気データとして採用したもの.

第69表　瀬戸B古窯跡群の考古地磁気測定結果

第２節　瀬戸Ｂ古窯跡群の出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１．はじめに

瀬戸Ｂ古窯跡群は、大府市共和町７丁目に所在し、山茶碗・小皿・片口鉢・壺などの考古遺物から平安時代末期～鎌倉時代後半の操業と考えられている。ここでは、瀬戸Ｂ古窯跡群で使用されていた燃料材を明らかにする目的で、窯体内と灰原から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

瀬戸Ｂ古窯跡群は１号窯～４号窯が同一斜面に並び位置し、１号窯と２号窯の操業は平安時代末期から鎌倉時代初頭、３号窯と４号窯は鎌倉時代後半と比定されている。検討した試料は２・３・４号窯の窯体内と一帯の灰原から出土した合計８試料である。

２．方法

各試料には接合しない複数の破片があり、これらを可能な限り同定し、同一分類群ごとにまとめ収納しなおした。

同定は、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。コナラ節やクヌギ節は横断面の管孔配列が特徴的であるため、実体顕微鏡下で同定した。ただし、識別が困難は破片もあり、これらは走査電子顕微鏡で横断面を拡大し、晩材部の管孔を注意して観察し、同定を決定した（材組織記載参照）。

走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５㎜角以下の大きさに整え、直径１㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、大府市教育委員会に保管されている。

３．結果

同定結果の一覧を、第70表に示した。検出分類群（樹種）は、針葉樹のマツ属複維管束亜属、落葉広葉樹のコナラ節とクヌギ節の合計３分類群であった。

①遺構と検出分類群

炭化材の情報が良好に得られた２号窯では、窯体内と灰原から共にマツ属複維管束亜属・コナラ節・クヌギ節の３分類群が検出された。しかし、出土位置により優占出土した樹種に偏りが見られ、灰原ではマツ属複維管束亜属とクヌギ節が多く、窯体内Ｆ区ではマツ属複維管束亜属が最も多く、焼成室焚口ではコナラ節が多く検出された。

平安時代末期～鎌倉時代初頭の操業である２号窯に比べ、操業時期が新しい（鎌倉時代後半）の３号窯と４号窯からは、コナラ節が少量検出されただけであった。

窯体との関連は特定できないAA区とＩ区の灰原からは、マツ属複維管束亜属とクヌギ節が検出され、

クヌギ節の出土が目立った。

②炭化材の形状や特徴

マツ属複維管束亜属は、比較的大きな材の破片が多く、細い枝材はほとんど見られなかった。材組織の観察からは、アカマツが含まれていた可能性が極めて高い。

2号窯F区のマツ属複維管束亜属には、片面または一部が生焼けで褐色を呈している破片が複数見られた。生焼けの部分は窯底部に接していたためで、湿気除去の目的で窯底に敷かれていた材の可能性を検討する必要があるかもしれない。

コナラ節とクヌギ節は、マツ属複維管束亜属と同様に大きな破片もあるが、直径1～3㎝の芯持ち丸木が多く、細い枝材も多く利用されていた。

クヌギ節には、年輪幅が狭いいわゆるぬか目材が目立ち、30年輪前後が数えられる破片もあることから、かなりの樹齢に達する木も利用されていたと類推される。

2号窯灰原G区(通番29)の炭化材からは、斜め切削痕のある直径2.5㎝のクヌギ節の枝材が検出された。鉈などの道具で、伐採または材の長さを調整していた作業風景が連想される。

また、2号窯の灰原G区からは厚い樹皮が検出された(写真76 6a)。コナラ節とクヌギ節の炭化材が検出されており、これらの樹皮は厚いのでこの2分類群との関連性が考えられる。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

(1)マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 写真75 1a-1c(通番29) 写真76 4c(通番29 写真1cとは別破片) 写真76 4c(通番29 1cとは別破片)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、年輪幅は広いものが多い。分野壁孔は窓状である。放射組織の上下端に有縁壁孔を持つ放射仮道管があり、その内壁には鋸歯状肥厚がある。この鋸歯状肥厚の形状が、アカマツは鋭利な鋸歯状をなすことで、クロマツは比較的ゆるやかな鋸歯状をなすことで区別される。ただし炭化材では、内腔に張り出た肥厚部分は観察しにくいので、アカマツとクロマツを識別するのは困難である。今回の炭化材は比較的試料が良好で、アカマツに似た肥厚形態が観察できた破片もあり、アカマツが利用されていた可能性は極めて高い。

マツ属複維管束亜属は、枝からマツ葉に入る維管束が2本である分類群で、日本産では2葉松類がこれに対応し、アカマツ・クロマツが属する。

(2)コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 写真75 2a-2c(通番18) 写真76

年輪の始めに中型の管孔が配列し急または除々に径を減じ、晩材部では薄壁で孔口が角形の小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと広放射組織がある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワなどが属する。各種の材組織は類似性が高く、材組織から種を特定することは出来ない。

(3)コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 写真75 3a-3c

(通番63)　写真76　5a(通番52)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、その後は厚壁で孔口は円形のやや小型～小型の管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと広放射組織がある。

クヌギ節は暖帯に成育する落葉高木で、クヌギとアベマキが属する。各種の材組織は類似性が高く、材組織から種を特定することは出来ない。

4．考察

平安時代末期から鎌倉時代後半に、主に山茶碗を焼成していた瀬戸B古窯跡群の燃料材樹種を調査した結果、マツ属複維管束亜属・コナラ節・クヌギ節の3分類群が利用されていた事が判った。この3分類群は、灰原や2号・3号・4号窯体内などの出土位置により、出土状況に多少の偏りがみられたことから、特に優占的に利用されていた分類群があったかどうかは、特定できなかった。 強いて言えば、コナラ節は2号・3号・4号窯跡から共通して検出され、2号窯跡ではクヌギ節も多いことから、マツ属複維管束亜属よりもコナラ亜属のコナラ節とクヌギ節が多く利用されていた可能性が高い。3号窯と4号窯からは、マツ属複維管束亜属は検出されなかった。この2基は2号窯より操業時期が新しく、一般的に考えられるようにマツ属の材が多く検出されることも予想されたが、検討試料数が少ないこともあり、操業の時期差による燃料材の変化は不明である。

大府市内のほぼ同時期の窯跡で、当古窯群と同じく猿投山西南麓古窯群に属する、吉田町の神明古窯跡群(木方、1996)や桃山町のガンジ山A古窯跡群(植田、2000)の燃料材調査においても、マツ属複維管束亜属・コナラ節・クヌギ節に対応する分類群が検出されている。神明古窯跡群では、マツ属よりコナラ節とクヌギ節を含むコナラ亜属の比率が高いことが報告されている。ガンジ山A古窯跡群では、マツ属複維管束亜属が多く、コナラ節とクヌギ節ではクヌギ節の方が多いようであった。当古窯群の結果も含め古窯群跡により、3分類群の検出状況に僅かながら差異があるのは、炭化材の残存の違いか、採取方法による差異か、窯ごとに利用樹種の比率が違っていたためか、窯周辺の植生の違いによるのかは不明である。

なお、常滑に近く知多古窯跡群に属し、同じく平安～鎌倉時代する森岡町の森岡第1号窯跡(植田、1999)の燃料材は、マツ属複維管束亜属が多く、そのほかに少数ではあるが常緑広葉樹のアカガシ亜属と落葉広葉樹のクヌギ節・クリ・ミズキ属など複数種類の広葉樹も検出されている。 知多半島に位置する窯跡では、検出される広葉樹材の種類数が多い傾向が知られている(山田、1993など)。従って、帰属する古窯群により燃料材の樹種選択性があったのか、それとも窯周辺の植生と燃料材は関連しているのか、今後も資料蓄積を重ねて検討してゆく必要があると思われる。

引用文献

山田昌久、1993年、日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史、1-242、植生史研究特別第1号。

木方洋二、1996年、出土炭材の樹種同定、127-133、『海陸庵古窯址群　神明古窯址群』、愛知県大府市教育委員会。

植田弥生、1999年、森岡第1号窯跡群出土炭化材の樹種同定、57-62、図版26-28、『森岡第１号窯跡群』、愛知県埋蔵文化財センター。
植田弥生、2000年、炭化物について、124-129、『ガンジ山Ａ古窯跡群』、愛知県大府市教育委員会。

多数：やや大きな破片数15点以上　複数：やや大きな破片数5～15点前後

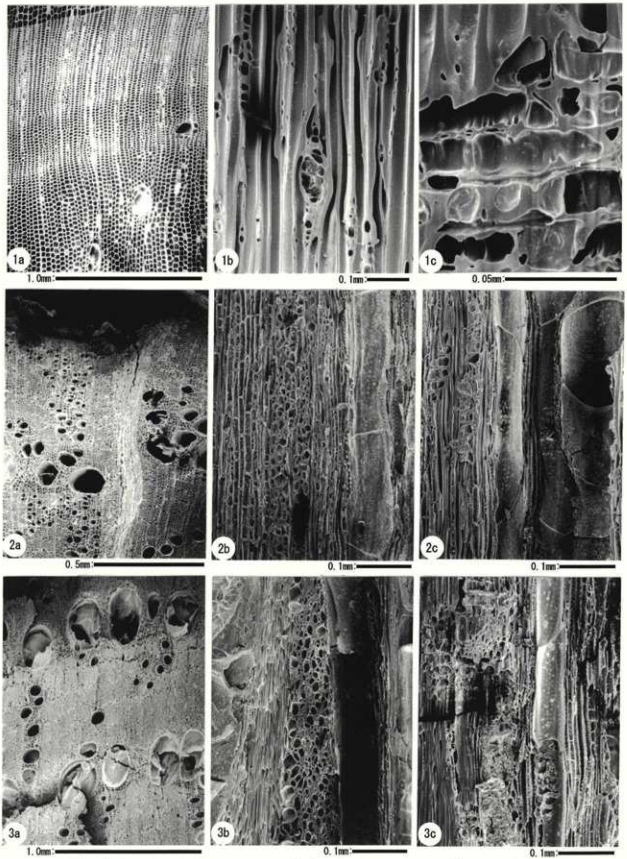
通番	グリット	遺構・出土位置	検出分類群	数量目安	備考(おもな形状など)	操業時期
5		2号窯　F区(炭)	マツ属複維管束亜属	多数	一辺2～4cmの比較的大きな破片多数 直径4cmの芯持ち丸木1点 片面または一部生焼け状態の破片数点	平安時代(末)～鎌倉時代(初期)
			クヌギ節	2	直径1.5cm 芯持ち丸木と丸木破片	
29	19-E	2号窯　灰原G区	マツ属複維管束亜属	多数	一辺2～4cmの比較的大きな破片多数	
			クヌギ節	多数	直径1～3cmの芯持ち丸木が多い 破片も複数あり 3.5cmで約30年輪数ある破片や2.3cmで約25年輪ある破片あり 直径2.5cmで斜め切削痕のある枝材あり	
			コナラ節	3	直径1.2cmで8年輪数ある芯持ち丸木１点 直径2.5cmの破片1点 3.0×1.0cm破片1点	
			樹皮	1点	厚み1.5cm、広葉樹の樹皮	
51		2号窯　焼成室焚口部(炭)	コナラ節	複数	推定直径2～3cm芯持ち丸木の破片 一辺3cm前後の破片	
52		2号窯　焼成室焚口部(炭)	コナラ節	多数	一辺6cm前後の大きな破片多数 直径1.5cm芯持ち丸木1点	
			クヌギ節	1	直径1.5cm芯持ち丸木1点	
50		3号窯　緑ベルト B区(炭)	コナラ節	2点	直径1.5cm で約3年輪ある芯持ち丸木1点 1辺1cmで8年ある破片1点	鎌倉時代(後半)
18		4号窯　C区(炭)	コナラ節	1点	直径1.7cm芯持ち丸木	鎌倉時代(後半)
23		灰原AA区（炭）	クヌギ節	3点	直径2.3cm芯持ち丸木破片1点 推定直径4～5cmの破片2点	平安時代(末)～鎌倉時代(後半)
63		灰原Ｉ区（炭）	マツ属複維管束亜属	3点	1辺2～3cmの破片3点	
			クヌギ節	複数	2cmで32年輪ある破片 ほか破片も年輪幅の狭いぬか目材が多い	

第70表　瀬戸Ｂ古窯跡群出土炭化材樹種同定結果

＋:1～3点　○:複数　●:多数

遺構 / 出土位置	灰原	2号窯			3号窯	4号窯
	AA区・I区	灰原	F区	焼成室焚口	B区	C区
検出分類群	平安時代末期～鎌倉時代(後半)	平安時代末期～鎌倉時代(初期)			鎌倉時代(後半)	
マツ属複維管束亜属	＋	●	●			
コナラ節		＋		●	＋	＋
クヌギ節	○	●	＋	＋		

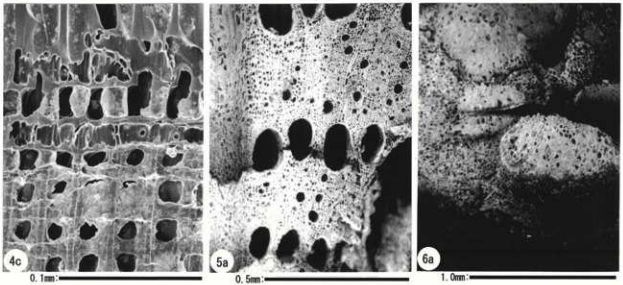
第71表　窯および出土位置の検出樹種比較



1a-1c：マツ属複維管束亜属（通番 29）　2a-2c：コナラ節（通番№18）　3a-3c：クヌギ節（通番 63）

a：横断面　b：接線断面　c：放射断面

写真75　瀬戸Ｂ古窯跡群出土炭化材の走査電子顕微鏡写真〔その１〕



4c：マツ属複維管束亜属（通番29、写真1cとは別破片） 5a：クヌギ節（通番52） 6a：樹皮（通番29）
a：横断面 b：接線断面 c：放射断面

写真76 瀬戸B古窯跡群出土炭化材の走査電子顕微鏡写真〔その2〕

通番29 クヌギ節 bar:2cm

写真77 瀬戸B古窯跡群出土切削痕のある炭化材

第４章　出土陶硯について

第１節　陶硯について

硯といえば、習字の道具のひとつとして広く知られる存在で、その素材は石と一般には思われている。しかしながら、日本の歴史においては石の硯は中世以降に普及していくもので、その前は焼き物の硯が使用されていた。すなわち“陶硯“と呼ばれるものである。

硯は大陸からの渡来品として日本に輸入されたものとされ、文字を認める文房具として古代から文字を操る官人や僧侶などの世界で使用されてきた道具である。硯は石製と陶器製の二つがあり、古墳時代の終わりから奈良平安時代は陶器製が主流で、鎌倉時代以降に石製に代わっていき、安土桃山時代に陶器製が復活するとされる①。古代においては、円面硯・風字硯・形象硯と呼ばれる硯が焼かれ、律令国家の諸役所や古代寺院で使用されたいたことが、平城宮跡・平安京跡・斎宮跡や各地の国衙政庁跡および古代寺院跡から出土している遺物から判っている。硯も正規もののほかに、割れた土器片を硯として転用した事例があることも指摘される②など、硯は焼き物が主流であったといえよう。

このような歴史がある陶硯については、研究の端緒をつけたのは内藤政恒氏③である。１９８０年代には石井則孝氏④、楢崎章一氏⑤や横田賢次郎氏⑥が陶硯の分類の視点や文房具のとしての観点から陶硯に関する研究論文が公表された。さらに五島美術館が『日本の陶硯』⑦と題する展覧会を行い、日本各地から約 400 点の陶硯（一部石製を含む）が集められ、その図録は会期中に完売するなど、一時期活況を呈していたようである。その後、１９９６年には斎宮歴史博物館が企画展「古代の硯」⑧を開催し、２００３年には奈良国立文化財研究所が「古代の陶硯をめぐる諸問題」⑨を発表するなどしている。他方、遺跡の調査報告書には陶硯の出土例がたびたび報告されているが、本遺跡の報告に関連する中世以降の長方形の陶硯として、特筆すべきは１９８７年に愛知県武豊町の中田池古窯⑩で出土した紀年名をもつ陶硯の存在である。鎌倉時代中期の年号が刻まれた中田池古窯出土陶硯については、中世常滑窯研究者はもとより、中世史の文献史学研究者からも注目された出土品である。中世常滑窯では、この陶硯の年号を指標に新しい中世常滑焼の生産地編年の改定が試みられ⑪、全国各地で出土する中世常滑焼の年代確定に寄与している。またこの硯には年号だけでなく、人名に加えて花押までが刻まれ、窯業を統括する人物か製品を発注した人物かなど様々な点に分析を加えられる素材を提供してくれた稀有な出土品としても受け止められている。また、愛知県東浦町の梨ノ木Ｂ古窯群では、出土品ではないが、「是日」とヘラがきされた硯が採取されていることが報告されている⑫。その他、どの地域の窯の焼成品かは不明であるが、「永仁二年三月」の銘文を裏面にもつ陶硯が展覧会に出品され⑬、岡山市の小松山遺跡（集落遺跡）では「長寛季二月十二日」という平安後期の年号が裏面に刻まれた陶硯が出土していることが速報され⑭、序々に資料が積みあがってきている。

註

①橘崎彰一「中部地方南部出土の陶硯」（五島美術館『日本の陶硯』　1978年）、天野秀昭『企画展　古代の硯』（斎宮歴史博物館　1996年）

②玉野時雄「転用硯考～墨書土器研究への一考察～」（滝口宏先生古稀記念考古学論集編集委員会編『滝口宏先生古稀記念考古学論集　古代探叢』早稲田大学出版部　1980年）

③内藤政恒『本邦古硯考』（養徳社　1944年）

④石井則孝「日本古代文房具史の一面～陶硯について～」（滝口宏先生古稀記念考古学論集編集委員会編『滝口宏先生古稀記念考古学論集　古代探叢』早稲田大学出版部　1980年）

⑤橘崎彰一「日本古代の陶硯～とくに分類について～」（『考古学論考』平凡社　1981年）

⑥横田賢次郎「福岡県内出土の硯について～分類と編年に関する一試案～」（『研究論集』9　九州歴史資料館　1983年）

⑦これは五島美術館が1978年9月30日から11月5日の会期で開催した「特別展 文房具シリーズ 2」の図録として刊行された。

⑧第4章第1節の註①の文献

⑨副題として「地方における文書行政をめぐって」が付けられているが、これは2003年3月13・14日開催の古代官衙・集落研究会の研究集会の報告を再編したもので、吉田恵二「陶硯研究の現状と課題 」の他に8本の論文が掲載され、主に古代における陶硯研究の到達点をまとめたもの。

⑩武豊町教育委員会『中田池古窯址群　その1』（1990年）の第9章「考察」、武豊町教育委員会『中田池古窯址群　その2』の第10章「まとめ」（1992年）

⑪永原慶二篇『常滑焼と中世社会』（小学館　1995年）

⑫『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』（愛知県教育委員会　1999年）、『新編東浦町誌』3　原始古代中世（東浦町役場　2004年）

⑬『日本の陶硯』277番の陶硯

⑭岡山市埋蔵文化財センター「収蔵品紹介　第43回」（岡山市埋蔵文化財センターホームページより）

第２節　愛知県および周辺県の出土中世陶硯

古代の陶硯については、官衙跡や寺院跡から出土例が多いことはすでに触れたとおりである。中世についてはどうであろうか。すべての報告書にあたったわけではないが、愛知県内に限定した場合、管見に入っているだけで31点あることが分かった。この表に取り上げた陶硯は時代としては平安時代末期から室町期に中世山茶碗窯で生産、または中世の消費遺跡で出土したと報告された硯である。硯の種類としては長方硯系・風字硯系・四葉硯の３種類が存在している。これを生産年代から便宜的に“中世陶硯”と呼んでおく。以上を表にしたものが、第72表の「東海地方出土中世陶硯一覧表」で、位置関係を図示したものが第65図「東海地方出土中世陶硯分布図」である。

遺跡の調査数によるが、遺跡の種類からみた場合、生産遺跡からの出土数が圧倒的に多い。窯業遺跡からは20点、官衙跡や寺院跡すなわち消費遺跡からは８点、その他（出土地不明）３点あることが確認できた。窯業地区で分けると、猿投窯で12点、常滑窯で10点、瀬戸窯で４点、渥美窯で１点、不明４点を抽出することができた。また美濃須衛窯や東濃窯がある岐阜県では窯跡から14点を発見し、湖西窯のある静岡県西部では４点を出土例があることが分かっている。これらの長方硯を寸法的にみると、平均で長さ10.80㎝・幅6.63㎝・厚さ（堤防を含む）2.14㎝という値になる。49点をサイズの分類表にまとめてみると、第72表になり、長さは９～11.9㎝、幅は５～8.9㎝、厚さは1.6～2.5㎝のところに集まっている。これが標準的な大きさとなろう。また縦横の比率は、平均値で1.55なので、これに近いものがプロポーションとしてはバランスが取れており、６中田池Ａ地点第１号窯・９梨ノ木Ｂ古窯群・48下津北山遺跡２がそれと同じか近いものである。

愛知県のうち尾張地方は尾張国で、言わずと知れた古代からの陶器生産国として全国的に有名な国で、猿投窯・瀬戸窯・常滑窯などを抱えている。三河国には渥美半島があり、ここも東大寺窯のアラコ窯をはじめ古代から中世にかけて多くの窯が操業していた地域である。窯業遺跡が膨大に上ることもあって、その発掘調査例も多数に上ることが出土例の多さにつながっている。資料として31点あるが、その形状は楢崎氏や横田氏の硯の分類に従えば、長方硯系が圧倒的に多く、29点を数える。代表的なものをあげると常滑窯は鐘場御林古窯（常滑市）①・中田池古窯（武豊町）②・梨ノ木Ｂ古窯群（東浦町）③、猿投窯は八事裏山１号窯（現在はＨ－Ｇ－83～86・88・91）④である。以下個々の出土品を検討していくこととする。

常滑窯⑤

常滑窯で焼かれた陶硯の資料は10点あることはすでに述べたとおりである。その出土地は、福住54号窯（東浦町）⑥・鐘場御林古窯（常滑市）・中田池Ａ地点第１号窯（武豊町）・瀬戸Ｂ古窯群（大府市）・梨ノ木Ｂ古窯群（東浦町）・伝半田池周辺採集品（常滑市）⑦・桧原山古窯（常滑市）⑧・名古屋市博物館所蔵品（出土地不明）⑨・愛知県陶磁資料館所蔵品（出土地不明）⑩で、常滑市が３点、大府市が１点、東浦町が２点、武豊町が１点、出土地不明で常滑窯の焼成品と目されるものが２点である。

１．福住54号窯〔現：東仙台Ｂ古窯群〕（第66図１）

焚口近くの窯前庭部で出土。完形品ではなく、陸の部分が一部の資料である。報告書の実測図（推定）から長方硯と推定され、縦 15 ㎝、横 5.5 ㎝の寸法をもつ陶硯と考えられている。なお、遺跡名が調査時の名称が東仙台Ｂ古窯群に改名されていることに注意。

2．伝半田池周辺採集品（第 66 図２）（写真 79，１）

半田市と常滑市とにまたがる半田池周辺で採集されたと伝わる陶硯である。窯跡から掘り出されたものかは今となっては分からないのが残念である。本資料は完形品であるが、長さ 10 ㎝を越えない小ぶりで細長いタイプの長方硯である。陸から海へはスムーズに整形され、縁の堤防も幅があるが、背面は硯面より短く、断面でみると逆台形をしている。焼成は良好で、伏せられていたと思われる。

3．桧原山古窯１（第 66 図３）（写真 79，２）

完形品であるが、図のように内側に湾曲し、硯面からみた場合も丸みを帯びており、焼成不良の陶硯と目される。本来は長方硯であったと思われる資料である。なお、この資料は『中田池古窯址群』に掲載されている陶硯とは別物である。

4．桧原山古窯２（第 66 図４）（写真 79，３）⑪

個人採集による陶硯である。『中田池古窯址群』に詳細な記述があるが、それによると、５点ほど重なって出土した内の１点ということである。硯面は灰白色を呈し、自然釉がかぶっている。完形品だが、長さが 10 ㎝に満たない小ぶりな長方硯である。明確に陸と海に分かれておらず、縁の堤防も硯尻は明確でない。成形はやや雑といえようか。

5．鉾場御林古窯（第 66 図５）（写真 79，４）

Ａ地点の灰原から出土した長方硯で、焼成が良好な完形品。縁部の上面に一条のミゾが巡っている。土器の生産地編年で６a 型式（1250～1275）とされる時期の窯である。

6．中田池Ａ地点第１号窯〔現：中田池Ｂ古窯群〕（第 66 図６）（写真 79，５）

１号窯の焼成室から出土した赤褐色を呈した完形品である。裏面の色調の相違から伏せて焼かれたものと判断させている。縦 14.4cm、横 9.0～9.4 ㎝を計測し、管見に入った中で大型の長方硯である。海も陸も削り取り技法で整形され、丁寧に整形されたものである。この陶硯の最大の特徴は、裏面に刻まれた銘文の存在である。銘文は以下のとおりである。

南無文殊支利菩薩
智慧硯也、正見元年
正月二十七日
沙弥尾張口（花押）

この銘文については、常滑窯の生産地編年資料⑫としての利用可能な良質な資料であるとか、窯業生産の統括者に関するもの⑬など様々な議論があるが、今回はそこには触れず紹介するに留めておく。土器の生産地編年で６a 型式（1250～1275）とされる時期の窯である。なお、遺跡名が調査時の名称が中田池Ｂ古窯群に改名されていることに注意。

7．愛知県陶磁資料館所蔵出土地不明品（第 67 図７）（写真 79，６）

出土地は残念ながら不明である。購入により収蔵品となった完形の陶硯で、鎌倉時代の常滑

窯とみなされる。この硯は、小ぶりなもので、細長いタイプである。特徴として陸部に縁の堤防は省略されており、海の部分のみ堤防がある。整形は粗雑さを感じさせ、胎土は砂質が多いことが感じられる。おそらく山茶碗窯での焼成品と目される。裏面に大量の自然釉が掛かっており、焼成は伏せて行なわれたようである。

8．名古屋市博物館所蔵出土地不明品（第67図8）（写真79，7）

出土地不明で同館に購入により収蔵品となった資料で、鎌倉時代中期の常滑窯の製品に分類されている。長方硯の完形品で、全体に黄色褐色気味の色を呈している。裏面はやや焼きが甘い雰囲気がある。堤防が全体に巡っているが、陸と海の境は明瞭ではなく、海への傾斜は少なく、差がわからないほどである。調整は全体的にヘラで行なわれているようである。また裏面の中央は反り気味で、全体的にねじれがある。なお、名古屋市博物館では工芸品（日本陶器）に分類され、収蔵番号は413である。

9．梨ノ木B古窯群（第67図9）（写真79，8）

この陶硯は、発掘調査により出土したものではなく、採取によるものである。硯は暗赤褐色を呈した完形品で裏面の窪みに「是日」の字が刻まれるのが特徴である。陸と海の境が明確で、しっかりとした長方形を成す。裏面はやや中央部でえぐれ気味であるが、丁寧に製作されたものと思われる。

10．瀬戸B古窯群（第71図10）（写真80，1・2・3）

この陶硯は“陸”の部分しか残存していない長方硯の一部である。陸部の中央部に堤防が設けられ、面を2分している。しかも整形は雑である。残存部分ではあるが、寸法は長さ7.8㎝（残存長）、幅8.7㎝、厚さ（外）2.05～2.6㎝、厚さ（陸）1.45～1.6㎝を計測する。ヘラ書きなどの文字はない。裏面に脚は認められない。出土地点や層位からみて平安時代末期から鎌倉時代初期頃のものと思われる。

猿投窯

11．名古屋市千種区田代町唐山出土品（第67図11）㊾

名古屋市博物館に所蔵される猿投窯で焼成されたと思われる陶硯である。海の全部と陸の一部が残存するのみである。焼成は締まっており、裏面と側面各面には緑色系の自然釉がかかっている。また全体に角ばっているが、硯面は丁寧に整形されている。横断面はH型を呈しており、裏面側も硯としたものか、または脚部としたものかは、明確にならない。仮に硯とするならば両面硯となり、珍しい資料と位置づけられる。同様な陶硯は44の尾張国府跡3がある。

12．八事裏山1号窯A窯〔H－G－83号〕（第71図12）（写真81，1・2・3）

12世紀中頃と推定される中世猿投窯の窯業遺跡から出土した硯である。A窯の窯内から出土したものとされる4分の1程度の小破片だが、海の部分であるため、二面硯と想定される硯である。形状も長方形と想定される。整形はナデ跡が見られるのでヘラ削りで、かつ丁寧である。胎土良好。表面の色調は淡灰褐色を呈する。裏面は削ってへこませてあるので、脚が作られた可能性が高い資料である。

13. 八事裏山１号窯Ｂ窯〔Ｈ－Ｇ－84 号〕（第 71 図 13）（写真 81，４・５・６）

Ｂ窯の焼成品とされる出土品であるが、半分欠損し、陸のみが残る二面硯と想定される硯である。形状は長方硯で、陸の中央部に堤防を設けた二面にしている。縁の堤防は陸部末端には設けられていない。やや焼けが甘く、生焼け感があり、黄褐色を呈しているが、胎土は良好である。成形は丁寧で、角は面取りを施している。硯面は滑らかで、ほぼ平らである。裏面は中央部がややくぼんでいるが、脚と見なすまでには至らない。報告書では「風字硯ないしその型式を踏襲したもの」とされる資料である。

14. 八事裏山１号窯Ｃ窯〔Ｈ－Ｇ－85 号〕（第 67 図 14）

Ｃ窯の窯内から検出された完形品である。形状は長方形であるが、硯面上部の断面は逆台形である。陸中央部はやや高く、堤防に近づくにつれて低くなる。堤防は幅が広いが、陸部末端には設けられていない。全体に筋状のミゾのようなものが不規則についているので、ヘラで成形され、面が滑らかにされている。また一部では角の面とりが施されている。裏面は削られて、脚を作り作り出している。土も良好であるが、やや生焼け感がある。

15. 八事裏山１号窯Ｄ窯１〔Ｈ－Ｇ－86 号〕（第 67 図 15）

Ｄ窯の上にあった灰層から出土したとされる。本資料は２個体が焼成時の自然釉で完全に癒着してしまっている。上下には自然釉部分が剥がれた跡が残るので、実際には４個体以上で窯詰めされたと思われる。２個体とも完形品でなく、海部が欠損している。残された部分から長方硯と思われ、硯面は堤防が施されているが、硯尻は省略される。また裏面中央部が削られ、脚部を造り出しているのが伺える。それぞれに角が面とりされ、成形も丁寧さが感じられる。ともに、同一形状と判断される。割た面から胎土を観察すると砂分は少なく良質な土を生地にしている。

16. 八事裏山１号窯Ｄ窯２〔Ｈ－Ｇ－86 号〕（第 67 図 16）

Ｄ窯の窯内から出土したとされる。欠損部分が多く、残された部分から硯と判断され、形状は長方硯の一部と目される。胎土は良好で灰色を呈している。

17. 八事裏山１号窯Ｅ窯〔Ｈ－Ｇ－88 号〕（第 67 図 17）

Ｅ窯の所属する出土品とされる。形状は長方硯であるが、一部が欠損している。欠損面の状態から焼成中にハゼが原因と思われる。周囲の堤防は全面に巡っており、堤防上部に一条のミゾを巡らしている。成形にはヘラが使用されているが、やや粗雑さを感じさせる。海と陸の境は明瞭ではない。裏面は中央部をくぼませ、脚を意識したつくりとなっている。胎土は良好であるが、焼成時の降灰がひどかったためか、表面に灰が多く付着している。表面は灰色を呈している。

18. Ｇ－20 号窯〔Ｋ－Ｇ－20 号窯〕（第 67 図 18）[19]

三好町の黒笹地区所在の中世猿投窯から出土した長方硯である。硯面の表面が所々欠落しているがほぼ完形の資料である。ヘラで削り出され、調整されており、周囲に明確な堤防を設けている。陸と海の境に堤防が作り出されており、これにより海と陸が明確に分離されている。全体的に造りは粗雑さを感じさせるものである。１３世紀中頃と位置づけられる資料である。

瀬戸窯

19. 細倉東窯[29]

細倉東窯は瀬戸市五位塚山中央（瀬戸区東部）にある１３世紀代に比定される瀬戸窯の遺跡である。『瀬戸市史』陶磁史編１[30]によると「無釉の陶硯を細倉の窯では一時造った」と写真とともに記述がある。この写真は『日本の陶硯』と同じもの。所蔵は出光美術館である。写真によると、完形品でなく、海の部分を含めて三角に欠損している。縁の堤防は作られているが、硯尻では確認できない。また左右の陸中央部が膨らんでいたりするなど、やや造りに粗雑さを感じさせる陶硯である。

20. 鷲窯１（第 67 図 20）[31]

鷲窯は室町時代の古瀬戸の窯跡である。完形品でないが、残された部分から形状が確認できる資料である。報告書では長方硯と認識している。裏面の中央部が大きく凹み、両側が脚となる。風字硯のように脚をもつタイプの長方硯である。特徴として陸下端の縁と脚部正面に真ん中と両端に３個の菊花が、脚部側面にも２個と３個の菊花が見られる点である。文様が施されているという意匠面でも注意すべき陶硯といえよう。

21. 鷲窯２（第 67 図 21）

完形品ではないが、残った部分から長方硯と思われる資料である。遺跡報告書によると、「硯の上方部分の海から墨堂になる部分で、焼成中に膨張し破裂した」と記載されるように、状態は決して良好ではない。胎土には白い粘土が縞模様上に入り、上面全体に降灰がみられるので、焼成時は硯面が上を向いていたようである。おそらく膨張破裂時に位置が変化したことが影響したことを考慮する必要があると思われる。

22. 鷲窯３（第 67 図 22）

同じく、室町時代の陶硯で、実測図から長方硯と目される。完形品でなく、右上半部分が残る。縁から裏面の上端に灰釉が施されている資料である。

渥美窯

23. 旧田原町内古窯〔遺跡名不明〕（第 67 図 23）[32]

『日本の陶硯』や植崎論文で紹介かれた陶硯で、完形品である。厚さが３cm あり、他の長方硯と比較して肉厚の感がある。渥美窯で管見に入った唯一の資料であるが、現時点でどの遺跡から出土したものかを特定するに及んでいない。

次に、隣県の岐阜県では長方陶硯系が 11 点、四葉硯が２点、形態不明が１点で、長方陶硯系が多い。出土地は各務原市の美濃須衛窯で５点、多治見市や土岐市の東濃窯で９点ある。

東濃窯

24. 北小木萱原７号窯〔総称：北小木古窯跡群〕（第 68 図 24）[33]

長方硯の一部が残る資料である。成形は全面をヘラで行っている。硯面には周囲を幅5㎜の堤防が囲み、平らな平面があるので、陸部の破片と思われる。裏面は脚を作り出した形跡は認められない。

25. 神明洞1号窯〔総称：北小木古窯跡群〕（第68図25）㉕

硯面の一部が残る陶硯であるが、欠損部分が多く全体はわからない。報告書では長方硯の一部を見なし、残存部分は陸部と推定している。鎌倉時代に比定される。

26. 大谷洞19号窯〔総称：北小木古窯跡群〕（第68図26）㉖

陸部のみが残る長方硯の一部である。周囲に堤防が巡らされており、成形はヘラにより行われている。裏面は降灰が確認されるので、伏せた状態での焼成であろう。また脚は存在しない。鎌倉時代と推定される。

27. 大藪西山2号窯（第68図27）㉗

表面採取で確認された完形品の長方硯である。形状は細長く、硯面の周囲に堤防を設けるが、硯尻は消滅している。裏面は中央部が凹んでいるので、脚を作り出していると思われる。

28. 窯洞1号窯跡（第68図28）㉘

小型の長方硯の完形品で、やや細長いものである。成形は全面に対してヘラ状器具で行われている。周囲に堤防を巡らし、その上面には幅1㎜程度の1条の溝が刻まれている。海は浅く、陸との境は明瞭ではない。裏面に脚の存在は確認できない。硯面に降灰が認められるので、伏せて焼成されたようではない。鎌倉時代と比定される。

29. 丸石古窯11号窯1（第68図29）㉙

報告書では四葉硯と命名された硯で完形品である。形状が上から見た場合に四つ葉形に成形されていることからこの名が付けられたと思われる。中世ではほとんど類例をみない陶硯である。縁に堤防はあるが、裏面に脚はない。出土位置は分焔柱基部の焼成室側である。

30. 丸石古窯11号窯2

破片のみの資料であるが、報告書掲載写真からみて、破片が硯の左側で、その形状から風字硯と思われる。出土位置は物原である。

31. 丸石古窯8～11号窯3（第68図31）

海の一部が残る長方硯の資料である。底部も剝がれてわからない。周囲の堤防の上部に縦方向に3条、横方向に4条の線刻が施されている。

32. 丸石古窯8～11号窯4

報告書では2㎝程度の破片と記すのみだが、器種は硯とする資料である。形状などは不明である。

美濃須衛窯

33. 船山北3号窯1（第71図33）（写真81，7・8・9）㉚

3号窯灰原からの出土した長方硯片であるが、完形品ではない。中央に堤防が設けられて左右に1面ずつある二面硯である。硯面には周囲を堤防がめぐり、中央部にも同じ幅の堤防で区

切られる。堤防上面には1から2本の細い沈線が刻まれている。整形は板状の粘土から指ナデで大まかに行ない、その後ケズリ調整が丁寧にされ、面取りが四つ角に施されている。裏面には左右に削り込みがあり、それにより3本の脚を作り出している。側面は逆台形に仕上げられている。胎土は良で、焼成も良である。年代は鎌倉時代初期と推定されている。

34. 船山北3号窯2（第72図34）（写真82，1・2・3）

3号窯灰原からの出土した長方硯片であるが、残存部は右側1面で、陸部のみである。周囲の堤防上面に1本の細沈線が刻まれている。裏面は中央部を削り、脚を生み出している。四つ角は面取りされ、しかも乾燥後に磨きをかけられたように自然な丸みがついており、丁寧な仕上げを感じさせる。裏面の削り幅などの類似点から報告書では二面硯と推定している。鎌倉時代初期と比定されている。

35. 船山北3号窯3（第72図35）（写真82，4・5・6）

3号窯灰原からの出土したやや焼成の不足な長方硯片であるが、残存部は右側1面で、陸部と海部まである。34と同じく周囲の堤防上面に1本の細沈線で装飾されている。硯尻では堤防が陸部とほぼ同じ高さになっている。裏面は中央部を削り、脚を生み出している。作りは非常に丁寧である。33との類似点から報告書では二面硯と推定している。鎌倉時代初期と比定されている。

36. 船山北3号窯4（第72図36）（写真82，7・8・9）

3号窯灰原からの出土した長方硯片であるが、中央部の堤防は残っており、二面硯である。おそらく硯面の周囲に堤防がめぐっていたと思われ、残っている堤防上面に1から2本の細沈線が刻まれている。胎土は小石が混ざるが、良好である。裏面も33と同様に左右に削り込みがあり、3本の脚が存在する。年代は鎌倉時代初期と推定されている。

37. 船山北3号窯5（第69図37）

3号窯灰原からの出土したほぼ完形の長方硯である。寸法的には左右の長さにさほどの違いがなく、一見すると正方形とも思われる縦横のバランスである。他の船山北3号窯の陶硯と違い、1面の硯である。堤防は周囲を巡っているが、上面には装飾は存在しない。だが、側面にはわずかに線刻が三条左右側面と前方側面に確認される。胎土は精緻で最良、焼成も良く、締まっている。裏面は削り込みによる脚が作り出されているが、丁寧な作業がされている。鎌倉時代初期と比定されている。

東隣の静岡県では湖西市と菊川市で出土事例がある。前者は湖西窯で2点、後者は東遠諸窯の菊川市皿山と思われ地区で2点、いずれもが長方硯系である。

湖西窯

38. 東笠子第44地点Ⅶ号窯1〔総称：山口第17地点古窯跡〕（第69図38）㉘

窯内からの出土した陶硯で、形状は長方硯で完形品である。焼成は良で、整形は丁寧である。硯面には3方向に堤防があり、硯尻にはそれがない。海と陸との境はなく、傾斜により深くな

った部分が海となる。この硯の特徴は、硯面の堤防上面には、実測図にもあるように草花文がヘラ書きされていることである。東海地方で収集した事例でも鴾古窯（瀬戸市）以外に類例がない陶硯であり、特異なものと言えよう。発注者に貴族層を想定できるのではないかと思われる。１２世紀後半の製品と思われる。

39. 東笠子第44地点Ⅷ号窯２〔総称：山口第17地点古窯跡〕（第69図39）

38と同じく窯内からの出土した陶硯で、形状は長方硯で完形品である。焼成と整形のレベルはともに良である。硯面には３方向に堤防があり、陸部末端にはそれがないタイプになる。特徴として堤防上面には格子文と四方の側面には唐草文がヘラ書で刻まれている点である。また裏面はもう一面の硯面が造られていることである。つまり両面硯といえよう。38に同じく１２世紀後半の製品と想定される。

東遠諸窯

40. 長者原窯１号窯〔現：皿山古窯〕（第69図40）

この窯は静岡県菊川市（旧菊川町）に所在する窯業遺跡㉙で、灰釉陶器を焼成した窯とされる。報告書はないが、楢崎論文㉚・『日本の陶硯』・『陶器全集』㉛などに写真や図面が掲載されている陶硯で、長方硯の完形品である。硯面の周囲に堤防を設けているが、硯尻は省略されている。裏面は中央部が凹んでいるので、脚を作りだしたものと思われる。なお『静岡県史』㉜では皿山古窯と呼ばれている。

41. 長者原窯３号窯〔現：皿山古窯〕（第69図41）

40と同じく、『日本の陶硯』・『陶器全集』・内藤論文㉝に写真が掲載されている陶硯である。それによると、１号窯のものと同じく長方硯の完形品である。硯面の周囲に堤防を作り出しているが、硯尻は省略される。裏面には脚を設けている。

以上、中世日本において主要な陶器生産地である常滑窯はじめ東海地方各窯での出土品について簡単に触れてきたが、中世以降の陶硯は長方硯が圧倒的に多い。その中でも瀬戸窯の鴾窯１（瀬戸市）・湖西窯の東笠子第44地点Ⅷ号窯（湖西市）のように硯の文様の意匠を凝らしたものや硯裏面を削りこんだりして脚部を造りだして古代の風字硯の遺風を感じさせるもの、さらに東濃窯の丸石古窯11号窯（土岐市）の２例のように四葉硯のように長方硯とは異なる形状のものも焼成されていたことが確認できたことは、板状の長方硯が主流の中世陶硯にあって注意すべき点と思われる。

次に、現時点で管見に入った消費遺跡での出土事例を紹介し、陶硯の供給先を考えておくこととする。消費先として尾張国の国衙所在した稲沢市の国府跡という官衙遺跡から４点、集落遺跡である玉ノ井遺跡（名古屋市）から１点、同じく集落遺跡の下津北山遺跡から３点確認されている。下津北山遺跡は旧国鉄稲沢操車場跡に眠っていた遺跡で、尾張国府跡や国分寺跡・東畑廃寺など国の中心機関が集まっていた場所と思われる。

官衙跡

42. 尾張国府跡１㉜

尾張国府が所在した稲沢市稲島町東狭間地区から出土した資料である。二面硯で使用痕があるものとして報告されるものだが、時代比定は不明である。

43. 尾張国府跡２（第 70 図 43）㉝

国府跡のある稲沢市国府宮町宗形から出土した陶硯片で、中世陶器に分類される。約３㎝程度の破片だが、長方硯と推定される。報告書によると、内面に朱が付着しているとあり、使用実態が分かる資料である。

44. 尾張国府跡３（第 70 図 44）㉞

国府跡から出土した長方硯の隅片で、約４㎝弱の資料である。硯面の側面には陰刻文が確認され、この部分に灰釉が掛けられるとする。実測図面にあるように裏面も使用可能ではないかと報告されている。このタイプは猿投窯出土と推定される 11 名古屋市千種区田代町唐山出土品（名古屋市博物館所蔵）と似ている。年代として平安時代後期が比定される。

45. 尾張国府跡４（第 70 図 45）㉟

国府跡の遺跡から出土した長方硯片である。硯面の左隅で、縁に堤防が施されている。裏面は反りがあると報告されているので、脚の存在が想定される。成形はヘラが使用されたと思われる。硯面に墨痕跡、側面や裏面に降灰が認められる。

集落遺跡

46. 玉ノ井遺跡（第 70 図 46）㊱

名古屋市熱田区に所在する集落遺跡から破片であるが、長方硯と思われる陶硯が１点出土したことが報告されている。硯面の周囲に堤防があり、その上面に２条の溝が刻まれている。また硯面は使用による摩滅が確認される。

47. 下津北山遺跡１（第 70 図 47）㊲

遺跡内の土坑内の下層からの出土で、他の土坑から出土した破片と接合して完形を成している。長方硯で、硯面は周囲に堤防を設けるが、硯尻は省略されている。裏面は中央で凹ませて、脚を作り出している。断面は逆台形を呈する。成形はヘラ削りで、滑らかに仕上げられている。また硯面は使用による摩滅が顕著で光沢も確認される。産地は猿投窯とし、１２世紀後半から１３世紀初頭が使用期間と推定する。

48. 下津北山遺跡２（第 70 図 48）

遺跡内の土坑内の中層からの出土。わずかに硯面右隅が欠損する程度の長方硯である。硯面の周囲に堤防が巡り、47 と 49 とは形状がやや異なる。成形・調整はヘラを使用している。裏面は平らで脚はなく、海と陸の境も明瞭はない。色調は黄色がかった灰白色系で、胎土は質の高いものであるが、焼成はややあまい部類に属する。硯面全体に墨痕が残る。猿投産とされ、１２世紀後半から１３世紀初頭に使用されたものと推定している。

49. 下津北山遺跡３（第 70 図 49）

遺跡内の土坑内の中層からの出土で、完形品である。全面がヘラで削られて調製されているが、やや粗雑さが感じられる。形状は硯頭部に丸みの少ない平頭風字硯とされ、裏面に脚が2箇所取り付けられた跡がある。硯面は摩滅が顕著で、光沢が確認される。色調は灰褐色とされ、細い礫がわずかに混入する胎土である。焼成地は猿投窯とし、12世紀後半から13世紀初頭に使用期間が特定されると結論付けている。

50. 斎宮跡（87次）（第70図50）⑩

全体で半分が欠出するが、周囲に堤防が巡っていると思われる長方硯である。硯面はヘラケズリの痕、底面にはナデとオサエ、側面にはヘラケズリがみられる。胎土は非常に緻密で、色調は灰白色である。出土位置と層位から鎌倉期の遺物と想定される硯であるが、産地は不明である。

51. 吉美中村遺跡D地区（第70図51）⑪

集落跡と主に、その性格を「窯で焼成した製品の選別場ないしは窯業関連の施設の他に、何らかの祭祀を行っていた」と想定される遺跡からの出土で、出土地点はD地区の溝からである。完形品ではなく、半分残存の資料で、部分的に欠損がある。だが、焼成は良で、整形の程度もよい。その特徴は硯裏面に図面にあるように、2個のヘラ書きが刻まれていることである。鎌倉幕府執権北条氏の家紋「三つ鱗」と想定されるヘラ書きで、出土碗の型式から13世紀中頃の長方硯と比定され、湖西窯のものと判断される。ヘラ書きについては、実際に北条氏との関係が証明できれば、窯業生産の生産関係に推察する良質な資料となろう。

以上、消費地での出土例について述べてきた。10例の内、44・47・48・49の4点は猿投窯、51の1点は湖西窯で生産された陶硯と思われ、他の5点の生産地は不明である。常滑窯の製品が消費地で確認された出土事例は未確認である。猿投窯焼成品の供給先の一つに尾張国中心部が含まれることはこの陶硯の事例から明白で、今更指摘するに及ばないことであろう。だが、生産地の常滑窯で長方硯が10点、東濃窯や美濃須衛窯で14点が焼かれている事実があるので、それぞれの消費先が確認されることが期待される。今後留意していきたい。

ここで取り扱った長方硯については、風字硯から石硯に移行する過渡期の硯とみる説⑫と長方形石硯を模倣して生産されたとみる説⑬が提起されているものである。狭い範囲ではあるが、日本の主要窯などでの出土事例を集めた結果から考えると、両説とも可能性があると思われる。生産者ないし発注者が硯を必要とした時に、参考とした硯が存在し、それを真似ることで硯を作ったことによるのではないか。また古代の円面硯や風字硯は形状的に複雑で簡単に整形できるタイプの硯ではない。古代以来の形状が中世で見られないことから、硯の需要が増したと仮定すると、簡単かつ手早く整形することが可能な形状へと変化したためではなかろうか、とも想像できる。いずれにしても今後も事例を集めるなかで、成案を得たいと考える。

註

①常滑市教育委員会『鍛場・御林古窯址群』(常滑市文化財調査報告15集　1985年)

②武豊町教育委員会『中田池古窯址群　その1』(武豊町文化財調査報告書第8集　1990年)

③『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』(愛知県教育委員会　1999年)、『新編東浦町誌』3原始古代中世(東浦町役場　2004年)

④名古屋考古学研究会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯発掘調査報告」(『古代人』38　1981年)、名古屋考古学研究会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯第二次発掘調査報告」(『古代人』41　1983年)、名古屋考古学研究会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯第三次発掘調査報告」(『古代人』43　1984年)、　名古屋考古学研究会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯第四・五次発掘調査報告」(『古代人』47　1986年)、名古屋考古学研究会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯第六次発掘調査報告」(『古代人』48　1987年)

⑤赤羽一郎氏は『常滑焼』(考古学ライブラリー23　ニュー・サイエンス社　1984年)の中で、知多半島では7例の陶硯出土例が知られると指摘されているが、その具体名は明示されていない。また、『半田市誌』中世編には、釜山第2号窯で発見された陶硯が実測図で掲載されていることを脱稿後に知りえたが、十分な調査と現物資料の確認ができなかったので、紹介するに留める。この陶硯は実測図から推測するに、風字硯系の形状をしている。なお、釜山第2号窯が現在どこの遺跡に該当するのか分からないが、釜山第5号窯が常滑市内にあるの、おそらくこの付近に存在した遺跡を想像される。

⑥新巽ケ丘団地関係遺跡調査団『福住古窯址群』(1978年)。現在遺跡名称は変更され、東仙台B古窯群が新しい名称である。

⑦知多半島中央部で半田市と常滑市との境にある池付近の窯跡からの採取品である。

⑧発掘調査はされておらず、個人採集品が常滑市に寄贈されたものである。

⑨名古屋市博物館には2点長方硯が所蔵され、収蔵品目録に掲載されている。8は購入によるもの。

⑩愛知県陶磁資料館には1点長方硯が収蔵され、『愛知県陶磁資料館収蔵品図録』Ⅱ(1998年)に掲載されている。平成3年度に購入により収蔵。

⑪写真は常滑市誌編さん委員会『常滑窯業誌』(1974年)・『日本の陶硯』(1978年)・常滑市教育委員会『三郎谷第1号窯』(1982年)にある。

⑫赤羽一郎・中野晴久「中世常滑焼の生産地編年」(『常滑焼と中世社会』小学館　1995年)

⑬石井進「中世考古学と歴史学」(『常滑焼と中世社会』小学館　1995年)

⑭この陶硯は五島美術館の『日本の陶硯』にも掲載されている。

⑮三好町教育委員会『愛知大学用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(1988年)

⑯この窯跡は発掘調査されていない。

⑰瀬戸市史編纂委員会　1969年刊行

⑱財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター『鴛窯跡』本文編・遺物図版編・写真図版編(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第109集　2005年)

⑲五島美術館『日本の陶硯』に掲載された写真には出土地をマーキングした部分が写っている。内容は「田原□□古窯跡群A地点」とあるが、遺跡名特定には至っていない。紹介された時点では愛知大学所蔵となっている。

⑳多治見市教育委員会『北小木古窯跡群発掘調査報告書』(多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第28号　1991年)

㉑ 多治見市文化財保護センター『北小木～北小木古窯跡群第２次発掘調査報告書』(多治見市教育委員会　多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第66号　第一分冊　2001年)

㉒ 多治見市文化財保護センター『北小木～北小木古窯跡群第２次発掘調査報告書』(多治見市教育委員会　多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第66号　第二分冊　2001年)

㉓ 多治見市教育委員会『大藪西山１・２・３号窯発掘調査報告書』(多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第59号　1998年)

㉔ 土岐市教育委員会『窯洞１号窯跡発掘調査報告書』(土岐市教育委員会　2003年)

㉕ 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター『丸石古窯跡群』(岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第84集　2003年)

㉖ 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター『船山北古墳群・船山北古墳群・船山北遺跡』(岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第52集　2000年)。陶硯が出土しているのは船山北３号窯で７個体分確認されている。そのうちの５点が報告書に実測図と写真が掲載されている。今回は報告書掲載分を紹介し、一覧表に記載および分布図に図示した。

㉗ 湖西市教育委員会『山口第17地点古窯跡発掘調査報告書』(静岡県西部農林事務所・湖西市教育委員会　湖西市文化財調査報告第26集　1991年)

㉘『瀬戸市史』陶磁史編１には旧菊川町の長者原にあった古窯についての記述がある。それによると「東海道線菊川駅の東方３kmほどして、そこの丘陵地帯を登った奥の長者原は、県下でも大きいことで名のある茶樹園で、入った左手の丘陵あたりが西原と呼び、これに続く長者原の東南の丘のあたりを皿山という。どちらにも斜面に窯址は点在するが、皿山の東南端から北にかけて近距離に窯址が連続している」というように具体的な記述がある。現在は「皿山古窯」と呼称されている。

㉙ 楢崎彰一「日本古代の陶硯～とくに分類について～」(『考古学論考』平凡社　1981年)

㉚ 楢崎彰一「猿投窯」(『陶器全集』平凡社　1966年)

㉛『静岡県史』資料編３　考古３(静岡県　1992年)

㉜ 内藤政恒「調度」(『新版　考古学講座』７　有史文化下　雄山閣　1970年)

㉝ 稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書(Ⅱ)』(稲沢市文化財調査報告ⅠＸ　1980年)

㉞ 稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書(Ⅳ)』(稲沢市文化財調査報告ＸＶ　1982年)

㉟ 稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書(Ⅳ)』(稲沢市文化財調査報告ＸＶ　1982年)

㊱ 稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書(Ⅷ)』(稲沢市文化財調査報告ＸＸⅦ　1986年)

㊲ 名古屋市教育委員会『石神遺跡・玉ノ井遺跡・高蔵遺跡(第７次)発掘調査報告書』(1995年)

㊳ 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター『下津北山遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第88集　2000年)

㊴ 斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡　平成２年度発掘調査概報』(1991年)、『三重県史』資料編考古２(2008年)

㊵ 注27に同じ

㊶ 石井則孝「陶硯について(２)」(『史館』第二号　1974年)

㊷ 楢崎彰一「日本古代の陶硯～とくに分類について～」(『考古学論考』平凡社　1981年)

【長さ】

分　類	点数
7 cm以下	2
7.0～7.9 cm	1
8.0～8.9 cm	3
9.0～9.9 cm	4
10～10.9 cm	4
11～11.9 cm	3
12.0～12.9 cm	4
13.0～13.9 cm	2
14 cm以上	4

【幅】

分　類	点数
3 cm以下	1
3.0～3.9 cm	1
4.0～4.9 cm	1
5～5.9 cm	10
6～6.9 cm	5
7～7.9 cm	4
8～8.9 cm	8
9～9.9 cm	2
10 cm以上	2

【厚さ】

分　類	点数
1 cm以下	4
1～1.5 cm	13
1.6～2.0 cm	12
2.1～2.5 cm	5
2.6～3 cm	0
3 cm以上	0

第72表　東海地方出土中世陶硯法量分布（実寸部分のみ）

1 伝半田池周辺採集品

2 桧原山古窯1

3 桧原山古窯2

4 鎗場御林古窯

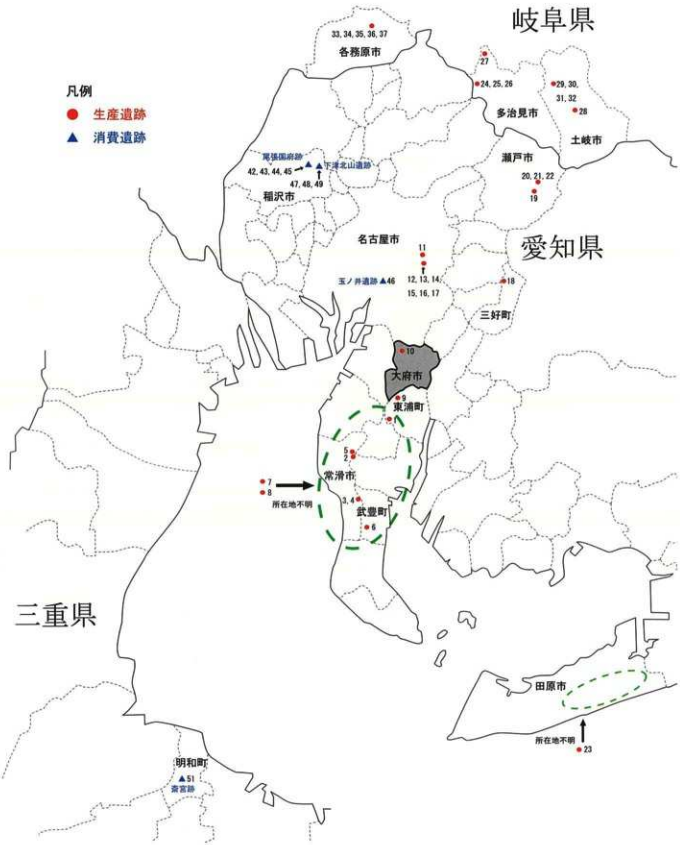
5 中田池A地点第1号窯

6 愛知県陶磁資料館
所蔵出土地不明品

7 名古屋市博物館所蔵
出土地不明品

8 梨ノ木B古窯群

写真78　常滑窯出土中世陶硯



第 65 図　東海地方出土中世陶硯分布図

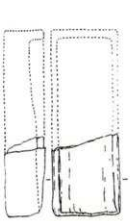
出土地一覧

1. 福住 54 号窯（東仙台Ｂ古窯群）
2. 伝半田池周辺採集品
3. 柏原山古窯 1
4. 柏原山古窯 2
5. 鐘場御林古窯
6. 中田池Ａ地点第 1 号窯
（中田池Ｂ古窯群）
7. 愛知県陶磁資料館所蔵出土地不明品
8. 名古屋市博物館所蔵出土地不明品
9. 梨ノ木Ｂ古窯群
10. 瀬戸Ｂ古窯群
11. 名古屋市千種区田代町唐山出土
12. 八事裏山 1 号窯Ａ窯（H-G-83 号）
13. 八事裏山 1 号窯Ｂ窯（H-G-84 号）
14. 八事裏山 1 号窯Ｃ窯（H-G-85 号）
15. 八事裏山 1 号窯Ｄ窯 1（H-G-86 号）
16. 八事裏山 1 号窯Ｄ窯 2（H-G-86 号）
17. 八事裏山 1 号窯Ｅ窯（H-G-88 号）
18. Ｇ-20 号窯（K-G-20 号窯）
19. 鍛倉東窯
20. 鷺窯 1
21. 鷺窯 2
22. 鷺窯 3
23. 旧田原町内古窯（遺跡名不明）
24. 北小木宮原 7 号窯
（総称：北小木古窯跡群）
25. 神明洞 1 号窯
（総称：北小木古窯跡群）
26. 大谷洞 19 号窯
（総称：北小木古窯跡群）
27. 大蔵西山 2 号窯
28. 窯洞 1 号窯跡
29. 丸石古窯 11 号窯 1
30. 丸石古窯 11 号窯 2
31. 丸石古窯 8 ～ 11 号窯 3
32. 丸石古窯 8 ～ 11 号窯 4
33. 船山北 3 号窯 1
34. 船山北 3 号窯 2
35. 船山北 3 号窯 3
36. 船山北 3 号窯 4
37. 船山北 3 号窯 5
38. 東笠子第 44 地点環号窯 1
（総称：山口第 17 号地点古窯跡）
39. 東笠子第 44 地点環号窯 2
（総称：山口第 17 号地点古窯跡）
40. 長者原窯 1 号窯（園山古窯）
41. 長者原窯 3 号窯（園山古窯）
42. 尾張国府跡 1
43. 尾張国府跡 2
44. 尾張国府跡 3
45. 尾張国府跡 4
46. 玉ノ井遺跡
47. 下津北山遺跡 1
48. 下津北山遺跡 2
49. 下津北山遺跡 3
50. 唐宮跡（第 87 次）
51. 吉美中村遺跡Ｄ地区

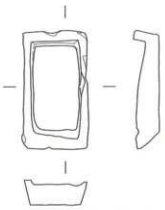
番号	遺跡名	種別	分類	窯	タイプ	脚有無	堤防	状態	時期	長さ(残存長)	幅(残存長)
1	福住54号窯(東仙谷B古窯群)	古窯跡	生産	常滑窯	長方	無	一周	一部	13世紀前期(中野編年4形式)	(6)	5.1
2	伝半田池周辺採集品	不明	不明	常滑窯	長方	無	一周	完形	中世	9.5	5.3
3	柿原山古窯1	古窯跡	不明	常滑窯	長方	無	一周	完形	中世	10	7.2
4	柿原山古窯2	古窯跡	不明	常滑窯	長方	無	一周	完形	中世	9.6	5.3
5	鐘場御林古窯	古窯跡	生産	常滑窯	長方	無	一周	完形	13世紀後半(中野編年6形式)	11.5	6.2
6	中田池A地点第1号窯(中田池B古窯)	古窯跡	生産	常滑窯	長方	無	一周	完形	13世紀中ごろ(中野編年5形式)	14.4	9.2
7	愛知県陶磁資料館所蔵出土地不明品	不明	不明	常滑窯	長方	無	一周	完形	鎌倉時代中期	10.3	5.5
8	名古屋市博物館所蔵出土地不明品	不明	不明	常滑窯	長方	無	一周	完形	鎌倉時代中期	10.9	7.2
9	梨ノ木B古窯群	古窯跡	生産	常滑窯	長方	無	一周	完形	12世紀前期から後期(中野編年1b～2)	13	8.5
10	瀬戸B古窯群	古窯跡	生産	常滑窯	長方？	無	一周？	半分	13世紀中頃～後期	(7.8)	8.7
11	名古屋市千種区田代町唐山出土	古窯跡	生産	猿投窯	長方	有	不明	一部	古代(平安後期)または鎌倉	—	8.2
12	八事裏山1号窯A窯(H－G－83号)	古窯跡	生産	猿投窯	長方？	有	不明	一部	12世紀前葉～中葉	(5.4)	(3.6)
13	八事裏山1号窯B窯(H－G－84号)	古窯跡	生産	猿投窯	長方？	無	確実なし	一部	12世紀前葉～中葉	(7.6)	9.4
14	八事裏山1号窯C窯(H－G－85号)	古窯跡	生産	猿投窯	長方？	有	確実なし	完形	12世紀前葉～中葉	13.3	8.2
15	八事裏山1号窯D窯1(H－G－86号)	古窯跡	生産	猿投窯	長方	有	確実なし	一部(重ね)	12世紀前葉～中葉	(5.1)	8.3
16	八事裏山1号窯D窯2(H－G－86号)	古窯跡	生産	猿投窯	長方	不明	不明	一部	12世紀前葉～中葉	(4.4)	(5.0)
17	八事裏山1号窯E窯(H－G－88号)	古窯跡	生産	猿投窯	長方	有	一周	一部	12世紀前葉～中葉	10.5	7.1
18	G－20号窯(K－G－20号窯)	古窯跡	生産	猿投窯	長方	無	一周	一部	中世	11	5.8
19	鍋倉東窯	古窯跡	生産	瀬戸窯	長方	不明	一周	一部	中世	(9.9)	6.8
20	荒窯1	古窯跡	生産	瀬戸窯	長方	有	不明	一部	室町時代	5.9	2.7
21	荒窯2	古窯跡	生産	瀬戸窯	長方	無	一周？	一部	室町時代	6.5	6.1
22	荒窯3	古窯跡	生産	瀬戸窯	長方	不明	不明	一部	室町時代	(3.9)	(4.3)
23	旧田原町内古窯(遺跡名不明)	古窯跡	生産	湿気窯	長方	無	確実なし	完形	12世紀、古代(平安後期)	8.5	5.5
24	北小木萱原7号窯(総称:北小木古窯跡群)	古窯跡	生産	東濃窯	長方	無	不明	一部	中世	(5.8)	(6.1)
25	神明洞1号窯(総称:北小木古窯跡群)	古窯跡	生産	東濃窯	長方？	不明	不明	一部	鎌倉時代	(11.2)	(6.3)
26	大谷洞19号窯(総称:北小木古窯跡群)	古窯跡	生産	東濃窯	長方	無	一周	一部	鎌倉時代	(5.6)	7.3
27	大脈西山2号窯	古窯跡	生産	東濃窯	長方	無	確実なし	完形	中世	8.8	4.4
28	窯洞1号窯跡	古窯跡	生産	東濃窯	長方	無	一周	完形	鎌倉時代	7.1	3.6
29	丸石古窯11号窯1	古窯跡	生産	東濃窯	四葉	無	一周	完形	中世	11	7.3
30	丸石古窯11号窯2	古窯跡	生産	東濃窯	風字硯	不明		完形	中世	(5.5)	(3.1)
31	丸石古窯8～11号窯3	古窯跡	生産	東濃窯	長方	不明	不明	一部	中世	(5.4)	(5.1)
32	丸石古窯8～11号窯4	古窯跡	生産	東濃窯	?	不明		一部	中世	—	—
33	船山北3号窯1	古窯跡	生産	美濃須衛窯	長方	有	一周	一部	鎌倉時代初期	14.9	12.4
34	船山北3号窯2	古窯跡	生産	美濃須衛窯	長方	有	一周	一部	鎌倉時代初期	14.4	(6.9)
35	船山北3号窯3	古窯跡	生産	美濃須衛窯	長方	有	一周	一部	鎌倉時代初期	16.2	(6.5)
36	船山北3号窯4	古窯跡	生産	美濃須衛窯	長方	有	一周	一部	鎌倉時代初期	(7.7)	(9.4)
37	船山北3号窯5	古窯跡	生産	美濃須衛窯	長方	有	一周	ほぼ完形	鎌倉時代初期	12.3	10.3
38	東笠子第44地点第号窯1(総称:山口第17地点古窯跡)	古窯跡	生産	湖西窯	長方	無	確実なし	完形	中世	11.2	6.1
39	東笠子第44地点第号窯2(総称:山口第17地点古窯跡)	古窯跡	生産	湖西窯	長方	無	確実なし	完形	中世	13.5	5.9
40	長者原第1号窯(皿山古窯)	古窯跡	生産	東遠諸窯	長方	無	確実なし	完形	平安後期？	9.8	5.5
41	長者原第3号窯(皿山古窯)	古窯跡	生産	東遠諸窯	長方	不明	確実なし	完形	平安後期？	8.8	5.8
42	尾張国府跡1	官衙跡	消費	?	長方？	不明	不明	一部	中世	—	—
43	尾張国府跡2	官衙跡	消費	?	長方	不明	不明	不明	中世	(3.0)	(3.5)
44	尾張国府跡3	官衙跡	消費	猿投窯？	長方	有	不明	一部	平安後期	(3.9)	(3.2)
45	尾張国府跡4	官衙跡	消費	?	長方	不明	不明	一部	中世	(2.9)	(2.5)
46	玉ノ井遺跡	集落跡他	消費	?	長方	無	不明	一部	中世	(6)	(4.5)
47	下津北山遺跡1	集落跡他	消費	猿投窯	長方	有	確実なし	ほぼ完形	12世紀中頃～13世紀第1四半期	(13.3)	(9)
48	下津北山遺跡2	集落跡他	消費	猿投窯	長方	無	一周	ほぼ完形	12世紀中頃～13世紀第1四半期	12.8	8.3
49	下津北山遺跡3	集落跡他	消費	猿投窯	風字硯	有	確実なし	完形	12世紀中頃～13世紀第1四半期	9.2	6.2
50	斎宮跡(87次)	官衙跡	消費	?	長方	無	一周	半分	鎌倉期	(7.0)	8.2
51	吉美中村遺跡D地区	住居跡？	消費	湖西窯	長方	無	一周	半分？	13世紀中頃	(8.4)	8.2

第73表　東海地方出土中世陶硯一覧表

厚さ[地](残存長)	厚さ[外](残存長)	比率(縦横)	文字	面数	発見年	出土地	資料所在	文献	図版番号	写真番号
2.5	3.1		なし	1	1978	愛知県東浦町	不明	1	第4-2図1	
1.65	2	1.79	なし	1	1978	愛知県常滑市	常滑市民俗資料館	2	第4-2図2	写真4-1、1
1.1	1.5	1.39	なし	1	1978	愛知県常滑市	常滑市民俗資料館	3	第4-2図3	写真4-1、2
1.4	1.7	1.81	なし	1	1978	愛知県常滑市	常滑市立陶芸研究所？(詳細不明)	4	第4-2図4	写真4-1、3
1.4	1.8	1.85	なし	1	1985	愛知県常滑市	常滑市民俗資料館	5	第4-2図5	写真4-1、4
1.2	2	1.57	あり	1	1987	愛知県武豊町	武豊町歴史民俗資料館	6	第4-2図6	写真4-1、5
—	2	1.87	なし	1	1991	不明	愛知県陶磁資料館	7	第4-3図7	写真4-1、6
—	1.3	1.51	なし	1	1997	不明	名古屋市博物館	8	第4-3図8	写真4-1、7
2.4	2.7	1.53	あり	1	1999	愛知県東浦町	東浦町郷土資料館	9	第4-2図9	写真4-1、8
1.53	2.33		なし	2	2004	愛知県大府市	大府市歴史民俗資料館	10	第4-7図10	写真4-2、1~3
—	2.4		なし	1	1936	愛知県名古屋市	名古屋市博物館	11	第4-3図11	
1.9	2.4		なし	2	1981~82	愛知県名古屋市	荒木集成館	12	第4-7図12	写真4-3、1~3
1.7	2.0		なし	2	1981	愛知県名古屋市	荒木集成館	13	第4-7図13	写真4-3、4~6
2.1	1.9	1.62	なし	1	1981~82	愛知県名古屋市	荒木集成館	14	第4-3図14	
2.1	1.9		なし	1	1983	愛知県名古屋市	荒木集成館	15	第4-3図15	
(1.4)	(1.6)		なし	1	1983	愛知県名古屋市	荒木集成館	16	第4-3図16	
1.8	2.1		なし	1	1981~82	愛知県名古屋市	荒木集成館	17	第4-3図17	
2	2.5		なし	1	1988	愛知県三好町	三好町教育委員会	18	第4-3図18	
—	1.3		なし	1	1969	愛知県瀬戸市	出光美術館	19		
1.2	2.9		なし	1	2005	愛知県瀬戸市	愛知県埋蔵文化財センター	20	第4-3図20	
1.9	1.5		なし	1	2005	愛知県瀬戸市	愛知県埋蔵文化財センター	21	第4-3図21	
0.5	1.1		なし	1	2005	愛知県瀬戸市	愛知県埋蔵文化財センター	22	第4-3図22	
—	3	1.55	なし	1	1978	愛知県田原市	愛知大学	23	第4-3図23	
1.5	1.8		なし	1	1991	岐阜県多治見市	多治見市教育委員会	24	第4-4図24	
-	3.9		なし	1	1996	岐阜県多治見市	多治見市教育委員会	25	第4-4図25	
1.6	1.7		なし	1	1996	岐阜県多治見市	多治見市教育委員会	26	第4-4図26	
1.5	2	2.00	なし	1	1998	岐阜県多治見市	多治見市教育委員会	27	第4-4図27	
1.3	1.2	1.97	なし	1	1986	岐阜県土岐市	土岐市教育委員会	28	第4-4図28	
1.8	1.8	1.51	なし	1	2001	岐阜県土岐市	岐阜県教育文化財団文化財保護センター	29	第4-4図29	
—	—	1.77	なし	1	2001	岐阜県土岐市	岐阜県教育文化財団文化財保護センター	30		
—	—		なし	1	2001	岐阜県土岐市	岐阜県教育文化財団文化財保護センター	31	第4-4図31	
—	2.4		なし	1	2001	岐阜県土岐市	岐阜県教育文化財団文化財保護センター	32		
1.8	2.0	1.20	なし	2	1995	岐阜県各務原市	岐阜県教育文化財団文化財保護センター	33	第4-7図33	写真4-3、7~9
1.9	2.2		なし	2	1995	岐阜県各務原市	岐阜県教育文化財団文化財保護センター	34	第4-8図34	写真4-4、1~3
2.1	2.3		なし	2	1995	岐阜県各務原市	岐阜県教育文化財団文化財保護センター	35	第4-8図35	写真4-4、4~6
—	(2.0)		なし	2	1995	岐阜県各務原市	岐阜県教育文化財団文化財保護センター	36	第4-8図36	写真4-4、7~9
1.5	2.1	1.19	なし	1	1995	岐阜県各務原市	岐阜県教育文化財団文化財保護センター	37	第4-5図37	
2.6	3.6	1.84	なし	1	1991	静岡県湖西市	湖西市教育委員会	38	第4-5図38	
2.5	2.8	2.29	なし	1	1991	静岡県湖西市	湖西市教育委員会	39	第4-5図39	
—	2	1.78	なし	1	1966	静岡県菊川市	不明	40	第4-5図40	
—	2.5	1.52	なし	1	1966	静岡県菊川市	不明	41		
—	—		なし	2	1980	愛知県稲沢市	稲沢市教育委員会	42		
1.2	2.2		なし	1	1981	愛知県稲沢市	稲沢市教育委員会	43	第4-6図43	
—	—		なし	1	1981	愛知県稲沢市	稲沢市教育委員会	44	第4-6図44	
-	2.2		なし	1	1986	愛知県稲沢市	稲沢市教育委員会	45	第4-6図45	
1.8	1.8		なし	1	1994	名古屋市	名古屋市見晴台考古資料館	46	第4-6図46	
0.9	2.5		なし	1	1996	愛知県稲沢市	愛知県埋蔵文化財センター	47	第4-6図47	
0.9	2.8	1.54	なし	1	1996~1997	愛知県稲沢市	愛知県埋蔵文化財センター	48	第4-6図48	
1.2	1.3	1.48	なし	1	1996	愛知県稲沢市	愛知県埋蔵文化財センター	49	第4-6図49	
—	2.2		なし	1	1991	三重県明和町	三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター	50	第4-8図50	
1.8	1.9		なし	1	1988	静岡県湖西市	湖西市教育委員会	51	第4-8図51	

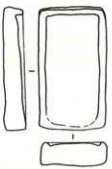


1．福住54号窯
（東仙台B古窯群）

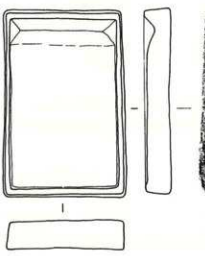


2．伝半田池周辺採集品

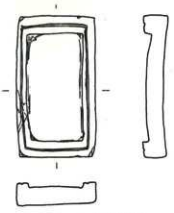
3．桧原山古窯1



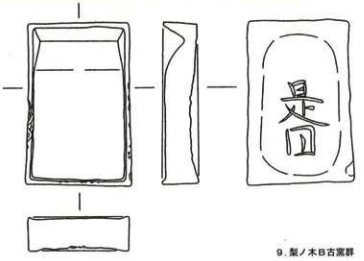
4．桧原山古窯2



6．中田池A地点第1古窯
（中田池B古窯群）

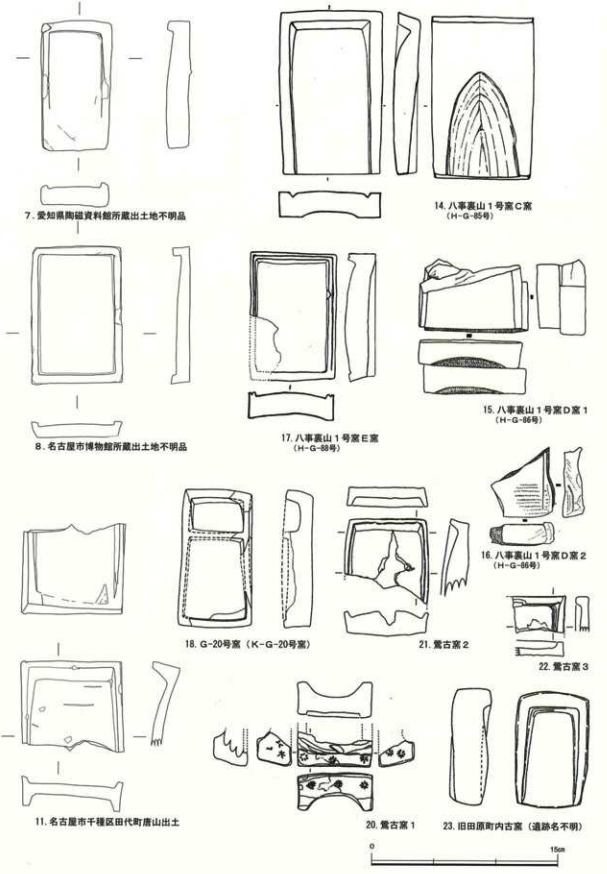


5．鎗場御林古窯



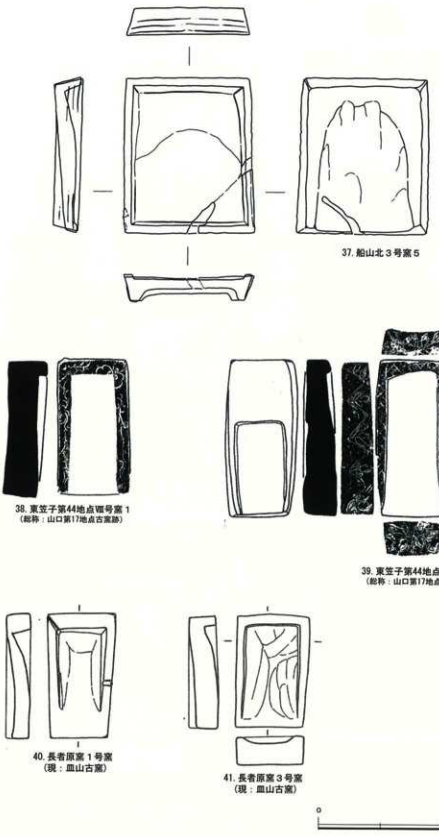
9．梨ノ木B古窯群

第66図　中世陶硯実測図〔その1〕　※一部報告書より転載

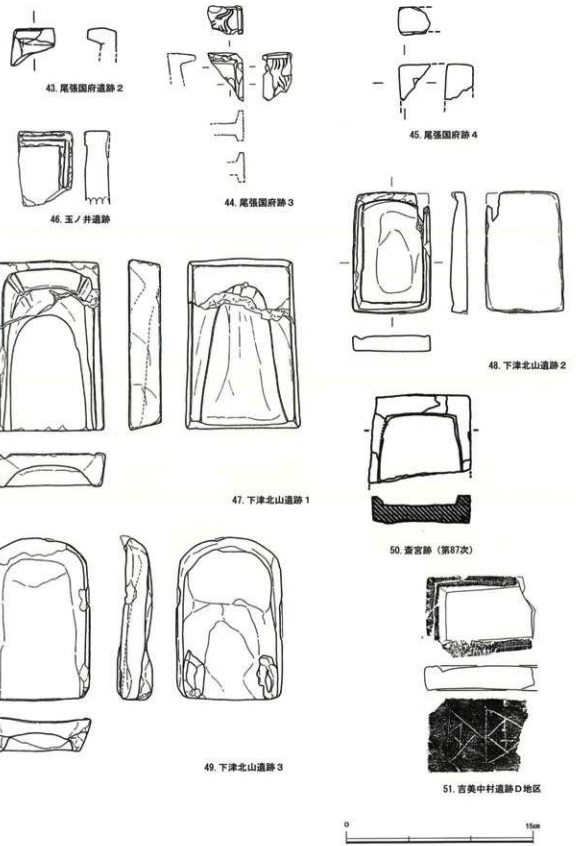


第67図　中世陶硯実測図〔その2〕　※一部報告書より転載

第68図　中世陶硯実測図〔その３〕　※一部報告書より転載



第 69 図　中世陶硯実測図〔その４〕　※一部報告書より転載



第70図　中世陶硯実測図〔その5〕　※一部報告書より転載

第３節　瀬戸Ｂ古窯跡群出土陶硯の考察

窯業遺跡や集落遺跡などの中世の遺跡からは稀に陶硯が出土する。その出土例は少なく、珍品といわれることもある。今回報告している瀬戸Ｂ古窯跡群では陶硯と目される遺物が１点出土している。この硯と思われる陶器は、残された部分の形状が方形の板状を成し、墨をする部分に成型した一面を持つスタイルから推察して陶硯とみなしてほぼ間違いないであろう。この陶硯は“陸”の部分しか残存していないが、中央部に堤防が設けられ、面を２面形成している。しかし整形は雑である。残存部分ではあるが、寸法は長さ 7.8 ㎝（残存長）、幅 8.7 ㎝、厚さ（外）2.05～2.6 ㎝、厚さ（陸）1.45～1.6 ㎝を計測する。ヘラ書きなどの文字はない。裏面や側面に自然釉がかかり、表面には炎のあたった形跡はみられないことから、焼成時に伏せて焼かれたと思われる。出土地点は、３号窯と４号窯の灰原または前庭部と目される地点と地層から出土しており、窯内から取り上げられたものではない。そのため４基検出された瀬戸Ｂ古窯跡群のどの窯で焼成されたものかを特定することは、やや困難であるが、出土層位と出土地点を素直に考えれば３号窯ではないかと、推測される。しかし今回はあえてどの窯と明言することは保留したい。

さて、この陶硯の形は従来の硯のスタイル、一面の陸とひとつの海で形成されるものとは趣を異にすることはすでに述べたとおりである。このような形の硯は“二面硯”と呼ばれている。『日本の陶硯』によれば、“二面硯”は古代の風字硯スタイルの硯に、同様な形のものがある。すなわち面を二分する堤防を中央部に設けるスタイルである①。現在知られている陶硯からみると、陸を二分する硯は風字硯から派生した、といえよう。ただ風字硯は、傾斜させるために裏面に脚を付け、形が“風”の漢字に似ていることから命名された硯であるように、外見に意匠が感じられる硯である。硯面を分割するという外見が中世以降長方形の硯に移行する中で、古代からの名残をとどめたものと、評することができよう。このように、長方形の硯で陸を二分割する陶硯を、ここでは「長方二面硯」と呼ぶこととする。瀬戸Ｂ古窯の硯は、長方形の硯で、裏面に脚または脚を作りだすために削られてはいない。このように陸部を二面造る硯はどのような目的で焼成されたかを示す史料は知られていないが、内藤氏は面を二分する硯は「二色を同時に使用できるような特殊なもの」とする指摘されている②。これが正しいかどうかはにわかに判断できないが、普通に考えれば首肯できる指摘といえよう。ただこれには消費地で同様な遺物が発見され、その使用痕跡から二色が検出されることが必要であろう。

さて、このように長方硯でしかも陸を二分する面を有する、いわゆる「長方二面硯」の出土例は第73表の 12・13・33・34・35・36 の６点、瀬戸Ｂ古窯跡群の 10 を加え、さらに尾張国府跡から出土した 42 を合わせると計８点確認でき、７点が生産地、１点が消費地からの出土である。窯業地区でみた場合、常滑窯１点、猿投窯２点、美濃須衛窯４点という内訳になる。瀬戸Ｂ古窯跡群の出土例と比較した場合で、よく似ていると思われるのはない。強いて言うなら、八事裏山１号Ａ窯とＢ窯③から出土した２点の「長方二面硯」はともに完形品ではないが、陸中央部に堤防を設けている点と脚がない点でのみ瀬戸Ｂ古窯跡群の「長方二面硯」と似ているといえようか。寸法的なサイズでみた場合は、八事裏山１号のＢ窯と似通っている。成形の丁寧さでみた場合は、似たものはない。この点でみた場合は、八事裏山１号窯のＡ窯とＢ窯のそれと酷似しているのは美濃須衛窯の船山北古窯の３号窯から

出土例であろう。瀬戸B古窯跡群の二面硯の消費地につながる資料が見出せなかったが、船山北古窯のそれは、尾張国府出土の二面硯（42）の写真と比較すると、よく似た感じがする資料である。仮に船山北古窯の焼成品が尾張国府に運ばれているとしたら、尾張国府の物資調達エリアに美濃国を視野に入れる必要が出てこよう。いずれにしても、この船山北古窯の出土例は、中世の「長方二面硯」が尾張国所在窯特有の製品かどうかを検討する材料として欠かせないものとして紹介しておくこととする。

註

①五島美術館『日本の陶硯』

②石井則孝「関東地方の陶硯について」（五島美術館『日本の陶硯』）

③名古屋考古学研究会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯発掘調査報告」（『古代人』38　1981年）、名古屋考古学研究会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯第二次発掘調査報告」（『古代人』41　1983年）、名古屋考古学研究会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯第三次発掘調査報告」（『古代人』43　1984年）、　名古屋考古学研究会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯第四・五次発掘調査報告」（『古代人』47　1986年）、名古屋考古学研究会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯第六次発掘調査報告」（『古代人』48　1987年）以上5本が報告書で、これらから同遺跡を再検討したものが、尾野善裕「八事裏山古窯跡群の基礎的再検討」（『古代人』53　1992年）ある。また『愛知県史』別篇　中世・近世瀬戸系　窯業2（2007年）にも八事裏山1号窯の調査結果が要約されており、新しい遺跡名を確認することができる。A窯がH-G-83号窯、B窯がH-G-84号窯、C窯がH-G-85号窯、D窯がH-G-86号窯、E窯がH-G-88号窯、F窯がH-G-91号窯に充てられている。なお、この遺跡からの出土品は荒木集成館で保管されている。

1瀬戸B古窯群　硯面斜め

2硯面　真上

3裏面　真上

写真79　長方二面硯〔その1〕

1八事裏山1号窯A窯　硯面斜め

2硯面　真上

3裏面　真上

4八事裏山1号窯B窯　硯面斜め

5硯面　真上

6裏面　真上

7船山北3号窯1　硯面斜め

8硯面　真上

9裏面　真上

写真80　長方二面硯〔その2〕

1 船山北3号窯2　硯面斜め

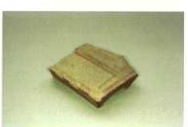
2 硯面　真上

3 裏面　真上

4 船山北3号窯3　硯面斜め

5 硯面　真上

6 裏面　真上

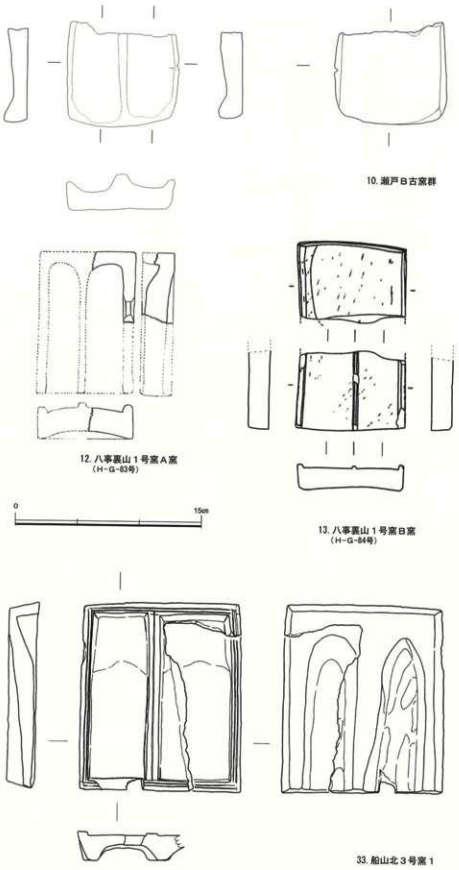


7 船山北3号窯4　硯面斜め

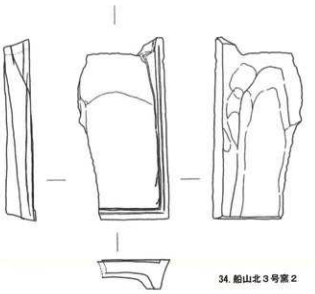
8 硯面　真上

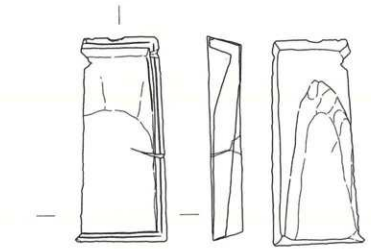
9 裏面　真上

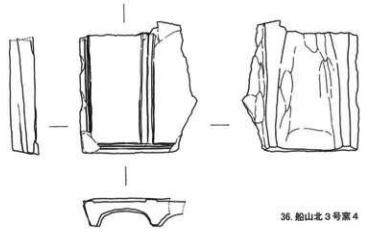
写真81　長方二面硯〔その3〕



第 71 図　中世陶硯実測図〔その６〕　※一部報告書より転載







第 72 図　中世陶硯実測図〔その７〕　※一部報告書より転載

第４節　中世陶硯研究の展望

最後に、中世陶硯の研究が何をもたらすのか私見を披見し、まとめとしたい。まず陶硯は、窯で焼成される碗や皿、壷や甕と違って、大量に生産された焼成物ではない。言わば希少な製品である。出土場所や遺跡も限られることから、生産地での出土事例の蓄積と研究が緻密になれば、消費地で出土する陶硯との比較検討から、産地を特定できる資料になりうる可能性を秘めた器種ともなり得よう。というのは、いつの時代も物を作るのは必要とする人や場所があってこそ生産されるものである。八事裏山１号窯の出土瓦（猿投窯編年Ⅶ－２型式）・吉田第１号窯・同第２号窯出土瓦（常滑焼編年１ｂ型式）①・社山古窯出土瓦（常滑焼編年１ｂ型式）②が鳥羽東殿（保延３年～）で使用というように、生産地と消費地とが結びつくことで、新たな歴史事実の解明につながると考えるからである。生産地と消費地とを合わせて流通史を考えようとするのは大事な視点である。それを膨大な量が焼成される碗類や皿類で考えるには対象資料があまりに多くて困難である。むしろ少量限定生産器種の方が資料として扱いやすいし、焦点が絞りやすい。現時点では、瓦がその資料になりうるものとして研究が蓄積されてきた。つまり瓦文様の比較研究から産地特定が試みられ、成果を得ているように、陶硯でもそのような役割を担えるのではないだろうかと考えるのである。

また陶硯は、中田池古窯や梨ノ木Ｂ古窯の陶硯の例が示すように、文字情報を提供することがある。古代から中世の陶器に文字が刻まれることは稀有な現象である。ひとつの窯跡で数千点から万点におよぶ廃棄品が出土するが、それに文字が刻まれていることは極々少ないことである。文字などが残された事例として、経塚で埋納された紀年銘陶製経筒や壷や鉢へのヘラ書きの事例～藤井宮御酒瓶子（大府市）③・顕長銘短頸壷（田原市）④・建久五年刻銘鉢⑤・吉美中村遺跡Ｄ区出土陶硯（湖西市）など～を挙げることが可能である。それらを除けば、製品自体に文字が刻まれることは珍しいことである。ましてや希少な製品である陶硯に文字が刻まれた例が３例もあることは、出土事例に比して、その例は多いといえるだろう。

以上のことから、今後も中世陶硯は瓦などと同様に注目すべき資料のひとつとして取上げ、研究されうるべきものではないかという点を指摘して、ひとまずは擱筆したいと思う。

註

①「社山古窯」（『横須賀の遺跡』横須賀町史別冊所収　1956年）

②『吉田第１号窯発掘調査報告書』『吉田第２号窯発掘調査報告書』（大府市教育委員会　1964・1970年）

③古窯跡からの出土でないが、編年研究から鎌倉期に焼成された短頸壷と見なされている。その壷の肩にヘラ書が存在し、その内容から現在の名がある。現在は愛知県指定文化財に指定されている。

④渥美窯の大アラコ第３号窯出土。短頸壷で、肩にヘラ書がある。

⑤美濃須衛窯の船山北３号窯から出土。内底面には、縦３行にわたって「奉施入　建久五年十月　祐向寺十八日」と記された刻銘が確認された。

【文献】第 73 表「東海地方出土中世陶硯一覧表」の文献欄に対応

1．新巽ケ丘団地関係遺跡調査団『福住古窯址群』（1977 年）
2．五島美術館『日本の陶硯』（1978 年）
3．文献なし
4．常滑市誌編さん委員会『常滑窯業誌』（1974 年）・五島美術館『日本の陶硯』（1978 年）・常滑市教育委員会『三郎谷第 1 号窯』（1982 年）・武豊町教育委員会『中田池古窯址群　その 1 』（1990 年）・
5．常滑市教育委員会『鎗場・御林古窯址群』（1985 年）
6．武豊町教育委員会『中田池古窯址群　その 1 』（1990 年）・同『中田池古窯址群　その 2 』（1992 年）
7．愛知県陶磁資料館『愛知県陶磁資料館所蔵品図録』Ⅱ（1998 年）
8．名古屋市博物館『名古屋市博物館館蔵品目録 1 』（1996 年）
9．愛知県教育委員会『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』（1999 年）、東浦町誌編さん委員会『新編東浦町誌』3 原始古代中世（2004 年）
10．文献なし
11．五島美術館『日本の陶硯』（1978 年）・奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター『埋蔵文化財ニュース』41（1983 年）
12．「八事裏山 1 号窯第二次発掘調査報告」（『古代人』41　1983 年）・『愛知県史』別篇　窯業 2（2007 年）
13．「八事裏山 1 号窯発掘調査報告」（『古代人』38 1981 年）
14．「八事裏山 1 号窯第二次発掘調査報告」（『古代人』41　1983 年）
15．「八事裏山 1 号窯第二次発掘調査報告」（『古代人』43　1984 年）
16．「八事裏山 1 号窯第二次発掘調査報告」（『古代人』43　1984 年）
17．「八事裏山 1 号窯第二次発掘調査報告」（『古代人』41　1983 年）
18．三好町教育委員会『愛知大学用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』（1988 年）
19．瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史』陶磁史篇 1（1969 年）・五島美術館『日本の陶硯』（1978 年）・楠崎彰一「日本古代の陶硯～とくに分類について～」（『考古学論考』平凡社　1981 年）・奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター『埋蔵文化財ニュース』41　（1983 年）
20．財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター『鴾窯跡』本文編・遺物図版編・写真図版編（2005 年）
21．財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター『鴾窯跡』本文編・遺物図版編・写真図版編（2005 年）
22．財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター『鴾窯跡』本文編・遺物図版編・写真図版編（2005 年）
23．五島美術館『日本の陶硯』（1978 年）・楠崎彰一「日本古代の陶硯～とくに分類について～」（『考古学論考』平凡社　1981 年）
24．多治見市教育委員会『北小木古窯跡群発掘調査報告書』（1991 年）
25．多治見市文化財保護センター『北小木～北小木古窯跡群第 2 次発掘調査報告書』第一分冊（2001 年）
26．多治見市文化財保護センター『北小木～北小木古窯跡群第 2 次発掘調査報告書』第二分冊（2001 年）

27. 多治見市教育委員会『大藪西山１・２・３号窯発掘調査報告書』(1998 年)
28. 土岐市教育委員会『窯洞１号窯跡発掘調査報告書』(2003 年)
29. 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター『丸石古窯跡群』(2003 年)
30. 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター『丸石古窯跡群』(2003 年)
31. 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター『丸石古窯跡群』(2003 年)
32. 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター『丸石古窯跡群』(2003 年)
33. 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター『船山北古墳群・船山北古墳群・船山北遺跡』(2000 年)
34. 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター『船山北古墳群・船山北古墳群・船山北遺跡』(2000 年)
35. 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター『船山北古墳群・船山北古墳群・船山北遺跡』(2000 年)
36. 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター『船山北古墳群・船山北古墳群・船山北遺跡』(2000 年)
37. 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター『船山北古墳群・船山北古墳群・船山北遺跡』(2000 年)
38. 静岡県教育委員会『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』(1989 年)・湖西市教育委員会『山口第 17 地点古窯跡発掘調査報告書』(1991 年)・『静岡県史』資料編　考古３（1992 年)・
39. 静岡県教育委員会『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』(1989 年)・湖西市教育委員会『山口第 17 地点古窯跡発掘調査報告書』(1991 年)・『静岡県史』資料編　考古３（1992 年)
40. 楠崎彰一「猿投窯」(『陶器全集』31　平凡社　1966 年)・五島美術館『日本の陶硯』(1978 年)・楠崎彰一「日本古代の陶硯～とくに分類について～」(『考古学論考』平凡社　1981 年)・奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター『埋蔵文化財ニュース』41(1983 年)・静岡県教育委員会『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』(1989 年)・『静岡県史』資料編　考古３（1992 年)
41. 五島美術館『日本の陶硯』(1978 年)・奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター『埋蔵文化財ニュース』41(1983 年)・楠崎彰一「猿投窯」(『陶器全集』31　平凡社　1966 年)・静岡県教育委員会『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』(1989 年)・『静岡県史』資料編　考古３（1992 年)
42. 稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書（Ⅱ）』(1980 年)
43. 稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書（Ⅳ）』(1982 年)
44. 稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書（Ⅳ）』(1982 年)
45. 稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書（Ⅷ）』(1986 年)
46. 名古屋市教育委員会『石神遺跡・玉ノ井遺跡・高蔵遺跡（第７次）発掘調査報告書』(1995 年)
47. 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター『下津北山遺跡』(2000 年)
48. 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター『下津北山遺跡』(2000 年)
49. 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター『下津北山遺跡』(2000 年)
50. 斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡　平成２年度発掘調査概報』(1991 年)、『三重県史』資料編考古２（2008 年)
51. 湖西市教育委員会『山口第 17 地点古窯跡発掘調査報告書』(1991 年)・『静岡県史』資料編　考古３（1992 年)

第５章　まとめ

瀬戸Ｂ古窯跡群の本調査は、市内で実施した１９例目の発掘調査である。窯業遺跡では１６例目に該当する。調査により窯体は４基・灰原１箇所・土坑３箇所・溝１条を確認した。窯体を始めその残存状況は、住宅や道路に囲まれた場所の割にはかなり良好な状態であった。特に１・２号窯の窯体は煙部が整地行為により幾分欠損したのみという好条件であった。ただし本調査において、西側の４号窯は隣家の敷地に及んだため、窯体すべてを調査できず不明なところが残った。また灰原の状態も良好であったが、その範囲は北側の道路下に及び、全容解明には至らなかった。焼成品は碗類と皿類が主体で、少量の鉢類が含まれる。この構成は知多半島では典型的なタイプなものである。

遺構について

本遺跡では、窯体４基・灰原１箇所・土坑３箇所・溝１条を確認したことは第２章で述べたとおりである。

窯業遺跡の主役である窯本体は４基検出したが、１・２号窯と３・４号窯はそれぞれ間隔を詰めた形で築窯されていた。特に、１号窯と２号窯は一部では隣あう窯に壁が食い込むほど接近していた。４基の窯は、窯形状から２グループに分けることが出来そうである。それは１・２号窯と３・４号窯とである。１・２号窯は焼成室の胴体幅が広く、しかも焼成室から煙道部にかけて急傾斜になっている点に特徴がある。一方、３・４号窯は焼成室の胴体幅が煙道部にかけ極端に狭くなることはなく、傾斜も緩やかに上昇していく形態である。この違いは時期差と築窯者の相違として認めることができよう。各窯の操業時期を時系列で表すと、２号窯→１号窯→３号窯と４号窯と分析した。

また窯体構造の特徴として、１号窯と３号窯には焼成室に床面下施設が造られ、４号窯には溝１条が燃焼室東壁はじまって、灰原方向へ伸びていることが確認された。共に、この場所湧き出る地下水対策のための施設と考えられる。

灰原は、切りあい関係が明確ではなかったが、おおむね１・２号窯の灰原と３・４号窯の灰原とに分けることが可能であった。両者の関係は１・２号窯の灰原の上に３・４号窯の灰原が覆っていた。ただし、１号窯の２号窯の灰原をどのように重なりあうかは分からなかった。

遺物について

焼成品は碗類・皿類がほとんどを占め、少量の鉢類を含み、托・壺系・陶丸と陶硯などが数点確認された。主要焼成品である碗類・皿類を中世常滑焼の生産地編年（中野編年）でみた場合、１２世紀後半から１２世紀末頃まで（実年代 1150 年頃～1190 年頃）のものと比定される。

この本窯で注目すべきは、陶硯の発見である。大府市内の窯業遺跡では始めての発見であり、常滑窯に広げた場合でも、中田池Ｂ古窯の事例を筆頭に９点しかないか確認されていない、珍しいものという結果が得られている。しかも陶硯の面が２面と想定される稀有な焼成品であった。詳細は第２部第４章に記述したが、中世で陶硯が作られることは石硯が主流になっていくこの時期としては特異な

製品と評価した。東海地方の出土状況については事例を集積したので、これをベースにさらに事例を蓄積すれば新たな中世陶硯の一面が推定できると結論づけた。

炭化材について

本窯跡で採取した炭化材は２号窯内から４号窯内と灰原部分で１号窯内からのサンプルはない。これらのサンプルを調査した結果、マツ属複維管束亜属・コナラ節・クヌギ節の３分類群が利用されていた。この３分類群は、灰原や２号・３号・４号窯体内などの出土位置により、出土状況に多少の偏りがみられたことから、特に優占的に利用されていた分類群があったかどうかは、特定できなかったようである。 強いて言えば、コナラ節は２号・３号・４号窯跡から共通して検出され、２号窯跡ではクヌギ節も多いことから、マツ属複維管束亜属よりもコナラ亜属のコナラ節とクヌギ節が多く利用されていた可能性が高い、という結果である。

以上のような結果から、以前樹種調査のあった窯業遺跡と比較すると、市内でほぼ同時期の操業と目される窯跡の神明古窯跡群（吉田町、木方、1996）やガンジ山Ａ古窯跡群（桃山町、植田、2000）の燃料材調査においては、マツ属複維管束亜属・コナラ節・クヌギ節に対応する分類群が検出され、マツ属よりコナラ節とクヌギ節を含むコナラ亜属の比率が高いことが報告されている。ガンジ山Ａ古窯跡群では、マツ属複維管束亜属が多く、コナラ節とクヌギ節ではクヌギ節の方が多いようであった。森岡第１号窯跡（森岡町、植田、1999）の燃料材は、マツ属複維管束亜属が多く、そのほかに少数ではあるが常緑広葉樹のアカガシ亜属と落葉広葉樹のクヌギ節・クリ・ミズキ属など複数種類の広葉樹も検出されている。 瀬戸Ｂ古窯跡群は、マツ属複維管束亜属よりもコナラ亜属のコナラ節とクヌギ節が多く利用されていた可能性が高いので、神明古窯跡群と樹種構成は似通っているといえよう。

操業年代について

本古窯跡群では考古地磁気年代測定を実施した。その結果、西南日本版によると、１号窯は、A.D.1250年±70年　２号窯はA.D.1230年±90年、３号窯はA.D.1250年±50年、４号窯はA.D.1130年±30年という結果が出ている。それぞれ誤差があるが、考古地磁気学的には、１～３号窯は１３世紀前期中頃から中期頃の操業という測定結果である。

考古学的には、遺物の年代観は、中世常滑焼の生産地編年表でみると、２～３型式、すなわち１２世紀後半から１２世紀末頃まで（実年代 1150 年頃～1190 年頃）、尾張型の編年では４型式に該当すると推定される。窯の形状分析から、１・２号窯と３・４号窯とでは窯形状に相違が認められるので、別な職人集団により窯が築かれ、操業を始めたものと評価できよう。たまたま、違う職人集団により複数の窯を築き、時間を空けて操業した結果が、この瀬戸Ｂ古窯跡群という遺跡として残ったものと思われる。

最後に、大府市内の窯業遺跡で、瀬戸Ｂ古窯跡群がどこに位置付けられるのか、私見を述べておく。主要焼成品である碗や皿（高台有・高台なしの並存）の型式と本窯で生産された陶器の構成など、総合的に判断すると、神明古窯跡群（中野編年２～３型式、１２世紀後半～１２世紀末頃、1996）や森岡第１号窯（中野編年２型式　１２世紀後半　1999）より後と推定される。神明古窯跡群は、器種構

成で碗・皿（高台有・高台なしの並存）・片口鉢・広口長頸壺・三筋壺で、本古窯跡群が碗・皿（高台有・高台なしの並存）・片口鉢・短頸壺・陶硯、というように碗・皿を軸に少量の片口鉢で主要部分を占め、わずかな壺や特殊品が混ざることからそのように推定される。

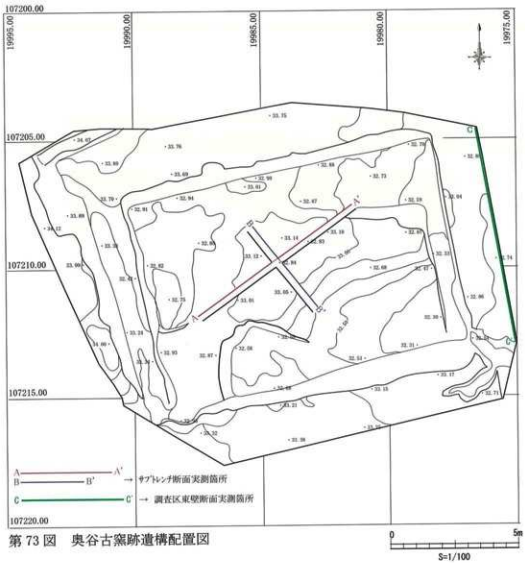
大府市が含まれる常滑窯北部・猿投窯南端部では、１２世紀後半から１３世紀前期が窯業生産の最盛期の生産時期と想定しているので、まさに盛期に操業した窯と思われる遺跡であろう。つまり、本遺跡は碗類と皿類をメインに少量の鉢類を加えて焼成した山茶碗窯で、その操業年代は１２世紀後半～１３世紀前期と思われ、常滑窯に含まれる窯業遺跡と評価できよう。

第３部　奥谷古窯跡

第１章　遺構について

奥谷古窯跡の現況は、北から南へ緩やかに傾斜する畑地となっており、調査以前から碗・皿の欠片を表採することができた。今回の発掘調査では、範囲確認調査により窯跡と思われる遺構と認められた地点を重点的に調査した。範囲確認調査では、17本のトレンチを畑地の傾斜と直交する方向で入れ、遺構の所在や遺物の堆積をつかもうとしたが、２m程度掘り下げても、遺構と思しきものはほとんど発見できなかった。辛うじて調査区に設定した場所で被熱により赤く発色した焼土混じりの土層を確認した。

本調査では、上記の場所を調査区として設定した。その調査区内の南側から焼土混じりの比較的堅く締まった砂層が確認できたことから、周辺に窯体が存在していた可能性は高い。また、今回の調査区域は、第74図奥谷古窯調査区内土層断面図からも判るように、攪乱が約１m堆積していることから、過去の農業構造改善等により、かなり攪乱されたと考えられることも付記しておく。地山は褐色の砂及びシルト層である。



第 73 図　奥谷古窯跡遺構配置図

土層説明(A-A・B-B'C-C'共通)

1 Hue10YR5/6(黄褐色)
砂層、粘性締まり共なし。
7%程10YR6/7(地山層)と1%炭化物含む。

2 Hue10YR6/6(明黄褐色)
砂層、粘性なし、締まり強い。
焼土ブロック、窯体<6cm程のブロックを多量に含む。

3 Hue10YR5/6黄褐色
砂層、粘性・締まり共になし。
20%程10YR6/8(地山層)を含む。

4 地山
10YR6/8(明黄褐色)
砂層、粘性・締まり共になし。

第74図　奥谷古窯跡調査区内土層断面図

第75図　東谷古墳群トレンチ断面図

土層説明(A-A'・B-B'C-C'共通)

1　Hue10YR5/6(黄褐色)
　砂層、粘性締まり共なし。
　7%程10YR6/7(地山層)と1%炭化物含む。
2　Hue10YR6/6(明黄褐色)
　砂層、粘性なし、締まり強い。
　焼土ブロック、窯体5cm程のブロックを多量に含む。
3　Hue10YR5/6黄褐色
　砂層、粘性・締まり共になし。
　20%程10YR6/8(地山層)を含む。
4　地山
　10YR6/8(明黄褐色)
　砂層、粘性・締まり共になし。

東壁　C-C'

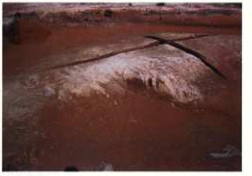
遺構風景

遺構風景

遺構風景

遺構風景

遺構風景



遺構風景

写真82　奥谷古窯跡遺構

第２章　遺物について

奥谷古窯跡から出土した遺物は、そのほとんどが無施釉で灰白色を呈する中世の碗・皿であり、いわゆる山茶碗・山皿といわれるものであった。これらの碗・皿は底部が 1/2 以上残存するものを１個体としてカウントした。

碗は 13 点と、複数の碗が釉着したもの（以後重ね碗と表記）２組（13 点）、破片が 273 点、皿は３点と破片 17 点が出土した。以下、個別に検討を加える。

碗

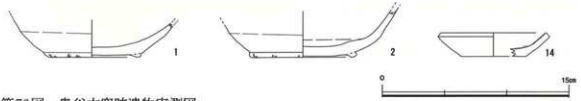
出土した碗のうち 13 点を計測したが、全てが高台部から体部の途中までしか残存しておらず、器形分類等の分析はできなかった。

高台径は 5.5 ㎝～8.3 ㎝、平均 7.0 ㎝、口径、器高は測定不能であった。高台はすべて押圧のためつぶれているが、もみ痕を有している。底面外部は、釉の付着のため不明なもの以外はすべて回転糸切り後高台との接着面付近をなでている。内面底部はヨコナデ７点、回転ナデ６点と半々である。

皿

出土した皿のうち計測した３点はすべて高台のないタイプであった。底部から口縁まで残存していたのは１点で、推定値であるが、口径 8.9cm、底径 5.2cm、器高 1.9cm、口縁部は面取りされていた。他２点は底径のみ計測可能で、それぞれ 5.0cm、5.3cm、３点の平均は 5.2cm であった。

全体として、碗・皿とも高台の接着やナデなどの調整が荒く、胎土も不良とはいえないまでも、砂粒を多く含み荒い。これまで大府市内で出土した窯業遺跡の焼成品や中野編年と照らした結果、中野編年形式の４～５型式に相当し、年代的には１２世紀末から１３世紀前半頃まで（実年代 1190 年頃～1250 年頃）の焼成と推測される。



第76図　奥谷古窯跡遺物実測図

写真 83　奥谷古窯跡遺物

遺物番号	器種	グリッド名	出土位置	法量(cm) 口径	高台径	器高	高台底面付着	底部外面	見込み	焼成	胎土	接合	備考
1	碗	不明	表採	−	8.0	−	もみ	回転糸切り後ナデ	ヨコナデ	良	良	無	内面にカマクソ付着 外面底部黒変
2	碗	不明	表採	−	8.3	−	もみ	回転糸切り後ナデ	ヨコナデ	良	良	無	内面底部に重ね焼片付着 外面底部黒変
3	碗	不明	トレンチ8	−	6.2	−	もみ	回転糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	無	
4	碗	不明	トレンチ9	−	6.7	−	もみ	回転糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	無	
5	碗	不明	トレンチ10	−	8.1	−	もみ	回転糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	無	内面にカマクソ付着 外面底部黒変
6	碗	不明	トレンチ10	−	6.2	−	もみ	回転糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	無	
7	碗	不明	トレンチ11	−	6.7	−	もみ	釉付着のため不明	ヨコナデ	良	良	無	外面全体に釉付着 外面にカマクソ付着
8	碗	不明	表採	−	5.5	−	もみ	回転糸切り後ナデ	ヨコナデ	良	良	無	高台に重ね焼片付着
9	碗	不明	表採	−	6.9	−	もみ	回転糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	無	
10	碗	不明	表採	−	6.5	−	もみ	回転糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	無	
11	碗	不明	表採	−	6.7	−	もみ	回転糸切り後ナデ	ヨコナデ	良	良	無	内面底部に重ね焼片付着
12	碗	不明	表採	−	7.2	−	もみ	回転糸切り後ナデ	ヨコナデ	良	良	無	内面底部に重ね焼片付着 高台にカマクソ付着
13	碗	不明	表採	−	7.5	−	もみ	釉付着のため不明	ヨコナデ	良	良	無	外面底部にカマクソ付着
14	皿	不明	表採	(8.9)	(5.2)	(1.9)	−	ナデ	釉付着のため不明	良	良	無	内面にカマクソ付着
15	皿	不明	表採	−	5.3	−	−	ナデ	ヨコナデ	良	良	無	
16	皿	不明	表採	−	5.0	−	−	釉付着のため不明	ヨコナデ	良	良	無	直径1cmの小石含む

第74表　奥谷古窯跡出土品観察表

第3章　まとめ

奥谷古窯跡は、市内で18例目の発掘調査の内、窯業遺跡では15例目に当たる。奥谷古窯跡の遺跡分布調査では、地表面に碗や皿などの遺跡が散布しており、遺構が埋蔵されていると予想された。しかし本調査では、過去に畑等の耕作により遺構そのものがほとんど消滅してしまっていることが判明し、遺構に関する調査結果はほとんどえられなかった。

出土品は、第2章で述べたとおり、奥谷古窯跡の遺物総数は322点で、大半が碗と皿の破片であった。しかも高台がすべて残るものはあるが、口縁まで存在するものは確認できず、正確な器形を示すことができなかったのは残念である。ただ、出土した遺物の分析から12世紀末から13世紀前半頃まで（実年代1190年頃～1250年頃）という結果を得られているので、大府市周辺の窯業遺跡としては後期に属する遺跡とみなすことができよう。

調査風景

調査風景

調査風景

調査風景

写真84　奥谷古窯跡調査風景

報告書抄録

ふりがな	せとびいこうせきぐん　おくたにこうせき
書名	瀬戸B古窯跡群・奥谷古窯跡
副書名	大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ
巻次	
シリーズ名	大府市文化財調査報告書
シリーズ番号	第10集
編著者名	古田功治、中村伸吾、服部孝信、伊藤羊子、鈴木智恵、広岡公夫、植田弥生
編集機関	大府市教育委員会
所在地	〒474－0025　大府市中央町五丁目70番地
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
せとビいこうせきぐん 瀬戸B古窯跡群	おおぶし　きょうわにちょう 大府市共和町七丁目35・36番地	232238	44101	35° 02′ 3.68″	136° 57′ 3.41″	20041104 ～ 20050226 ・ 20060612 ～ 20060617	430㎡	区画整理事業
おくたにこうせき 奥谷古窯跡	おおぶし　きょうわにしちょう 大府市共西町一丁目42・62・70	232238	44102	35° 02′ 0.09″	136° 56′ 51.389″	20041006 ～ 20041013	120㎡	区画整理事業

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瀬戸B古窯跡群	古窯址	平安時代末期 鎌倉時代中期	窯体4基・灰原2・土坑4	碗・皿・鉢・壺・硯・焼台・伊勢型鍋など	陶硯1点出土
奥谷古窯跡	古窯址	鎌倉時代後期		碗・皿	

要約	窯跡は4基検出したが、窯形態は1・2号と3・4号とは時期差がある。さらに主要焼成製品の碗・皿の器形にも同時期のものとは明らかに違いがある。

大府市文化財調査報告書刊行案内

	タイトル	刊行年	値段	在庫
第１集	**大府市山車調査報告書**	**平成７年**	**３，５００円**	**在庫あり**

大府市指定有形民俗文化財になっている藤井神社祭礼山車３輌と山之神社祭礼１輌の詳細調査の報告書で図面多数掲載。３分冊で構成。

第２集　海陸庵古窯址群・神明古窯址群　平成８年　２，０００円　在庫あり

平成６年から７年に発掘調査した前期中世山茶碗窯の遺構である。神明古窯址群からは大量の広口長頸壺が出土。

第３集　円通寺古墓　平成９年　１，５００円　在庫あり

平成６年に発見された江戸中期の経塚遺構。近世村落社会における庶民の信仰を探る資料。

第４集　ガンジ山Ａ古窯跡群　平成１２年　１，２００円　在庫あり

平成９年に発掘調査した中世山茶碗窯の遺構で、検出した窯跡１基から市内ではじめて床面下施設を確認した遺跡である。

第５集　深廻間Ａ古窯跡群　平成１６年　２，４００円　在庫あり

平成９年に発掘調査した平安末期から鎌倉初期にかけての中世山茶碗窯の遺構で、検出した窯跡２基に床面下施設を確認した遺跡である。

第６集　羽根山古窯跡群　未刊

平成１０年に発掘調査した鎌倉期の中世山茶碗窯で、市内に確認された最大規模の窯跡である。

第７集　深廻間Ｂ古窯跡群　平成１７年　１，５００円　在庫あり

平成１１年に発掘調査した中世山茶碗窯の遺構で、窯跡３基を検出した遺跡である。

第８集　砂原古窯跡群　平成１９年　１，５００円　在庫あり

平成１５年に発掘調査した中世山茶碗窯の遺構で、床面下施設を伴う窯跡１基を検出した遺跡である。

第９集　深廻間Ｃ古窯跡群　平成２０年　１，５００円　在庫あり

平成１５年に発掘調査した中世山茶碗窯の遺構で、窯跡２基を検出した遺跡である。

大府市文化財調査報告書　第１０集

瀬戸Ｂ古窯跡群

奥谷古窯跡

大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ

平成 21 年 3 月 31 日発行

発行　愛知県大府市教育委員会
住所　〒４７４－００２５
　　愛知県大府市中央町五丁目７０番地
印刷　株式会社　隆文社